一七 たまへ　一七 ヱホバよわれに愧をおはしめ給ふなかれ　そは我なんぢをよべばなり　願くはあしきものに恥をうけし
一八 め陰府にありて口をつぐましめ給へ　一八 傲慢と輕侮とをもて義きものにむかひ妄りにのゝしるいつはりの口唇を
一九 つぐましめたまへ　一九 汝をおそるゝ者のためにたくはへ　なんぢに依賴むもののために人の子のまへにてほどこ
二〇 したまへる汝のいつくしみは大なるかな　二〇 汝かれらを御前なるひそかなる所にかくして人の謀略よりまぬかれ
二一 しめ　また行宮のうちにひそませて舌のあらそひをさけしめたまはん　二一 讃べきかなヱホバは堅固なる城のなか
二二 にて奇しまるゝばかりの仁慈をわれに顯したまへり　二二 われ驚きあわてゝいへらく　なんぢの目のまへより絶れ
二三 たりと　然どわれ汝によびもとめしとき　汝わがねがひの聲をきゝたまへり　二三 なんぢらもろもろの聖徒よヱホバ
二四 をいつくしめ　ヱホバは眞實あるものをまもり　傲慢者におもく報をほどこしたまふ　二四 すべてヱホバを俟望む
ものよ雄々しかれ　なんぢら心をかたうせよ

第三二篇

ダビデの訓諭のうた

一 その愆をゆるされその罪をおほはれしものは禍ひなり　二 不義をヱホバに負せられざるもの心に
三 いつはりなき者はさいはひなり　三 我いひあらはさゞりしときは終日かなしみさけびたるが故にわが骨ふるびお
四 とろへたり　四 なんぢの手はよるも晝もわがうへにありて重し　わが身の潤澤はかはりて夏の旱のごとくなれり
セラ　五 斯てわれなんぢの前にわが罪をあらはしわが不義をおほはざりき　我いへらくわが愆をヱホバにいひあ
らはさんと　斯るときしも汝わがつみの邪曲をゆるしたまへり　セラ　六 されば神をうやまふ者はなんぢに遇こと
をうべき間になんぢに祈らん　大水あふれ流るゝともかならずその身におよばじ　七 汝はわがかくるべき所なり
なんぢ患難をふせぎて我をまもり救のうたをもて我をかこみたまはん　セラ　八 われ汝ををしへ汝をあゆむべき
途にみちびき　わが目をなんぢに注てさとさん　九 汝等わきまへなき馬のごとく驢馬のごとくなるなかれ　かれら
は鑣たづなのごとき具をもてひきとめずば近づききたることなし　一〇 惡者はかなしみ多かれどヱホバに依賴む
ものは憐憫にてかこまれん　二 たゞしき者よヱホバを喜びたのしめ　凡てこゝろの直きものよ喜びよばふべし

第三三篇

一 たゞしき者よヱホバによりてよろこべ　讃美はなほきものに適はしきなり　二 琴をもてヱホバに
感謝せよ　十絃のことをもてヱホバをほめうたへ　三 あたらしき歌をヱホバにむかひてうたひ歡喜
の聲をあげてたくみに琴をかきならせ　四 ヱホバのみことばは直く　そのすべて行ひたまふところ眞實なれば
なり　五 ヱホバは義と公平とをこのみたまふ　その仁慈はあまねく地にみつ　六 もろもろの天はヱホバのみこと
ばによりて成り　てんの萬軍はヱホバの口の氣によりてつくられたり　七 ヱホバはうみの水をあつめてうづだか
くし深淵を庫にをさめたまふ　八 全地はヱホバをおそれ世にすめるもろもろの人はヱホバをおぢかしこむべし
九 そはヱホバ言たまへば成り　おほせたまへば立るがゆゑなり　一〇 ヱホバはもろもろの國のはかりごとを虛くし
もろもろの民のおもひを徒勞にしたまふ　一一 ヱホバの謀略はとこしへに立ち　そのみこゝろのおもひは世々にたつ
一二 ヱホバをおのが神とする國はさいはひなり　ヱホバ嗣業にせんとて撰びたまへるその民はさいはひなり　一三 ヱ
ホバ天よりうかゞひてすべての人の子を見　一四 その在すところより地にすむもろもろの人をみたまふ　一五 ヱホバ

イ詩二五・二　ロ毋前二・九　詩一一　五・一七　ハ毋前二・三　詩九四　・四　綱一五
ニ詩一二・三　ホ寒六四・四　哥前二　・九　ヘ詩二七・五、三二・七　ト伯五・二一
チ毋前二三・七　リ詩一七・七　ヌ毋前二三・二六　詩一一六・一一　ル寒三八・一一、一二
ヲ詩三四・九　ワ詩二七・一四　カ詩八五・二　羅四・六—八
ヨ哥後五・一九　タ約一・四七　レ毋前五・六、一一　三三・七　詩三八・二　ソ雅二八・一三　寒
哀三・五四　拿二・四　・九　伯六五・二四　路一五　・一八、二一　約壹一　・九　ツ毋前一・一六
ネ寒五五・六　約七・三四　ナ詩九・九、二七・五、三一・二〇、一一九　・九　半雅一三・二一　羅二　ラ出一五・七　士五・一　ノ詩三四・八、八四・
ム雅二六・三　雅三・三　ウ伯三五・一一　・九　一二 雅一六・二〇　ヤ詩一四七・一　耶一七・七　オ詩六四・一〇、六八　・三　ク詩三二・一一、九七
マ詩九二・三、一四四　・九　ケ詩九六・一、九八・一、一四四・九、一　・三　寒四三・　テ創二・一
フ詩一一・七、四五・七　コ詩一一・九・六四　エ創一・六、七來一一　・三　彼後三・五　ア伯二六・一三　サ創一・九　一〇、三八・八　キ創一・三　詩一四八　・五　ユ寒八・一〇、一九・三
一〇 默五・九　メ伯二三・一三　雅　一九・二一　寒四六　・一〇　ミ詩六五・四、一四四　・一五　シ出一九・五　申七・六
ヱ代下一六・九　伯二八・二四　詩一一　・四、一四・二　雅　一五・三

九 ヱホバ言たまへば成り　おほせたまへば立るがゆゑなり　一〇 ヱホバはもろもろの國のはかりごとを虛くし
もろもろの民のおもひを徒勞にしたまふ　一一 ヱホバの謀略はとこしへに立ち　そのみこゝろのおもひは世々にたつ
一二 ヱホバをおのが神とする國はさいはひなり　ヱホバ嗣業にせんとて撰びたまへるその民はさいはひなり　一三 ヱ
ホバ天よりうかゞひてすべての人の子を見　一四 その在すところより地にすむもろもろの人をみたまふ　一五 ヱホバ

一六 はすべてかれらの心をつくり その作ところをことごとく鑒みたまふ　一六 王者いくさびと多をもて救をえず勇士
一七 ちから大なるをもて助をえざるなり　一七 馬はすくひに益なく その大なるちからも人をたすくることなからん
一八 一八 視よヱホバの目はヱホバをおそるゝもの並その憐憫をのぞむもののうへにあり　一九 此はかれらのたましひを
一九 死よりすくひ饑饉たるときにも世にながらへしめんがためなり　二〇 われらのたましひはヱホバを俟望めり ヱホ
二〇 バはわれらの援われらの盾なり　二一 われらはきよき名によりたのめり 斯てぞわれらの心はヱホバにありてよろ
二一 こばん　二二 ヱホバよわれら汝をまちのぞめり これに循ひて憐憫をわれらのうへに垂たまへ

第三四篇

一 ダビデ、アビメレクのまへにて狂へる狀をなし逐れていでさりしときに作れるうた

一 われつねにヱホバを祝ひまつらん その頌詞はわが口にたえじ　二 わがたましひはヱホバにより
二 て誇らん 謙だるものはこれをきゝてよろこばん　三 われとともにヱホバを崇めよ われらともにその名をあげたゝ
三 へん　四 われヱホバを尋ねたればヱホバわれにこたへ我をもろもろの畏懼よりたすけいだしたまへり　五 かれら
四 ヱホバを仰ぎのぞみて光をかうぶれり かれらの面ははぢあからむことなし　六 この苦しむもの叫びたればヱホ
五 バこれをきゝ そのすべての患難よりすくひいだしたまへり　七 ヱホバの使者はヱホバをおそるゝ者のまはりに
六 營をつらねてこれを援く　八 なんぢらヱホバの恩惠ふかきを嘗ひしれ ヱホバによりたのむ者はさいはひなり
七 九 ヱホバの聖徒よヱホバを畏れよヱホバをおそるゝものには乏しきことなければなり　一〇 わかき獅はともしくし
八 て饑ることあり されどヱホバをたづぬるものは嘉物にかくることあらじ　一一 子よきたりて我にきけ われヱホバ
九 一〇 一一 一二 を畏るべきことを汝等にをしへん　一二 福祉をみんがために生命をしたひ存へんことをこのむ者はたれぞや　一三 な
一〇 んぢの舌をおさへて惡につかしめず なんぢの口唇をおさへて虛僞をいはざらしめよ　一四 惡をはなれて善をおこ
一一 なひ和睦をもとめて切にこのことを勉めよ　一五 ヱホバの目はたゞしきものをかへりみ その耳はかれらの號呼に
一二 一三 かたぶく　一六 ヱホバの聖顏はあくをなす者にむかひてその跡を地より斷滅したまふ　一七 義者さけびたればヱホ
一四 バ之をきゝてそのすべての患難よりたすけいだしたまへり　一八 ヱホバは心のいたみかなしめる者にちかく在して
一五 たましひの悔頽れたるものをすくひたまふ　一九 たゞしきものは患難おほし されどヱホバはみなその中よりたす
一六 一七 けいだしたまふ　二〇 ヱホバはかれがすべての骨をまもりたまふ その一つだに折らるゝことなし　二一 惡はあしき
一八 ものをころさん 義人をにくむものは刑なはるべし　二二 ヱホバはその僕等のたましひを贖ひたまふ ヱホバに
一九 二〇 二一 依賴むものは一人だにつみなはるゝことなからん

第三五篇

一 ダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは我にあらそふ者とあらそひ我とたゝかふものと戰ひたまへ　二 干と大盾とを
二 とりてわが援にたちいでたまへ　三 戟をぬきいだしたまひて我におひせまるものの途をふさぎ且わが靈魂にわれ
三 はなんぢの救なりといひたまへ　四 願くはわが靈魂をたづぬるものの恥をえていやしめられ 我をそこなはんと
四 謀るものの退けられて惶てふためかんことを　五 ねがはくはかれらが風のまへなる粃糠のごとくなりヱホバの
五 使者におひやられんことを　六 願くはかれらの途をくらくし滑らかにしヱホバの使者にかれらを追ゆかしめたま

七 はんことを　七 かれらは故なく我をとらへんとて網をあなにふせ　故なくわが靈魂をそこなはんとて阱をうがちた
八 ればなり　八 願くはかれらが思ひよらぬ間にほろびきたり己がふせたる網にとらへられ自らその滅におちいらん
九 ことを　九 然ときわが靈魂はヱホバによりてよろこび その救をもて樂しまん　一〇 わがすべての骨はいはん ヱホ
一〇 バよ汝はくるしむものを之にまさりて力つよきものより並くるしむもの貧しきものを掠めうばふ者よりたすけい
一一 だし給ふ　一一 誰かなんぢに比ふべき者あらんと　一二 こゝろあしき證人おこりてわが知ざることを詰りとふ　一三 かれ
一三 らは惡をもてわが善にむくい我がたましひを依仗なきものとせり　一三 然どわれかれらが病しときには麁服をつけ
一四 糧をたちてわが靈魂をくるしめたり　一四 わがかれに作ることはわが友わが兄弟に
一五 ことならず母の喪にありて痛哭がごとく哀しみうなたれたり　一五 然どかれらはわが倒れんとせしとき喜びつどひ
一六 わが知ざりしとき匪類あつまりきたりて我をせめ　一六 われを裂てやめざりき　一六 かれらは酒宴にて穢きことをのぶ
一七 る嘲笑者のごとく我にむかひて齒をかみならせり　一七 主よいたづらに見るのみにして幾何時をへたまふや　願く
一八 はわがたましひの彼等にほろぼさるゝを脫れしめ　一八 わが生命をわかき獅よりまぬかれしめたまへ　一八 われ大なる
一九 會にありてなんぢに感謝し　一九 おほくの民のなかにて汝をほめたゝへん　一九 虛僞をもてわれに仇するもののわが故
二〇 によろこぶことを容したまふなかれ　二〇 故なくして我をにくむ者のたがひに眇せることなからしめたまへ　二〇 かれ
二一 らは平安をかたらず　二一 あざむきの言をつくりまうけて國內におだやかにすまふ者をそこなはんと謀る　二一 然のみ
二二 ならず我にむかひて口をあけひろげ　二二 あゝ視よや視よやわれらの眼これをみたりといへり　二三 ヱホバよ汝すでに

イ詩九・一五　ロ撒前五・三　ハ詩七・一五、一六、五七・六、一四一・九、一〇、撒五・二二　ニ詩一三・五　ホ詩五・一八　ヘ出一五・一一　ト詩二七・一二　チ詩三八・二〇、一〇　九・三一・五　耶一八　リ伯三〇・二五　ヌ太一〇・一三　路一〇・六　ル伯三〇・一、八、一二　ヲ伯一六・九　ワ伯一六・九　カ哈一・一二　ヨ詩二二・二〇　タ詩二二・二五、三一、四〇・九、一〇、一　レ詩一三・四、二五・二・三八・一六　ソ詩六九・四、一〇九・三、一一九・一六一　ツ伯一五・一二　ネ詩二二・一三　哀三・五二　約一五　ナ詩四〇・一五、五四・二五　ラ出三・七　徒七・三四　ム詩二八・一、八三・一　ウ詩一〇・一、二二・一一、一九、三八・ク詩三五・一九　ヤ詩二七・一二、七〇・二、七一・一二　ノ撒後一・六　オ詩二六・一　ク詩三五・一九　ヤ詩二七・一二、七〇・二、一四〇・八　マ哀二・一六　ケ詩三五・四、四〇・一四　フ詩三八・一六　コ詩一〇九・二九、一三二・一八　エ羅一・一二・一五　耶前キ羅三・一八　ユ申二九・一九　詩一〇・三、四九・一八　メ詩一二・一　モ伯一・八　詩七七・一九羅一・三三　ミ耶四・一二　シ箴四・一六　米二・一　セ伯七・二〇　詩一四　ヒ詩五七・一〇、一〇　八・四　エ寮六五・二　五・九　撒前四・一〇　ニ伯二〇・一七　獻　ス詩三一・一九　イ得二・一二　詩一七　ホ耶二・一三　一〇、一四　約四・

ラ これを觀たまへり　ム ねがはくは默したまふなかれ主よわれに遠ざかりたまふなかれ　ウ わが神よわが主よ　ノ おきた
ク まへ醒たまへ　オ ねがはくはわがために審判をなし　ク わが訟ををさめたまへ　ヤ わが神ヱホバよ　ヤ なんぢの義にした
ヤ がひて我をさばきたまへ　ヤ わが事によりてかれらに歡喜をえしめたまふなかれ　ヤ かれらにその心裡にてあゝ
コ こゝちよきかな視よこれわが願ひしところなりといはしめたまふなかれ　コ 又われらかれを呑つくせりといはしめ
サ たまふなかれ　サ 願くはわが害なはるゝを喜ぶもの皆はぢて惶てふためき　サ 我にむかひてほこりかに高ぶるもの
シ の愧とはづかしめとを衣んことを　シ わが義をよみする者をばよろこび謳はしめ大なるかなヱホバその僕のさい
ス はひを悅びたまふと恒にいはしめたまへ　ス わが舌は終日なんぢの義となんぢの譽とをかたらん

第三六篇

一 あしきものの愆はわが心のうちにかたりて　一 その目のまへに神をおそるゝの畏あることなしといふ　二 かれはおのが邪曲のあらはるゝことなく憎まるゝことなからんとて自からその目にて誚る　三 その口のことばは邪曲と虛僞となり　三 智をこばみ善をおこなふことを息たり　四 かつその寢床にてよこしまなる事をはかりよからぬ途にたちとまりて惡をきらはず　五 ヱホバよなんぢの仁慈は天にあり　五 なんぢの眞實は雲にまでおよぶ　六 汝のたゞしきは神の山のごとく　六 なんぢの審判はおほいなる淵なり　七 ヱホバよなんぢは人とけものとを護りたまふ　七 神よなんぢの仁慈はたふときかな　八 人の子はなんぢの翼の蔭にさけどころを得　八 なんぢの屋のゆたかなるによりてことごとく飽ことをえん　九 なんぢはその歡樂のかはの水をかれらに飲しめたまはん　九 そはいの

一〇 ちの泉はなんぢに在り われらはなんぢの光によりて光をみん　一〇 ねがはくはなんぢを知るものにたえず憐憫を
一一 ほどこし心なほき者にたえず正義をほどこしたまへ　一一 たかぶるものの足われをふみ惡きものの手われを逐去ふ
一二 をゆるし給ふなかれ　一二 邪曲をおこなふ者はかしこに仆れたり かれら打伏られてまた起ことあたはざるべし

第三七篇

ダビデのうた

一 惡をなすものの故をもて心をなやめ 不義をおこなふ者にむかひて嫉をおこすなかれ　二 かれらは
三 やがて草のごとくかりとられ青菜のごとく打萎るべければなり　三 ヱホバによりたのみて善をおこなへ この國
四 にとどまり眞實をもて糧とせよ　四 ヱホバによりて歡喜をなせ ヱホバはなんぢが心のねがひを汝にあたへたま
五 はん　五 なんぢの途をヱホバにゆだねよ 彼によりたのまば之をなし とげ　六 光のごとくなんぢの義をあきらか
七 にし午日のごとくなんぢの訟をあきらかにしたまはん　七 なんぢヱホバのまへに口をつぐみ忍びてこれを俟望め
八 おのが途をあゆみて榮るものの故をもて あしき謀略をとぐる人の故をもて 心をなやむるなかれ　八 怒をやめ
九 忿恚をすてよ 心をなやむるなかれ これ惡をおこなふ方にうつらん　九 そは惡をおこなふものは斷滅され ヱホ
一〇 バを俟望むものは國をつぐべければなり　一〇 あしきものは久しからずしてうせん なんぢ細密にその處をおもひ
一一 みるともあることなからん　一一 されど謙だるものは國をつぐ また平安のゆたかなるを樂まん　一二 惡きものは義
一三 きものにさからはんとて謀略をめぐらし之にむかひて切齒す　一三 主はあしきものを笑ひたまはん かれが日のき
一四 たるを見たまへばなり　一四 あしきものは劍をぬき弓をはりて苦しむものと貧しきものとをたふし行ひなほきもの

イ 彼前二・九 ロ 耶二二・一六 ハ 詩七・一〇、九四・一五、九七・一一 ニ 詩一・五 ホ 詩三七・七、七三・ 三 箴二三・一七、二四・一、一九 ヘ 詩九〇・五、六 ト 賽五八・一四 チ 詩五五・二二 箴一六・三 太六・二五 路一二・二二 リ 伯一一・一七 ヌ 詩六二・一 彼前五・七 ル 米七 ヲ 詩三七・一、八 ワ 詩七三・三 二六 カ 伯二七・一三、一四 ヨ 詩三七・一、二二、 タ 伯七・一〇、二〇・九 二九 賽五七・一三 弗四・ レ 太五・五 ソ 詩三五・一六 ツ 詩二・四 ネ 拙前二六・一〇 ナ 米五・六 ラ 箴一五・一六、一六 ・八 提前六・六 ム 伯三八・一五 詩一〇・一五 結三〇・二一 ウ 詩一・六 キ 賽六〇・二一 ノ 伯五・二〇 詩三三・一九 オ 詩一〇二・三 ク 詩一一二・五、九 ヤ 箴三・三三 マ 詩三七・九 ケ 箴一六・九 フ 詩三四・一九、二〇、四〇・二、九一・一二 箴二四・一六 米七 コ 伯一五・二三 詩五九・一五、一〇九・一〇 エ 申一五・八、一〇 詩一一二・五、九 ・八 哀後四・九 テ 詩三四・一四 賽一・六、一七 ア 詩一一・七 サ 詩二一・一〇 箴二・二一 賽一四・二〇 キ 箴二・二一 ユ 太一二・三五 メ 申六・六 八、一一九・九八 ミ 詩一〇・八 シ 彼後二・九 ヱ 詩一〇九・三一 ヒ 詩二七・四、三七・九 箴二〇・二二 モ 詩五二・五、六、九 一・八

一五 を殺さんとせり　一五 されどその劍はおのが胸をさしその弓はをらるべし
一六 くの惡きものの豐かなるにまされり　一六 義人のもてるもののすくなきは多
一七 一七 そは惡きものの臂はをらるれどヱホバは義きものを扶持たまへばなり
一八 一八 ヱホバは完全もののもろもろの日をしりたまふ かれらの嗣業はかぎりなく久しからん　一九 かれらは禍害にあ
一九 ふとき愧をおはず饑饉の日にもあくことを得ん　二〇 あしき者はほろびヱホバのあたは牧場のさかえの枯るがごと
二〇 くうせ烟のごとく消ゆかん　二一 あしき者はものかりて償はず義きものは惠ありて施しあたふ　二二 神のことほぎた
二一 まふ人は國をつぎ 神ののろひたまふ人は斷滅さるべし　二三 人のあゆみはヱホバによりて定めらる そのゆく途を
二二 ヱホバよろこびたまへり　二四 縱ひその人たふるゝことありとも全くうちふせらるゝことなし ヱホバかれが手を
二三 たすけ支へたまへばなり　二五 われむかし年わかくして今おいたれど 義者のすてられ 或はその裔の糧こひあり
二四 くを見しことなし　二六 たゞしきものは終日めぐみありて貸あたふ その裔はさいはひなり　二七 惡をはなれて善を
二五 なせ 然ばなんぢの住居とこしへならん　二八 ヱホバは公平をこのみ その聖徒をすてたまはざればなり かれらは
二六 永遠にまもりたすけらるれど惡きもののすゑは斷滅さるべし　二九 たゞしきものは國をつぎ その中にすまひて
二七 とこしへに及ばん　三〇 たゞしきものの口は智慧をかたり その舌は公平をのぶ　三一 かれが神の法はそのこゝろに
二八 ありそのあゆみは一歩だにすべることあらじ　三二 あしきものは義者をひそみうかゞひて之をころさんとは
二九 かる　三三 ヱホバは義者をあしきものの手にのこしおきたまはず 審判のときに罰ひたまふことなし　三四 ヱホバを
三〇 俟望みてその途をまもれ さらば汝をあげて國をつがせたまはん なんぢ惡者のたちほろぼさるゝ時にこれをみん

三五 我あしきものの猛くしてはびこれるを見るに生立たる地にさかえしげれる樹のごとし 三六 然れどもかれは逝
三六 ゆけり 視よたちまちに無なりぬ われ之をたづねしかど遇ことをえざりき 三七 完人に目をそゝぎ直人をみよ 和平
三七 なる人には後あれど 三八 罪をかすものらは共にほろぼされ惡きものの後はかならず斷るべければなり 三九 たゞ
三八 しきものの救はヱホバよりいづ ヱホバはかれらが辛苦のときの保砦なり 四〇 ヱホバはかれらを助け かれらを解
三九 脫ちたまふ ヱホバはかれらを惡者よりときはなちて救ひたまふ かれらはヱホバをその避所とすればなり
四〇

第三八篇

記念のためにつくれるダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは忿恚をもて我をせめ はげしき怒をもて我をこらしめ給ふなかれ 二 なんぢの
二 矢われにあたり なんぢの手わがうへを壓へたり 三 なんぢの怒によりてわが肉には全きところなく わが罪によ
三 りてわが骨には健かなるところなし 四 わが不義は首をすぎてたかく重荷のごとく負がたければなり 五 われ愚
四 なるによりてわが傷あしき臭をはなちて腐れたゞれたり 六 われ折屈みていたくなげきうなたれたり われ終日
五 かなしみありく 七 わが腰はことごとく燒るがごとく肉に全きところなければなり 八 我おとろへはて甚くきず
六 つけられ わが心のやすからざるによりて歎獻さけべり 九 あゝ主よわがすべての願望はなんぢの前にあり わが
七 嘆息はなんぢに隱るゝことなし 一〇 わが胸をどりわが力おとろへ わが眼のひかりも亦われをはなれたり 一一 わ
八 が友わが親めるものはわが痍をみて遙にたち わが隣もまた遠かりてたてり 一二 わが生命をたづぬるものは網を
九 まうけ我をそこなはんとするものは惡言をいひ また終日たばかりを謀る 一三 然はあれどわれは聾者のごとく

イ 伯五・三　ロ 伯二〇・五　ハ 詩一・四、五二・五　ニ 詩三・八　ホ 詩九・九　ヘ 箴三一・五　ト 代上五・二〇 但三・七、二八、六・二　チ 詩六・一　リ 伯六・四　ヌ 詩三二・四　ル 詩六・二　ヲ 箴九・六　詩四〇・一二　ワ 太一一・二八　カ 詩三五・一四　ヨ 伯三〇・二八　詩四二・九、四三・二　タ 伯七・五　詩三八・三　レ 伯三・二四　詩二二・一　箴五九・一一　ソ 詩六・七、八八・九　ツ 詩三一・一一、三二　ネ 路一〇・三一、三二　ナ 路二三・四九　ラ 拠後一七・一—三　ム 拠後一六・七、八　ウ 詩三五・二〇　キ 拠後一六・一

一四 きかず われは口をひらかぬ啞者のごとし 一四 如此われはきかざる人のごとく口にことあげせぬ人のごとき なり
一五 ヱホバよ我なんぢを俟望めり 主わが神よなんぢかならず答へたまふべければなり 一六 われ曩にいふ おそら
一六 くはかれらわが事によりて喜び わが足のすべらんとき我にむかひて誇りかにたかぶらんと 一七 われ仆るゝばか
一七 りになりぬ わが悲哀はたえずわが前にあり 一八 そは我みづから不義をいひあらはし わが罪のためにかなしめば
一八 なり 一九 わが仇はいきはたらきてたけく 故なくして我をうらむるものおほし 二〇 惡をもて善にむくゆるものは
一九 われ善事にしたがふが故にわが仇となれり 二一 ヱホバよねがはくは我をはなれたまふなかれ わが神よわれに
二〇 遠かりたまふなかれ 二二 主わがすくひよ速きたりて我をたすけたまへ

伶長エドトンにうたはしめたるダビデのうた

第三九篇

一 われ曩にいへり われ舌をもて罪をかさどらんために我すべての途をつゝしみ惡者のわがまへ
二 に在るあひだはわが口に銜をかけんと 二 われ默して啞となり善言すらことばにいださず わが憂なほおこれり
三 わが心わがうちに熱し おもひつゞくるほどに火もえぬればわれ舌をもていへらく 四 ヱホバよ願くはわが終と
四 わが日の數のいくばくなるとを知しめたまへ わが無常をしらしめたまへ 五 視よなんぢわがすべての日を一掌に
五 すぎさらしめたまふ わがいのち主前にてはなきにことならず 實にすべての人は皆その盛時だにもむなしから
六 ざるはなし セラ 六 人の世にあるは影にことならず その思ひなやむことはむなしからざるなし その積蓄ふる
七 ものはたが手にをさまるをしらず 七 主よわれ今なにをかまたん わが望はなんぢにあり 八 ねがはくは我を

ノ 詩三九・二、九　オ 拠後一六・一二　詩三九・七　ク 詩一三・四　ヤ 申三二・三五　マ 詩三五・二六　ケ 詩三二・五　箴二八　コ 詩三五・一九　エ 詩三五・一二　テ 彼前三・一三　約壹三・一二　ア 詩三五・二二　サ 詩二七・一、六二・　ヒ 詩九〇・四　モ 詩三九・一一、六二・九、一四四・四　セ 伯二七・一七 傳二・一八、二一、二六、　ミ 詩三八・一三　シ 邪二〇・九　ス 詩三八・一五　ヱ 詩九〇・一二、一一　九・八四　五・一四　路一二・二〇、二一

九 すべての愆より助けいだしたまへ　愚なるものに誹らるゝことなからしめたまへ　九 われは默して口をひらかず
一〇 此はなんぢの成したまふ者なればなり　一〇 願くはなんぢの責をわれよりはなちたまへ　我なんぢの手にうちこら
一一 さるゝによりて亡ぶるばかりになりぬ　一一 なんぢ罪をせめて人をこらし　その慕ひよろこぶところのものを蠹の
一二 くらふがごとく消うせしめたまふ　實にもろもろの人はむなしからざるなし　セラ　一二 あゝヱホバよねがはくは
一三 わが祈をきゝ　わが號呼に耳をかたぶけたまへ　わが淚をみて默したまふなかれ　われはなんぢに寄る旅客すべて
わが列祖のごとく宿れるものなり　一三 我こゝを去てうせざる先になんぢ面をそむけてわれを爽快ならしめたまへ

第四〇篇

一 我たへしのびてヱホバを俟望みたり　ヱホバ我にむかひてわが號呼をきゝたまへり　二 また我を
ほろびの阱より泥のなかよりとりいだしてわが足を磐のうへにおきわが歩をかたくしたまへり　三 ヱホバはあた
らしき歌をわが口にいれたまへり此はわれらの神にさゝぐる讃美なり　おほくの人はこれを見ておそれ　かつヱホ
四 バによりたのまん　四 ヱホバをおのが賴となし高るものによらず虛僞にかたぶく者によらざる人はさいはひなり
五 わが神ヱホバよなんぢの作たまへる奇しき迹と　われらにむかふ念とは甚おほくして　汝のみまへにつらねいふ
ことあたはず　我これをいひのべんとすれどその數かぞふることあたはず　六 なんぢ犧牲と祭物とをよろこびた
七 まはず汝わが耳をひらきたまへり　なんぢ燔祭と罪祭とをもとめたまはず　七 そのとき我いへらく　視よわれきた
八 らんわがことを書の卷にしるしたり　八 わが神よわれは聖意にしたがふことを樂む　なんぢの法はわが心のうち

イ詩四四・一三、七九　ロ利一〇・三　伯四〇・四、四、五　詩三八・一三　ハ摂後一六・二〇　伯二・一〇　ニ伯九・三四、一三・ト利二五・二三　代上二九・一五　詩一一・九・一九・一九　哥後五・六　彼前一・一三　來一・一三　何五・一二　ホ伯四・一九、一三・ヘ詩三九・五　チ創四七・九　リ伯一四・一〇—一二　ヌ伯一〇・二〇、二一、一四・五、六　ル詩二七・一四、三七・七　ヲ詩六九・二、一四　ワ詩二七・五　カ詩三七・二三　ヨ詩三三・三　タ詩五二・六　レ詩三四・八　耶一七　ソ詩一〇一・三七　ツ寒一二五・五　ネ寒五五・八　ナ出一五・一一　伯五・九、九・一〇　詩七一・一五、九二・ラ摂前一五・二二　詩五・一六　寒一・一、六六・何六・六、六九　ム路二四・四四　ウ詩一一九・一六、二四、四七、九二　約三・三四　箴七・二二　ヰ詩三七・三一　ノ詩二二・二二、二五、ク詩一三九・二　マ詩四三・三、五七・フ詩七三・二六　コ詩七〇・一　エ詩三五・四、二六、七〇・二、三、七一・一三　ア詩七〇・四　サ詩三五・二七　ヤ徒二〇・二〇、二七　ケ詩三八・四　ヲ詩七〇・三　キ詩七〇・五　ユ使前五・七　メ箴一四・二一　ミ詩二七・二二　シ代下三〇・二〇　詩六・二、一四七・三

一〇 われは大なる會にて義をつげしめせり　視よわれ口唇をとぢず　ヱホバよなんぢ之をしりたまふ　一〇 わ
一一 れなんぢの義をわが心のうちにひめおかず　なんぢの眞實となんぢの拯救とをのべつたへたり　我なんぢの仁慈と
なんぢの眞理とをおほいなる會にかくさゞりき　一二 ヱホバよなんぢ憐憫をわれにをしみたまふなかれ　仁慈と
一三 眞理とをもて恒にわれをまもりたまへ　そはかぞへがたき禍害われをかこみ　わが不義われに追及てあふぎみ
ること能はぬまでになりぬ　その多きことわが首の髮にもまさり　わが心きえうするばかりなればなり　一四 ヱホバ
一四 よ願くはわれをすくひたまへ　ヱホバよ急ぎきたりて我をたすけたまへ　一五 願くはわが靈魂をたづねほろぼさん
とするものの皆はぢあわてんことを　わが害はるゝをよろこぶもののみな後にしりぞきて恥をおはんことを
一五 われにむかひて　あゝ視よや視よやといふ者おのが恥によりておどろきおそれんことを　一六 願くはなんぢを
一六 尋求むるものの皆なんぢによりて樂みよろこばんことを　なんぢの救をしたふものの恒にヱホバは大なるかなと
一七 となへんことを　一七 われはくるしみ且ともし　主われをねんごろに念ひたまふ　なんぢはわが助なり　われをすく
ひたまふ者なり　あゝわが神よねがはくはためらひたまふなかれ

第四一篇

一 うたのかみに謳はしめたるダビデのうた
一 よわき人をかへりみる者はさいはひなり　ヱホバ斯るものを禍ひの日にたすけたまはん
二 二 ヱホバ之をまもり之をながらへしめたまはん　かれはこの地にありて福祉をえん　なんぢ彼をその仇ののぞみに
三 まかせて付したまふなかれ　三 ヱホバは彼がわづらひの床にあるをたすけ給はん　なんぢかれが病るときその
四 衾褥をしきかへたまはん　四 我いへらくヱホバよわれを憐みわがたましひを醫したまへ　われ汝にむかひて罪を

五 をかしたりと　五 わが仇われをそしりていへり 彼いづれのときに死いづれのときにその名ほろびんと　六 かれ
六 又われを見んとてきたるときは虚偽をかたり邪曲をその心にあつめ 外にいでてはこれを述ぶ　七 すべてわれを
七 にくむもの互ひにさゝやき我をそこなはんとて相謀る　八 かつ云ふ かれに一のわざはひつきまとひたれば仆れ
八 ふしてふたゝび起ることなからんと　九 わが恃みしところ わが糧をくらひしところのわが親しき友さへも我に
九 そむきてその踵をあげたり　一〇 然はあれどヱホバよ 汝ねがはくは我をあはれみ我をたすけて起したまへ されば
一〇 我かれらに報ることをえん　一一 わが仇われに打勝てよろこぶこと能はざるをもて 汝がわれを愛いつくしみ
一一 たまふを我しりぬ　一二 わが事をいはゞ なんぢ我をわが完全うちにてたもち我をとこしへに面のまへに置たまふ
一二 一三 イスラエルの神ヱホバはとこしへより永遠までほむべきかな アーメン アーメン

第四二篇

一 伶長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

一 あゝ神よ しかの溪水をしたひ喘ぐがごとく わが靈魂もなんぢをしたひあへぐなり　二 わがたま
二 しひは渇けるごとくに神をしたふ 活神をぞしたふ 何れのときにか我ゆきて神のみまへにいでん　三 かれらが
三 終日われにむかひて なんぢの神はいづくにありやとのゝしる 間はたゞわが涙のみ晝夜そゝぎてわが糧なりき
四 四 われむかし群をなして祭日をまもる衆人とともにゆき歡喜と讃美のこゑをあげてかれらを神の家にともなへ
五 り 今これらのことを追想してわが衷よりたましひを注ぎいだすなり　五 あゝわが靈魂よ なんぢ何ぞうなたるゝ
六 やなんぞわが衷におもひみだるゝや なんぢ神をまちのぞめ われに聖顔のたすけありて我なほわが神をほめ
六 たゝふべければなり　六 わが神よわがたましひはわが衷にうなたる 然ばわれヨルダンの地よりヘルモン

イ 詩一二・二 箴二六 ハ 拙後一五・二二 伯 耶二〇・一〇 ト 撒前一・九 リ 詩八〇・五、一〇二 ル 伯三〇・一六 詩 ・五
・二四—二六 一九・一九 詩五五 二 伯二六・七 詩三四 ホ 詩一〇六・四八 ヘ 詩六三・一、八四・ チ 詩四二・一〇、七九 ヲ 哀三・二四
ロ 阿七 約一三・一八 ・一二、一三、二〇 ・一五 ヘ 詩六三・一、八四・ ・九 ヌ 箴三〇・二九 ヲ 詩四二・一一、四三
一〇、一一五・二 三七

カ 耶四・二〇 結七・二六 レ 伯三五・一〇 詩三二・七、六三・六、一四九・五 ツ 詩四二・三 耳二・一七 米七・一〇 ラ 詩三五・一 ノ 詩三・四
ヨ 詩八八・七 箴二・三 ム 詩二八・七 ネ 詩四二・五、四三・五 ウ 詩四二・九 オ 詩四二・五、一一
タ 利二五・二一 申二八・八 詩一三三 ソ 詩三八・六、四三・二 ナ 詩二六・一、三五・ 十 詩四〇・一一、五七 ク 出一二・二六、二七 詩七八・三

よりミザルの山より汝をおもひいづ　七 なんぢの大瀑のひゞきによりて淵々よびこたへ なんぢの波なんぢの
八 猛浪ことごとくわが上をこえゆけり　八 然はあれど晝はヱホバその憐憫をほどこしたまふ 夜はその歌われと
九 ともにあり 此うたはわがいのちの神にさゝぐる祈なり　九 われわが磐なる神にいはん なんぞわれを忘れたまひ
一〇 しや なんぞわれは仇のしへたげによりて悲しみありしや　一〇 わが骨もくだくるばかりにわがてきはひねもす
一一 我にむかひて なんぢの神はいづくにありやといひのゝしりつゝ我をそしれり　一一 あゝわがたましひよ 汝なんぞ
うなたるゝや 何ぞわがうちに思ひみだるゝや なんぢ神をまちのぞめ われ尚わがかほの助なるわが神をほめ
たゝふべければなり

第四三篇

一 神よねがはくは我をさばき 情しらぬ民にむかひてわが訟をあげつらひ詭計おほきよこしまなる
二 人より我をたすけいだし給へ　三 願くはなんぢはわが力の神なり なんぞ我をすてたまひしや 何ぞわれは
三 仇の暴虐によりてかなしみありくや　四 さらばわれ神の祭壇にゆき又わがよろこびよろこぶ神にゆかん あゝ神よわが
四 その帷幄とにゆかしめたまへ　五 あゝわが靈魂よなんぢなんぞうなたるゝや なんぞわが衷におもひみ
五 神よわれ琴をもてなんぢを讃たゝへん
だるゝや なんぢ神によりて望をいだけ 我なほわが面のたすけなるわが神をほめたゝふべければなり

第四四篇

一 伶長にうたはしめたるコラの子のをしへの歌

一 あゝ神よむかしわれらの列祖の日になんぢがなしたまひし事迹をわれら耳にきけり 列祖われら

二 に語れり　二 なんぢ手をもてもろもろの國人をおひしりぞけ　われらの列祖をうゑ並もろもろの民をなやまして
三 われらの列祖をはびこらせたまひき　三 かれらはおのが劍によりて國をえしにあらず　おのが臂によりて勝をえ
四 しにあらず　只なんぢの右の手なんぢの臂なんぢの面のひかりによれり　汝かれらを惠みたまひたればなり　四 神
五 よなんぢはわが王なり　ねがはくはヤコブのために救をほどこしたまへ　五 われらは汝によりて敵をたふし　また
六 我儕にさからひて起りたつものをなんぢの名によりて踐壓ふべし　六 そはわれわが弓によりたのまず　わが劍も
七 また我をすくふことあたはざればなり　七 なんぢわれらを敵よりすくひ　またわれらを惡むものを辱かしめたま
八 九 へり　八 われらはひねもす神によりてほこり　われらは永遠になんぢの名に感謝せん　セラ　九 しかるに今は
一〇 われらをすてゝ恥をおはせたまへり　われらの軍人とともに出ゆきたまはず　一〇 われらを敵のまへより退かしめ
一一 たまへり　われらを惡むものその任意にわれらを掠めうばへり　一一 なんぢわれらを食にそなへらるゝ羊のごとく
一二 にあたへ斯てわれらをもろもろの國人のなかにちらし　一二 得るところなくしてなんぢの民をうり　その價により
一三 てなんぢの富をましたまはざりき　一三 汝われらを隣人にそしらしめ　われらを環るものにあなどらしめ　嘲けらし
一四 めたまへり　一四 又もろもろの國のなかにわれらを談柄となし　もろもろの民のなかにわれらを頭ふらるゝ者とな
一五 したまへり　一五 わが凌辱ひねもす我がまへにあり　わがかほの恥われをおほへり　一六 こは我をそしり我をのゝし
一七 るものの聲により我にあだし我にうらみを報るものの故によるなり　一七 これらのこと皆われらに臨みきつれどわ
一八 れらなほ汝をわすれず　なんぢの契約をいつはりまもらざりき　一八 われらの心しりぞかず　われらの歩履なんぢの

イ出一五・一七　申七・一　詩七八・五五、ニ詩七四・一二　八〇・八　ホ但八・四　ロ申八・一七　書二四　ヘ詩三三・一六　何一・二　ハ申四・三七、七・七、ト詩四〇・一四　チ詩三四・二　耶九・二四　羅二・一七　リ詩六〇・一、一〇、七四・一、八八・一四、八九・三八、一〇八・一一　ヌ利二六・一七　申二八・二五　書七・八、一二　ル羅八・三六　ヲ申四・二七、二八・六四　詩六〇・一　ワ塞五二・三、四　耶一五・一三　カ申二八・三七　詩七九・四、八〇・六　ヨ耶二四・九　タ王下一九・二一　伯七　レ詩八・二　ソ但九・一三　ツ伯二三・一一　詩一九・五一、一五　ネ塞三四・一三、三五　ナ詩二三・四　ラ伯一・一三　詩・七

一九 道をはなれず　一九 然どなんぢは野犬のすみかにてわれらをきずつけ死蔭をもてわれらをおほひ給へり　二〇 われら
二一 もしおのれの神の名をわすれ或はわれらの手を異神にのべしことあらんには　二一 神はこれを糾したまはざらん
二二 や神はこゝろの隱れたることをも知たまふ　二二 われらは終日なんぢのために死にわたされ屠られんとする羊の
二三 如くせられたり　二三 主よさめたまへ何なればねぶりたまふや起たまへ　われらをとこしへに棄たまふなかれ
二四 二四 いかなれば聖顏をかくしてわれらがうくる苦難と虐待とをわすれたまふや　二五 われらのたましひはかゞみて
二五 二六 塵にふし　われらの腹は土につきたり　二六 ねがはくは起てわれらをたすけたまへ　なんぢの仁慈のゆゑをもて
二六 われらを贖ひたまへ

ム伯三一・一四　詩ウ路八・三六　一三九・一　邪一七　キ詩七・六、三五・二　ノ詩四四・九　三、五九・四、五、オ伯一三・二四　詩一三・一、八八・一四　マ箴四九・二一　默一・一六、フ詩九三・二　來一・八　ヤ路四・二二　ケ默六・二　ク詩一一九・二五　コ詩三三・五　エ箴六・一　テ默二・六　ア王上一・三九、四〇　サ默一・三　キ默六・八

第四五篇

一 百合花のしらべにあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のをしへのうた　愛のうた

一 わが心はうるはしき事にてあふる　われは王のために詠たるものをいひいでん　わが舌はすみやけ
二 く寫字人の筆なり　二 なんぢは人の子輩にまさりて美しく文雅そのくちびるにそゝがる　このゆゑに神はとこし
三 へに汝をさいはひしたまへり　三 英雄よなんぢその劍その榮その威をこしに佩べし　四 なんぢ眞理と柔和とたゞ
四 しきとのために威をたくましくし勝をえて乘すゝめ　なんぢの右手なんぢに畏るべきことををしへん　五 なんぢ
五 の矢は鋭して王のあたの胸をつらぬき　もろもろの民はなんぢの下にたふる　六 神よなんぢの寶座はいやとほ永
六 く　なんぢの國のつゑは公平のつゑなり　七 なんぢは義をいつくしみ惡をにくむ　このゆゑに神なんぢの神はよろ
七 こびの膏をなんぢの侶よりまさりて汝にそゝぎたまへり　八 なんぢの衣はみな沒藥　蘆薈　肉桂のかをりあり　琴瑟
八 の音ざうげの諸殿よりいでて汝をよろこばしめたり　九 なんぢがたふとき婦のなかにはもろもろの王のむすめ

一〇 あり 皇后はオフルの金をかざりてなんぢの右にたつ　一〇 女よきけ目をそゝげ なんぢの耳をかたぶけよ なんぢ
一一 の民となんぢが父の家とをわすれよ　一一 さらば王はなんぢの美麗をしたはん 王はなんぢの主なりこれを伏拜め
一二 ツロの女は贈物をもてきたり民間のとめるものも亦なんぢの惠をこひもとめん　一二 王のむすめは殿のうちに
一四 ていとゞ榮えかゞやき そのころもは金をもて織なせり　一四 かれは錦繡せる衣をきて王のもとにいざなはる 之に
一五 ともなへる處女もそのあとにしたがひて汝のもとにみちびかれゆかん　一五 かれらは歡喜と快樂とをもていざなは
一六 一七 れ斯して王の殿にいらん　一六 なんぢの子らは列祖にかはりてたち なんぢはこれを全地に君となさん　一七 我なん
ぢの名をよろづ代にしらしめん この故にもろもろの民はいやとほ永くなんぢに感謝すべし

第四六篇

女音のしらべにしたがひて伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 神はわれらの避所また力なり なやめるときの最ちかき助なり　二 さればたとひ地はかはり山は
三 うみの中央にうつるとも我儕はおそれじ　三 よしその水はなりとゞろきてさわぐとも その溢れきたるによりて
四 山はゆるぐとも何かあらん セラ　四 河あり そのながれは神のみやこをよろこばしめ至上者のすみたまふ
五 聖所をよろこばしむ　五 神そのなかにいませば都はうごかじ 神は朝つとにこれを助けたまはん　六 もろもろの
七 民はさわぎたち もろもろの國はうごきたり 神その聲をいだしたまへば 地はやがてとけぬ　七 萬軍のヱホバは
八 われらとともなり ヤコブの神はわれらのたかき櫓なり セラ　八 きたりてヱホバの事跡をみよ ヱホバは
九 おほくの懼るべきことを地になしたまへり　九 ヱホバは地のはてまでも戰鬪をやめしめ弓ををり戈をたち戰車

イ 王上二・一九　ロ 申二一・一三　ハ 詩九五・六　ニ 詩二二・二九、七二　ホ 歌一・四　ヘ 歌一・五　ト 傳前二・九　チ 馬一・一一　リ 詩六二・七、八、九　ヌ 詩四八・一、八　ル 詩九三・三、四　ヲ 箴八・七　ワ 詩四八・一、八　カ 申三三・一四　ヨ 詩二・一　タ 箴二・九、二四　レ 民一四・九　ソ 詩六六・五　ツ 箴二・四　ネ 詩七六・三　ナ 結三九・九　ラ 箴二・一一、一七　ム 詩四六・七

一〇 を火にてやきたまふ　一〇 汝等しづまりて我の神たるをしれ われはもろもろの國のうちに崇められ全地にあがめ
一一 らるべし　一一 萬軍のヱホバはわれらと偕なり ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり セラ

第四七篇

伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 もろもろのたみよ手をうち歡喜のこゑをあげ神にむかひてさけべ　二 いとたかきヱホバはおそる
三 べく また地をあまねく治しめす大なる王にてましませばなり　三 ヱホバはもろもろの民をわれらに服はせ もろ
四 もろの國をわれらの足下にまつろはせたまふ　四 又そのいつくしみたまふヤコブが譽とする嗣業をわれらのため
五 に選びたまはん セラ　五 神はよろこびさけぶ聲とともにのぼり ヱホバはラッパの聲とともにのぼりたまへり
六 ほめうたへ 神をほめうたへ 頌歌へわれらの王をほめうたへ　七 かみは地にあまねく王なればなり 教訓の
八 うたをうたひてほめよ　八 神はもろもろの國をすべをさめたまふ 神はそのきよき寶座にすわりたまふ
九 もろもろのたみの諸侯はつどひきたりてアブラハムの神の民となれり 地のもろもろの盾は神のものなり 神は
いとたふとし

第四八篇

コラの子のうたなり 讃美なり

一 ヱホバは大なり われらの神の都 そのきよき山のうへにて甚くほめたゝへられたまふべし　二 シ
三 オンの山はきたの端たかくしてうるはしく喜悅を地にあまねくあたふ こゝは大なる王のみやこなり　三 その
四 もろもろの殿のうちに神はおのれをたかき櫓としてあらはしたまへり　四 みよ王等はつどひあつまりて偕にすぎ
五 ゆきぬ　五 かれらは都をみてあやしみ且おそれて忽ちのがれさり　六 戰慄はかれらにのぞみ その苦痛は子を

ウ 箴五五・一二　ヰ 申七・二二　詩七六・一二　ノ 馬一・一四　オ 詩一八・四七　ク 傳前一・四　ヤ 詩六八・二四、二五　マ 亞一四・九　ケ 哀前一・四・一五、二　フ 代上一六・三一　詩九三・一、九六・一　コ 譯四・一一、一二　エ 詩八九・一八　テ 詩四六・四、八七・三　ア 箴二二・二三　米四・　サ 結二〇・六　キ 太五・三五　ユ 彼後一〇・六、一四、一〇・九七・一、九九　メ 例一三・一三　ミ 詩一・一　箴・九・六　シ 詩二・一一、一二　ヱ 詩八九・一八　ヒ 詩四六・四、八七・三　フ 箴二・一一、一七　ヘ 箴二・一一、一七　ホ 詩二・一　箴二・一一、一七　ヨ 詩二・一　タ 箴二・九、二四　レ 民一四・九　詩四六・一一　代下一三・一一　ソ 詩六六・五　ツ 箴二・四

七 うまんとする婦のごとし　七 なんぢは東風をおこしてタルシシの舟をやぶりたまふ
八 今われらは萬軍のヱホバの都われらの神のみやこにて之をみることをえたり　八 神はこの都をとこしへまで固くし
九 たまはん　セラ　九 神よ我らはなんぢの宮のうちにて仁慈をおもへり　一〇 神よなんぢの譽はその名のごとく地の
一〇 極にまでおよべり　なんぢの右手はたゞしきにて充り　一一 なんぢのもろもろの審判によりてシオンの山はよろこ
一一 びユダの女輩はたのしむべし　一二 シオンの周圍をありき徧くめぐりてその櫓をかぞへよ　一三 その石垣に目を
一三 とめよ　そのもろもろの殿をみよ　なんぢらこれを後代にかたりつたへんが爲なり　一四 そはこの神はいや遠長に
一四 われらの神にましましてわれらを死るまでみちびきたまはん

第四九篇

伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 二 もろもろの民よきけ賤きも貴きも富るも貧きもすべて地にすめる者よ　なんぢらともに耳をそば
三 だてよ　三 わが口はかしこきことをかたり　わが心はさときことを思はん　四 われ耳を喩言にかたぶけ琴をなら
四 してわが幽玄なる語をときあらはさん　五 わが踵にちかゝる不義のわれを打圍むわざはひの日もいかで懼るゝ
五 ことあらんや　六 おのが富をたのみ財おほきを誇るもの　七 たれ一人おのが兄弟をあがなふことあたはず之が
六 ために贖價を神にさゝげ　八 之をとこしへに生存へしめて朽ざらしむることあたはず（靈魂をあがなふには費
七 いとおほくして此事をとこしへに捨置ざるを得ざればなり）　九 そは智きものも死おろかものも獸心者もひと
八 しくほろびてその富を他人にのこすことは常にみるところなり　一〇 かれら竊におもふ　わが家はとこしへに存り
九 わがすまひは世々にいたらんと　かれらはその地におのが名をおはせたり　一一 されど人は譽のなかに永くとゞま

イ耶一八・一七　ロ結二七・二六　ハ詩四八・一二　ニ申二八・五八　ホ詩二六・三、四〇・一〇　ヘ申二八・五八　ト申二五・一一　チ詩六二・九　リ詩七八・二　ヌ詩三八・四　ル伯三一・二四、二五　ヲ太一六・二六　ワ詩八九・四八　カ伯三六・一八、一九　ヨ傳二・一六　タ箴一・一四　レ創四・一七　ソ詩三九・五、四九・一〇、八二・七　ツ路一二・二〇　ネ詩四七・三　但七・二二　馬四・三　路一二・三〇　創前六・二一　默二・二六、二〇・四　ナ伯四・二一　詩三九・一一　ラ詩五六・一三　何一三・一四　ム伯二七・一九　ウ申二九・一九　路一二・一九　ク傳三・一九　ヤ尼九・三二　ケ申三三・二一　詩八〇・一　民一六　ヱ出二四・七　ヲ利一〇・二　ヌ詩三八・四　ル伯三一・二四、二五　ヲ太一六・二六　ワ詩八九・四八　カ伯三六・一八、一九　ヨ傳二・一六　タ箴一・一四　傳二・一八、二一　ミ何六・六　ム伯二七・一九　ウ申二九・一九　路一二・一九　ク傳三・一九　ヤ尼九・三二　ケ申三三・二一　詩八〇・一　民一六　ヱ出二四・七

一三 らず亡びうする獸のごとし　一四 斯のごときは愚かなるものの途なり　然はあれど後人はその言をよしと
一四 せん　セラ　一五 かれらは羊のむれのごとくに陰府のものと定めらる　死これが牧者とならん直きもの朝にかれらを
一五 をさめん　その美容は陰府にほろぼされて宿るところなかるべし　一六 されど神われを接たまふべければわが靈魂を
一六 あがなひて陰府のちからより脫かれしめたまはん　セラ　一七 人のとみてその家のさかえくはゝらんとき汝おそる
一七 るなかれ　一八 かれの死るときは何一つたづさへゆくことあたはず　その榮はこれにしたがひて下ることをせざ
一八 ればなり　一九 かゝる人はいきながらふるほどに己がたましひを祝するとも　みづからを厚うするがゆゑに人々
一九 なんぢをほむるとも　二〇 なんぢ列祖の世にゆかん　かれらはたえて光をみざるべし　二一 尊貴なかにありて曉ら
二〇 ざる人はほろびうする獸のごとし

第五〇篇

アサフのうた

一 ぜんのうの神ヱホバ詔命して日のいづるところより日のいるところまであまねく地をよびたま
二 へり　三 かみは美麗の極なるシオンより光をはなちたまへり　四 われらの神はきたりて默したまはじ火その前に
三 ものをやきつくし暴風その四周にふきあれん　五 神はその民をさばかんとて上なる天および地をよびたまへり
四 いはく祭物をもて我とけいやくをたてしわが聖徒をわがもとに集めよと　六 もろもろの天は神の義をあらはせ
五 り　神はみづから審士たればなり　セラ　七 わが民よきけ我ものいはん　イスラエルよきけ我なんぢにむかひて證
六 をなさん　われは神なんぢの神なり　八 わがなんぢを責るは祭物のゆゑにあらず　なんぢの燔祭はつねにわが前に
七 詩篇　四九・一三——五〇・八　一〇〇七

九 あり　我はなんぢの家より牡牛をとらず　なんぢの牢より牡山羊をとらず　一〇 林のもろもろのけもの山のうへ
一一 の千々の牲畜はみなわが有なり　一二 われは山のすべての鳥をしる　野のたけき獸はみなわがものなり　一三 世界と
一三 そのなかに充るものとはわが有なれば縱ひわれ飢るともなんぢに告じ　一四 われいかで牡牛の肉をくらひ牡山羊の
一四 血をのまんや　一五 感謝のそなへものを神にさゝげよ　なんぢのちかひを至上者につくのへ　一六 なやみの日にわれ
一六 をよべ我なんぢを援けん而してなんぢ我をあがむべし　一七 然はあれど神あしきものに言給く　なんぢは教を
一七 にくみ　わが言をその後にすつるものなるに何のかゝはりありてわが律法をのべ　わがけいやくを口にとりしや
一八 なんぢ盜人をみれば之をよしとし姦淫をおこなふものの伴侶となれり　一九 なんぢその口を惡にわたす　なんぢ
二〇 の舌は詭計をくみなせり　二一 なんぢ坐りて兄弟をそしり己がはゝの子を誣のゝしれり　二二 汝これらの事をなしゝ
二二 をわれ默しぬれば　なんぢ我をおのれに恰にたるものとおもへり　されど我なんぢを責めてその罪をなんぢの目前
二三 につらぬべし　二三 神をわするゝものよ今このことを念へ　おそらくは我なんぢを抓さかんとき助るものあら
二三 じ　二三 感謝のそなへものを獻るものは我をあがむ　おのれの行爲をつゝしむ者にはわれ神の救をあらはさん

第五一篇

ダビデがバテセバにかよひしのち預言者ナタンの來れるときよみて伶長にうたはしめたる歌

一 あゝ神よねがはくはなんぢの仁慈によりて我をあはれみ　なんぢの憐憫のおほきによりてわがも
二 ろもろの愆をけしたまへ　二 わが不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ　三 われはわが愆を
三 しる　わが罪はつねにわが前にあり　四 我はなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし聖前にあしきことを行へり

イ 米六・六　徒一七・ハ何一四・二　來一三　九一・一五、一〇七・チ尼九・二六　七九・默一・五
二五　一五　ロ 申二三・一一　伯　ヌ 提前五・二二　ネ 詩三二・五、三八・
ロ 出一九・五　申一〇　二二・二七　詩七六　ル 詩五二・二二　ラ 羅三・四
・四 伯四一・一一　ヘ 詩二二・二三、五〇　ヲ 傳八・一一、一二　ワ 羅二・四　一一
詩二四・一　寄創　ト 詩二二・二一、二二　二六・一〇、五七・　カ 詩九〇・八　レ 加六・一六
一〇・二六、二八　永 伯二二・二七　詩　タ 詩二七・六　羅一二　ヨ 伯八・一三　詩九・　ソ 詩五一・九　賽四三
一七　賽五一・一三　ツ 來九・一四　約壹一・　ム 伯一四・四　詩五八
・二五、四四・二二　ナ 創二〇・六、三九・　ヤ 詩二七・一　ム 伯一四・四　詩五八
西二・一四　一八　約三・六　羅
・一一　傳五・四五　詩　ヘ 詩二二・二三、五〇　ル 利五・一九、六　ヤ 詩二七・一　ム 伯一四・四　詩五八
・二二　ヌ 提前五・二二　九　・三　約三・六　羅
・二　提後一二・一三　ウ 伯一四・四　五・一二　弗二・五

一五 されば汝ものいふときは義とせられ　なんぢ鞫くときは咎めなしとせられ給ふ　一六 視よわれ邪曲のなかにうまれ
一六 罪にありてわが母われをはらみたりき　一七 なんぢ眞實をこゝろの衷にまでのぞみ　わが隱れたるところに智慧を
一七 しらしめ給はん　一八 なんぢヒソプをもて我をきよめたまへ　さらばわれ淨まらん　我をあらひたまへ　さらばわれ
一八 雪よりも白からん　一九 なんぢ我によろこびと快樂とをきかせ　なんぢが碎きし骨をよろこばせたまへ　二〇 ねがはく
二〇 は聖顏をわがすべての罪よりそむけ　わがすべての不義をけしたまへ　二一 あゝ神よわがために淸心をつくり
二一 わが衷になほき靈をあらたにおこしたまへ　二二 われを聖前より棄たまふなかれ　汝のきよき靈をわれより取り
二二 たまふなかれ　二三 なんぢの救のよろこびを我にかへし自由の靈をあたへて我をたもちたまへ　二四 さらばわれ愆を
二四 をかせる者になんぢの途ををしへん罪人はなんぢに歸りきたるべし　二五 神よわが救のかみよ血をながしゝ罪より
二五 我をたすけいだしたまへ　わが舌は聲たからかになんぢの義をうたはん　二六 主よわが口唇をひらきたまへ　然ば
二六 わが口なんぢの頌美をあらはさん　二七 なんぢは祭物をこのみたまはず　もし然らずば我これをさゝげん　なんぢ
二七 また燔祭をも悅びたまはず　二八 神のもとめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり　神よなんぢは碎けたる悔しこゝろ
二八 を藐しめたまふまじ　二九 ねがはくは聖意にしたがひてシオンにさいはひし　エルサレムの石垣をきづきたま
二九 へ　その時なんぢ義のそなへものと燔祭と全きはんさいとを悅びたまはん　かくて人々なんぢの祭壇に
牡牛をさゝぐべし

第五二篇

エドム人ドエグ、サウルにきたりてダビデはアビメレクの家にきぬと告しときダビデがよみて伶長に
うたはしめたる教訓のうた

ハ 伯三八・三六　十 耶一六・一七　一〇　コ 羅八・九　箴四・三〇　二・九　詩四〇・六、五〇・　キ 詩三四・一八　賽
ノ 利一四・四、六四九　マ 詩五一・一　フ 創四・一四　王下　エ 遊後三・一七　ア 詩三五・二八　八 賽一・一一　耶　五七・一五、六六・二
民一九・一八　來九　ケ 徒一五・九　弗二・　一三・二三　テ 撒後一一・一七、一　サ 民一五・二七、三〇　七・二二　何六・六　ユ 詩四・五　馬三・三
ク 太五・四

一 猛者よなんぢ何なればあしき企圖をもて自らほこるや神のあはれみは恒にたえざるなり　二 なんぢの舌はあしきことをはかり利き剃刀のごとくいつはりをおこなふ　三 なんぢは善よりも惡をこのみ正義をいふよりも虛僞をいふをこのむ セラ　四 たばかりの舌よなんぢはすべての物をくひほろぼす言をこのむ　五 されば神とこしへまでも汝をくだき　また汝をとらへてその幕屋よりぬきいだし生るものの地よりなんぢの根をたやしたまはん セラ　六 義者はこれを見ておそれ彼をわらひていはん　七 神をおのが力となさず　その富のゆたかなるをたのみ　その惡をもて己をかたくせんとする人をみよと　八 然はあれどわれは神の家にあるあをき橄欖の樹のごとし　我はいやとほながに神のあはれみに依賴まん　九 なんぢこの事をおこなひ給ひしによりて我とこしへになんぢに感謝し　なんぢの聖徒のまへにて聖名をまちのぞまん　こは宜しきことなればなり

第五三篇

マハラッ（樂器の名、あるひはいふ調べの名）にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの教訓のうた

一 愚かなるものは心のうちに神なしといへり　かれらは腐れたりかれらは憎むべき不義をおこなへり善をおこなふ者なし　二 神は天より人の子をのぞみて悟るものと神をたづぬる者とありやなしやを見たまひしに　三 みな退ぞきてことごとく汚れたり善をなすものなし一人だになし　四 不義をおこなふものは知覺なきかかれらは物くふごとくわが民をくらひ　また神をよばふことをせざるなり　五 かれらは懼るべきことのなきときに大におそれたり　神はなんぢにむかひて營をつらぬるものの骨をちらしたまへばなり　神かれらを棄たまひしによりて汝かれらを辱かしめたり　六 願くはシオンよりイスラエルの救のいでんことを　神その民のとらはれたるを返したまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂まん

イ 詩篇二二・七　ロ 詩五〇・一九　ハ 詩五七・四、五九・　ニ 耶九・四、五　ホ 箴二・二一　ヘ 伯二二・一九　詩三七・三四、四〇・三、六四・九　ト 詩五八・一〇　チ 詩四九・六　リ 耶一一・一六　ヌ 詩五四・六　ル 詩一〇・四、一四・一　ワ 詩三三・一三　カ 代下一五・二、一九　ヨ 耶四・二一　タ 利二六・一七、三六　レ 箴二八・一　結六・五

ソ 詩一四・七　ツ 詩八六・一四　ネ 詩一一八・七　ナ 詩八九・四九　ラ 詩五二・九　ム 詩五九・一〇、九二　ウ 申三八・二四　キ 申後一六・七、八、一九・一九　ノ 詩一一六・三　オ 耶六・七

第五四篇

ジフ人のサウルにきたりてダビデはわれらの處にかくれをるにあらずやといひたりしとき

ダビデうたのかみに琴にてうたはしめたる教訓のうた

一 神よねがはくは汝の名によりて我をすくひ　なんぢの力をもて我をさばきたまへ　二 神よわが祈をきゝたまへ　わが口のことばに耳をかたぶけたまへ　三 そは外人はわれにさからひて起りたち强暴人はわがたましひを索むるなり　かれらは神をおのが前におかざりき セラ　四 みよ神はわれをたすくるものなり　主はわがたましひを保つものとともに在せり　五 主はわが仇にそのあしきことの報をなしたまはん　願くはなんぢの眞實によりて彼等をほろぼしたまへ　六 我よろこびて祭物をなんぢに獻ん　ヱホバよ我なんぢの名にむかひて感謝せんこは宜しきことなればなり　七 そはヱホバはすべての患難より我をすくひたまへり　わが目はわが仇につきての願望をみたり

第五五篇

ダビデうたのかみに琴にてうたはしめたる教訓のうた

一 神よねがはくは耳をわが祈にかたぶけたまへ　わが懇求をさけて身をかくしたまふなかれ　二 われに聖意をとめ　我にこたへたまへ　われ歎息によりてやすからず悲みうめくなり　三 これ仇のこゑと惡きものの暴虐とのゆゑなり　そはかれら不義をわれに負せ　いきどほりて我におひせまるなり　四 わが心わがうちに憂ひいたみ死のもろもろの恐懼わがうへにおちたり　五 おそれと戰慄とわれにのぞみ甚だしき恐懼われをおほへり　六 われ云ねがはくは鴿のごとく羽翼のあらんことを　さらば我とびさりて平安をえん　七 みよ我はるかにのがれさりて野にすまん セラ　八 われ速かにのがれて暴風と狂風とをはなれん　九 われ都のうちに强暴とあらそひと

一〇 をみたり 主よねがはくは彼等をほろぼしたまへ かれらの舌をわかれしめたまへ 一〇 彼等はひるもよるも石垣の
一一 うへをあるきて邑をめぐる 邑のうちには邪曲とあしき企圖とあり 一二 また惡きこと邑のうちにあり しへたげと
一二 欺詐とはその街衢をはなるゝことなし 一三 われを謗れるものは仇たりしものにあらず もし然りしならば尚しの
ばれしなるべし 我にむかひて己をたかくせし者はわれを恨みたりしものにあらず 若しかりしならば身をかくし
一四 て彼をさけしなるべし 一五 されどこれ汝なり われとおなじきもの わが友われと親しきものなり 一四 われら
一五 互にしたしき語らひをなし また會衆のなかに在てともに神の家にのぼりたりき 一五 死は忽然かれらにのぞみ
一六 その生るまゝにて陰府にくだらんことをそは惡事その住處にありその中にあればなり 一六 されど我はたゞ神を
一七 よばんヱホバわれを救ひたまふべし 一七 夕にあしたに晝にわれなげき且かなしみうめかん ヱホバわが聲をきゝ
一八 たまふべし 一八 ヱホバは我をせむる戰鬪よりわが靈魂をあがなひいだして平安をえしめたまへり そはわれを攻
一九 るもの多かりければなり 一九 太古よりいます者なる神はわが聲をきゝてかれらを惱めたまふべし セラ かれらに
二〇 は變ることなく神をおそるゝことなし 二〇 かの人はおのれと睦みをりしものに手をのべてその契約をけがしたり
二一 その口はなめらかにして乳酥のごとくなれどもその心はたゝかひなり その言はあぶらに勝りてやはらか
二二 なれどもぬきたる劍にことならず 二三 なんぢの荷をヱホバにゆだねよさらば汝をさゝへたまはん たゞしき人の
二三 うごかさるゝことを常にゆるしたまふまじ 二三 かくて神よなんぢはかれらを亡の坑におとしいれたまはん血を
ながすものと詭計おほきものとは生ておのが日の半にもいたらざるべし 然はあれどわれは汝によりたのまん

イ 詩四一・九　耶九・四　三、九、三〇 撒前五　ヌ 詩二八・三、五七・二五 路一二・二二　一〇・二七 傳七・一七
ロ 詩三五・二六、三八　ニ 詩四二・二　四、六二・四、六四 彼前五・七　ト 申三三・二七　ホ 民一六・三〇　ヘ 俱六・一〇 路一八・一　チ 詩七・四　一二・一八 箴五・三、四、ヲ 詩三七・二四　ワ 詩五五・六　カ 伯一五・三二 箴
ハ 撒後一五・一二、一　一 徒三・一、一〇・一　リ 徒一一・一　ル 詩三七・五 太六・
六・二三 詩四一・九

ヨ 詩五七・一　ソ 詩一一八・六 箴三一・三 來一三・六　ネ 路七・一〇　ラ 羅八・三一　ヰ 伯三三・三〇
タ 詩五七・三　ツ 詩五九・三、一四〇　ナ 馬三・一八　ム 詩五六・四
レ 詩五六・一〇、一一　ウ 詩一一六・八

第五六篇

ダビデがガテにてペリシテ人にとらへられしとき詠て「遠きところにをる音をたてぬ鴿」の
しらべにあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一 あゝ神よねがはくは我をあはれみたまへ 人いきまきて我をのまんとし終日たゝかひて我をしへたぐ
二 わが仇ひねもす急喘てわれをのまんとす誇りたかぶりて我とたゝかふものおほし 三 われおそるゝときは汝に
四 よりたのまん 四 われ神によりてその聖言をほめまつらん われ神に依賴みたればおそるゝことあらじ肉體われ
五 になにをなし得んや 五 かれらは終日わがことばを曲るなり その思念はことごとくわれにわざはひをなす
六 かれらは群つどひて身をひそめ わが歩に目をとめてわが靈魂をうかゞひもとむ 七 かれらは不義をもてのが
七 れんとおもへり 神よねがはくは憤ほりてもろもろの民をたふしたまへ 八 汝わがあまたゝびの流離をかぞへた
八 まへり なんぢの革囊にわが涙をたくはへたまへ こは皆なんぢの冊にしるしあるにあらずや 九 わがよびもとむ
九 る日にはわが仇しりぞかん われ神のわれを守りたまふことを知る 一〇 われ神によりてその聖言をほめまつらん
一〇 我ヱホバによりてそのみことばを讃まつらん 一一 われ神によりたのみたれば懼るゝことあらじ 人はわれに何を
一一 なしえんや 一二 神よわがなんぢにたてし誓はわれをまとへり われ感謝のさゝげものを汝にさゝげん 一三 汝わが
一二 たましひを死よりすくひたまへばなり なんぢ我をたふさじとわが足をまもり生命の光のうちにて神のまへに
一三 我をあゆませ給ひしにあらずや

第五七篇

ダビデが洞にいりてサウルの手をのがれしとき詠て「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて
伶長にうたはしめたるミクタムのうた

一　我をあはれみたまへ神よわれをあはれみたまへ　わが靈魂はなんぢを避所とす　われ禍害のすぎさるまでは
二　なんぢの翼のかげを避所とせん　我はいとたかき神によばはん　わがために百事をなしをへたまふ神によば
三　はん　神はたすけを天よりおくりて我をのまんとする者のそしるときに我を救ひたまはん　セラ　神はその憐憫
四　その眞實をおくりたまはん　わがたましひは群ゐる獅のなかにあり　火のごとくもゆる者　その齒は戈のごとく
五　矢のごとくその舌はとき劍のごとき人の子のなかに我ふしぬ　五　神よねがはくはみづからを天よりも高くし
六　みさかえを全地のうへに擧たまへ　六　かれらはわが足をとらへんとて網をまうく　わが靈魂はうなたるかれ
七　らはわがまへに陥をほりたり而してみづからその中におちいれり　セラ　七　わが心さだまれり神よわがこゝろ
八　定まれり　われ謳ひまつらん頌へまつらん　八　わが榮よさめよ　箏よ琴よさめよ　われ黎明をよびさまさん　九　主よ
九　われもろもろの民のなかにてなんぢに感謝し　もろもろの國のなかにて　汝をほめうたはん　一〇　そは汝のあはれみ
一〇　は大にして天にまでいたり　なんぢの眞實は雲にまでいたる　一一　神よねがはくは自からを天よりも高くし光榮を
一一　あまねく地のうへに擧たまへ

第五八篇

一　ダビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムのうた

一　なんぢら默しぬて義をのべうるか　人の子よなんぢらなほき審判をおこなふや　二　否なんぢらは
二　心のうちに惡事をおこなひ　その手の强暴をこの地にはかりいだすなり　三　あしきものは胎をはなるゝより背き
三　とほざかり生れいづるより迷ひていつはりをいふ　四　かれらの毒は蛇のどくのごとし　かれらは蠱術をおこなふ

イ詩五六・一　ロ寒二六・二〇　ハ詩一七・八、六三・七　ニ詩一三八・八　ホ詩一四四・五、七　ヘ詩五六・一　ト詩四〇・一一、四三　チ箴三〇・一四　リ詩五五・二一、六四　ヌ詩五七・一一、一〇　ル詩七・一五、一六、九・一五　ヲ詩一〇八・一　ワ詩一六・九、三〇・一二、一〇八・一二　カ詩一〇八・三　ヨ詩三六・五、七・一九、一〇三・一一、ソ詩五一・五　寒四八・一〇八・四　タ詩五七・五　レ詩九四・一〇　寒一〇・一一　ツ詩一四〇・三　傳一〇・一一

※耶八・一七

五　ものの甚たくみにまじなふその聲をだにきかざる耳ふさぐ聾ひの蝮のごとし　六　神よかれらの口の齒ををりたま
六　へ　ヱホバよ壯獅の牙をぬきくだきたまへ　七　願くはかれらを流れゆく水のごとくに消失しめ　その矢をはなつ
七　ときは折れたるごとくなし給はんことを　八　また融てきえゆく蝸牛のごとく婦のときならず產たる日をみぬ嬰の
八　ごとくならしめ給へ　九　なんぢらの釜いまだ荊棘の火をうけざるさきに靑をも燃たるをもともに狂風にて吹さり
九　たまはん　一〇　義者はかれらが讎かへさるゝを見てよろこび　その足をあしきものの血のなかにてあらはん
一〇　二　かくて人はいふべし　實にたゞしきものに報賞あり實にさばきをほどこしたまふ神はましますなりと

第五九篇

サウル、ダビデを殺さんとし人をおくりてその家をうかゞはしめし時ダビデがよみて

一　「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一　わが神よねがはくは我をわが仇よりたすけいだし　われを高處におきて我にさからひ起立つものより脫か
二　れしめたまへ　二　邪曲をおこなふものより我をたすけいだし血をながす人より我をすくひたまへ　三　視よかれら
三　は潛みかくれてわが靈魂をうかゞひ猛者むれつどひて我をせむ　ヱホバよ此はわれに愆あるにあらず　われに罪
四　まるにあらず　四　かれら趨りまはりて過失なきに我をそこなはんとて備をなす　ねがはくは我をたすくるために
五　目をさまして見たまへ　五　なんぢヱホバ萬軍の神イスラエルの神よ　ねがはくは目をさましてもろもろの國に
六　のぞみたまへ　あしき罪人にあはれみを加へたまふなかれ　セラ　六　かれらは夕にかへりきたり犬のごとくほえて
七　邑をへありく　七　視よかれらは口より惡をはく　そのくちびるに劍あり　かれらおもへらく誰ありてこの言をきか
八　んやと　八　されどヱホバよ汝はかれらをわらひ　もろもろの國をあざわらひたまはん　九　わが力よ　われ汝をまち

ナ伯四・一〇　詩三・七　ム伯三・一六　傳六・三　ラ箴七・五　詩一一・一二　ウ箴一〇・二五　ヰ詩五二・六、六四　ノ詩六八・二三　一〇、一〇七・四二　ク詩六七・四、九六・九八・九　オ詩九二・一五　ヤ詩一八・四八　マ詩五六・六　ケ摂前二四・一一　フ詩三五・二三、四四　コ詩五九・一四　エ詩五七・四　箴一二　テ詩一〇・一一、一三、六四・五、七三・一　ア摂前一九・一六　詩一、九四・七　二・一四

一〇 のぞまん 神はわがたかき櫓なり 一〇 憐憫をたまふ神はわれを迎へたまはん 神はわが仇につきての願望をわれに
一一 見させたまはん 一一 願くはかれらを殺したまふなかれ わが民つひに忘れやはせん 主われらの盾よ 大能をもて
一二 かれらを散し また卑したまへ 一二 かれらがくちびるの言はその口のつみなり かれらは詛と虚偽とをいひいづ
一三 るによりてその傲慢のためにとらへられしめたまへ 一三 忿恚をもてかれらをほろぼしたまへ 再びながらふる
ことなきまでに彼等をほろぼしたまへ ヤコブのなかに神いまして統治めたまふことをかれらに知しめて地の極
一四 にまでおよぼしたまへ セラ 一四 かれらは夕にかへりきたり 犬のごとくほえて邑をへありくべし 一五 かれらは
一五 ゆきゝして食物をあさり もし飽ことなくば終夜とゞまれり 一六 されど我はなんぢの大能をうたひ清晨にこゑを
一六 あげてなんぢの憐憫をうたひまつらん なんぢわが迫りくるしみたる日にたかき櫓となり わが避所となりたまひ
一七 たればなり 一七 わがちからよ我なんぢにむかひて頌辭をうたひまつらん 神はわがたかき櫓われにあはれみを
たまふ神なればなり

ダビデ、ナハライムのアラムおよびゾバのアラムとたゝかひをりしがヨアブかへりゆき鹽谷にて
エドム人一萬二千をころしゝとき教訓をなさんとてダビデがよみて「證詞の百合花」といふ調に

第六〇篇

一 神よなんぢわれらを棄われらをちらし給へり なんぢは憤ほりたまへり ねがはくは再びわれらを歸したま
二 へ 二 なんぢ國をふるはせてこれを裂たまへり ねがはくはその多くの隙をおぎなひたまへ そは國ゆりうごく
三 なり 三 なんぢはその民にたへがたきことをしめし人をよろめかする酒をわれらに飲しめ給へり 四 なんぢ

イ詩五九・一七、六二　ハ詩五四・七、九二・一一、一二・八　ホ歌一二・一三、一八　ト詩八三・一八　チ詩五九・六　リ伯一五・一二　詩一〇九・一〇　ヌ詩一八・一　ル詩五九・九、一〇　ヲ詩四四・九　ワ代下七・一四　カ詩七一・二〇　ヨ箴五一・一七、二二　耶二五・一五　レタ詩二〇・五　ソ詩一〇八・六　ツ詩一二・六　ネ箴一・六　ナ箴一三・二七　ラ申三三・一七　ム創四九・一〇　ウ撰後八・二　キ撰後八・一四　詩オ詩四四・九、六〇・一、一〇八・九　ノ撰後八・一　ク箴七・二一　ヤ詩一一八・八、一四　ケ箴六三・三　マ民二四・一八　代上フ歌一八・一〇　コ詩二七・四　エ詩一七・八、一、九一・四　五七・　テ詩二一・四　ア詩四〇・一一　二〇・二八　詩

五 眞理のために擧しめんとて 汝をおそるゝものに一つの旗をあたへたまへり セラ 五 ねがはくは右の手を
六 もて救をほどこし われらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ 六 神はその聖をもていひたま
七 へり われ甚くよろこばん われシケムをわかち スコテの谷をはからん 七 ギレアデはわがものマナセはわが有
八 なり エフライムも亦わが首のまもりなり ユダはわが杖 八 モアブはわが足盥なり エドムにはわが履をなげん
九 ペリシテよわが故によりて聲をあげよと 九 たれかわれを堅固なる邑にすゝましめんや 誰かわれをみちびきて
一〇 エドムにゆきたるか 一〇 神よなんぢはわれらを棄たまひしにあらずや 神よなんぢはわれらの軍とともにいで
一一 ゆきたまはず 一一 ねがはくは助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ 人のたすけは空しければなり 一二 われ
一二 らは神によりて勇しくはたらかん われらの敵をふみたまふものは神なればなり

第六一篇

一 琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた
二 あゝ神よねがはくはわが哭聲をきゝたまへ わが祈にみこゝろをとめたまへ 二 わが心くづほる
三 るとき地のはてより汝をよばん なんぢ我をみちびきてわが及びがたきほどの高き磐にのぼらせたまへ 三 なん
四 ぢはわが避所われを仇よりのがれしむる堅固なる櫓なればなり 四 われ永遠になんぢの帷幄にすまはん我なんぢ
五 の翼の下にのがれん セラ 五 神よなんぢはわがもろもろの誓をきゝ名をおそるゝものにたまふ嗣業をわれに
六 七 あたへたまへり 六 なんぢは王の生命をのばし その年を幾代にもいたらせたまはん 七 王はとこしへに神の
八 みまへにとゞまらん ねがはくは仁慈と眞實とをそなへて彼をまもりたまへ 八 さらば我とこしへに名をほめ
うたひて日ごとにわがもろもろの誓をつくのひ果さん

ヲ詩四四・九　ワ代下七・一四　カ詩七一・二〇　ヨ箴五一・一七、二二　耶二五・一五　レタ詩二〇・五　ソ詩一〇八・六　ツ詩一二・六　ネ箴一・六　ナ箴一三・二七　ラ申三三・一七　ム創四九・一〇　ウ撰後八・二　キ撰後八・一四　詩オ詩四四・九、六〇・一、一〇八・九　ノ撰後八・一　ク箴七・二一　ヤ詩一一八・八、一四　ケ箴六三・三　マ民二四・一八　代上フ歌一八・一〇　コ詩二七・四　エ詩一七・八、一、九一・四　五七・　テ詩二一・四　ア詩四〇・一一　二〇・二八　詩

第六二篇

エドトンの體にしたがひて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一　わがたましひは默してたゞ神をまつ　わがすくひは神よりいづるなり　二　神こそはわが磐わが
すくひなれ　またわが高き櫓にしあれば　我いたくは動かされじ　三　なんぢらは何のときまで人におしせまるや
なんぢら相共にかたぶける石垣のごとく　搖ぎうごける籬のごとくに　人をたふさんとするか　四　かれらは人を
たふとき位よりおとさんとのみ謀り　いつはりをよろこび　またその口にてはいはひその心にてはのろふ　セラ
五　わがたましひよ默してたゞ神をまて　そはわがのぞみは神よりいづ　六　神こそはわが磐わがすくひなれ　又わが
たかき櫓にしあれば我はうごかされじ　七　わが救とわが榮とは神にあり　わがちからの磐わがさけどころは神に
あり　八　民よいかなる時にも神によりたのめ　その前になんぢらの心をそゝぎいだせ　神はわれらの避所なり　セラ
九　實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり　すべてかれらを權衡におかば　上にあがりて虛しきもの
よりも輕きなり　一〇　暴虐をもて恃とするなかれ　掠奪ふをもてほこるなかれ　富のましくはゝる時はこれに心を
かくるなかれ　一一　ちからは神にあり　神ひとたび之をのたまへり　われ二次これをきけり　一二　あゝ主よあはれみも
亦なんぢにあり　なんぢは人おのおのの作にしたがひて報をなしたまへばなり

第六三篇

一　あゝ神よなんぢはわが神なり　われ切になんぢを戀したふ　二　曩にも我かくのごとく大權と榮光とを
ごとくわが靈魂はかわきて　汝をのぞみ　わが肉體はなんぢを

イ詩三三・二〇　ロ詩六二・六　ハ詩三七・二四　ニ箴三〇・一三　ホ詩二八・三　ヘ詩二六・一、二　ト耶三・二三　チ撫前一・一五　詩四二・四、哀二・一九　リ詩一八・二　ヌ詩三九・五、一一箴四〇・一五、一七羅　ル伯三・一・二五　ヲ默一九・一　ワ伯三三・一四　カ詩八六・一五、一〇　ヨ伯三四・一一　タ詩二四・一二　レ代上一六・一一　詩二七・四、七八・六一　ソ詩三〇・五　ツ詩一〇四・三三、一　ネ詩四二・八、一一九　ナ詩三六・八　ラ詩六一・四　ム結三五・五　ウ申六・一三　ノ詩五八・七　オ箴一・一一　ク詩一〇・一一、五九　ヤ詩七・二二、一三　マ箴一二・一三、一八　ケ詩三一・一一、五二　ヘ詩二六・一、二　ト耶三・二三　チ撫前一・一五　詩四二・四、哀二・一九　リ詩一八・二　ヌ詩三九・五、一一箴四〇・一五、一七羅　ル伯三・一・二五　ヲ默一九・一　ワ伯三三・一四　カ詩八六・一五、一〇　ヨ伯三四・一一　タ詩二四・一二　レ代上一六・一一　詩二七・四、七八・六一　ソ詩三〇・五　ツ詩一〇四・三三、一　ネ詩四二・八、一一九　ナ詩三六・八　ラ詩六一・四　ム結三五・五　ウ申六・一三　ノ詩五八・七　オ箴一・一一　ク詩一〇・一一、五九　ヤ詩七・二二、一三　マ箴一二・一三、一八　ケ詩三一・一一、五二

三　みんことをねがひ聖所にありて目をなんぢより離れしめざりき　四　なんぢの仁慈はいのちにも勝れるゆゑにわが
口唇はなんぢを讃まつらん　五　斯われはわが生るあひだ汝をいはひ名によりてわが手をあげん　六　われ床にあり
て汝をおもひいで夜の更るまゝになんぢを深くおもはん時　七　わがたましひは髓と脂とにて饗さるゝごとく飽こと
をえ　わが口はよろこびの口唇をもてなんぢを讃たゝへん　八　そはなんぢわが助となりたまひたれば我なんぢの
翼のかげに入てよろこびたのしまん　九　わがたましひはなんぢを慕追ふ　みぎの手はわれを支ふるなり　一〇　然ど
わがたましひを滅さんとて尋ねもとむるものは地のふかきところにゆき　一一　又つるぎの刃にわたされ野犬の獲る
ところとなるべし　一二　しかれども王は神をよろこばん　神によりて誓をたつるものはみな誇ることをえん　虛僞を
いふものの口はふさがるべければなり

第六四篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一　神よわがなげくときわが聲をきゝたまへ　わが生命をまもりて仇のおそれより脫かれしめたまへ
二　ねがはくは汝われをかくして惡をなすものの陰かなる謀略よりまぬかれしめ不義をおこなふものの喧嘩より
まぬかれしめ給へ　三　かれらは劍のごとくおのが舌をとぎ　その弓をはり矢をつがへるごとく苦言をはなち
四　隱れたるところにて全者を射んとす俄かにこれを射ておそるゝことなし　五　また彼此にあしき企圖をはげまし
共にはかりてひそかに羂をまうく　斯ていふ誰かわれらを見んと　六　かれらはさまざまの不義をたづねいだして
云われらは懇ろにたづね終れりと　おのおのの衷のおもひと心とはふかし　七　然はあれど神は矢にてかれらを射
たまふべし　かれらは俄かに傷をうけん　八　斯てかれらの舌は其身にさからふがゆゑに遂にかれらは躓かん　これ

を見るものみな逃れさるべし　九　もろもろの人はおそれん而して神のみわざをのべつたへ　その作たまへることを考ふべし　一〇　義者はヱホバをよろこびて之によりたのまん　すべて心のなほきものは皆ほこることを得ん

第六五篇

伶長にうたはしめたる歌　ダビデの讃美なり

一　あゝ神よさんびはシオンにて汝をまつ　人はみまへにて誓をはたさん　二　祈をきゝたまふものよ　四　汝に諸人こぞりて汝にきたらん　三　不義のことば我にかてり　なんぢ我儕のもろもろの愆をきよめたまはん　五　えらばれ汝にちかづけられて大庭にすまふ者はさいはひなり　われらはなんぢの家なんぢの宮のきよき處のめぐみにて飽ことをえん　六　われらが救のかみよ　地と海とのもろもろの極なるきはめて遠ものの恃とするなんぢは公義によりて畏るべきことをもて我儕にこたへたまはん　七　かみは大能をおび　その權力によりてもろもろの山をかたくたゝしめ　八　海のひゞき狂瀾のひゞき　もろもろの民のかしがましきを鎮めたまへり　九　されば極遠にすめる人々もなんぢのくさぐさの豫兆をみておそる　なんぢ朝夕のいづる處をよろこび謳はしめたまふ　一〇　なんぢ地にのぞみて漑そぎおほいに之をゆたかにしたまへり　神のかはに水みちたり　なんぢ如此そなへをなして穀物をかれらにあたへたまへり　一一　なんぢ畦をおほいにうるほし畝をたひらにし白雨にてこれをやはらかにし　その萌芽るを祝し　一二　また恩惠をもて年の冕弁としたまへり　なんぢの途には膏したゝれり　一三　その恩滴は野の牧場をうるほし小山はみな歡びにかこまる　一四　牧場はみな羊のむれを衣　もろもろの谷は穀物におほはれたり　かれらは皆よろこびてよばはりまた謳ふ

イ 詩四〇・三　ロ 耶五〇・二八、五一　ハ 詩三二・一一、五八・一〇、六八・三　ニ 箴六六・二三　ホ 詩三八・四、四〇・一二　ヘ 詩五一・二、七九・九　箴六・七　來九　ト 詩四・三　チ 詩三三・一二、八四・一四　約壹一・七、一四　リ 詩三六・八　ヌ 詩二二・二七　ル 詩九三・一　ヲ 詩八九・九、一〇七・二九　太八・二六　ワ 詩七六・一〇　寒一七・二、一三　カ 申一一・一二　ヨ 詩六八・九、一〇、一〇四・一三　耶五　タ 詩四六・四　レ 箴五五・一二　ソ 詩一〇〇・一　ツ 詩六五・五　ネ 詩一八・四四　ナ 詩二二・二七、六七

三、一一七・二　ラ 詩九六・一、二　ム 詩四六・八　ウ 出一四・二一　キ 詩一四・六　ノ 詩一一・四　オ 詩一二一・三　ク 詩一七・三　箴四八・一〇　ヤ 申一三・九　俊約一・六、七　マ 哀一、一三　ケ 箴五一・二三　フ 箴四三・二　コ 詩一〇〇・四、一一　エ 傳五・四　六・一四、一七—一　ア 伯二七・九　徳一五・二九、二八・九　箴　サ 詩一一六・一、二　ラ 詩三四・一一　雅四・三　一・一五　約九・三一

第六六篇

全地よ神にむかひて歡びよばはれ　二　その名の榮光をうたへ　その頌美をさかえしめよ　三　かみに告まつれ　汝のもろもろの功用はおそるべきかな　大なる力によりてなんぢの仇はなんぢに畏れしたがひ　四　全地はなんぢを拜みてうたひ名をほめうたはんと　セラ　五　來りて神のみわざをみよ　人の子輩にむかひて作たまふことはおそるべきかな　六　神はうみをかへて乾ける地となしたまへり　ひとびと歩行にて河をわたりき　その處にてわれらは神をよろこべり　七　神はその大能をもてとこしへに統治め　その目は諸國をみたまふ　そむく者みづからを崇むべからず　セラ　八　もろもろの民よわれらの神をほめまつれ　神をほめたゝふる聲をきこえしめよ　九　神はわれらの靈魂をながらへしめ　われらの足のうごかさるゝことをゆるしたまはず　一〇　神よなんぢはわれらを試みて白銀をねるごとくにわれらを錬たまひたればなり　一一　汝われらを網にひきいれ　われらの腰におもき荷をおき　一二　人々をわれらの首のうへに騎こえしめたまひき　われらは火のなか水のなかをすぎゆけり　されど汝その中よりわれらをひきいだし豐盛なる處にいたらしめたまへり　一三　われ燔祭をもてなんぢの家にゆかん　迫りくるしみたるときにわが口唇のいひいでわが口ののべし誓をなんぢに償はん　一五　われ肥たるものを燔祭とし牡羊を馨香として　汝にさゝげ牡牛と牡山羊とをそなへまつらん　セラ　一六　神をおそるゝ人よ　みな來りてきけ　われ神のわがたましひのために作たまへることをのべん　一七　われわが口をもて神によばはり　また舌をもてあがむ　一八　然るにわが心にしれる不義あらば主はわれにきゝたまふまじ　一九　されどまことに神はきゝたまへり　聖意をわがいのりの聲にとめたまへり　二〇　神はほむべきかな　わが祈をしりぞけず　その憐憫をわれよりとりのぞきたまはざりき

琴にあはせて伶長にうたはしめたる歌なり　讃美なり

第六七篇

一　ねがはくは神われらをあはれみ　われらをさきはひてその聖顔をわれらのうへに照したまはん　セラ
二　此はなんぢの途のあまねく地にしられ　なんぢの救のもろもろの國のうちに知れんがためなり
三　かみよ庶民はなんぢに感謝し　もろもろの民はみな汝をほめたゝへん
四　もろもろの國はたのしみ又よろこびうたふべし　なんぢは直をもて庶民をさばき　地のうへなる萬の國ををさめたまふべければなり　セラ
五　神よたみらはなんぢに感謝し　もろもろの民はみな汝をほめたゝへん
六　地は産物をいだせり　神わが神はわれらを福ひたまはん
七　神われらをさきはひたまふべし　かくて地のもろもろの極ことごとく神をおそれん

第六八篇

伶長にうたはしめたるダビデのうたなり　讃美なり

一　ねがはくは神おきたまへ　その仇はことごとくちり　神をにくむものは前よりにげさらんことを
二　烟のおひやらるゝごとくかれらを驅逐たまへ　惡きものは火のまへに蠟のとくるごとく　神のみまへにてほろぶべし
三　されど義きものには歡喜あり　かれら神の前にてよろこびをどらん實にたのしみて喜ばん
四　神のみまへにうたへ　その名をほめたゝへよ　乘て野をすぐる者のために大道をきづけ　かれの名をヤハとよぶ　その前によろこびをどれ
五　きよき住居にまします神はみなしごの父やもめの審士なり　神はよるべなきものを家族の中にをらしめ囚人をときて福祉にみちびきたまふ　されど悖逆者はうるほひなき地にすめり
六
七　神よなんぢは民にさきだちいでて野をすゝみゆきたまひき　セラ
八　そのとき地ふるひ天かみのみまへに漏る　シナイの山すら神

イ民六・二五　詩四八路二・三〇・三一　多　ヘ利二六・四　詩八五　リ寮九・一八　何一三　ヲ詩六六・四　タ詩一〇七・一〇、一　ソ出一三・二一　士四・六、三一・一六、八〇・三、七、一九、一二九・一三五　ニ詩六六・四　ト詩二二・二七　ヌ詩九七・五　米一・四　カ詩一〇・一四、一八、一四六・九　徒五・一一、五八　ヨ申前二・五　詩一一　レ詩一〇七・三四、一二・六、七　ツ出一九・一六、一八　士五・四　寮六四・九八・九　ネ申一一・一一、一二　結三四・二六　ナ申二六・五、九　詩七四・二九　ラ民三一・八、九、五四　書一〇・一六、一二　ム詩一〇五・三七　ウ民二一・三　書一〇・一〇、一二・一　ヰ申一二・五、一一　王上九・三　詩八七・一二、一三二・一　ノ申三三・二　王下六・一六、一七　但七・十　詩七八・六〇　マ申三二・三九　箴四・二三　ケ詩一一〇・六　哈三・一三　フ詩五五・二三　コ民二一・二三　エ出一四・二二　テ詩五八・一〇　ア王上二一・一九　サ代上一三・八、一五・一六　詩四七・五

イスラエルの神の前にふるひうごけり
九　神よなんぢの嗣業の地のつかれおとろへたるとき豐かなる雨をふらせて之をかたくしたまへり
一〇　曩になんぢの公會はその中にとどまれり　神よなんぢは惠をもて貧きもののために預備をなしたまひき
一一　主みことばを賜ふ　その佳音をのぶる婦女はおほくして群をなせり
一二　もろもろの軍旅の王たちはにげさる　逃去りたれば家なる婦女はその掠物をわかつ
一三　なんぢら羊の牢のうちにふすときは鴿のつばさの白銀におほはれその毛の黃金におほはるゝがごとし
一四　全能者かしこにて列王をちらし給へるときはサルモンの山に雪ふりたるがごとくなりき
一五　バシャンのやまは神の山なりバシャンのやまは峰かさなれる山なり
一六　峰かさなれるもろもろの山よ　なんぢら何なれば神の住所にえらびたまへる山をねたみ見るや　然れヱホバは永遠にこの山にすみたまはん
一七　神の戰車はよろづに萬をかさね千にちぢをくはふ　主その中にいませり　聖所にいますがごとくシナイの山にいましゝがごとし
一八　なんぢ高處にのぼり虜者をとりこにしてひきゐ禮物を人のなかよりも叛逆者のなかよりも受たまへり　ヤハの神こゝに住たまはんが爲なり
一九　日々にわれらの荷をおひたまふ主われらのすくひの神はほむべきかな　セラ
二〇　神はしばしばわれらを助けたまへる神なり　死よりのがれうるは主ヱホバに由る
二一　神はその仇のかうべを擊やぶりたまはん　愆のなかにとどまるものの髮おほき顱頂をうちやぶりたまはん
二二　主いへらく我バシャンよりかれらを携へかへり海のふかき所よりたづさへ歸らん
二三　斯てなんぢの足をそのあたの血にひたし之をなんぢの犬の舌になめしめん
二四　神よすべての人はなんぢの進行きたまふをみたり　わが神わが王の聖所にすゝみゆきたまふを見たり
二五　襲うつ童女のなかに

二六 ありて謳ふものは前にゆき琴ひくものは後にしたがへり　二六 なんぢらすべての會にて神をほめよ イスラエルの
二七 みなもとより出るなんぢらよ 主をほめまつれ　二七 彼處にかれらを統るとしわかきベニヤミンあり ユダの諸侯と
二八 その群衆とありまたゼブルンのきみたちナフタリの諸侯あり　二八 なんぢの神はなんぢの力をたてたまへり
二九 神よなんぢ我儕のためになしたまひし事をかたくしたまへ　二九 エルサレムなるなんぢの宮のために列王なんぢに
三〇 禮物をさゝげん　三〇 ねがはくは葦間の獸むらがれる牡犢のごときもろもろの民をいましめてかれらに白銀を
三一 たづさへきたり みづから服ふことを爲しめたまへ 神はたゝかひを好むもろもろの民をちらしたまへり
三二 諸侯はエジプトよりきたり エテオピアはあわたゞしく神にむかひて手をのべん　三二 地のもろもろのくによ
三三 神のまへにうたへ主をほめうたへ セラ　三三 上古よりの天の天にのりたまふ者にむかひてうたへ みよ主はみこゑ
三四 を發したまふ勢力ある聲をいだしたまふ　三四 なんぢらちからを神に歸せよ その稜威はイスラエルの上に
三五 とどまり その大能は雲のなかにあり　三五 神のおそるべき狀はきよき所よりあらはる イスラエルの神はその民に
ちからと勢力とをあたへたまふ 神はほむべきかな

第六九篇

百合花にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 神よねがはくは我をすくひたまへ 大水ながれきたりて我がたましひにまでおよべり　二 われ
立止なき ふかき 泥の中にしづめり われ深水におちいる おほみづわが上をあふれすぐ　三 われ歎息によりて
つかれたり わが喉はかわき わが目はわが神をまちわびておとろへぬ　四 故なくしてわれをにくむ者わがかしら

イ 申三三・二八 寒 四、二五 代下三二 ロ 詩前九・二一 ハ 詩四二・八 ニ 王上一〇・一〇、二 ホ 詩二二・二二 ヘ 詩後八・二、六 ト 寒一九・一九、二一 チ 詩七二・九 寒四五 リ 詩四四・二〇 ヌ 詩一八・一〇、六八 ル 詩二九・三 ヲ 詩二九・一 ワ 詩四五・四、六五・五、六六・五、七六 カ 詩六九・二、一四、一五 拿二・五 タ 詩六・六 レ 詩一九・八二、一 ソ 詩三五・一九 約一五・二五 ツ 詩三二・一一 寒五三・三 約一・一、七・五 エ 伯一六・二

五 の髪よりもおほく謂なくして わが仇となり我をほろぼさんとするものの勢力つよし われ掠めざりしものをも
六 償はせらる　五 神よなんぢはわが愚なるをしりたまふ わがもろもろの罪はなんぢにかくれざるなり　六 萬軍の
ヱホバ主よ ねがはくは汝をまちのぞむ者をわが故によりて辱かしめらるゝことなからしめたまへ イスラエルの
七 神よねがはくはなんぢを求むる者をわが故によりて恥をおはしめらるゝことなからしめたまへ　七 我はなんぢの
八 ために謗をおひ恥はわが面をおほひたればなり　八 われわが兄弟には旅人のごとく わが母の子には外人のごとく
九 なれり　九 そはなんぢの家をおもふ熱心われをくらひ汝をそしるものの謗われにおよべり　一〇 われ涙をながして
一〇 食をたち わが靈魂をなげかすれば反てこれによりて謗をうく　一一 われ麁布をころもとなしゝにかれらが諺語と
一二 なりぬ　一二 門にすわる者はわがうへをかたる われは醉狂たるものに謳ひはやされたり　一三 然はあれどヱホバよ
一三 われは惠のときに汝にいのる ねがはくは神よなんぢの憐憫のおほきによりて汝のすくひの眞實をもて我にとた
一四 へたまへ　一四 ねがはくは泥のなかより我をたすけいだして 沈まざらしめたまへ 我をにくむものより深水より
一五 たすけいだしたまへ　一五 大水われを淹ふことなく淵われをのむことなく坑その口をわがうへに閉ること なから
一六 しめたまへ　一六 ヱホバよねがはくは我にこたへたまへ なんぢの仁慈うるはしければなり なんぢの憐憫はおほし
一七 われに歸りきたりたまへ　一七 面をなんぢの僕にかくしたまふなかれ われ迫りくるしめり ねがはくは速かに我に
一八 こたへたまへ　一八 わがたましひに近くよりて之をあがなひわが仇のゆゑに我をすくひたまへ　一九 汝はわがうくる
一九 謗とはぢと侮辱とをしりたまへり わが敵はみな汝のみまへにあり　二〇 譏謗わが心をくだきぬれば我いたくわづ
二〇 らへり われ憐憫をあたふる者をまちたれど一人だになく 慰むるものを俟たれど一人をもみざりき　二一 かれらは

ネ 詩一一九・一三九 約三・一七 ナ 詩八九・五〇、五一 ラ 詩三五・一三、一四 ム 王上九・七 邪二四 ウ 伯三〇・九 詩三五・九、一五、一六 ヰ 寒四九・八、五五・六 ノ 詩一四・七 オ 詩六九・一二、一五 ク 民一六・三三 ヤ 詩六三・三 マ 詩二五・一六、八六 ケ 詩二七・九、一〇二 フ 詩二二・六、七 五三・三 來一二・二 コ 詩一四二・四 詩六三・五 エ 伯一六・二

二二 苦草をわがくひものにあたへ わが渴けるときに醋をのませたり 二三 ねがはくは彼等のまへなる筵は網となり
二四 そのたのむ安逸はつひに羂となれ 二五 その目をくらくして見しめず その腰をつねにふるはしめたまへ 二六 願くは なんぢの忿恚をかれらのうへにそゝぎ 汝のいかりの猛烈をかれらに追及せたまへ 二七 かれらの屋をむなしくせよ その幕屋に人をすまはするなかれ 二八 かれらはなんぢが擊たまひたる者をせめ なんぢが傷けたまひたるものの痛をかたりふるればなり 二九 ねがはくはかれらの不義に不義をくはへてなんぢの義にあづからせ給ふなかれ 三〇 かれらを生命の册よりけして義きものとともに記さるゝことなからしめたまへ 三一 われ歌をもて神の名をほめたゝへみ且うれひあり 三二 神よねがはくはなんぢの救われを高處におかんことを 三三 われ感謝をもて神をあがめまつらん 三四 此はをうしまたは角と蹄とある力つよき牡牛にまさりてヱホバよろこびたまはん 三五 謙遜者はこれを見てよろこべり 三六 神をしたふ者よなんぢらの心はいくべし 三七 ヱホバは乏しきものの聲をきゝ その俘囚をかろしめたまはざればなり 三八 天地はヱホバをほめ蒼海とその中にうごくあらゆるものとはヱホバを讃まつるべし 三九 神はシオンをすくひユダのもろもろの邑を建たまふべければなり かれらは其處にすみ且これをおのが有とせん 四〇 その僕のすゑも亦これを嗣その名をいつくしむ者その中にすまん

第七〇篇

伶長にうたはしめたるダビデが記念のうた

一 神よねがはくは我をすくひたまへ ヱホバよ速きたりて我をたすけたまへ 二 わが靈魂をたづぬるものの恥あはてんことを わが害はるゝをよろこぶものの後にしりぞきて恥をおはんことを 三 あゝ視よや

イ 太二七・三四、四八 可一五・二三 約一九・二九 ロ 羅一・九、一〇 ハ 賽六・九、一〇 約一二・三九、四〇 羅一・一〇 哥後三・一四 ニ 撒前二・一六 ホ 太二三・三八 徒一・二〇 ヘ 賽五三・四 ト 代下二八・九 亞一・三 チ 羅一・二八 リ 賽二六・一〇 羅九・三一 ヌ 出三二・三二 默三・五、一三 ル 結一三・九 路一〇・二〇 來一二・二三 ヲ 詩二八・七 ワ 詩五〇・一三、一四、二三 カ 詩三四・二 ヨ 詩二二・二六 タ 弗三・一 レ 詩九六・一二、一四 八・一 賽四四・二三、二四 ソ 賽五五・一二 ツ 詩五一・一八 賽四九・一三 ラ 詩三五・四、二六、七一・一三 ム 詩四〇・一五 ナ 詩四〇・一三、七一・一二 ネ 詩一〇二・二八

四 視よやといふもののおのが恥によりて後にしりぞかんことを 四 すべて汝をたづねもとむる者のなんぢによりて樂みよろこばんことを なんぢの救をしたふもののつねに神は大なるかなとなへんことを 五 われは苦しみ且ともし神よいそぎて我にきたりたまへ 汝はわが助われを救ふものなり ヱホバよねがはくは猶豫たまふなかれ

第七一篇

一 ヱホバよ我なんぢに依賴む ねがはくは何の日までも恥うくることなからしめ給へ 二 なんぢの義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへ なんぢの耳をわれに傾けて我をすくひたまへ 三 ねがはくは汝わがすまひの磐となりたまへ われ恒にそのところに往ことを得んなんぢ我をすくはんとて勅命をいだしたまへり そは汝はわが磐わが城なり 四 わが神よあしきものの手より不義殘忍なる人のてより我をまぬかれしめたまへ 五 主ヱホバよ なんぢはわが望なり わが幼少よりの恃なり 六 われ胎をはなるゝより汝にまもられ母の腹にありしときより 汝にめぐまれたり 我つねに汝をほめたゝへん 七 我おほくの人にあやしまるゝごとき者となれり 然どなんぢはわが堅固なる避所なり 八 なんぢの頌辭となんぢの頌美とは終日わが口にみちん 九 わが年老ぬるとき我をすてたまふなかれ わが力おとろふるとき我をはなれたまふなかれ 一〇 わが仇はわがことを論らひ わが靈魂をうかゞふ者はたがひに議ていふ 一一 神かれを離れたり彼をたすくる者なし かれを追てとらへよと 一二 神よわれに遠ざかりたまふなかれ わが神よ とく來りて我をたすけたまへ 一三 わがたましひの敵ははぢ且おとろへ我をそこなはんとするものは謗と辱とにおほはれよ 一四 されど我はたえず望をいだきていやますます汝をほめたゝへん 一五 わが口はひねもす汝の義となんぢの救とをかたらん われその數をしらざれば

ウ 詩四〇・一七 キ 詩一四一・一 ノ 詩二五・二、三、三一 ・一 オ 詩三一・一 ク 詩一七・六 ヤ 詩三一・二、三 マ 詩四四・四 ケ 詩一四〇・一、四 フ 耶一七・七、一七 コ 詩二二・九、一〇 賽四六・三 エ 賽八・一八 哥前四・九 テ 詩三五・二八 ア 詩七一・一八 サ 撒後一七・一 二七・一 キ 詩二二・一一、一九、三五・二二、三八・一 太 ユ 詩七〇・一 メ 詩三五・四、二六、四〇・一四、七〇・一 ミ 詩三五・二八、七一・一七、二、七一・二四 シ 詩四〇・五、一三九・一七・一八

一六 なり　一七 われは主ヱホバの大能の事跡をたづさへゆかん　われは只なんぢの義のみをかたらん　一七 神よなんぢ
一八 われを幼少より教へたまへり　われ今にいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたへたり　一八 神よねがはくは
われ老て頭髪しろくなるとも我がなんぢの力を次代にのべつたへ　なんぢの大能を世にうまれいづる凡のものに
一九 宣傳ふるまで我をはなれ給ふなかれ　一九 神よなんぢの義もまた甚たかし　なんぢは大なることをなしたまへり
二〇 神よたれか汝にひとしき者あらんや　二〇 汝われらを多のおもき苦難にあはせたまへり　なんぢ再びわれらを活し
二一 われらを地の深所よりあげたまはん　二一 ねがはくは我をいよいよ大ならしめ歸りきたりて我をなぐさめ給へ
二二 わが神よさらばわれ箏をもて汝をほめ　なんぢの眞實をほめたゝへん　イスラエルの聖者よわれ琴をもて
二三 なんぢを讃うたはん　二三 われ聖前にうたふときわが口唇よろこびなんぢの贖ひたまへるわが靈魂おほいに喜ばん
二四 わが舌もまた終日なんぢの義をかたらん　われを害はんとするもの愧惶つればなり

第七二篇

ソロモンのうた

一 神よねがはくは汝のもろもろの審判を王にあたへ　なんぢの義をわうの子にあたへたまへ　二 かれ
は義をもてなんぢの民をさばき公平をもて苦しむものを鞫かん　三 義によりて山と岡とは民に平康をあたふべし
四 かれは民のくるしむ者のために審判をなし乏しきものの子輩をすくひ虐ぐるものを壞きたまはん　五 かれら
は日と月とのあらんかぎり世々おしなべて汝をおそるべし　六 かれは刈とれる牧にふる雨のごとく地をうるほす
白雨のごとくのぞまん　七 かれの世にたゞしき者はさかえ平和は月のうするまで豐かならん　八 またその政治は

イ詩七一・九　ロ詩五七・一〇　ハ詩三五・一〇、八六・八八、八九・六、八　ニ詩六〇・三　ホ何六・一、二　ヘ詩九二・一—三、一五〇・三　ト王下一九・二二　チ詩一〇三・四　リ詩七一・八、一五　ヌ詩七一・一三　ル箴一・二—四、三　ヲ詩八五・一〇　箴三二・七、五二・七　ワ箴一・一四　カ詩七二・七、一七、八九・三六、三七　ヨ申後二三・四　何六・四・二二、二四　詩二・八、八〇・一一、八九・二五　亞九・一〇　タ箴二・四　但二・四四　路一・三三　レ出二三・三一　王上一〇　ソ詩七四・一四　ツ箴四九・二三　米七・一七　ネ代下九・二一　詩四五・一二、六八・二九　箴四九・七、六〇・六、九　ナ箴四九・二二、二三

ラ伯二九・一二　ム詩一一六・一五　ウ王上四・二〇　キ詩八九・三六　ノ創一二・三、二二・一八　耶四・二　オ路一・四八　ク出一五・一一　詩七七・一四、一三六　ヤ代上二九・一〇　詩四一・一三、一〇六　ケ民一四・二一　亞・四八　マ尼九・六　フ伯二一・七　詩三七・一　耶一二・一　コ伯二一・九　エ詩一〇九・一八　テ伯一五・二七　詩一一九・七〇　耶五・二八　ア何七・一六

一〇 海より海にいたり河より地のはてにおよぶべし　九 野にをる者はそのまへに屈み　その仇は塵をなめん　一〇 タル
シシおよび島々の王たちは貢ををさめ　シバとセバの王たちは禮物をさゝげん　一一 もろもろの王はそのまへに
俯伏し　もろもろの國はかれにつかへん　一二 かれは乏しき者をその叫ぶときにすくひ　助けなき苦しむ者をたすけ
一三 弱きものと乏しき者とをあはれみ　乏しきものの靈魂をすくひ　一四 かれらのたましひを暴虐と强暴とより
一五 あがなひたまふ　その血はみまへに貴かるべし　一五 かれらは存ふべし　人はシバの黃金をさゝげてかれのために
一六 恒にいのり終日かれをいはゝん　一六 國のうち五穀ゆたかにしてその實はレバノンのごとく山のいたゞきにそよぎ
一七 邑の人々は地の草のごとく榮ゆべし　一七 かれの名はつねにたえず　かれの名は日の久しきごとくに絶ることなし
一八 人はかれによりて福祉をえん　もろもろの國はかれをさいはひなる者ととなへん　一八 たゞイスラエルの神
一九 のみ奇しき事跡をなしたまへり　神ヱホバはほむべきかな　一九 その榮光の名はよゝにほむべきかな　全地はその
二〇 榮光にて滿べし　アーメン　アーメン　二〇 ヱッサイの子ダビデの祈はをはりぬ

第七三篇

アサフのうた

一 神はイスラエルにむかひ心のきよきものに對ひてまことに惠あり　二 然はあれどわれはわが足
三 つまづくばかり　わが歩すべるばかりにてありき　三 こはわれ惡きものの榮ゆるを見てその誇れる者をねたみし
四 による　四 かれらは死るに苦しみなく　そのちからは反てかたし　五 かれらは人のごとく憂にをらず人のごとく
六 患難にあふことなし　六 このゆゑに傲慢は妝飾のごとくその頸をめぐり　强暴はころものごとく彼等をおほへり
七 かれら肥ふとりてその目とびいで心の欲にまさりて物をうるなり　八 また嘲笑をなし惡をもて暴虐のことばを

一 詩篇　七二・九——七三・八　二 三 四 五 六 七 八

九 いだし高ぶりてものいふ　その口を天におき　その舌を地にあまねく往しむ　一〇 このゆゑにかれの民はこゝに
一一 かへり水のみちたる杯をしぼりいだして　一二 いへらく 神いかで知たまはんや　至上者に知識あらんやと　一三 視よ
一三 かれらは惡きものなるに常にやすらかにしてその富ましくはゝれり　一四 誠に我はいたづらに心をきよめ罪をかゝ
一四 さずして手をあらひたり　一五 そはわれ終日なやみにあひ朝ごとに責をうけしなり　一六 われもし斯ることを述んと
一六 いひしならば我なんぢが子輩の代をあやまらせしならん　一七 われこれらの道理をしらんとして思ひめぐらしゝに
一七 わが眼いたく痛たり　一八 われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふかく思へるまでは然りき　一八 誠になんぢはかれ
一九 らを滑かなるところにおき　かれらを滅亡におとしいれ給ふ　一九 かれらは瞬間にやぶれたるかな　彼等は恐怖を
二〇 もてことごとく滅びたり　二一 主よなんぢ目をさましてかれらが像をかろしめたまはんときは夢みし人の目さめ
二一 たるがごとし　二二 わが心はうれへ　わが腎はさゝれたり　二三 われおろかにして知覺なし聖前にありて獸にひとし
二三 かりき　二四 されど我つねになんぢとともにあり　汝わが右手をたもちたまへり　二四 なんぢその訓諭をもて我を
二五 みちびき後またわれをうけて榮光のうちに入たまはん　二五 汝のほかに我たれをか天にもたん　地にはなんぢの
二六 他にわが慕ふものなし　二六 わが身とわが心とはおとろふ　されど神はわがこゝろの磐わがとこしへの嗣業なり
二七 視よなんぢに遠きものは滅びん　汝をはなれて姦淫をおこなふ者はみなんぢ之をほろぼしたまひたり
二八 神にちかづき奉るは我によきことなり　われは主エホバを避所としてそのもろもろの事跡をのべつたへん

第七四篇

アサフの教訓のうた

イ 彼後二・一八　ロ 詩一六　ハ 詩七五・八　伯二・一三　一〇・一、九四・七　ニ 詩七三・三　ホ 伯二・一五、三四　・九、三五・三　ヘ 詩二六・六　ト 傳八・七　チ 詩七七・一三　リ 詩三七・三八　ヌ 詩三五・六　ル 詩七八・六五　ヲ 伯二〇・八　詩九〇・五　寒二九・七、八　ワ 詩七三・三　カ 詩九二・六　・二　ヨ 詩三二・八　寒五八　タ 腓三・八　レ 詩八四・二、一一九　ソ 詩一六・五、一一九　・五七　ツ 詩一九・一五五　ネ 出三四・一五　民一五・三九　雅四・四　ナ 來一〇・二二　ラ 詩一〇七・二二、一一八・一七

一 神よいかなれば汝われらをかぎりなく棄たまひしや　奈何ばなんぢの草苑の羊にみいかりの煙あがれるや
二 ねがはくは往昔なんぢが買求めたまへる公會ゆづりの支派となさんとて贖ひたまへるものを思ひいでたまへ
三 又なんぢが住たまふシオンの山をおもひいで給へ　三 とこしへの滅亡の跡にみあしを向たまへ仇は聖所にてもろ
四 もろの惡きわざをおこなへり　四 なんぢの敵はなんぢの集のなかに吼たけびおのが旗をたてて誌とせり　五 かれ
五 らは林のしげみにて斧をあぐる人の狀にみゆ　六 いま鉞と鎚とをもて聖所のなかなる彫刻めるものをことごとく
六 毀ちおとせり　七 かれらはなんぢの聖所に火をかけ名の居所をけがして地におとしたり　八 かれら心のうちに
七 いふ われらことごとく之をこぼちあらさんと　かくて國内なる神のもろもろの會堂をやきつくせり　九 われらの
八 誌はみえず預言者も今はなし　斯ていくその時をかふべき　われらのうちに知るものなし　一〇 神よ敵はいくその時
九 をふるまでそしるや　仇はなんぢの名をとこしへに汚すならんか　一一 いかなれば汝その手みぎの手をひきたまふ
一〇 や　ねがはくは手をふところよりいだしてかれらを滅したまへ　一二 神はいにしへよりわが王なり　すくひを世
一一 の中におこなひたまへり　一三 なんぢその力をもて海をわかち水のなかなる龍の首をくだき　一四 鰐のかうべをうち
一二 くだき野にすめる民にあたへて食となしたまへり　一五 なんぢは泉と水流とをひらき　又もろもろの大河をからし
一三 たまへり　一六 晝はなんぢのもの夜も又汝のものなり　なんぢは光と日とをそなへ　一七 あまねく地のもろもろの界
一四 をたて夏と冬とをつくりたまへり　一八 エホバよ仇はなんぢをそしり愚かなる民はなんぢの名をけがせりこの事を
一五 おもひいでたまへ　一九 願くはなんぢの鴿のたましひを野のあらき獸にわたしたまふなかれ　苦しむものの命を

ム 詩四四・九、二三、六〇・一、一〇、七七・七　耶三一・三七、三三・二四　ウ 詩九五・七、一〇〇　・三　半出一五・一六　申九　・二九　ノ 申三二・九　耶一〇　・二六　オ 哀二・七　ク 何六・二七　ヤ 王上六・一八、二九、三二、三五　マ 王下二五・九　ケ 詩八九・三九　フ 詩八三・四　コ 摂前三・一一　廢八・　サ 寒五一・九、一〇　結二九・三、三二・二　キ 詩七二・九　テ 詩四四・四　ア 出一四・二二　ユ 民一四・九　メ 出一七・五、六　民二〇・一一　詩一〇五　・四一　寒四八・二一　ミ 書三・一三　シ 創一・二四　エ 從一七・二六　ヒ 創八・二二　モ 詩七四・二二　一六・一九　セ 詩三九・八　ス 歌二・一四　イ 詩六八・一〇

とこしへに忘れたまふなかれ　二〇 契約をかへりみたまへ　地のくらきところは強暴の宅にて充たればなり　二一 ね
がはくは虐げらるゝものを慚退かしめ給ふなかれ　惱るものと苦しむものとに聖名をほめたゝへしめたまへ
二二 神よおきてなんぢの訟をあげつらひ愚かなるものの終日なんぢを謗れるをみこゝろに記たまへ　二三 なんぢの
敵の聲をわすれたまふなかれ　汝にさからひて起りたつ者のかしがましき聲はたえずあがれり

第七五篇

一 神よわれら汝にかんしやす　われら感謝す　なんぢの名はちかく坐せばなり　もろもろの人はなん
ぢの奇しき事跡をかたりあへり　二 定りたる期いたらば我なほき審判をなさん　三 地とすべての之にすむものと
消去しとき我そのもろもろの柱をたてたり セラ　四 われ誇れるものに誇りかにおこなふなかれといひ　惡きもの
に角をあぐるなかれといへり　五 なんぢらの角をたかく擧るなかれ頸をかたくして高りいふなかれ　六 擧ること
は東よりにあらず西よりにあらず　また南よりにもあらざるなり　七 たゞ神のみ審士にましませば此をさげ彼を
あげたまふ　八 ヱホバの手にさかづきありて酒あわだてり　その中にものまじりてみつ　神これをそゝぎいだせり
誠にその滓は地のすべてのあしき者しぼりて飲むべし　九 されど我はヤコブの神をのべつたへん　とこしへに
一〇 讃うたはん　一〇 われ惡きもののすべての角をきりはなたん　義きものの角はあげらるべし
琴にあはせて伶長にうたはしめたるアサフの歌なり　讃美なり

第七六篇

一 神はユダにしられたまへり　その名はイスラエルに大なり　二 またサレムの中にその幕屋あり
その居所はシオンにあり　三 彼所にてかれは弓の火矢をきり盾と劍と戰陣とをやぶりたまひき セラ　四 なんぢ

イ 創一七・七、八　利 三三・二一　ハ 詩五〇・六、五八・一一　ホ 撰前二・七　但二・六〇・三　耶二五・ト 歴二三・三〇　ヌ 詩八九・一七、一四　ル 詩四八・一—三
二六・四四・四五　詩 一〇六・四五　耶 一〇・五一　ロ 詩七四・一八、八九　一五　獻一四・一〇　チ 詩七三・一〇　一六・一九　リ 詩一〇一・八　耶 四八・二五　ヲ 詩八九・一七、一四　ヨ 詩四六・九　結三九 八・一四

ワ 箴三八・一二、一三、三九・四　カ 箴四六・一二　ヨ 詩一三・三、三九　タ 出一五・一、二一　結 三九・二〇　レ 傳一・六、三九・二〇　ソ 結三八・二〇　ツ 詩九・七—九、七二　ナ 出九・一六、一八・一一　詩六五・七　ネ 代下二〇・二九、三〇　ラ 創五・四—六　ム 代下三二・二二、二三　ウ 詩六八・三五　ヰ 詩三・四　ノ 詩五〇・一五　オ 箴二六・九、二六　ク 詩一四二・三、一四・三・四　ヤ 申三二・七　詩一四　マ 詩四二・八　ケ 詩四・四　フ 詩七四・一　コ 詩八五・一三・五　箴五一・九　ユ 羅九・六　テ 箴四九・一五

榮光あり　掠めうばふ山よりもたふとし　五 心のつよきものは掠められ　かれらは睡にしづみ勇ましきものは皆
その手を見うしなへり　六 ヤコブの神よなんぢの叱咤によりて戰車と馬とともに深睡につけり　七 神よなん
ぢこそ懼るべきものなれ　一たび怒りたまふときは誰かみまへに立えんや　八 なんぢ天より宣告をのりたまへり
地のへりくだる者をみなすくはんとて　神のさばきに立たまへるとき地はおそれて默したり セラ　一〇 實に人の
いかりは汝をほむべし　怒のあまりは汝おのれの帶としたまはん　二 なんぢの神ヱホバにちかひをたてて償へ
そのまはりなるすべての者はおそるべきヱホバに禮物をさゝぐべし　一二 ヱホバはもろもろの諸侯のたましひを
絕たまはん　ヱホバは地の王たちのおそるべき者なり

第七七篇

エドトンの體にしたがひて伶長にうたはしめたるアサフのうた

一 我わがこゑをあげて神によばはん　われ聲を神にあげなばその耳をわれにかたぶけたまはん
二 わがなやみの日にわれ主をたづねまつれり　夜わが手をのべてゆるむることなかりき　わがたましひは慰められ
るをいなみたり　三 われ神をおもひいでて打なやむ　われ思ひなげきてわが靈魂おとろへぬ セラ　四 なんぢは
わが眼をさゝへて閉がしめたまはず　我はものいふこと能はぬほどに惱みたり　五 われむかしの日いにしへの
年をおもへり　六 われ夜わが歌をおもひいづ　我わが心にてふかくおもひ　わが靈魂はねもころに尋ねもとむ
七 主はとこしへに棄たまふや　再びめぐみを垂たまはざるや　八 その憐憫はのこりなく永遠にさり　そのちかひは
世々ながく廢れたるや　九 神は恩をほどこすことを忘れたまふや　怒をもてそのあはれみを緘たまふや セラ

一〇 斯るときに我いへらく此はたゞわが弱きがゆゑのみいで至上者のみぎの手のもろもろの年をおもひいでん
一一 われヤハの作爲をのべとなへん われ往古よりありし汝がくすしきみわざを思ひいださん 一二 また我なんぢの
一二 すべての作爲をおもひいで汝のなしたまへることを深くおもはん 一三 神よなんぢの途はいときよし神のごとく
一三 大なる神はたれぞや 一四 なんぢは奇きみわざをなしたまへる神なり もろもろの民のあひだにその大能をしめし
一五 その臂をもてヤコブ、ヨセフの子輩なんぢの民をあがなひたまへり セラ 一六 かみよ大水なんぢを見たり
一七 おほみづ汝をみてをのゝき淵もまたふるへり 一七 雲はみづをそゝぎいだし空はひゞきをいだし なんぢの矢は
一八 はしりいでたり 一八 なんぢの雷鳴のこゑは暴風のうちにありき 電光は世をてらし地はふるひうごけり 一九 なん
一九 ぢの大道は海のなかにあり なんぢの徑はおほみづの中にあり なんぢの蹤跡はたづねがたかりき 二〇 なんぢその
二〇 民をモーセとアロンとの手によりて羊の群のごとくみちびきたまへり

第七八篇

アサフの教訓のうた

一 わが民よわが教訓をきゝ わが口のことばになんぢらの耳をかたぶけよ 二 われ口をひらきて
二 譬喩をまうけ いにしへの玄幽なる語をかたりいでん 三 是われらが曩にきゝしところ知しところ又われらが
三 列祖のかたりつたへし所なり 四 われら之をその子孫にかくさずヱホバのもろもろの頌美と能力とそのなしたま
四 へる奇しき事跡とをきたらんとする世につげん 五 そはヱホバ證詞をヤコブのうちにたて律法をイスラエルのう
五 ちに定めてその子孫にしらすべきことをわれらの列祖におほせたまひたればなり 六 これ來らんとする代のちに

イ 詩三一・二二　ロ 詩一四三・五　ハ 詩七三・一七　ニ 出一五・一一　ホ 出六・六　申九・二九　ヘ 出一四・二一　蒼三　チ 詩九七・四　・一五、一六 詩一一　ト 申後二二・一五　哈　ヌ 哈三・八　リ 申後二二・八　四・三　ル 出一四・二八　ヲ 出一三・二一、一四・　ワ 蹇五一・四　ノ 出七・一一・一二・　オ 創三・三　民一三　・二二　詩七八・四　三　蹇一九・一一、一三　結三〇・一四　ク 出一四・二一　ヤ 出一五・八　詩三三　・七　マ 出一三・二一、一四　・二四　詩一〇五・　ケ 出一七・六　詩一〇五・　・一一　哥前一〇・四　フ 申九・二一　詩一〇　コ 申九・二二　詩九五　・八　來三・一六　エ 出一六・二　四一　テ 民一一・四　ア 出一七・六　民二〇　・二一　サ 民一一・一、一〇　キ 來三・一八　猶五　ユ 創七・一一　馬三・　メ 出一六・四、一四　詩一〇五・四〇　約六・三一　哥前一〇・三　ナ 王下一七・一四　結　詩六八・六　ム 代下二〇・三三　詩　七八・三七　ラ 出三二・九、三三・　三、三四・九　申九・　ウ 王下一七・一五　六、一三、三一・二七　ヰ 詩一〇六・一三　ク 出一四・二一　蹇三　チ 詩九七・四　・一九　詩七八・五二、一九　カ 詩四九・四　太二三　レ 出一二・二六、二七、　・三五　八〇・一　蹇六三・　一一、一二　何一二　ヨ 詩四四・一　一三・八、一四　春　ネ 詩一〇二・一八　・二三　タ 申四・九、六・七　耳　ソ 詩一四七・一九　四・六・七　一・三　ツ 申四・九、六・七、

七 生るる子孫がこれを知みづから起りてそのまた子孫につたへ 七 かれらをして神によりたのみ神のみわざを忘れ
八 ずその誡命をまもらしめん爲なり 八 またその列祖のごとく頑固にしてそむくものの類となり そのこゝろ修ま
九 らず そのたましひ神に忠ならざる類となりざらん爲なり 九 エフライムのこらは武具とゝのへ弓をたづさへし
一〇 に戰ひの日にうしろをそむけたり 一〇 かれら神のちかひをまもらず そのおきてを履ことをいなみ 一一 ヱホバの
一一 なしたまへることとかれらに示したまへる奇しき事跡とをわすれたり 一二 神はエジプトの國にてゾアンの野にて
一二 妙なる事をかれらの列祖のまへになしたまへり 一三 すなはち海をさきてかれらを過ぎしめ水をつみて堆かくし
一三 たまへり 一四 ひるは雲をもてかれらをみちびき夜はよもすがら火の光をもてこれを導きたまへり 一五 神はあれの
一四 一五 にて磐をさき大なる淵より汲がごとくにかれらに飲しめ 一六 また磐より流をひきて河のごとくに水をながれしめ
一六 一七 たまへり 一七 然るにかれら尙たえまなく罪をかして神にさからひ荒野にて至上者にそむき 一八 またおのが慾の
一八 ために食をもとめてその心のうちに神をこゝろみたり 一九 然のみならずかれらは神にさからひていへり 神は
一九 荒野にて筵をまうけたまふを得んや 二〇 みよ神いはを擊たまへば水ほどばしりいで流あぶれたり 糧をもあたへ
二〇 たまふを得んや神はその民のために肉をそなへたまはんやと 二一 この故にヱホバこれを聞ていきどほりたまひき
二一 火はヤコブにむかひてもえあがり怒はイスラエルにむかひて立騰れり 二二 こはかれら神を信ぜずその救にたのま
二二 ざりし故なり 二三 されどなほ神はうへなる雲に命じて天の戸をひらき 二四 彼等のうへにマナをふらせて食はしめ
二三 二四 天の穀物をあたへたまへり 二五 人みな勇士の糧をくらへり 神はかれらに食物をおくりて飽足らしめたまふ
二五

二六 神は天に東風をふかせ大能もて南の風をみちびきたまへり 二七 神はかれらのうへに塵のごとく肉をふらせ海の沙のごとく翼ある鳥をふらせて 二八 その營のなかその住所のまはりに落したまへり 二九 斯てかれらは食ひて飽たりぬ 三〇 神はこれにその欲みしものを與へたまへり 三一 かれらが未だその慾をはなれず食物のなほ口のうちにあるほどに 三二 神のいかり既かれらに對ひてたちのぼり彼等のうちにて最もこえたる者をころしイスラエルのわかき男をうちたふしたまへり 三三 これらの事ありしかど彼等はなほ罪をかしてその奇しきみわざを信ぜざりしかば 三四 神はかれらの日を空しくすぐさせ その年をおそれつゝ過させたまへり 三五 時かれら神をたづね歸りきたりて懇ろに神をもとめたり 三六 かくて神はおのれの磐いとたかき神はおのれの贖主なることをおもひいでたり 三七 然はあれど彼等はたゞその口をもて神にへつらひ その舌をもて神にいつはりをいひたりしのみ 三八 そはかれらのこゝろは神にむかひて堅からず その契約をまもるに忠信ならざりきされど神はあはれみに充たまへばかれらの不義をゆるして亡したまはず屢ばそのみいかりを轉してことごとくは忿恚をふりおこし給はざりき 三九 又かれがたゞ肉にして過去ばふたゝび歸りこぬ風なるをおもひいで給へり 四〇 かれらは野にて神にそむき荒野にて神をうれへしめしこと幾度ぞや 四一 かれらかへすがへす神をこゝろみイスラエルの聖者をはづかしめたり 四二 かれらは神の手をも敵より贖ひたまひし日をもおもひいでざりき 四三 神はそのもろもろの豫兆をエジプトにあらはしその奇しき事をゾアンの野にあらはし 四四 かれらの河を血にかはらせてその流を飲あたはざらしめ 四五 また蠅の群をおくりてかれらをくはしめ蛙をおくりてかれらを亡させたまへり 四六 神はかれらの田産を蟲賊にわたしかれらの勤勞を蝗にあたへたまへり 四七 神は雹をもてかれらの葡萄の樹をからし霜をもてかれらの桑の樹をからし 四八 その家畜をへうにわたしその群をもゆる閃電にわたし 四九 かれらの上にはげしき怒といきどほりと怨恨となやみと禍害のつかひの群とをなげいだし給へり 五〇 神はその怒をもらす道をまうけ かれらのたましひを死よりまぬかれしめず そのいのちを疫癘にわたし 五一 エジプトにてすべての初子をうちハムの幕屋にてかれらの力の始をうちたまへり 五二 されどおのれの民を羊のごとくに引いだし かれらを曠野にてけだものの群のごとくにみちびき 五三 かれらをともなひておそれなく安けからしめ給へり されど海はかれらの仇をおほへり 五四 神はその聖所のさかひ その右の手にて購たまへるこの山に彼らを携へたまへり 五五 又かれらの前にてもろもろの國人をおもひいだし準繩をもちゐ その地をわかちて嗣業となしイスラエルの族をかれらの幕屋にすまはせたまへり 五六 然はあれど彼等はいとたかき神をこゝろみ之にそむきてそのもろもろの證詞をまもらず 五七 叛きしりぞきてその列祖の如く眞實をうしなひ くるへる弓のごとくひるがへりて逸ゆけり 五八 高處をまうけて神のいきどほりをひき刻める像にて神の嫉妬をおこしたり 五九 神きゝたまひて甚だしくいかり大にイスラエルを憎みたまひしかば 六〇 人々の間におきたまひし幕屋なるシロのあげばりを棄さり 六一 その力をとりことならしめ その榮光を敵の手にわたし 六二 その民を劍にあたへ その嗣業にむかひて甚だしく怒りたまへり 六三 火はかれらのわかき男をやきつくし かれらの處女はその婚姻の歌によりて譽らるゝことなく 六四 かれらの祭司はつるぎにて仆れ かれらの寡婦は喪のなげきだにせざりき 六五 斯るときに主は

イ民一一・三一　ロ民一一・二〇　ハ民一一・三三　ニ民一四・一、一六、一七、　ホ詩七八・二二　ヘ民一四・二九、三五、一六・六四、六五　ト何五・一五　チ申三二・四、一五、　リ出一五・一三　申七・八　寨四一・一四、四四・六、六三・九　ヌ結三三・三一　ル詩七八・八　ヲ民一四・一八、二〇　ワ寨八・九　カ王上二一・二九　ヨ創六・三　約三・六　タ詩一〇三・一四、一六　レ詩七八・一七、九五　ソ民一四・二二　申六・九、一〇　寨七・一三、六三・一〇　ツ詩七八・二〇　ネ詩七八・一二、一〇　ナ出七・二〇　詩一〇五・二七　ラ出八・二四　詩一〇・一五　ム出八・六　詩一〇五・三〇　ウ出一〇・一三、一五　詩一〇五・三四、三五　オ出一二・二九、三一　ク詩一〇六・二二　ヤ詩七七・二〇　マ出一四・一九、二〇　ケ出一四・二七、二八、一五・二〇　フ出一五・一七　コ詩四四・二三　エ詩四四・二一　テ箴一三・七、一九、五一　詩一三六・六　ア士二・一一、一二　サ詩七八・四一　結二〇・二七、二八　キ何七・一六　ユ申一二・二、四　王上　ミ撰前四・一一　耶七　メ申三二・一六、二一　シ士一八・三〇　エ撰前四・一〇　ヒ耶七・三四、一六・六、九　モ撰前四・一一、二二　セ伯二七・一五　結二四・二〇　ス詩一〇・二四、二六・二、一四、二六・六、九　ヱ撰前四・一一　耶七　ヒ撰前四・一〇　ヒ耶七・三四、一六・

六六 ねぶりし者のさめしごとく勇士の酒によりてさけぶがごとく目さめたまひて　六六 その敵をうちしりぞけ とこし
六七 へ の辱をかれらに負せたまへり　六七 またヨセフの幕屋をいなみ エフライムの族をえらばず　六八 ユダの族その
六八 いつくしみたまふシオンの山をえらびたまへり　六九 その聖所を山のごとく永遠にさだめたまへる地のごとくに立
六九 たまへり　七〇 またその僕ダビデをえらびて羊の牢のなかよりとり　七一 乳をあたふる牝羊にしたがひゆく勤のうち
七〇 より携へきたりてその民ヤコブその嗣業イスラエルを牧はせたまへり　七二 斯てダビデはそのこゝろの完全に
七一 したがひてかれらを牧ひ その手のたくみをもて之をみちびけり

第七九篇

一 アサフのうた

一 あゝ神よ もろもろの異邦人はなんぢの嗣業の地ををかし なんぢの聖宮をけがし エルサレムを
二 こぼちて礫堆となし　二 なんぢの僕のしかばねをそらの鳥に與へて餌となし なんぢの聖徒の肉を地のけものに
三 あたへ　三 その血をエルサレムのめぐりに水のごとく流したり されど之をはうむる人なし　四 われらは隣人に
四 そしられ四周のひとびとに侮られ嘲けらるゝものとなれり　五 ヨホバよ斯て幾何時をへたまふや 汝とこしへに
五 怒たまふや なんぢのねたみは火のごとく燃るか　六 願くはなんぢを識ざることくにびと聖名をよばざるもろも
六 ろの國のうへに烈怒をそゝぎたまへ　七 かれらはヤコブを呑その住處をあらしたればなり　八 われらにむかひて
七 先祖のよこしまなるわざを記念したまふなかれ 願くはなんぢの憐憫をもて速かにわれらを迎へたまへ われらは
八 貶されて甚だしく卑くなりたればなり　九 われらのすくひの神よ名のえいくわうのために我儕をたすけ名のため

イ 詩四四・二三　ロ 申三二・一三、一八　ハ 詩前五・六、一二、六・四　ニ 詩八七・二　ホ 王上六・　ヘ 詩前一六・一一、一　ト 創三三・一三　チ 詩後五・二　リ 王上九・四　ヌ 出一五・一七　ル 詩七四・七　ヲ 王下二五・九、一〇　ワ 耶七・三三、一六・　カ 詩一四一・七　タ 詩七四・一、九、一〇、八五・八九　レ 箴一・一八、三・八　ソ 箴四五・四、五　ツ 詩五三・四　ネ 耶一〇・二五　ナ 箴六四・九　ラ 申二八・四三　ム 代下一四・一一　ウ 耶一四・七、二二

ク 創四・一五　箴六五　マ 箴四三・二二　ケ 詩七七・二〇　フ 出二五・二〇、二二　ヨ 詩四四・一三、八〇　ミ 詩四四・二、七八　ヒ 詩八〇・三、一九　ユ 詩八〇・三、一九　メ 箴五・一、七　シ 出二三・二八　エ 詩七二・八

一〇 にわれらを救ひ われらの罪をのぞきたまへ　一〇 いかなれば異邦人はいふかれらの神はいづくにありやと 願く
一一 はなんぢの僕等がながされし血の報をわれらの目前になして異邦人にしらしめたまへ　一二 ねがはくは汝のみまへ
一二 にとらはれびとの嘆息のとどかんことを なんぢの大なる能力により死にさだめられし者をまもりて存へしめ
一三 たまへ　一三 主よわれらの隣人のなんぢをそしりたる謗を七倍ましてその懷にむくいかへしたまへ　然ばわれら
一 なんぢの民なんぢの草苑のひつじは 永遠になんぢに感謝しその頌辭を世々あらはさん

第八〇篇

一 イスラエルの牧者よひつじの群のごとくヨセフを導きたまふものよ 耳をかたぶけたまへ ケルビ
二 ムのうへに坐したまふものよ 光をはなちたまへ　二 エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんぢの力をふりお
三 こし來りてわれらを救ひたまへ　三 神よふたゝびわれらを復し なんぢの聖顏のひかりをてらしたまへ 然ばわれ
四 ら救をえん　四 ばんぐんの神ヱホバよなんぢその民の祈にむかひて何のときまで怒りたまふや　五 汝かれら
五 になみだの糧をくらはせ涙を量器にみちみつるほどあたへて飲しめ給へり　六 汝われらを隣人のあひあらそふ
六 種料となしたまふ われらの仇はたがひにあざわらへり　七 萬軍の神よふたゝびわれらを復したまへ 汝のみかほ
七 の光をてらしたまへ さらばわれら救をえん　八 なんぢ葡萄の樹をエジプトより携へいだしもろもろの國人を
八 おひしりぞけて之をうゑたまへり　九 汝そのまへに地をまうけたまひしかば深く根して國にはびこれり　一〇 その
九 影はもろもろの山をおほひ そのえだは神の香柏のごとくにてありき　一一 その樹はえだを海にまでのべ その若枝

一二 を河にまでのべたり　一三 汝いかなればその垣をくづして路ゆくすべての人に摘取らせたまふや　一四 はやしの猪は
一四 これをあらし野のあらき獸はこれをくらふ　一五 あゝ萬軍の神よねがはくは歸りたまへ　一六 天より俯視てこの葡萄の
一五 樹をかへりみ　一六 なんぢが右の手にてうゑたまへるもの　一七 自己のために強くなしたまへる枝をまもりたまへ
一六 その樹は火にて燒れまた斫たふさる　一八 かれらは聖顏のいかりにて亡ぶ　一九 ねがはくはなんぢの手をその右の
一七 手の人のうへにおき自己のためにつよくなしたまへる人の子のうへにおきたまへ　一八 さらばわれら汝をしりぞき
一八 離るゝことなからん　一九 願くはわれらを活したまへ　一〇 われら名をよばん　一一 あゝ萬軍の神ヱホバよふたゝび我儕を
一九 かへしたまへ　一〇 なんぢの聖顏のひかりを照したまへ　一一 然ばわれら救をえん

第八一篇

一 ギテトの琴にあはせて伶長にうたはしめたるアサフのうた

一 われらの力なる神にむかひて高らかにうたひヤコブの神にむかひてよろこびの聲をあげよ
二 歌をうたひ鼓とよき音のことと箏とをもちきたれ　三 新月と滿月とわれらの節會の日とにラッパをふきならせ
四 これイスラエルの律法ヤコブのかみの格なり　五 神さきにエジプトを攻たまひしときヨセフのなかに之をたて
六 て證となしたまへり　六 我かしこにて未だしらざりし方言をきけり　七 われかれの肩より重荷をのぞき　八 かれの手を
七 籃よりまぬかれしめたり　七 汝なやめるとき呼しかば我なんぢをすくへり　九 われ雷鳴のかくれたるところにて汝
八 にこたへメリバの水のほとりにて汝をこゝろみたり　セラ　一〇 わが民よきけ我なんぢに證せん　一一 イスラエルよ汝が
九 われに從はんことをもとむ　九 汝のうちに他神あるべからず　一二 なんぢ他神をがむべからず　一三 われはエジプト
一〇 の國よりなんぢを携へいでたる汝の神ヱホバなり　一四 なんぢの口をひろくあけよ　一五 われ物をみたしめん　一六 されど

イ 詩八九・四〇、四一　ハ 詩三九・一一、七六　ホ 詩八〇・三、七　ノ 哥二二・三　ト 詩一一四・一　ヲ 出一七・六、七　民　カ 出二〇・三、五　タ 出二〇・二
ロ 寒五・五　箴二・二　ニ 詩八九・二一　ヘ 利二三・二四　民一〇・一〇　チ 寒九・四、一〇・二七　リ 出一・一四　ヨ 申三二・一二　寒四三・一二　レ 詩三七・三、四　約一五・七
ヌ 出二二・二三、一四・一　ル 出一九・一九　ヌ 詩五〇・一五　ヲ 出一七・六、七　民二〇・一三　ワ 詩五〇・七　カ 出二〇・三、五　ヨ 申三二・一二　寒四三・一二　タ 出二〇・二　レ 詩三七・三、四　約一五・七

ソ 徒七・四二、一四・一　ネ 詩一八・四五　羅一・八　ウ 出二一・六、二二・八　ノ 哥二二・三　オ 伯二九・一二　鐵三・一二　マ 出二二・九、二八　詩八二・一　約一〇・三四　フ 米七・二、七
六 羅一・二四、二六　ツ 申五・二九、一〇・一　ナ 申三二・一三、一四　ラ 伯二九・六　ム 代下一九・六　傳五・二　ヰ 申一・一七　代下二・一、二　ク 米三・一　ケ 伯二一・三二　詩四九・一二　結三一・一　コ 詩二八・一、三五・二　詩二・一、一〇九・一　エ 詩二・一　徒四・二五
寒四八・一八　寒二・一三、三二・二九　寒一九・七　箴一八・五　ヤ 詩一一・三、七五・三

一二 わが民はわが聲にしたがはず　一三 イスラエルは我をこのまず　一四 このゆゑに我かれらが心のかたくなるにまかせ
一三 彼等がその任意にゆくにまかせたり　一四 われはわが民のわれに從ひイスラエルのわが道にあゆまんことを求む
一四 さらば我すみやかにかれらの仇をしたがへ　一五 わが手をかれらの敵にむけん　一六 斯てヱホバをにくみし者も
一六 かれらに從ひ　かれらの時はとこしへにつゞかん　一七 神はむぎの最嘉をもてかれらをやしなひ　磐よりいでたる
一七 蜜をもて汝をあかしむべし

第八二篇

一 アサフのうた

一 かみは神のつどひの中にたちたまふ　二 神はもろもろの神のなかに審判をなしたまふ　三 なんぢら
二 は正からざる審判をなし　三 あしきものの身をかたよりみて幾何時をへんとするや　セラ　四 よわきものと孤兒との
三 ためにさばき苦しむものと乏しきものとのために公平をほどこせ　五 弱きものと貧しきものとをすくひ彼等を
四 あしきものの手よりたすけいだせ　六 かれらは知ることなく悟ることなくして暗中をゆきめぐりぬ　七 地のもろ
五 もろの基はうごきたり　六 我いへらく　七 なんぢらは神なり　なんぢらはみな至上者の子なりと　八 然どなんぢらは
六 人のごとくに死もろもろの侯のなかの一人のごとく仆れん　八 神よおきて全地をさばきたまへ　汝もろもろの國
七 を嗣たまふべければなり

第八三篇

一 アサフの歌なり　讃美なり

一 神よもだしたまふなかれ　神よものいはで寂靜たまふなかれ　二 視よなんぢの仇はかしがましき

三 聲をあげ汝をにくむものは首をあげたり　三 かれらはたくみなる謀略をもてなんぢの民にむかひ相共にはかりて
四 汝のかくれたる者にむかふ　四 かれらいひたりき 來かれらを斷滅してふたゝび國をたつることを得ざらしめイ
五 スラエルの名をふたゝび人にしられざらしめんと　五 かれらは心を一つにしてともにはかり互にちかひをなして
六 なんぢに逆ふ　六 こはエドムの幕屋にすめる人イシマエル人 モアブ、ハガル人　七 ゲバル、アンモン、アマレク、
七 ペリシテおよびツロの民などなり　八 アッスリヤも亦かれらにくみせり 斯てロトの子輩のたすけをなせり セラ
八 九 なんぢ曩にミデアンになしたまへる如くキションの河にてシセラとヤビンとに作たまへるごとく彼等にもなし
九 一〇 たまへ　一〇 かれらはエンドルにて ほろび地のために肥料となれり　一一 かれらの貴人をオレブ、ゼエブのごとく
一〇 一一 そのもろもろの侯をゼバ、ザルムンナのごとくなしたまへ　一二 かれらはいへり われら神の草苑をえてわが有とす
一二 一三 べしと　一三 わが神よかれらをまきあげらるる塵のごとく風のまへの藁のごとくならしめたまへ　一四 林をやく火の
一四 一五 ごとく山をもやす焔のごとく　一五 なんぢの暴風をもてかれらを追ひなんぢの旋風をもてかれらを怖れしめたまへ
一五 一六 一六 かれらの面に恥をみたしめたまへ　一七 ヱホバよ然ばかれらなんぢの名をもとめん　一七 かれらをとこしへに恥おそ
一六 一七 一八 れしめ惶てまどひて亡びうせしめたまへ　一八 然ばかれらはヱホバてふ名をもちたまふ汝のみ全地をしろしめす
一八 至上者なることを知るべし

第八四篇

一 萬軍のヱホバよなんぢの帷幄はいかに愛すべきかな　二 わが靈魂はたえいるばかりにヱホバの大
庭をしたひ わが心わが身はいける神にむかひて呼ふ　三 誠やすゞめは窩をえ燕子はその雛をいるる巣をえたり

ギテトの琴にあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のうた

イ 詩八一・一五　ロ 詩二七・五、三一・二〇　ハ 帖三・六、九　耶一一・一一　ホ 民三一・七　士七・二一　ヘ 士四・二五、二四、五・二二　ト 王下九・三七　チ 士七・二五　リ 士八・二二、二三　ヌ 箴一七・一三、一四　ル 詩三五・五　ヲ 申三二・二二　カ 詩三五・四、二六　ヨ 詩五九・一三　タ 出六・三　レ 詩九二・八　ソ 詩二七・四　ツ 詩四二・一、二、六、三　一一・七、三・二六、一二九・二〇　ネ 詩六五・四　ナ 箴四・二八　哥後三・一八　ラ 申一六・一六　詩一四・二六　ム 創一五・一　詩八四・一一　ウ 箴六〇・一九　ヰ 創一五・一　詩八四・一一、一一九・一一　ノ 詩三四・九、一〇　オ 詩二・一二　ク 創一・一二、二・一　ヤ 詩三二・一　マ 詩七四・一、七九・五七九・八　ケ 哈三・二　フ 哈二・一　コ 弗九・一〇　エ 彼後二・二〇・二一

萬軍のヱホバわが王わが神よ これなんぢの祭壇なり　四 なんぢの家にすむものは福ひなり かゝる人はつねに汝
四 五 をたゝへまつらん セラ　五 その力なんぢにあり その心シオンの大路にある者はさいはひなり　六 かれらは涙の
六 七 谷をすぐれども其處をおほくの泉あるところとなす また前の雨はもろもろの惠をもて之をおほへり　七 かれら
七 八 は力より力にすゝみ遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ　八 ばんぐんの神ヱホバよわが祈をきゝたまへ
八 九 ヤコブの神よ耳をかたぶけたまへ セラ　九 われらの盾なる神よ みそなはしてなんぢの受膏者の顏をかへりみ
九 一〇 たまへ　一〇 なんぢの大庭にすまふ一日は千日にもまされり われは惡の幕屋にをらんよりは 寧ろわが神のいへの
一〇 一一 門守とならんことを欲ふなり　一一 そは神ヱホバは日なり盾なり ヱホバは恩とえいくわうとをあたへ直くあゆむ
一一 一二 ものに善物をこばみたまふことなし　一二 萬軍のヱホバよなんぢに依賴むものはさいはひなり

第八五篇

伶長にうたはしめたるコラの子のうた

一 ヱホバよなんぢは御國にめぐみをそゝぎたまへり なんぢヤコブの俘囚をかへしたまひき　二 なんぢおのが民の不義をゆるし そのもろもろの罪をおほひたまひき セラ　三 汝すべての怒をすてその烈しきいき
三 四 どほりを遠けたまへり　四 われらのすくひの神よかへりきたり我儕にむかひて忿怒をやめたまへ　五 なんぢ永遠
五 六 にわれらをいかり萬世にみいかりをひきのべたまふや　六 汝によりてなんぢの民の喜悅をえんが爲に我儕を活し
六 七 たまはざるか　七 ヱホバよなんぢの憐憫をわれらにしめし汝のすくひを我儕にあたへたまへ　八 わが神ヱホバの
八 かたりたまふ事をきかん ヱホバはその民その聖徒に平和をかたりたまへばなり さればかれらは愚かなる行爲に

九 ふたゝび歸るなかれ　九 實にそのすくひは神をおそるる者にちかしかくて榮光はわれらの國にとゞまらん
一〇 あはれみと眞實とともにあひ義と平和とたがひに接吻せり　一一 まことは地よりはえ義は天よりみおろせり
一二 ヱホバ善物をあたへたまへばわれらの國は物産をいださん　一三 義はヱホバのまへにゆきヱホバのあゆみたまふ跡をわれに踏しめん

第八六篇

ダビデの祈禱

一 ヱホバよなんぢ耳をかたぶけて我にこたへたまへ　我はくるしみかつ乏しければなり　二 ねがはくはわが靈魂をまもりたまへ　われ神をうやまふ者なればなり　わが神よなんぢに依賴める汝のしもべを救ひ給へ
三 主よわれを憐みたまへ　われ終日なんぢによばふ　四 なんぢの僕のたましひを悅ばせたまへ　主よわが靈魂はなんぢを仰ぎのぞむ　五 主よなんぢは惠ふかくまた赦をこのみたまふ　汝によばふ凡てのものを豐かにあはれみたまふ　六 ヱホバよわがいのりに耳をかたぶけ　わが懇求のこゑをきゝたまへ　七 われわが患難の日になんぢに呼はん　なんぢは我にこたへたまふべし　八 主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく汝のみわざに侔しきものはなし　九 主よなんぢの造れるもろもろの國はなんぢの前にきたりて伏拜まん　かれらは聖名をあがむべし　一〇 なんぢは大なり奇しき事跡をなしたまふ　唯なんぢのみ神にましませり　一一 ヱホバよなんぢの道をわれに教へたまへ我なんぢの眞理をあゆまん　ねがはくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまへ　一二 主わが神よ我心をつくして汝をほめたゝへ　とこしへに聖名をあがめまつらん　一三 そはなんぢの憐憫はわれに大なり

イ 詩四六・一三　ロ 亞二・五　ハ 詩七二・三　ニ 詩四五・八　ホ 詩八四・一一　ヘ 詩六七・六　ト 詩八九・一四　チ 詩二六・三　リ 詩五六・一、五七・一　ヌ 詩二五・一、一四三・一　ル 詩八六・一五、一三　ヲ 詩五〇・一五　ワ 出一五・一一　カ 申三・二四　ヨ 詩二二・三一、一〇　レ 申六・四、三二・三九　ソ 詩二五・四、二七・一　ツ 詩五六・一三、一一　ナ 出三四・六　ネ 詩五四・三　ラ 詩二五・一六、六九　ム 詩一一六・一六　ウ 詩四八・一　ヰ 詩七八・六七、六八　ノ 詩六〇・　オ 詩八九・一〇　ク 結一三・九　ヤ 詩二二・三〇　マ 詩二七・九、五一・一四　ケ 詩一八・七　フ 詩一〇七・一八

一四 わがたましひを陰府のふかき處より助けいだしたまへり　一四 神よたかぶれるものは我にさからひて起りたち暴ぶる人の會はわがたましひをもとめ　斯てなんぢを己がまへに置ざりき　一五 されど主よなんぢは憐憫とめぐみとにとみ怒をおそくし愛しみと眞實とにゆたかなる神にましませり　一六 我をかへりみ我をあはれみたまへ　ねがはくは汝のしもべに能力を與へ汝のはしためのの子をすくひたまへ　一七 我にめぐみの憑據をあらはしたまへ然ばわれをにくむ者これをみて恥をいだかん　そはヱホバよなんぢ我をたすけ我をなぐさめたまへばなり

第八七篇

コラの子のうたなり　讃美なり

一 ヱホバの基はきよき山にあり　二 ヱホバはヤコブのすべての住居にまさりてシオンのもろもろの門を愛したまふ　三 神の都よなんぢにつきておほくの榮光のことを語りはやせり　セラ　四 われはラハブ、バビロンをも我をしるものの中にあげん　ペリシテ、ツロ、エテオピアを視よこの人はかしこに生れたりといはん　五 シオンにつきては如此いはん　此もの彼ものその中にうまれたり至上者みづからシオンを立たまはんと　六 ヱホバもろもろの民をしるしたまふ時このものは彼處にうまれたりと算へあげたまはん　セラ　七 うたふもの踊るもの皆いはん　わがもろもろの泉はなんぢの中にありと

第八八篇

マハラテ、レアノテの調にあはせて伶長にうたはしめたるコラの子のうたなり　讃美なり、エズラ人

一 わがすくひの神ヱホバよわれ晝も夜もなんぢの前にさけべり　二 願くはわが祈をみまへにいたらせ汝のみゝをわが號呼のこゑにかたぶけたまへ　三 わがたましひは患難にてみち我がいのちは陰府にちかづけり

四 われは穴にいるものとともにかぞへられ依仗なき人のごとくなれり　五 われ墓のうちなる殺されしもののごと
く死者のうちにすてらる汝かれらを再びこゝろに記たまはず かれらは御手より斷滅されしものなり　六 なんぢ
我をいとふかき穴 くらき處 ふかき淵におきたまひき　七 なんぢの怒はいたくわれにせまれり なんぢその
もろもろの浪をもて我をくるしめ給へり セラ　八 わが相識ものを我よりとほざけ我をかれらに憎ませたまへり
われは鋼閉されていづることあたはず　九 わが眼はなやみの故をもておとろへぬ われ日ごとに汝をよべり ヱホ
バよなんぢに向ひてわが兩手をのべたり　一〇 なんぢ死者にくすしき事跡をあらはしたまはんや 亡にしもの立て
なんぢを讃たゝへんや セラ　一一 汝のいつくしみは墓のうちに汝のまことは滅亡のなかに宣傳へられんや　一二 汝
のくすしきみわざは幽暗になんぢの義は忘失のくにに知るゝことあらんや　一三 されどヱホバよ我なんぢに向ひて
さけべり わがいのりは朝にみまへに達らん　一四 ヱホバよなんぢ何なればわが靈魂をすてたまふや何なればわれ
に面をかくしたまふや　一五 われ幼稚よりなやみて死るばかりなり 我なんぢの恐嚇にあひてくるしみまどへり
一六 汝のはげしき怒わがうへをすぐ 汝のおびやかし我をほろぼせり　一七 これらの事ひねもす大水のごとく我を
めぐり ことごとく來りて我をかこみ ふさげり　一八 なんぢ我をいつくしむ者とわが友とをとほざけ わが相識る
ものを幽暗にいれたまへり

第八九篇

一 われヱホバの憐憫をとこしへにうたはん われ口もてヱホバの眞實をよろづ代につげしらせん
エズラ人エタンのをしへの歌

イ詩二八・一　ロ寒五三・八　ハ詩四二・七　二伯一九・一三、一九　詩三一・一二、一四　ホ哀三・七　ヘ詩三八・一〇　ト詩八六・三　チ伯一一・一三　詩二一・四　リ詩六・五、三〇・九、一四三・六　一四三・六　ヌ伯一〇・二一　詩ヲ詩五・三、一一九・一四七　ヌ詩三一・二二、八八・一八　ル詩三一・一二、一五、一七、一二　寒三八・五　傳八・一〇、九　ワ詩四三・二　カ伯一三・一四　詩一三・一　タ詩二二・一六　レ伯一九・一三　詩一・一二、三八・一一　ソ詩一〇・一

二 われいふ あはれみは永遠にたてらる汝はその眞實をかたく天にさだめたまはんと　三 われわが撰びたる
ものと契約をむすびわが僕ダビデにちかひたり　四 われなんぢの裔をとこしへに固うし なんぢの座位をたてて
代々におよばしめん セラ　五 ヱホバよもろもろの天はなんぢの奇しき事跡をほめん なんぢの眞實もまた潔きも
のの會にてほめらるべし　六 蒼天にてたれかヱホバに類ふものあらんや 神の子のなかに誰かヱホバのごとき者
あらんや　七 神はきよきものの公會のなかにて畏むべきものなり その四周にあるすべての者にまさりて懼るべ
きものなり　八 萬軍の神ヱホバよヤハよ汝のごとく大能あるものは誰ぞや なんぢの眞實はなんぢをめぐりたり
九 なんぢ海のあるゝををさめ その浪のたちあがらんときは之をしづめたまふなり　一〇 なんぢラハブを殺されし
もののごとく擊碎きおのれの仇どもを力ある腕をもて打散したまへり　一一 もろもろの天はなんぢのもの地もまた
汝のものなり世界とその中にみつるものとはなんぢの基したまへるなり　一二 北と南はなんぢ造りたまへり タボ
ル、ヘルモンはなんぢの名によりて歡びよばふ　一三 なんぢは大能のみうでをもちたまふ なんぢの手はつよく汝の
みぎの手はたかし　一四 義と公平はなんぢの寶座のもとゐなり あはれみと眞實とは聖顏のまへにあらはれゆく
一五 よろこびの音をしる民はさいはひなり ヱホバよかれらはみかほの光のなかをあゆめり　一六 かれらは名により
て終日よろこび 汝の義によりて高くあげられたり　一七 かれらの力の榮光はなんぢなり 汝の惠によりてわれらの
角はたかくあげられん　一八 そはわれらの盾はヱホバに屬われらの王はイスラエルの聖者につけり　一九 その
とき異象をもてなんぢの聖徒につげたまはく われ佑助をちからあるものに委ねたり わが民のなかより一人を

ツ詩一一九・八九　ネ王上八・一六　寒ラ詩八九・二九、三六　ム詩八九・一　路一・三二、三三　ナ得後七・一一—一六　代上一七・一〇—一　ウ詩一九・一、九七・六　ク出一五・一一　毋前　ヤ詩六五・七、九三・五、七一・一九　ノ詩四〇・五、七一・一三　九、八六・八、一一三　ハ詩七六・七、一一　ホ哀三・五　ヘ詩三五・一　ト詩八九・七　チ詩四・六、四四・三　リ詩一四・一〇、七一・一、一九　ヌ詩一〇・一一、一九　ル詩三一・一二、八八・一八　カ創一・一　詩二四・一、二、五〇・一二　ケ創一・七、五一・一九　代上二九・一一　詩二四・一、二、五〇・一二　ア詩八五・一三　サ民一〇・一〇、二三　テ詩九七・二　エ寒一二・一　ユ詩七五・一〇、八九・二四、九二・一〇、一三二・一七　メ詩八九・三　王上一一・三四　ミ詩四・六、四四・三　コ寒一九・二二　フ伯二六・七　ヲ詩五・三、一一九・一四七　タ詩二二・一六　レ伯一九・一三　詩一・一二、三八・一一　ソ詩一〇・一

二〇 えらびて高くあげたり　二一 われわが僕ダビデをえて之にわが聖膏をそゝげり　二二 わが手はかれとともに堅くわ
二三 が臂はかれを強くせん　二四 仇かれをしへたぐることなし悪の子かれを苦しむることなからん　二五 われかれの前に
二六 そのもろもろの敵をたふし彼をにくめるものを擊ん　二七 されどわが眞實とわが憐憫とはダビデとともに居り わ
二八 が名によりてその角はたかくあげられん　二九 われ亦かれの手を海のうへにおき そのみぎの手を河のうへにおか
三〇 ん　三一 ダビデ我にむかひて汝はわが父わが神わがすくひの岩なりとよばん　三二 われまた彼をわが初子となし地の
三三 王たちのうち最もたかき者となさん　三四 われとこしへに憐憫をかれがためにたもち之とたてし契約はかはるこ
三五 となかるべし　三六 われまたその裔をとこしへに存へ そのくらゐを天の日數のごとくながらへしめん　三七 もしその
三八 子わが法をはなれ わが審判にしたがひて歩まず　三九 わが律法をやぶりわが誡命をまもらずば　四〇 われ杖をもて
四一 かれらの愆をたゞし鞭をもてその邪曲をたゞすべし　四二 されど彼よりわが憐憫をことごとくはとりさらず わが
四三 眞實をおとろへしむることなからん　四四 われおのれの契約をやぶらず己のくちびるより出しことをかへじ　四五 わ
四六 れ曩にわが聖をさして誓へり われダビデに虚僞をいはじ　四七 その裔はとこしへにつゞき その座位は日のごとく
四八 恒にわが前にあらん　四九 また月のごとく永遠にたてられん空にある證人はまことなり セラ　五〇 されどその
五一 受膏者をとほざけて棄たまへり なんぢ之をいきどほりたまへり　五二 なんぢ己がしもべの契約をいみ其かんむり
五三 をけがして地にまでおとし給へり　五四 またその垣をことごとく倒し その保砦をあれすたれしめたまへり　五五 その
五六 道をすぐるすべての者にかすめられ隣人にのゝしらる　五七 なんぢかれが敵のみぎの手をたかく擧そのもろもろの

イ 摂前一六・一、一二　ロ 詩八〇・一七　ハ 摂後七・一三　ニ 摂後七・九　ホ 詩六一・七　ヘ 詩八九・二七　ト 詩七二・八、八〇・一一　チ 摂後七・一四　代上ニニ・一〇　リ 摂後二二・四七　ヌ 詩二・七　西一・一　ル 民二四・七　ヲ 寒五五・三　ワ 詩八九・三四　カ 詩八九・四、三六　ヨ 詩八九・四　寒九・七　ダ 申一・二二　レ 摂後七・一四　ソ 詩一一九・五三　耶　ラ 摂後七・一四　王上　ネ 摂後七・一三　ナ 慶四・二　ラ 摂後七・一六　詩八九・四、二九　路一・三三　約一二・三四　ム 詩七二・五、一七　耶　ウ 代上二八・九　詩四四・九、六〇・一、一〇　ヰ 申三二・一九　詩　ノ 詩七四・七　哀五・一六　オ 詩八〇・一二　ク 詩四四・一三、七九　ヤ 詩八九・三九　マ 詩七九・五　ケ 詩七八・六三　フ 伯七・七、一〇・九、

一四・一　詩三九・五一、一九・八四　エ 來一一・五　テ 詩五四・五　ア 摂後七・一五　寒　サ 詩七四・二二　キ 詩六九・九、一九　五五・三　ユ 詩四一・一三　メ 申三三・二七　一一・一六　結　ミ 歴八・二五、二六　シ 創三・一九　傳一二　ヱ 後後三・八　ヒ 詩七三・二〇　モ 詩一〇三・一五　寒　四〇・六　セ 伯一四・二　詩九二・七　ス 詩五〇・二一　耶　一六・二七　イ 詩一九・一二

四三 仇をよろこばしめたまへり　四四 なんぢかれの劍の刃をふりかへして戰鬪にたつに堪へざらしめたまひき　四五 また
四六 その光輝をけしその座位を地になげおとし　四七 その年若き日をちゞめ恥をそのうへに覆たまへり セラ　四八 ヱホバ
四九 よかくて幾何時をへたまふや 自己をとこしへに隱したまふや怒は火のもゆるごとくなるべきか　五〇 ねがはく
五一 はわが時のいかに短かきかを思ひたまへ 汝いたづらにすべての人の子をつくりたまはんや　五二 誰かいきて死を
五三 みず又おのがたましひを陰府より救ひうるものあらんや セラ　五四 主よなんぢが眞實をもてダビデに誓ひたまへ
五五 る昔日のあはれみはいづこにありや　五六 主よねがはくはなんぢの 僕のうくる謗をみこゝろにとめたまへ　五七 ヱホバ
五八 よ汝のもろもろの仇はわれをそしりなんぢの受膏者のあしあとをそしれり　五九 我もろもろの民のそしりをわが懷中
六〇 にいだく　六一 ヱホバは永遠にほむべきかな アーメン アーメン

第九〇篇

神の人モーセの祈禱

一 主よなんぢは往古より世々われらの居所にてましませり　二 山いまだ生いでず汝いまだ地と世界
三 とをつくりたまはざりしとき 永遠よりとこしへまでなんぢは神なり　三 なんぢ人を塵にかへらしめて宣はく
四 人の子よなんぢら歸れと　四 なんぢの目前には千年もすでにすぐる昨日のごとく また夜間のひとゝきにおなじ
五 なんぢこれらを大水のごとく流去らしめたまふ かれらは一夜の寢のごとく朝にはえいづる青草のごとし
六 朝にはえいでてさかえ夕にはかられて枯るなり　七 われらはなんぢの怒によりて消うせ 汝のいきどほりにより
八 て怖まどふ　九 汝われらの不義をみまへに置 われらの隱れたるつみを聖顔のひかりのなかにおきたまへり　一〇 わ
れらのもろもろの日はなんぢの怒によりて過去り われらがすべての年のつくるは一息のごとし　一〇 われらが

年をふる日は七十歳にすぎず あるひは壯やかにして八十歳にいたらん されどその誇るところはたゞ勤勞とかなしみとのみ その去ゆくこと速かにして われらもまた飛去れり　一二 誰かなんぢの怒のちからを知らんや たれか汝をおそるゝ畏にたくらべて汝のいきどほりをしらんや　一三 願くはわれらにおのが日をかぞふることををしへて智慧のこゝろを得しめたまへ　一四 ヱホバよ歸りたまへ斯ていくそのときを歴たまふや ねがはくは汝のしもべらに係れるみこゝろを變へたまへ　一五 ねがはくは朝にわれらを汝のあはれみにてあきたらしめ世をはるまで喜びたのしませたまへ　一六 汝がわれらを苦しめたまへるもろもろの日とわれらが禍害にかゝれるもろもろの年とにたくらべて我儕をたのしませたまへ　一七 なんぢの作爲をなんぢの僕等になんぢの榮光をその子等にあらはしたまへ　一八 斯てわれらの神ヱホバの佳美をわれらのうへにのぞましめ われらの手のわざをわれらのうへに確からしめたまへ 願くはわれらの手のわざを確からしめたまへ

第九一篇

一 至上者のもとなる隱れたるところにすまふその人は全能者の蔭にやどらん　二 われヱホバのことを宣て ヱホバはわが避所わが城わがよりたのむ神なりといはん　三 そは神なんぢを獵人のわなと毒をながす疫癘よりたすけいだしたまふべければなり　四 かれその翮をもてなんぢを庇ひたまはん なんぢその翼の下にかくれん その眞實は盾なり干なり　五 夜はおどろくべきことあり晝はとびきたる矢あり　六 幽暗にはあゆむ疫癘あり日午にはそこなふ颷しき疾あり　七 されどなんぢ畏るゝことあらじ 千人はなんぢの左にたふれ萬人はなんぢの右にたふる されどその災害はなんぢに近づくことなからん　八 なんぢの眼はたゞこの事をみるのみ なんぢ惡者のむくいを見ん　九 なんぢ曩にいへりヱホバはわが避所なりと なんぢ至上者をその住居となしたれば　一〇 災害なんぢにいたらず苦難なんぢの幕屋に近づかじ　一一 そは至上者なんぢのためにその使者輩におほせて 汝があゆむもろもろの道になんぢを守らせ給へばなり　一二 かれら手にてなんぢの足の石にふれざらんために汝をさゝへん　一三 なんぢは獅と蝮とをふみ壯獅と蛇とを足の下にふみにじらん　一四 彼その愛をわれにそゝげるがゆゑに我これを助けん かれわが名をしるがゆゑに我これを高處におかん　一五 かれ我をよばゞ我こたへん 我その苦難のときに偕にをりて之をたすけ之をあがめん　一六 われ長壽をもてかれを足はしめ且わが救をしめさん

第九二篇

安息日にもちゐる歌なり 讃美なり

一 いとたかき者よヱホバにかんしやし聖名をほめたゝふるは善かな　二 あしたに汝のいつくしみをあらはし 夜々なんぢの眞實をあらはすに　三 十絃のなりものと箏とをもちゐ 琴の妙なる音をもちゐるはいと善かな　四 そはヱホバよ なんぢその作爲をもて我をたのしませたまへり 我なんぢの手のわざをよろこびほこらん　五 ヱホバよ汝のみわざは大なるかな汝のもろもろの思念はいとふかし　六 無知者はしることなく愚なるものは之をさとらず　七 惡きものは草のごとくもえいで 不義をおこなふ衆庶はさかゆるとも 遂にはとこしへにほろびん　八 されどヱホバよ汝はとこしへに高處にましませり　九 ヱホバよ吁なんぢの仇あゝなんぢの仇はほろびん 不義をおこなふ者はことごとく散されん　一〇 されど汝わが角をたかくあげて 野の牛のつののごとくならしめたまへり 我はあたらしき膏をそゝがれたり　一一 又わが目はわが仇につきて願へることをきゝたり 又わが耳はわれにさからひておこりたつ惡をなすものにつきて願へることをきゝたり　一二 義しきものは棕櫚の樹のごとく榮え レバノンの香柏の

ごとくそだつべし　一三 ヱホバの宮にうゑられしものはわれらの神の大庭にさかえん　一四 かれらは年老てなほ果を
むすび豐かにうるほひ 綠の色みちみちて　一五 ヱホバの直きものなることを示すべし ヱホバはわが巖なり ヱホバ
には不義なし

第九三篇

一 ヱホバは統御たまふ ヱホバは稜威をきたまへり ヱホバは能力をころもとなし帶となしたまへり
されば また世界もかたくたちて動かざるゝことなし　二 なんぢの實座はいにしへより堅くたちぬ
汝はとこしへより在せり　三 大水はこゑをあげたり ヱホバよおほみづは聲をあげたり おほみづは浪をあぐ
四 ヱホバは高處にいましてその威力はおほくの水のこゑ海のさかまくにまさりて盛んなり　五 なんぢの證詞は
いとかたし ヱホバよ聖潔はなんぢの家にとこしへまでも適應なり

第九四篇

一 ヱホバよ仇をかへすは汝にあり 神よあたを報すはなんぢにあり ねがはくは光をはなちたまへ
二 世をさばきたまふものよ 願くは起てたかぶる者にそのうくべき報をなしたまへ　三 ヱホバよ惡き
もの幾何のときを經んとするや あしきもの勝誇りていくそのとしを經るや　四 かれらはみだりに言をいだして
誇りものいふ すべて不義をおこなふ者はみづから高ぶれり　五 ヱホバよ彼等はなんぢの民をうちくだき なんぢ
の業をそこなふ　六 かれらは寡婦と旅人との生命をうしなひ孤子をころす　七 かれらはいふ ヤハは見ずヤコブ
の神はさとらざるべしと　八 民のなかなる無知よなんぢらさとれ 愚かなる者よいづれのときにか智からん
九 みゝを植るものきくことをせざらんや 目をつくれるもの見ることをせざらんや　一〇 もろもろの國ををしふる者
たゞすことを爲ざらんや 人に知識をあたふる者しることなからんや　一一 ヱホバは人の思念のむなしきを知り

イ 詩一〇〇・四、一三　ハ 羅九・一四　ニ 詩九六・一〇、九七・五・二　ホ 詩一〇四・一一・九九・一　ヘ 詩六五・六　ト 詩九六・一〇　チ 詩四五・六・二二—二三　リ 詩六五・七、八九・九　ヌ 申三二・三五　ヲ 伯二〇・五　カ 詩三一・一八　タ 詩七三・二二、九二・一五　ヨ 詩一〇・一二・一三、一〇〇・三

たまふ　一二 ヤハよなんぢの懲めたまふ人 なんぢの法ををしへらるゝ人は さいはひなるかな　一三 かゝる人をわざ
はひの日よりのがれしめ 惡きもののために坑のほらるゝまで これに平安をあたへたまはん　一四 そはヱホバその
民をすてたまはず その嗣業をはなれたまはざるなり　一五 審判はたゞしきにかへり心のなほき者はみなその後に
したがはん　一六 誰かわがために起りたちて惡きものを責んや 誰か我がために立て不義をおこなふ者をせめんや
一七 もしヱホバ我をたすけたまはざりせば わが靈魂はとくに幽寂とところに住ひしならん　一八 されどわが足すべり
ぬといひしとき ヱホバよなんぢの憐憫われをさゝへたまへり　一九 わがうちに憂慮のみつる時 なんぢの安慰
わがたましひを喜ばせたまふ　二〇 律法をもて害ふことをはかる惡の位はなんぢに親むことを得んや　二一 彼等は
あひかたらひて 義人のたましひをせめ罪なき血をつみに定む　二二 然はあれどヱホバはわがたかき櫓 わが神は
わが避所の磐なりき　二三 神はかれらの邪曲をその身におはしめ かれらをその惡き事のなかに滅したまはん われ
らの神ヱホバはこれを滅したまはん

第九五篇

一 來われらヱホバにむかひてうたひ すくひの磐にむかひてよろこばしき聲をあげん　二 われら感
謝をもてその前にゆき ヱホバにむかひ歌をもて歡ばしきこゑをあげん　三 そはヱホバは大なる神な
り もろもろの神にまされる大なる王なり　四 地のふかき處みなその手にあり 山のいたゞきもまた神のものなり
五 うみは神のものその造りたまふところ旱ける地もまたその手にて造りたまへり　六 いざわれら拜みひれふし
我儕をつくれる主ヱホバのみまへに曲跪くべし　七 彼はわれらの神なり われらはその草苑の民その手のひつじ

レ 出四・二一　整二〇・二一　ソ 伯三五・一一　二八・二六　ツ 哥前三・二〇　ネ 伯五・二七　整三・一一・哥前一一・三二　來一二・五—一一　ナ 傳前一二・二二　羅一一・一・二二　ラ 詩一二四・一、二　ム 詩三八・二六　ウ 詩五八・二二　賽一〇・一五　ク 詩五九・九、六二・二六　ノ 太二七・一　オ 出二二・七　錄一七　ヤ 詩七・一六　錄二・二二、五・二二　マ 申三二・一五　得後二二・四七　ケ 詩一〇〇・一　フ 詩九六・四、九七・九、一三五・五　コ 創一・九、一〇　エ 哥前六・二〇　テ 詩七九・一三、八〇・一、一〇〇・三

八 なんぢらメリバに在りしときのごとく 野なるマサにありなり 今日なんぢらがその聲をきかんことをのぞむ
九 その時なんぢらの列祖われをこゝろみ我をためし 又わがわざを
一〇 し日の如くその心をかたくなにするなかれ
一一 みたり われその代のためにうれへて四十年を歴 われいへり かれらは心あやまれる民わが道を知ざりきと
一二 このゆゑに我いきどほりて彼等はわが安息にいるべからずと誓ひたり

第九六篇

一 あたらしき歌をヱホバにむかひてうたへ 全地よヱホバにむかひて謳ふべし
二 ヱホバに向ひて
三 うたひその名をほめよ 日ごとにその救をのべつたへよ
四 もろもろの國のなかにその榮光をあらはし もろもろの民のなかにその奇しきみわざを顯すべし
五 そはヱホバはおほいなり大にほめたゝふべきものなり もろもろの神にまさりて畏るべきものなり
六 もろもろの民のすべての神はことごとく虛しされどヱホバはもろもろの天をつくりたまへり
七 尊貴と稜威とはその前にあり 能と善美とはその聖所にあり
八 もろもろの民のやからよ榮光とちからとをヱホバにあたへよヱホバにあたへよ
九 その聖名にかなふ榮光をもてヱホバにあたへ 獻物をたづさへてその大庭にきたれ
一〇 きよき美しきものをもてヱホバををがめ 全地よその前にをのゝけ
一一 もろもろの國のなかにいへ ヱホバは統御たまふ 世界もかたくたちて動かさるゝことなし ヱホバは正直をもてすべての民をさばきたまはんと
一二 天はよろこび 地はたのしみ 海とそのなかに盈るものとはなりどよみ
一三 田畑とその中のすべての物とはよろこぶべし かくて林のもろもろの樹もまたヱホバの前によろこびうたはん
一四 ヱホバ來りたまふ地をさばかんとて來りたまふ 義をもて世界をさばきその眞實をもてもろもろの民をさばき

一八・一一　ウ詩八九・一四　キ詩一八八、五〇・三　ノ出一九・一八　詩七七・一八、一〇四　オ十五・五　ク詩一九・一、五〇・六　ヤ出二〇・四　利二六・一　中五・八、・三二　米一・四　ケ詩八三・一八　フ出一八・一一　詩九五・三、九六・四　コ詩三四・一四、三七・二七、一〇・三　歴五・一五　羅一二・九　エ詩三・一三、三七・一八　ア伯二・二八　詩一二・四　鎧四・一八　サ詩三三・一　キ詩三〇・四　ユ詩三三・三、九六・一　箴四二・一〇　メ出一五・一一　詩七七・一四、八六・一〇、一〇五・五、一三六・四、一三九・一四　ミ出一五・六　箴五九・一六、六三・五　シ箴五二・一〇　路二・三〇、三一　エ箴六二・二　羅三・二五、二六　ヒ路一・五四、五五、七二　モ箴四九・六、五二・一〇　路二・三〇、三一、三六　徒一三・四七、二八・二八

イ來三・七、一五、四・七　ロ出一七・二、七　民一四・二二、一三　申六・一六　ハ詩七八・一八、四〇、五六　哥前一〇・九　ニ民一四・二二　ホ來三・一〇、一七　ヘ民一四・二三、二八　ト代上一六・二三—三三　チ詩三三・三　リ詩一八・三　ヌ詩九五・三　ル耶一〇・一一、一二　ヲ詩一一五・一五　箴四二・五　ワ詩二九・二　カ詩二九・一、二　ヨ詩二九・二、一一〇・三　タ詩九三・一、九七・一　レ詩六七・四、九六・一三、九八・九　ソ詩六九・三四　ツ詩九八・七　ネ詩六七・四　駄一九・一一　ナ詩九六・一〇　ラ箴六〇・九　ム王上八・一二　詩

たまはん

第九七篇

一 ヱホバは統御たまふ 全地はたのしみ多くの島々はよろこぶべし
二 雲とくらきとはその周環にあり 義と公平とはその寶座のもとゐなり
三 火ありそのみまへにすゝみ その四周の敵をやきつくす
四 ヱホバのいなびかりは世界をてらす 地これを見てふるへり
五 もろもろの山はヱホバのみまへ全地の主のみまへにて蠟のごとくとけぬ
六 もろもろの天はその義をあらはし よろづの民はその榮光をみたり
七 すべてきざめる像につかへ虛しきものによりてみづから誇るものは恥辱をうくべし もろもろの神よみなヱホバをふしをがめ
八 ヱホバよなんぢの審判のゆゑにより シオンはきゝてよろこびユダの女輩はみな樂しめり
九 ヱホバよなんぢ全地のうへにましまして至高く なんぢもろもろの神のうへにましまして至貴とし
一〇 ヱホバを愛しむものよ惡をにくめ ヱホバはその聖徒のたましひをまもり 之をあしきものの手より助けいだしたまふ
一一 光はたゞしき人のためにまかれ 欣喜はこゝろ直きもののために播れたり
一二 義人よヱホバによりて喜べ そのきよき名に感謝せよ

第九八篇

歌なり

一 あたらしき歌をヱホバにむかひてうたへ そは妙なる事をおこなひその右の手そのきよき臂をもて己のために救をなし畢たまへり
二 ヱホバはそのすくひを知しめ その義をもろもろの國人の目のまへにあらはし給へり
三 又その憐憫と眞實とをイスラエルの家にむかひて記念したまふ 地の極もことごとくわが神の

一二　一三　一四　一五　一六　一七　一八　一九　二〇　二一　二二　二三

四 すくひを見たり　四 全地よヱホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ聲をはなちてよろこびうたへ讃うたへ　五 琴を
五 もてヱホバをほめうたへ琴の音と歌のこゑとをもてせよ　六 ラッパと角笛をふきならし王ヱホバのみまへによ
六 ろこばしき聲をあげよ　七 海とそのなかに盈るもの世界とせかいにすむものと鳴響むべし　八 大水はその手を
七八 うち もろもろの山はあひともにヱホバの前によろこびうたふべし　九 ヱホバ地をさばかんために來りたまへば
九 なり ヱホバ義をもて世界をさばき公平をもてもろもろの民をさばきたまはん

第九九篇

一 ヱホバは統御たまふ もろもろの民はをのゝくべし ヱホバはケルビムの間にいます 地ふるはん
二 ヱホバはシオンにましまして大なり もろもろの民にすぐれてたふとし　三 かれらは汝のおほい
三 なる畏るべき名をほめたゝふべし ヱホバは聖なるかな　四 王のちからは審判をこのみたまふ 汝はかたく
四 公平をたてヤコブのなかに審判と公義とをおこなひたまふ　五 われらの神ヱホバをあがめ その承足のもとにて
五 拜みまつれ ヱホバは聖なるかな　六 その祭司のなかにモーセとアロンとあり その名をよぶ者のなかにサム
六 エルあり かれらヱホバをよびしに應へたまへり　七 ヱホバ雲の柱のうちにましましてかれらに語りたまへり
七 かれらはその證詞とその賜はりたる律法とを守りたりき　八 われらの神ヱホバよなんぢ彼等にこたへたまへり
八 かれらのなしゝ事にむくいたまひたれど また赦免をあたへたまへる神にてましませり　九 われらの神ヱホバを
九 崇めそのきよき山にてをがみまつれ そはわれらの神ヱホバは聖なるなり

第一〇〇篇

感謝のうた

イ詩九五・一、一〇〇　ハ詩九六・一一　一八・二〇、八〇・一　ル詩九九・九　ヨ出一四・一五、一五・二五　民二〇・一二、二四　・三、九九・五、一一八・二八　ナ詩一一九・七三、一三九・一三、一四九
ロ民一〇・一〇　代上一五・二八　代下二九・二七　ニ雅五五・一二　ホ詩九六・一〇、一三　ヘ詩九三・一、一五・四　チ詩九七・九　リ申二八・五八　殿　ヲ代上二八・二　詩　一三二・七　ワ利一九・二　カ民一五・一　タ出三三・九　レ出三二・二一一四　ソ民一四・二〇　耶　四六・二八　番三・七　ツ出一五・二　詩三四　ネ詩九五・一、九八・四　ラ詩九五・七　結三四　・三〇、三一

ム詩六六・一三、一一　ウ詩一三六・一　ヰ詩八九・一　ノ拝前八・一四　オ王上九・四、一一・四　ク雅二三・六　拝前一　ヤ詩九七・一〇　二・二〇・二一　四〇・四、一二五・五　詩　マ太七・二三　提後二　・二九　ケ詩一八・二七　ヲ詩七五・一〇　フ詩七五・一〇　耶　コ詩四八・二、八　エ出二・二三　拝前九　・二六　詩一八・六　ア詩七一・二八八・二　ヲ詩二七・九、六九・　サ詩一一九、八三　雅　四・一四　ラ詩一七

一 全地よヱホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ
二 欣喜をいだきてヱホバに事へ うたひつゝその前にきた
三 れ 知れヱホバこそ神にますなれ われらを造りたまへるものはヱホバにしませば我儕はその屬なり われら
四 はその民その草苑のひつじなり　四 感謝しつゝその門にいり ほめたゝへつゝその大庭にいれ 感謝してその名を
五 ほめたゝへよ　五 ヱホバはめぐみふかくその憐憫かぎりなく その眞實よろづ世におよぶべければなり

第一〇一篇

ダビデのうた

一 われ憐憫と審判とをうたはん ヱホバよ我なんぢを讃うたはん　二 われ心をさとくして全き道
二 をまもらん なんぢいづれの時われにきたりたまふや 我なほき心をもてわが家のうちをありかん　三 われわが
三 眼前にいやしき事をおかず われ叛くものの業をにくむ そのわざは我につかじ　四 僻めるこゝろは我よりはなれ
四 ん 惡きものを知ることをこのまず　五 隱にその友をそしるものは我これをほろぼさん 高ぶる眼また驕れる心の
五 ものは我これをしのばじ　六 わが眼は國のうちの忠なる者をみて之をわれとともに住ません 全き道をあゆむ人
六 はわれに事へん　七 欺くことをなす者はわが家のうちに住むことをえず 虛僞をいふものはわが目前にたつこと
七 を得じ　八 われ朝な朝なこの國のあしき者をことごとく滅し ヱホバの邑より不義をおこなふ者をことごとく
八 絶除かん

第一〇二篇

一 ヱホバよわが祈をきゝたまへ なやみたる者おもひくづほれてその歎息をヱホバの前にそゝぎいだせるときの祈禱
二 願くはわが號呼のこゑの御前にいたらんことを　二 わが窮苦の日
三 みかほを蔽ひたまふなかれ なんぢの耳をわれにかたぶけ 我がよぶ日にすみやかに我にこたへたまへ　三 わが

四 もろもろの日は煙のごとくきえ わが骨はたきゞのごとく焚るるなり 四 わがこゝろは草のごとく擊れてしほれ
五 たり われ糧をくらふを忘れしによる 五 わが歎息のこゑによりてわが骨はわが肉につく 六 われは野の鵜鶘の
六 ごとく荒たる跡のふくろふのごとくになりぬ 七 われ醒てねぶらず たゞ友なくして屋蓋にをる雀のごとくなれり
七 八 わが仇はひねもす我をそしる 猖狂ひて我をせむるもの 我をさして誓ふ 九 われは糧をくらふごとくに灰をく
八 九 らひ わが飲ものには涙をまじへたり 一〇 こは皆なんぢの怒と忿恚とによりてなり なんぢ我をもたげてなげすて
一〇 給へり 一一 わが齡はかたぶける日影のごとし 一二 またわれは草のごとく萎れたり 一三 されどヱホバよなんぢは
一一 永遠にながらへ その名はよろづ世にながらへん 一四 なんぢ起てシオンをあはれみたまはん そはシオンに恩惠を
一二 ほどこしたまふときなり そのさだまれる期すでに來れり 一五 なんぢの僕はシオンの石をもよろこび その塵をさ
一三 へ愛しむ 一六 もろもろの國はヱホバの名をおそれ 地のもろもろの王はその榮光をおそれん 一七 ヱホバはシオンを
一四 きづき榮光をもてあらはれたまへり 一八 ヱホバは乏しきものの祈をかへりみ彼等のいのりを藐しめたまはざりき
一五 一八 來らんとするのちの世のためにこの事をしるさん 新しくつくられたる民はヤハをほめたゝふべし 一九 ヱホバ
一六 その聖所のたかき所よりみおろし天より地をみたまへり 二〇 こは俘囚のなげきをきゝ死にさだまれる者をとき
一七 はなち 二一 人々のシオンにてヱホバの名をあらはしヱルサレムにてその頌美をあらはさんが爲なり 二二 かゝる時
一八 にもろもろの民もろもろの國つどひあつまりてヱホバに事へまつらん 二三 ヱホバはわがちからを途にておと
一九 ろへしめ わが齡をみじかからしめ給へり 二四 我いへり ねがはくはわが神よわがすべての日のなかばにて 我を

イ 伯三〇・五〇 詩三 ロ 詩三七・二 詩一〇 ハ 伯一九・二〇 哀四・一八 ニ 伯三〇・二九 ホ 番二・一四 ヘ 徒二六・一一 ト 徒二三・一二 チ 詩四二・三、八〇・五 リ 詩三〇・七 ヌ 伯一四・二 詩一〇 ル 詩一〇二・四 賽四〇・六—八 雅一・一〇 ヲ 詩九・七、一〇二・九、二六 哀五・一九 ワ 詩一三五・一三 カ 賽六〇・一〇 亞一 ソ 賽六〇・一、二 ツ 尼一・六、二、二、二 タ 詩七九・一 レ 王上八・四三 詩一 ナ 詩二二・三一 賽三八・四 賽六〇・三 ム 詩七九・一一 ウ 詩二二・二二 キ 伯二一・二二 ノ 賽三八・一〇 オ 詩九〇・二 哈一・一二

ク 創一・二、二・一 來二〇 彼後三・七、一〇 ヤ 賽三四・四、五一・一 マ 詩一〇二・一二 ケ 馬三・六 來一三・六、六五・一七、六六・二二 羅八・八 雅一・一七 フ 詩六九・三六 コ 詩一〇三・二二 詩一〇四・一、一四六 テ 出一五・二六 詩一四七・三 耶一七 サ 詩五・一二 キ 賽四〇・三一 ア 詩三四・二二、五六 ユ 詩一四六・七 メ 詩一四七・一九 ミ 出三四・六、七 民一四・二八 申五・一〇 尼九・一七 詩八六 シ 詩三〇・五 賽五七・一六 耶三・五 ヱ 瑪九・一三 ヒ 詩五七・一〇 ・一八 モ 賽四三・二五 雅七・一八 セ 馬三・二八 ヱ 瑪九・一三 太九・一四 ・一三 ・一五 耶三二・一八 ・一八 賽五七 哥前 三、一四

二五 とりさりたまふなかれ 汝のよはひは世々かぎりなし 二六 汝いにしへ地の基をすゑたまへり 天もまたなんぢの手
二六 の工なり 二七 これらは亡びん されど汝はつねに存らへたまはん これらはみな衣のごとくふるびん 汝これらを
二七 袍のごとく更たまはん されば彼等はかはらん 二八 然れども汝はかはることなし なんぢの齡はをはらざるなり
二八 汝のしもべの子輩はながらへん その裔はかたく前にたてらるべし

第一〇三篇

ダビデのうた

一 わが靈魂よヱホバをほめまつれ わが衷なるすべてのものよそのきよき名をほめまつれ 二 わ
一 二 がたましひよヱホバを讃まつれ そのすべての恩惠をわすれるなかれ 三 ヱホバはなんぢがすべての不義をゆる
三 し汝のすべての疾をいやし 四 なんぢの生命をほろびより贖ひいだし 仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ 五 なんぢ
四 五 の口を嘉物にてあかしめたまふ 斯てなんぢは壯ぎて鷲のごとく新になるなり 六 ヱホバはすべて虐げらるる者
六 のために公義と審判とをおこなひたまふ 七 おのれの途をモーセにしらしめ おのれの作爲をイスラエルの子輩
七 八 にしらしめ給へり 八 ヱホバはあはれみと恩惠にみちて怒りたまふことおそく仁慈ゆたかにましませり 九 恒に
九 一〇 せむることをせず永遠にいかりを懷きたまはざるなり 一〇 ヱホバはわれらの罪の量にしたがひて我儕をあしらひ
一〇 たまはず われらの不義のかさにしたがひて報いたまはざりき 一一 ヱホバをおそるるものにヱホバの賜ふその
一一 あはれみは大にして 天の地よりも高きがごとし 一二 そのわれらより愆をとほざけたまふことは東の西より遠き
一二 一三 ヱホバの己をおそるる者をあはれみたまふことは父がその子をあはれむが如し 一四 ヱホバは我儕の
一三 がごとし

一五 つくられし狀をしり　われらの塵なることを念ひ給へばなり　一五 人のよはひは草のごとく　その榮はのの花のごと
一六 し　一七 風すぐれば失てあとなくその生いでし處にとへど尙しらざるなり　一七 然はあれどヱホバの憐憫はとこしへ
一八 より永遠まで　ヱホバをおそるるものにいたり　その公義は子孫のまた子孫にいたらん　一八 その契約をまもりその
一九 訓諭を心にとめて行ふものぞその人なる　一九 ヱホバはその寶座をもろもろの天にかたく置たまへり　その政權は
二〇 よろづのもののうへにあり　二〇 ヱホバにつかふる使者よ　ヱホバの聖言のこゑをきゝ　その聖言をおこなふ勇士よ
二一 二二 ヱホバをほめまつれ　二一 その萬軍よ　その聖旨をおこなふ僕等よ　ヱホバをほめまつれ　二二 その造りたまへる萬物
よ　ヱホバの政權の下なるすべての處にて　ヱホバをほめよ　わがたましひよ　ヱホバを讃まつれ

第一〇四篇

一 わが靈魂よ　ヱホバをほめまつれ　わが神　ヱホバよ　なんぢは至大にして尊貴と稜威とを衣たまへ
二 三 なんぢ光をころものごとくにまとひ　天を幕のごとくにはり　三 水のなかにおのれの殿の
四 棟梁をおき　雲をおのれの車となし　風の翼にのりあるき　四 かぜを使者となし　焰のいづる火を僕となしたまふ
五 五 ヱホバは地を基のうへにおきて　永遠にうごくことなからしめたまふ　六 衣にておほふがごとく　大水にて地を
六 おほひたまへり　水たゝへて山のうへをこゆ　七 なんぢ叱咤すれば水しりぞき　汝いかづちの聲をはなてば水たち
七 八 まち去ぬ　八 あるひは山にのぼり　或ひは谷にくだりて　汝のさだめたまへる所にゆけり　九 なんぢ界をたてて之を
九 一〇 こえしめず　ふたゝび地をおほふことなからしむ　一〇 ヱホバはいづみを谷にわきいだし給ふ　その流は山のあひだ
一一 にはしる　一二 かくて野のもろもろの獸にのましむ　野の驢馬もその渴をやむ　一二 空の鳥もそのほとりにすみ　樹梢

イ詩七八・三九　ロ創三・一九　傳一二　ハ詩九〇・五、六　傳前一・二四　ニ伯一四・一、二　詩四七・二　但四・一〇、一一　ホ伯七・一〇、二〇・九　ヘ出二〇・六　ト申七・九　チ詩一一・四　リ詩四七・二　但四・二五、三四、三五　ヌ太六・一〇　來一・一四　ル詩一四八・二　ヲ創三・二　番五・一四　詩六八・一七　ワ但七・九、一〇　來一・二四　カ詩一四五・一〇　ヨ詩一〇三・一、一〇　タ詩一〇三・一、一〇　レ詩九三・一　ソ但七・九　ツ箴四〇・二二、四五　ネ傳九・六　ナ箴一九・一　ラ詩一八・一〇　ム來一・七　ウ王下二・一一、六・一七　ヰ伯二六・七、三八・四・六　詩二四・二、一三六・六　傳一・四　ノ創七・一九　オ創八・一　ク創八・五　ヤ伯三八・一〇、一一　マ伯二六・一〇　詩三・七　耶五・二二　ケ創九・一一、一五

の間よりさえづりうたふ　一三 ヱホバはその殿よりもろもろの山に灌漑たまふ　地はなんぢのみわざの實によりて
一四 飽足ぬ　一四 ヱホバは草をはえしめて家畜にあたへ　田產をはえしめて人の使用にそなへたまふ　かく地より食物を
一五 いだしたまふ　一五 人のこゝろを歡ばしむる葡萄酒　ひとの顏をつやゝかならしむるあぶら　人のこゝろを强からし
一六 一七 むる糧どもなり　一六 ヱホバの樹とその植たまへるレバノンの香柏とは飽足ぬべし　一七 鳥はそのなかに巢をつくり
一八 鶴は松をその棲とせり　一八 たかき山は山羊のすまひ　磐石は山鼠のかくるる所なり　一九 ヱホバは月をつくりて時を
一九 二〇 つかさどらせたまへり　日はその西にいることをしる　二〇 なんぢ黑暗をつくりたまへば夜あり　そのとき林のけも
二一 二二 のは皆しのびしのびに出きたる　二一 わかき獅ほえて餌をもとめ神にくひものをもとむ　二二 日いづれば退きてその
二三 二四 穴にふす　二三 人はいでて工をとりその勤勞はゆふべにまでいたる　二四 ヱホバよなんぢの事跡はいかに多なる こ
二五 れらは皆なんぢの智慧にてつくりたまへり　汝のもろもろの富は地にみつ　二五 かしこに大なるひろき海あり　その
二六 なかに數しられぬ匍ふもの　小なる大なる生るものあり　二六 舟そのうへをはしり　汝のつくりたまへる鱷そのうちに
二七 二八 あそびたはぶる　二七 彼ら皆なんぢを俟望む　なんぢ宜時にくひものを之にあたへたまふ　二八 彼等はなんぢの予へ
二九 たまふ物をひろふ　なんぢ手をひらきたまへばかれら嘉物にあきたりぬ　二九 なんぢ面をおほひたまへば彼等はあ
三〇 わてふためく　汝かれらの氣息をとりたまへばかれらは死て塵にかへる　三〇 なんぢ靈をいだしたまへば百物みな
三一 造らるなんぢ地のおもてを新にしたまふ　三一 願くはヱホバの榮光とこしへにあらんことを　ヱホバそのみわざを
三二 三三 喜びたまはんことを　三二 ヱホバ地をみたまへば地ふるひ　山にふれたまへば山は煙をいだす　三三 生るかぎりは

フ詩一四七・八　コ詩六五・九、一〇　エ耶一〇・一二、一四　テ創一・二九、三〇、　ア伯二八・五　詩一三　六・二五、一四七・九　ユ箴三〇・二六　メ創一・二四　ミ伯三八・一二　三・一八、九・三　詩一四七・八　キ民二四・六　シ箴四五・七　エ伯三八・三九　耳一　セ伯四一・一　ス詩一三六・二五、一四五・二、一四七　ロ塞三二・一五　結　詩一四六・四　傳　ハ詩三・一〇　ト詩一四四・五　チ詩六三・四、一四六　リ詩四・一　ヌ詩一三六・二五、一　ル詩一一・七　ヲ詩一四七・九　ワ詩一一・一　カ詩一四七・一　ヨ詩一四七・一　タ詩一四七・一　レ詩一四六・一　ソ詩一四七・一　ツ箴一九・一　ネ箴一九・一　ナ箴一九・一　ラ詩一四七・一　ム詩一四七・一　ウ詩一四七・一　ヰ詩一四七・一　ノ詩一四七・一　オ詩一四七・一　ク詩一四七・一　ヤ詩一四七・一　マ詩一四七・一　ケ詩一四七・一　イ伯三四・一四、一五　ハ創一・三一

三四 ヱホバに向ひてうたひ我ながらふるほどはわが神をほめうたはん 三四 ヱホバをおもふわが思念はたのしみ深か
三五 らん われヱホバによりて喜ぶべし 三五 罪人は地より絶滅され あしきものは復あらざるべし わが靈魂よヱホバ
をほめまつれヱホバを讃稱へよ

第一〇五篇

一 一 ヱホバに感謝しその名をよび そのなしたまへる事をもろもろの民輩のなかにしらしめよ
二 二 ヱホバにむかひてうたへ ヱホバを讃うたへ そのもろもろの妙なる事跡をかたれ 三 その
三 きよき名をほこれ ヱホバをたづねもとむるものの心はよろこぶべし 四 ヱホバとその能力とをたづねもとめよ
四 つねにその聖顏をたづねよ 五 六 その僕アブラハムの裔よ ヤコブの子輩よ そのえらびたまひし所のものよ その
五 六 なしたまへる妙なるみわざと奇しき事跡とその口のさばきとを心にとむれ 七 彼はわれらの神ヱホバなり その
七 八 みさばきは全地にあり 八 ヱホバはたえずその契約をみこゝろに記たまへり 此はよろづ代に命じたまひし
九 一〇 聖言なり 九 アブラハムとむすびたまひし契約イサクに與へたまひし誓なり 一〇 之をかたくしヤコブのために律法
一一 となし イスラエルのためにとこしへの契約となして 一一 言たまひけるは我なんぢにカナンの地をたまひてなんぢ
一二 一三 らの嗣業の分となさん 一二 この時かれらの數おほからず甚すくなくしてかしこにて旅人となり 一三 この國より
一四 かの國にゆき この國よりほかの民にゆけり 一四 人のかれらを虐ぐるをゆるし給はず かれらの故によりて王たち
一五 一六 を懲しめて 一五 宣給くわが受膏者たちにふるゝなかれ わが預言者たちをそこなふなかれ 一六 ヱホバは饑饉を地に
一七 まねき 人の杖とする糧をことごとく碎きたまへり 一七 又かれらの前にひとりを遣したまへり ヨセフはうられて

イ 詩三七・三八 燉二 ロ 詩一〇四・一 ハ 代上一六・八—二二 ニ 詩二七・八 ホ 詩七七・一二、一一 ヘ 詩二七・八 ト 詩七七・一一 チ 箴二六・九 リ 路一・七二 ヌ 創一七・二、二二・一 ル 創一二・一八 ヲ 創三四・三〇 ワ 來一一・九 カ 創三五・五 ヨ 創一二・一七、二〇・ タ 創四一・五四 レ 利二六・二六 ソ 創四五・五、五〇・一〇 ツ 創三七・二八、三六

一八 僕となりぬ 一八 かれら足械をもてヨセフの足をそこなひ くろかねの鏈をもてその靈魂をつなげり 一九 斯てその
二〇 ことばの驗をうるまでに及ぶ ヱホバのみことば彼をこゝろみたまへり 二〇 王は人をつかはしてこれを解き もろ
二一 もろの民の長はこれをゆるし 二一 之をその家司となし その財寶をことごとく司どらせ 二二 その心のまゝにかの
二三 國のきみたちを縛しめ 二四 長老たちに智慧ををしへしむ 二三 イスラエルも亦エジプトにゆき ヤコブはハムの地に
二四 二五 やどれり 二四 ヱホバはその民を大にましくはへ 之をその敵よりも強くしたまへり 二五 また敵のこゝろをかへて
二六 おのれの民をにくましめ おのれの僕輩をあざむき待さしめたまへり 二六 又そのしもべモーセとその選びたまへ
二七 るアロンとを遣したまへり 二七 かれらはヱホバの預兆をハムの地におこなひ またその國にくすしき事をおこな
二八 二九 へり 二八 ヱホバは闇をつかはして暗くしたまへり かれらその聖言にそむくことをせざりき 二九 彼等のすべての
三〇 水を血にかへてその魚をころしたまへり 三〇 かれらの國は蛙むれいでて王の殿のうちにまでみちふさがりぬ
三一 三二 ヱホバいひたまへば蠅むらがり蚤そのすべての境にいりきたりぬ 三二 また雨にかへて雹をかれらに與へ
三三 もゆる火をかれらの國にふらし 三三 かれらの葡萄の樹といちじくの樹とをうちその境のもろもろの樹ををりくだ
三四 三五 きたまへり 三四 ヱホバいひたまへば算しられぬ蝗と蟲賊きたり 三五 かれらの國のすべての田產をはみつくし
三六 その地のすべての實を食つくせり 三六 ヱホバはかれらの國のすべての首出者をうち かれらのすべての力の始を
三七 うちたまへり 三七 しろかね黃金をたづさへて彼等をいでゆかしめたまへり その家族のうちに一人のよわき者も
三八 なかりき 三八 エジプトはかれらの出るをよろこべり かれらをおそるるの念そのうちにおこりたればなり

ネ 創三九・二〇、四〇・一五 ナ 創四一・二五 ラ 創四一・一四 ム 創四一・四〇 ウ 創四六・六 ヰ 詩七八・五一、一〇 ノ 出一・七 オ 出一・八—二二 ク 出三・一〇、四・一 ヤ 民一・六五、一七・五 マ 出七・八、九・一〇、一一・一二 ケ 詩七八・四三—五三 フ 出一〇・二二 コ 詩九九・七 エ 出七・二〇 詩七八 テ 出八・六 四四 四五 詩七八・ ア 出八・一七、二四 詩七八・四五 サ 出九・二三、二五 詩 キ 詩七八・四七 七八・四八 ユ 出一〇・四、一二、一四 詩七八・四六 メ 出一二・二九 詩七八・五一 ミ 創四九・三 シ 出一二・三五 ヱ 出一二・三三

三九 ヱホバは雲をしきて蓋となし夜は火をもて照したまへり　四〇 又かれらの求によりて鶉をきたらしめ天の餅
四一 にてかれらを飽しめたまへり　四二 磐をひらきたまへば水ほどばしりいで潤ひなきところに川をなして流れいで
四三 たり　四四 ヱホバそのきよき聖言とその僕アブラハムとをおもひいでたまひたればなり　四五 その民をみちびきて
四四 歡びつゝいでしめ そのえらべる民をみちびきて謳ひつゝいでしめたまへり　四六 もろもろの國人の地をかれらに
四五 與へたまひしかば 彼等もろもろのたみの勤勞をおのが有とせり　四七 こは彼等がその律にしたがひその法をまも
らんが爲なり ヱホバをほめたゝへよ

第一〇六篇

一 ヱホバをほめたゝへヱホバに感謝せよ そのめぐみはふかくその憐憫はかぎりなし　二 たれか
ヱホバの力ある事跡をかたり その讃べきことを悉とくいひあらはし得んや　三 審判をまもる人々
つねに正義をおこなふ者はさいはひなり　四 ヱホバよなんぢの民にたまふ惠をもて我をおぼえ なんぢの救をも
てわれに臨みたまへ　五 さらば我なんぢの撰びたまへる者のさいはひを見 なんぢの國の歡喜をよろこび なんぢ
の嗣業とともに誇ることをせん　六 われら列祖とともに罪をかせり 我儕よこしまをなし惡をおこなへり
七 われらの列祖はなんぢがエジプトにてなしたまへる奇しき事跡をさとらず 汝のあはれみの豐かなるを心にと
めず 海のほとり即ち紅海のほとりにて逆きたり　八 されどヱホバはその名のゆゑをもて彼等をすくひたまへり
こは大なる能力をしらしめんとてなり　九 また紅海を叱咤したまひたれば乾きたり かくて民をみちびきて野を
ゆくがごとくに淵をすぎしめ　一〇 恨むるものの手よりかれらをすくひ 仇の手よりかれらを贖ひたまへり　一一 水

イ 出一三・二一　ロ 出一六・一二、一三　詩七八・一八、二七　ハ 詩七八・二四、二五　ニ 尼九　ホ 創一五・一四　ヘ 申六・一〇、一一　書一三・七—三三　詩一〇七・一、一八・一三六・一　ト 申四・一、四〇、六・二一—二五　チ 代上一六・三四　詩一〇七・一、一三六・一　リ 詩四〇・五　ヌ 詩一五・二　ル 詩一一九・一三二　ヲ 利二六・四〇　王上八・四七　但九・五　ワ 出一四・一一、一二　カ 結二〇・一四　ヨ 出九・一六　タ 出一四・二一　詩一八・四七　レ 寨六三・一一—一四　ソ 出一四・三〇　ツ 出一四・二七、二八、一五・五　ネ 出一四・三一、一五・一

その敵をおほひたればその一人だにのこりし者なかりき　一一 このとき彼等そのみことばを信じその頌美をうたへ
り　一二 彼等しばしがほどにその事跡をわすれその訓誨をまたず　一三 野にていたくむさぼり荒野にて神をこゝろみ
たりき　一四 ヱホバはかれらの願欲をかなへたまひしかど その靈魂をやせしめたまへり　一五 たみは營のうちにて
モーセを嫉みヱホバの聖者アロンをねたみしかば　一六 地ひらけてダタンを呑みアビラムの黨類をおほひ　一七 火は
このともがらの中にもえおこり焰はあしき者をやきつくせり　一八 かれらはホレブの山にて犢をつくり鑄たる像を
をがみたり　一九 かくの如くおのが榮光をかへて草をくらふ牛のかたちに似す　二〇 救主なる神はエジプトにて大な
るわざをなし　二一 ハムの地にて奇しき事跡をなし紅海のほとりにて懼るべきことを爲たまへり　二二 かれは斯る神を
わすれたり　二三 この故にヱホバかれらを亡さんと宣まへりされど神のえらみたまへる者モーセやぶれの間隙に
ありてその前にたちその烈怒をひきかへして滅亡をまぬかれしめたり　二四 かれら美しき地を蔑しそのみことば
を信ぜず　二五 剰さへその幕屋にてつぶやきヱホバの聲をもきかざりき　二六 この故に手をあげて彼等にむかひたま
へり これ野にてかれらを斃れしめんとし　二七 又もろもろの國のうちにてその裔をたふれしめ もろもろの地に
かれらを散さんとしたまへるなり　二八 彼らはバアルペオルにつきて死るものの祭物をくらひたり　二九 斯のごとく
その行爲をもてヱホバの烈怒をひきいだしければえやみ侵しいりたり　三〇 そのときピネハスたちて裁判をなせり
かくて疫癘はやみぬ　三一 ピネハスは萬代までとこしへにこのことを義とせられたり　三二 民メリバの水のほとり
にてヱホバの烈怒をひきおこししかば かれらの故によりてモーセも禍害にあへり　三三 かれら神の靈にそむき

ナ 出一五・二四、一六、一一・七・二、詩七八・一一　ム 民一一・三一　詩七八・一九　ウ 寨一〇・一六　ヰ 民一六・一—三五　ノ 民一六・三一、三二　オ 民一六・三五、四六　ク 出三二・一四　ヤ 耶一・一　羅一・二三　マ 詩七八・五一、一〇五・二三、二七　ケ 詩七八・一一、一二　フ 出三二・一〇、一一、三二・一、申九・一九、二五、一〇・一〇　コ 申八・七　耶三・一九　エ 來三・一八　テ 民一四・二二—二七　ア 詩九五・一一　結二〇・一五　來三・一一　サ 出六・八　申三二・四〇　キ 利二六・三三　詩四四・一一　結二〇　ユ 民二五・二、三、三一・一六　申四・二、三二・一七　何九・一〇　默二・一四　メ 民二五・七、八　ミ 民二五・一一—一三　シ 民二〇・三、一三　詩八一・七　エ 民二〇・一二　申一・三七、三二・二六　ヒ 民二〇・一〇

しかばモーセその口唇にて妄にものいひたればなり　三四　かれらはヱホバの命じたまへる事にしたがはずしてもろ
もろの民をほろぼさず　三五　反てもろもろの國人とまじりをりてその行爲にならひ　三六　おのが羂となりしその偶像
につかへたり　三七　かれらはその子女を鬼にさゝぐ　三八　罪なき血すなはちカナンの偶像にさゝげたる己がむすこ
むすめの血をながしぬ　斯てくには血にてけがされたり　三九　またそのわざは自己をけがし　そのおこなふところは
姦淫なり　四〇　このゆゑにヱホバの怒その民にむかひて起り　その嗣業をにくみて　四一　かれらをもろもろの國の手
にわたしたまへり　彼等はおのれを恨むるものに制へられ　四二　おのれの仇にしへたげられ　その手の下にうちふせ
られたり　四三　ヱホバはしばしば助けたまひしかどかれらは謀略をまうけて逆き　そのよこしまに卑くせられたり
四四　されどヱホバはかれらの哭聲をきゝたまひしとき　その患難をかへりみ　四五　その契約をかれらの爲におもひ
いだしその憐憫のゆたかなるにより聖意をかへさせ給ひて　四六　かれらを已がとりこにせられたる者どもに憐ま
るゝことを得しめたまへり　四七　われらの神ヱホバよ　われらをすくひて列邦のなかより取集めたまへ　われら
は聖名に謝し　なんぢのほむべき事をほこらん　四八　イスラエルの神ヱホバはとこしへより永遠までほむべき
かな　すべての民はアーメンととなふべし　ヱホバを讃稱へよ

第一〇七篇

一　ヱホバに感謝せよ　ヱホバは惠ふかくましましてその憐憫かぎりなし　二　ヱホバの救贖をかう
ぶる者はみな然いふべきなり　三　ヱホバは敵の手よりかれらを贖ひもろもろの地より東西北南よ
りとりあつめたまへり　四　かれら野にてあれはてたる路にさまよひその住ふべき邑にあはざりき　五　かれら

イ申七・二、一六　士二・二一　ロ士一・二一、二七―二九　ハ士二・二、三・五、六　寮二・六　哥前五・六　ニ出二三・三三　申七・二六　士二・三、一四、一五　ホ士二・一二、一三、一七、一九、三・六、七　ヘ王下一六・三　寮五七・五　結一六・二〇、二〇・二六　ト利一七・七　申三二・一七　代下一一・一五　哥前一〇・二〇　チ民三五・三三　リ結二〇・一八、三〇、三一　ヌ利一七・七　民一五・三九　結二〇・三〇　ル士二・一四、一五　詩七八・五九、六二　ヲ申九・二九　ワ士二・一四　尼九・二七―三〇　カ士二・一六　尼九・二七―三一　ヨ士三・九、四・三、六・七、一〇・一〇　尼九・二七―三〇　タ利二六・四一、四二　レ詩五一・一、六九・一六　寮六三・七　ソ士二・一八　哀三・三二　ツ瞬九・九　耶四二・一二　ネ代上一六・三五、三六　ナ詩四一・一三　ラ詩一〇六・一、一一八・一、一三六・一　ム詩一一九・六八　太一九・一七　ウ詩一〇六・一〇

飢また渇きそのうちの靈魂おとろへたり　六　斯てその困苦のうちにてヱホバをよばはりたればヱホバこれを患難
よりたすけいだし　七　住ふべき邑にゆかしめんとて直き路にみちびきたまへり　八　願くはすべての人はヱホバの
惠により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバを讃稱へんことを　九　ヱホバは渇きしたふ靈魂をたら
はせ飢たるたましひを嘉物にてあかしめ給へばなり　一〇　くらきと死の蔭とに居るもの患難とくろがねとに縛
しめらるゝもの　一一　神の言にそむき至高者のをしへを蔑しめければ　一二　勤勞をもてその心をひくうしたまへり
かれら仆れたれど助くるものもなかりき　一三　斯てその困苦のうちにてヱホバをよばはりたればヱホバこれを患難
よりすくひ　一四　くらきと死のかげより彼等をみちびき出してその械をこぼちたまへり　一五　願くはすべての人はヱ
ホバの惠により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバを讃稱へんことを　一六　そはあかがねの門をこぼ
ちくろがねの關木をたちきりたまへり　一七　愚かなる者はおのが愆の道により己がよこしまによりて惱めり
一八　かれらの靈魂はすべての食物をきらひて死の門にちかづく　一九　かくてその困苦のうちにてヱホバをよばふ　ヱ
ホバこれを患難よりすくひたまふ　二〇　その聖言をつかはして之をいやし之をその滅亡よりたすけいだしたまふ
二一　願くはすべての人ヱホバのめぐみにより人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバをほめたゝへんこ
とを　二二　かれらは感謝のそなへものをさゝげ喜びうたひてその事跡をいひあらはすべし　二三　舟にて海にうか
び大洋にて事をいとなむ者は　二四　ヱホバのみわざを見また淵にてその奇しき事跡をみる　二五　ヱホバ命じたまへば

ヰ詩一〇六・四七　寮四三・五、六　耶二九・一四、三一・八、一〇　結三九・二七、二八　ノ申三二・一〇　オ詩一〇七・四〇　ク詩五〇・一五、一〇七・一三、一九、二八　何五・一五　ヤ瞬八・二一　マ詩一〇七・一五、二一、三一　ケ詩三四・一〇　路一・五三　フ路一・七九　コ伯三六・八　エ哀三・四二　テ詩七三・二四、一一九・二四　路七・三〇　徒二〇・二七　ア詩二二・一一　寮六三・五　サ詩一〇七・六、一九、二八　キ詩六八・六、一四六・七　徒一二・七―一〇、一六・二六　ユ詩一〇七・八、二一、三一　メ寮四五・二　ミ哀三・三九　シ伯三三・二〇　ヱ伯三三・二二　詩九・一三、八八・三　ヒ詩一〇七・六、一三、二八　モ王下二〇・四、五　詩一四七・一五、一八　セ詩三〇・二、一〇三・三　ス伯三三・二八、三〇　詩三〇・三、四九・一五、五六・一三、一〇三・四　イ詩一〇七・八、一五、三一　ロ利七・一二　詩五〇・一四、一一六・一七　來一三・一五　ハ詩九・一一、七三・二八、一一八・一七

あらき風おこりてその浪をあぐ　二六 かれら天にのぼりまた淵にくだり 患難によりてその靈魂とけさり　二七 左たかたにかたぶき醉たる者のごとく蹌蹌てなす所をしらず　二八 かくてその困苦のうちにてヱホバをよばふ ヱホバこれを患難よりたづさへいで　二九 狂風をしづめて浪をおだやかになし給へり　三〇 かれらはおのが靜かなるをよろこぶ 斯てヱホバはかれらをその望むところの湊にみちびきたまふ　三一 願くはすべての人ヱホバの惠により人の子になしたまへる奇しき事跡によりてヱホバをほめたゝへんことを　三二 かれら民の會にてこれをあがめ長老の座にてこれを讃稱ふべし　三三 ヱホバは河を野にかはらせ泉をかわける地に變らせ　三四 また豐かなる地にすめる民の惡によりてそこを鹵の地にかはらせ給ふ　三五 野を池にかはらせ乾ける地をいづみにかはらせ　三六 こゝに餓たるものを住はせたまふ されば彼らは己がすまひの邑をたて　三七 畠にたねをまき葡萄園をまうけてそのむすべる實をえたり　三八 ヱホバはかれらの甚くふえひろごれるまでに惠をあたへ その牲畜のへることをも許したまはず　三九 されどまた虐待くるしみ悲哀によりて減ゆき且うなたれたり　四〇 ヱホバもろもろの君に侮辱をそゝぎ道なき荒地にさまよはせたまふ　四一 然はあれど貧しきものを患難のうちより擧てその家族をひつじの群のごとくならしめたまふ　四二 直きものは之をみて喜びもろもろの不義はその口をふさがん　四三 すべて慧者はこれらのことに心をよせヱホバの憐憫をさとるべし

第一〇八篇

ダビデの歌なり　讃美なり

一 神よわが心はさだまれり われ謳ひまつらん 稱まつらん わが榮をもてたゝへまつらん　二 琴よ琴よさむべし われ黎明をよびさまさん　三 ヱホバよ我もろもろの民のなかにてなんぢに感謝し もろもろの國のなかにてなんぢをほめうたはん　四 そは汝のあはれみは大にして天のうへにあがり なんぢの眞實は雲にまでおよぶ　五 神よねがはくはみづからを天よりもたかくし榮光を全地のうへに擧たまへ　六 ねがはくは右の手をもて救をほどこし われらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ　七 神はその聖をもていひたまへり われ甚くよろこばん我シケムをわかちスコテの谷をはからん　八 ギレアデはわがものマナセはわが有なりエフライムも亦わが首のまもりなりユダはわが杖　九 モアブはわが足盥なりエドムにはわが履をなげんペリシテよわが故によりて聲をあげよと　一〇 誰かわれを堅固なる邑にすゝましめんや 誰かわれをみちびきてエドムにゆきしや　一一 神よなんぢはわれらを棄たまひしにあらずや 神よなんぢはわれらの軍とともに出ゆきたまはず　一二 ねがはくは助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ 人のたすけは空しければなり　一三 われらは神によりて勇しくはたらかん われらの敵をふみたまふものは神なればなり

第一〇九篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 わが讃たゝふる神よもだしたまふなかれ　二 かれらは惡の口とあざむきの口とをあけて我にむかひ いつはりの舌をもて我にかたり　三 うらみの言をもて我をかこみ ゆゑなく我をせめて鬪ふことあればなり　四 われ愛するにかれら反りてわが敵となる われたゞ祈るなり　五 かれらは惡をもてわが善にむくい恨をもてわが愛にむくいたり　六 ねがはくは彼のうへに惡人をたてその右方に敵をたゝしめたまへ　七 かれが鞫かるゝときはその罪をあらはにせられ又そのいのりは罪となり　八 その日はすくなく その職はほかの人にえられ　九 その子輩はみなしごとなり その妻はやもめとなり　一〇 その子輩はさすらひて乞丐 そのあれたる處よりいできたりて

一一 食をもとむべし　一二 彼のもてるすべてのものは債主にうばはれ　かれの勤勞は外人にかすめらるべし　一三 かれに
一三 惠をあたふる人ひとりだになく　かれの孤子をあはれむ者もなく　一四 その裔はたえその名はつぎの世にきえうす
一四 べし　一五 その父等のよこしまはヱホバのみこゝろに記され　その母のつみはきえざるべし　一六 かれらは恒にヱホ
一五 バの前におかれ　その名は地より斷るべし　一七 かゝる人はあはれみを施すことをおもはず反りて貧しきもの乏し
一六 きもの心のいためる者をころさんとして攻たりき　一八 かゝる人は詛ふことをこのむ　この故にのろひ己にいたる
一七 惠むことをたのしまず　この故にめぐみ己にとほざかれり　一九 かゝる人はころものごとくに詛をきる　この故に
一八 のろひ水のごとくにおのれの衷にいり油のごとくにおのれの骨にいれり　二〇 ねがはくは詛をおのれのきたる衣の
一九 ごとく帶のごとくなして恒にみづから纏はんことを　二一 これらの事はわが敵とわが靈魂にさからひて惡言をいふ
二〇 者とに　ヱホバのあたへたまふ報なり　二二 されど主ヱホバよなんぢの名のゆゑをもて我をかへりみたまへ　なんぢ
二一 の憐憫はいとふかし　ねがはくは我をたすけたまへ　二三 われは貧しくして乏し　わが心うちにて傷をうく　二四 わが
二二 ゆく狀はゆふ日の影のごとく　また蝗のごとく吹さらるゝなり　二五 わが膝は斷食によりてよろめき　わが肉はやせ
二三 おとろふ　二六 われは彼等にそしらるゝ者となれり　かれら我をみるときは首をふる　二七 わが神ヱホバよねがはく
二四 は我をたすけその憐憫にしたがひて我をすくひたまへ　二八 ヱホバよこれらは皆なんぢの手よりいで　汝のなしたま
二五 へることなるを彼等にしらしめたまへ　二九 かれらは詛へども汝はめぐみたまふ　かれらの立ときは恥かしめらる
二六 れどもなんぢの僕はよろこばん　三〇 わがもろもろの敵はあなどりを衣　おのが恥を外袍のごとくにまとふべし

オ 伯五・五、一八・九　ホ 尼四・五　耶一八・　チ 箴一四・一四　結　ル 來一二・一二　タ 箴六五・一四　ス 詩六八・二一　哈三　ア 太六・二六、三三
ロ 伯一八・一九　詩　二三　ヘ 伯一八・一七　詩　リ 民五・二二　ヲ 詩二二・六、七　レ 詩三五・二六、一三　ク 士七・五、六　一三　五、一〇七・三二、一〇九・三〇、一四　フ 詩一四三・五　八
ハ 箴一〇・七　三七・二八　三四・一六　ト 詩三四・一八　ヌ 詩一〇二・一一、一　四四・四　ワ 太二七・三九　カ 伯三七・七　ヨ 傳後一六・一、二・一八　ヤ 箴五三・一二　ケ 伯三八・一四一・九・一　コ 詩一四五・四、五、一〇　ヲ 太六・二六、三三
ニ 出二〇・五　ソ 詩三五・一八、一一　ネ 太二二・四四　可一一・三六　路二〇・一二・三四　徒二・三四　ナ 士五・二　ラ 詩九六・一九　ム 民二三・一九　哥前一五・二五　來一・一三　彼前三・二二　詩四五・六、七　七・一七、二一　詩　ウ 來五・六、六・二〇、　ノ 詩二・五、一二　羅　ヤ 箴五三・一二　マ 詩三五・一八、八九・　默一一・一八　ル 來一二・一二　タ 箴六五・一四　レ 詩三五・二六、一三　二・一八　ス 詩六八・二一　哈三　ク 士七・五・六　一三　五、一〇七・三二、一〇九・三〇、一四　默一五・三　ケ 伯三八・一四一・九・一　詩九二・五、一三九　エ 詩八六・五、一〇三・

三〇 われはわが口をもて大にヱホバに謝しおほくの人のなかにて讃まつらむ　三一 ヱホバはまづしきものの右にた
三一 ちてその靈魂を罪せんとする者より之をすくひたまへり

第一一〇篇

ダビデのうた

一 ヱホバわが主にのたまふ　我なんぢの仇をなんぢの承足とするまではわが右にざすべし　二 ヱ
二 ホバはなんぢのちからの杖をシオンよりつきいださしめたまはん　汝はもろもろの仇のなかに王となるべし
三 なんぢのいきほひの日になんぢの民は聖なるうるはしき衣をつけ　心よりよろこびて己をさゝげん　なんぢは朝
四 の胎よりいづる壯きものの露をもてり　四 ヱホバ誓をたてて聖意をかへさせたまふことなし　汝はメルキゼデク
五 の狀にひとしくとこしへに祭司たり　五 主はなんぢの右にありてそのいかりの日に王等をうちたまへり　六 主は
六 もろもろの國のなかにて審判をおこなひたまはん　此處にも彼處にも屍をみたしめ　寛濶なる地をすぶる首領を
七 うちたまへり　七 かれ道のほとりの川より汲てのみ斯てかうべを擧ん

第一一一篇

一 ヱホバを讃たゝへよ　我はなほきものの會あるひは公會にて心をつくしてヱホバに感謝せん
二 ヱホバのみわざは大なり　すべてその事跡をしたふものは之をかんがへ究む　三 その行ひたま
三 ふところは榮光ありまた稜威あり　その公義はとこしへに失することなし　四 ヱホバはその奇しきみわざを人の
四 こゝろに記しめたまへり　ヱホバはめぐみと憐憫とにて充たまふ　五 ヱホバは己をおそるゝものに糧をあたへた
五 まへり　またその契約をとこしへに心にとめたまはん　六 ヱホバはもろもろの國の所領をおのれの民にあたへて

七 その作爲のちからを之にあらはしたまへり　八 その手のみわざは眞實なり公義なり　九 そのもろもろの訓諭はかたし　一〇 これらは世々かぎりなく堅くたち眞實と正直とにてなれり　一一 ヱホバはそのたみに救贖をほどこし その契約をとこしへに立たまへり　一二 ヱホバの名は聖にしてあがむべきなり　一三 ヱホバをおそるゝは智慧のはじめなり これらを行ふものは皆あきらかなる聰ある人なり　一四 ヱホバの頌美はとこしへに失ることなし

第一一二篇

一 ヱホバを讃まつれ　二 ヱホバを畏れてそのもろもろの誡命をいたく喜ぶものはさいはひなり　三 かゝる人のすゑは地にてつよく直きものの類はさいはひを得ん　四 富と財とはその家にあり その公義はとこしへにうすることなし　五 直き者のために暗きなかにも光あらはる　六 彼は惠ゆたかに憐憫にみつる義しきものなり　七 惠をほどこし貸ことをなす者はさいはひなり　八 かゝる人は審判をうくるときおのが訴をさへうべし　九 又とこしへまで動かさるゝことなからん　一〇 義者はながく忘れらるゝことなかるべし　一一 彼はあしき音信によりて畏れず　一二 その心ヱホバに依賴みてさだまれり　一三 その心かたくたちて懼るゝことなく敵につきての願望をつひに見ん　一四 彼はちらして貧者にあたふ　一五 その正義はとこしへにうすることなし　一六 その角はあがめをうけて擧られん　一七 惡者はこれを見てうれへもだえ切齒しつゝ消さらん　一八 また惡きものの願望はほろぶべし

第一一三篇

一 ヱホバをほめまつれ　二 汝等ヱホバの僕よ　三 今より永遠にいたるまでヱホバの名はほめまつれ　四 日のいづる處より日のいる處までヱホバの名はほめらるべし　五 ヱホバはもろもろの國の上にありてたかく　六 その榮光は天よりもたかし　七 われらの神ヱホバにたぐふべき者はたれぞや　八 寶座をその高處にするゑ己をひくゝして天と地とをかへりみ給ふ　九 まづしきものを塵よりあげ乏しきものを糞土よりあげて　一〇 もろもろの諸侯とともにすわらせ　一一 その民のきみたちと共にすわらせたまはん　一二 又はらみなき婦に家をまもらせ　一三 おほくの子女のよろこばしき母たらしめたまふ　一四 ヱホバを讃まつれ

第一一四篇

一 イスラエルの民エジプトをいで　二 ヤコブのいへ異言の民をはなれしとき　三 ユダはヱホバの聖所となりイスラエルはヱホバの所領となれり　四 海はこれを見てにげヨルダンは後にしりぞき　五 山は牡羊のごとくをどり小山はこひつじのごとく躍れり　六 海よなんぢ何とてにぐるやヨルダンよなんぢ何とて後にしりぞくや　七 山よなにとて牡羊のごとくをどるや小山よなにとて小羊のごとく躍るや　八 主はいはを池にかはらせ石をいづみに變らせたまへり みまへヤコブの神の前にをのゝけ

第一一五篇

一 ヱホバよ榮光をわれらに歸するなかれ　二 われらに歸するなかれ　三 なんぢのあはれみと汝のまことの故によりてたゞ名にのみ歸したまへ　四 もろもろの國人はいかなればいふ　五 今かれらの神はいづくにありやと　六 然どわれらの神は天にいます　七 神はみこゝろのまゝにすべての事をおこなひ給へり　八 かれらの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり　九 その偶像は口あれどいはず目あれどみず　一〇 耳あれどきかず鼻あれどかゞず　一一 手あれどとらず脚あれどあゆまず喉より聲をいだすことなし　一二 此をつくる者とこれに依賴むものとは皆これにひとしからん　一三 イスラエルよなんぢヱホバに依賴め　一四 ヱホバはかれらの助かれらの盾なり　一五 アロンの家よなんぢらヱホバによりたのめ　一六 ヱホバはかれらの助かれらの盾なり　一七 ヱホバを畏るゝものよ

イ 默一五・三　ロ 詩一九・七　ハ 箴四〇・八　ニ 詩一・九・九　ホ 太一・二一　ヘ 路一・四九　ト 申四・六　チ 詩一二八・一　リ 詩一一九・一六、三　ヌ 詩二五・一三、三七・三　ル 太六・三三　ヲ 伯一一・一七　ワ 詩三七・二六　カ 詩一五・五　ヨ 箴一〇・七　タ 箴一・三三　レ 詩五七・七　ソ 詩六四・一〇　ツ 箴一・三三　ネ 詩五九・一〇、一一　ナ 哀後九・九　ラ 申二四・一三　ム 詩七五・一〇　ウ 路一三・二八　ヰ 詩三七・一二　ノ 詩五八・七、八　オ 箴一〇・二八、一一　ク 詩一三五・一　ヤ 但二・二〇　マ 箴五九・一九　ケ 詩九七・九、九九・二　フ 詩八・一　コ 詩八九・六

七 乏しきものを糞土よりあげて　八 もろもろの諸侯とともにすわらせ　九 又はらみなき婦に家をまもらせ おほくの子女のよろこばしき母たらしめたまふ ヱホバを讃まつれ

第一一四篇

一 イスラエルの民エジプトをいで ヤコブのいへ異言の民をはなれしとき　二 ユダはヱホバの聖所となりイスラエルはヱホバの所領となれり　三 海はこれを見てにげヨルダンは後にしりぞき　四 山は牡羊のごとくをどり小山はこひつじのごとく躍れり　五 海よなんぢ何とてにぐるやヨルダンよなんぢ何とて後にしりぞくや　六 山よなにとて牡羊のごとくをどるや小山よなにとて小羊のごとく躍るや　七 地よ主のみまへヤコブの神の前にをのゝけ　八 主はいはを池にかはらせ石をいづみに變らせたまへり

第一一五篇

一 ヱホバよ榮光をわれらに歸するなかれ われらに歸するなかれ なんぢのあはれみと汝のまことの故によりてたゞ名にのみ歸したまへ　二 もろもろの國人はいかなればいふ 今かれらの神はいづくにありやと　三 然どわれらの神は天にいます　四 神はみこゝろのまゝにすべての事をおこなひ給へり　五 かれらの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり　六 その偶像は口あれどいはず目あれどみず　七 耳あれどきかず鼻あれどかゞず　八 手あれどとらず脚あれどあゆまず喉より聲をいだすことなし　九 此をつくる者とこれに依賴むものとは皆これにひとしからん　一〇 イスラエルよなんぢヱホバに依賴め ヱホバはかれらの助かれらの盾なり　一一 ヱホバを畏るゝものよ

エ 詩一一・四、一三八・六　テ 箴前二・八　ア 伯三六・七　サ 箴前二・五　詩六八・六　メ 箴五七・一五　詩一〇・七・四　キ 出一三・三　ユ 詩八一・五　ミ 出一四・二一　詩七七・一六　シ 箴三・一三、一六　ヱ 詩二九・六、六八・一六　ヒ 哈三・八　モ 出一七・六　民二〇・一一　詩一〇七・九・一〇　耳二・一七　イ 代上一六・二六　詩一三五・六　但四・三五　ス 詩四二・三、一〇、七　ロ 申四・二八　詩一三・五・一五—一七　邸一〇・三—五　ニ 詩一一八・二—四　ホ 詩一三五・一九、二〇　箴四四・九—一一　ヘ 詩一一八・一八、二八　哈二・一八、　ト 詩三三・二〇　箴三〇・五

一二 ヱホバに依賴め ヱホバはかれらの助かれらの盾なり 一三 ヱホバは我儕をみこゝろに記たまへり われらを惠みイ
一三 スラエルの家をめぐみアロンのいへをめぐみ 一四 また小なるも大なるもヱホバをおそるゝ者をめぐみたまはん
一四 願くはヱホバなんぢらを增加へ なんぢらとなんぢらの子孫とをましくはへ給はんことを 一五 なんぢらは天地
一五 をつくりたまへるヱホバに惠まるゝ者なり 一六 天はヱホバの天なり されど地は人の子にあたへたまへり
一七 死人も幽寂ところに下れるものもヤハを讃稱ふることなし 一八 然どわれらは今より永遠にいたるまでヱホバ
一八 を讃まつらむ 汝等ヱホバをほめたゝへよ

第一一六篇

一 われヱホバを愛しむ そはわが聲とわが願望とをきゝたまへばなり 二 ヱホバみゝを我にかた
二 ぶけたまひしが故に われ世にあらんかぎりヱホバを呼まつらむ 三 死の繩われをまとひ陰府の
三 くるしみ我にのぞめり われは患難とうれへとにあへり 四 その時われヱホバの名をよべり ヱホバよ願くはわが
四 靈魂をすくひたまへと 五 ヱホバは恩惠ゆたかにして公義ましませり われらの神はあはれみ深し 六 ヱホバは
五 愚かなるものを護りたまふ われ卑くせられしがヱホバ我をすくひたまへり 七 わが靈魂よなんぢの平安にかへ
六 れ ヱホバは豐かになんぢを待ひたまへばなり 八 汝はわがたましひを死より わが目をなみだより わが足を
七 顚蹶よりたすけいだしたまひき 九 われは活るものの國にてヱホバの前にあゆまん 一〇 われ大になやめりといひ
八 つゝもなほ信じたり 一一 われ惶てしときに云らく すべての人はいつはりなりと 一二 我いかにしてその賜へるも
九 ろもろの恩惠をヱホバにむくいんや 一三 われ救のさかづきをとりてヱホバの名をよびまつらむ 一四 我すべての民
一〇 のまへにてヱホバにわが誓をつくのはん 一五 ヱホバの聖徒の死はそのみまへにて貴とし 一六 ヱホバよ誠にわれは

イ詩一二八・一、四　ロ創一・二、詩九六・五　ハ創一四・一九　ニ詩六・五、八八・一〇　ホ詩一一三・二、但二・二〇　ヘ詩一八・一　ト詩一八・四—六　チ詩一〇三・八　リ申九・一五、民九・八　ヌ耶六・一六、太一一　ル詩一三・六、一一九　ヲ詩五六・一三　ワ詩二七・一三　カ哥後四・一三　ヨ詩三一・二二　タ羅三・四　レ詩二二・二五、一一

なんぢの僕なり われはなんぢの婢女の子にして汝のしもべなり なんぢわが繩紲をときたまへり 一七 われ感謝を
一八 そなへものとして汝にさゝげん われヱホバの名をよばん 一八 我すべての民のまへにてヱホバにわがちかひを償
一九 はん 一九 エルサレムよ汝のなかにてヱホバのいへの大庭のなかにて此をつくのふべし ヱホバを讃まつれ

第一一七篇

一 もろもろの國よなんぢらヱホバを讃まつれ もろもろの民よなんぢらヱホバを稱へまつれ
二 そはわれらに賜ふその憐憫はおほいなり ヱホバの眞實はとこしへに絕ることなし ヱホバを
三 ほめまつれ

第一一八篇

一 ヱホバに感謝せよヱホバは恩惠ふかくその憐憫とこしへに絕ることなし 二 イスラエルは率い
二 ふべし その憐憫はとこしへにたゆることなしと 三 アロンの家はいざ言ふべし そのあはれみは
三 永遠にたゆることなしと 四 ヱホバを畏るゝものは率いふべし その憐憫はとこしへにたゆることなしと 五 わ
四 れ患難のなかよりヱホバをよべば ヱホバこたへて我をひろき處におきたまへり 六 ヱホバわが方にいませばわれ
五 におそれなし 人われに何をなしえんや 七 ヱホバはわれを助くるものとともに我がかたに坐す この故にわれを
六 憎むものにつきての願望をわれ見ることをえん 八 ヱホバに依賴むは人にたよるよりも勝りてよし 九 ヱホバに
七 よりたのむはもろもろの侯にたよるよりも勝りてよし 一〇 もろもろの國はわれを圍めり われヱホバの名により
八 て彼等をほろぼさん 一一 かれらは我をかこめり我をかこめりヱホバの名によりて彼等をほろぼさん 一二 かれらは
九 蜂のごとく我をかこめり かれらは荊の火のごとく消たり われはヱホバの名によりてかれらを滅さん 一三 汝われ

ソ詩七二・四　ツ詩一一九・一二五、一四三・一二　ネ詩八六・一六　ナ利七・二二　ラ詩一一六・一四　ム詩九六・八、一〇〇・　ウ詩五〇・一四、一三五・二　ヰ詩一〇〇・五　ノ代上一六・八、三四　オ詩一一五・九—一八　ク詩一二〇・一　ヤ詩一八・一九　マ詩二七・一、五六・　ケ詩五四・四　フ詩五九・一〇　コ詩四〇・四、六二・七、一三六・一　サ詩一一五・一二　來一三・六　エ詩一四六・三　テ詩八八・一七　ア申一・四四　サ傳七・六　雷一・一〇

一四 を倒さんとしていたく刺つれど ヱホバわれを助けたまへり 一四 ヱホバはわが力わが歌にしてわが救となりたま
一五 へり 一五 歡喜とすくひとの聲はたゞしきものの幕屋にあり ヱホバのみぎの手はいさましき動作をなしたまふ
一六 一七 ヱホバのみぎの手はたかくあがり ヱホバの右の手はいさましき動作をなしたまふ 一七 われは死ることなか
一八 らん 存へてヤハの事跡をいひあらはさん 一八 ヤハはいたく我をこらしたまひしかど死には付したまはざりき
一九 一九 わがために義の門をひらけ 我そのうちにいりてヤハに感謝せん 二〇 こはヱホバの門なり たゞしきものは
二〇 二一 その内にいるべし 二一 われ汝に感謝せん なんぢ我にこたへてわが救となりたまへばなり 二二 工師のすてたる
二二 二三 石はすみの首石となれり 二三 これヱホバの成たまへる事にしてわれらの目にあやしとする所なり 二四 これヱホバ
二四 二五 の設けたまへる日なり われらはこの日によろこびたのしまん 二五 ヱホバよねがはくはわれらを今すくひたまへ
二六 ヱホバよねがはくは我儕をいま榮えしめたまへ 二六 ヱホバの名によりて來るものは福ひなり われらヱホバの家
二七 よりなんぢらを祝せり 二七 ヱホバは神なり われらに光をあたへたまへり 繩をもて祭壇の角にいけにへをつなげ
二八 二八 なんぢはわが神なり我なんぢに感謝せん なんぢはわが神なり我なんぢを崇めまつらん 二九 ヱホバにかんしや
二九 せよ ヱホバは恩惠ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし

第一一九篇

一 アレフ おのが道をなほくしてヱホバの律法をあゆむ者はさいはひなり 二 ヱホバのもろもろの證詞を
二 まもり 心をつくしてヱホバを尋求むるものは福ひなり 三 かゝる人は不義をおこなはずして ヱホバの道を

イ 出一五・二 寨一二 ホ 哥後六・九・二 ヘ 寨二六・二 ト 詩二四・七 ロ 出一五・六 ハ 詩六・五 哈一・一二 ニ 詩七三・二八 チ 寨三五・八 默二一 ヌ 詩一一八・一四 ル 太二一・四二 可一一・一〇 ヲ 太二一・九、二三・三九 可一一・九 カ 出一五・二 寨二五 ワ 帖八・二六 彼前二・九 ヨ 詩一一八・一 タ 詩一二八・一 レ 約壁三・九、五・一八 ソ 伯二二・二六 約壁二・二八 ツ 詩一一九・一七 ネ 代下一五・一五

一五 徒四・一一 弗 路一九・三八 啞四・一 彼前二・四、七 ヲ 太二一・九、二三・三九 可一一・九 カ 出一五・二 寨二五 ヨ 詩一一八・一 タ 詩一二八・一 レ 約壁三・九、五・一八 ツ 詩一一九・一七 ネ 代下一五・一五

ナ 詩一一九・二一、一八 ラ 詩三七・三一 路二 ム 詩二五・四、一一九・二九、三三、六四、六 ウ 詩三四・一一 八、一〇八、一二四、一三五 ク 詩四七・九 代上二 來一一・一三 ヤ 詩四二・一、二六三 ケ 詩三九・八

四 あゆむなり 四 ヱホバよなんぢ訓諭をわれらに命じてねんごろに守らせたまふ 五 なんぢわが道をかたくたてて
五 その律法をまもらせたまはんことを 六 われ汝のもろもろの誡命にこゝろをとむるときは恥ることあらじ 七 わ
六 れ汝のたゞしき審判をまなばゞ 直き心をもてなんぢに感謝せん 八 われは律法をまもらん われを棄はてたまふ
七 なかれ

九 ベテ わかき人はなにによりてかその道をきよめん 聖言にしたがひて慎むのほかぞなき 一〇 われ心をつくして汝
八 をたづねもとめたり 願くはなんぢの誡命より迷ひいださしめ給ふなかれ 一一 われ汝にむかひて罪ををかすまじき
九 一〇 爲になんぢの言をわが心のうちに藏へたり 一二 讃べきかなヱホバよねがはくは律法をわれに教へたまへ 一三 われ
一一 一二 わが口唇をもてなんぢの口よりいでしもろもろの審判をのべつたへたり 一四 我もろもろの財貨をよろこぶごと
一三 一四 くに汝のあかしの道をよろこべり 一五 我なんぢの訓諭をおもひ汝のみちに心をとめん 一六 われは律法をよろこび
一五 一六 聖言をわすれることなからん

一七 ギメル ねがはくは汝のしもべを豐にあしらひて存へしめたまへ さらばわれ聖言をまもらん 一八 なんぢわが眼を
一七 一八 ひらき なんぢの法のうちなる奇しきことを我にみせたまへ 一九 われは世にある旅客なり 我になんぢの誡命を
一九 二〇 かくしたまふなかれ 二〇 斷るときなくなんぢの審判をしたふが故にわが靈魂はくだくるなり 二一 汝はたかぶる
二〇 二一 者をせめたまへり なんぢの誡命よりまよひいづる者はのろはる 二二 我なんぢの證詞をまもりたり 我より謗と

二三 あなどりとを取去たまへ　二三 又もろもろの侯は坐して相語りわれをそこなはんとせり　然はあれど汝のしもべは
二四 律法をふかく思へり　二四 汝のもろもろの證詞はわれをよろこばせわれをさとす者なり

○ ダレテ

二五 わが靈魂は塵につきぬ　なんぢの言にしたがひて我をいかしたまへ
二六 汝こたへを我になしたまへり　なんぢの律法をわれに教へたまへ　二七 なんぢの訓諭のみちを我にわきまへしめたまへ　われ汝のくすしき事跡をふかく思はん
二八 ひて我にちからを予へたまへ　二九 願くはいつはりの道をわれより遠ざけ　なんぢの法をもて我をめぐみたまへ
三〇 われは眞實のみちをえらび　恒になんぢのもろもろの審判をわが前におけり　三一 我なんぢの證詞をしたひて
離れず　ヱホバよねがはくは我をはづかしめ給ふなかれ　三二 われ汝のいましめの道をはしらん　その時なんぢわが
心をひろく爲たまふべし

○ ヘ

三三 ヱホバよ願くはなんぢの律法のみちを我にをしへたまへ　われ終にいたるまで之をまもらん　三四 われに
智慧をあたへ給へ　さらば我なんぢの法をまもり心をつくして之にしたがはん　三五 われに汝のいましめの道を
ふましめたまへ　われその道をたのしめばなり　三六 わが心をなんぢの證詞にかたぶかしめて　貪利にかたぶかしめ
給ふなかれ　三七 わが眼をほかにむけて虛しきことを見ざらしめ　我をなんぢの途にて活し給へ　三八 ひたすらに汝を

イ詩一一九・一五　ロ詩一一九・七七、九　ハ詩四四・二五　ニ詩一一九・四〇、　ホ詩二五・四・二七・一一、八六・一一、一一　ヘ詩一一九・一一二　ト詩一〇七・二六　チ王上四・二九　寒六・五　哥後六・一一　リ詩一一九・一二二　ヌ詩一一九・一一二　ル詩一一九・七三　歟二・六　雅一・五　ヲ詩一一九・一一六　ワ結三三・三一　可七・二一、二二　路一二・二五　提前六・一〇　レ哥後七・二五　ヨ歟二三・五　タ詩一一九・四〇　カ寒三三・一五

三九 おそるゝ汝のしもべに　聖言をかたくしたまへ　三九 わがおそるゝ謗をのぞきたまへ　そはなんぢの審判はきはめて
四〇 善し　四〇 我なんぢの訓諭をしたへり　願くはなんぢの義をもて我をいかしたまへ

○ ワウ

四一 ヱホバよ聖言にしたがひてなんぢの憐憫なんぢの拯救を我にのぞませたまへ　四二 さらば我われを謗るものに答ふることをえん　われ聖言によりたのめばなり　四三 又わが口より眞理のことばをことごとく除き給ふなかれ
四四 われなんぢの審判をのぞみたればなり　四四 われたえずいや永久になんぢの法をまもらん　四五 われなんぢの訓諭を
四五 もとめたるにより障なくしてあゆまん　四六 われまた王たちの前になんぢの證詞をかたりて恥ることあらじ　四七 我
四六 四七 わが愛するなんぢの誡命をもて己をたのしましめん　四八 われ手をわがあいする汝のいましめに擧げ　なんぢの律法
四八 をふかく思はん

○ ザイン

四九 ねがはくは汝のしもべに宣ひたる聖言をおもひいだしたまへ　汝われに之をのぞましめ給へり　五〇 なんぢ
五〇 の聖言はわれを活しゝがゆゑに　今もなほわが艱難のときの安慰なり　五一 高ぶる者おほいに我をあざわらへり　さ
五一 れど我なんぢの法をはなれざりき　五二 ヱホバよわれ汝がふるき往昔よりの審判をおもひいだして　自から慰めたり
五二 五三 なんぢの法をすつる惡者のゆゑによりて　我はげしき怒をおこしたり　五四 なんぢの律法はわが旅の家にてわが
五三 五四 歌となれり　五五 ヱホバよわれ夜間になんぢの名をおもひいだして　なんぢの法をまもれり　五六 われ汝のさとしを
五五 五六 守りしによりてこの事をえたるなり

ソ詩一一九・二〇　ツ詩一一九・二五、三　ネ詩一〇七・一　七、八八、一〇七、一　ナ詩一〇六・四、一一　ラ詩一一九・一六　ム詩一一九・一五　ウ詩一一九・七四、八　ヰ羅一五・四　ノ耶二〇・七　オ伯二三・一一　詩四四・一八、一一九・　ク耀九・三　ヤ詩六三・六

五七　○ヘテ

五七　ヱホバはわがうくべき有なり　われ汝のもろもろの言をまもらんといへり　五八　われ心をつくして汝のめぐ
五八　みを請求めたり　ねがはくは聖言にしたがひて我をあはれみたまへ　五九　我わがすべての途をおもひ　足をかへして
五九　なんぢの證詞にむけたり　六〇　我なんぢの誡命をまもるに速けくしてたゆたはざりき　六一　惡きものの繩われに纏ひ
六一　たれども　我なんぢの法をわすれざりき　六二　我なんぢのたゞしき審判のゆゑに　夜半におきてなんぢに感謝せん
六二　六三　われは汝をおそるゝ者　またなんぢの訓諭をまもるものの侶なり　六四　ヱホバよ汝のあはれみは地にみちたり
六四　願くはなんぢの律法をわれにをしへたまへ

○テテ

六五　ヱホバよなんぢ聖言にしたがひ　惠をもてその僕をあしらひたまへり　六六　われ汝のいましめを信ず　ねがは
六五　六六　くはわれに聰明と智識とををしへたまへ　六七　われ苦しまざる前にはまよひいでぬ　されど今はわれ聖言をまもる
六七　六八　なんぢは善にして善をおこなひたまふ　ねがはくは汝のおきてを我にをしへたまへ　六九　高ぶるもの虚僞をくは
六八　六九　だてゝ我にさからへり　われ心をつくしてなんぢの訓諭をまもらん　七〇　かれらの心はこえふとりて脂のごとし
七〇　七一　されど我はなんぢの法をたのしむ　七二　困苦にあひたりしは我によきことなり　此によりて我なんぢの律法をまな
七一　七二　びえたり　七三　なんぢの口の法はわがためには千々のこがね白銀にもまされり

○ヨーデ

七三　なんぢの手はわれを造りわれを形づくれり　ねがはくは智慧をあたへて我になんぢの誡命をまなばしめた

イ詩一六・五、耶一〇・一六、哀三・二四　ロ詩一一九・四一　ハ路一五・一七、一八　ニ徒一六・二五　ホ詩三三・五　ヘ詩一一九・一二、二二　ト詩一一九・七一　チ詩一〇六・一、一〇　リ詩一一九・一二、二二　ヌ伯一三・四　詩一〇　ル詩一七・一〇　箴六　ヲ詩一一九・三五　ワ詩一一九・六七　來　カ詩一九・一〇、一一　ヨ伯一〇・八　詩一〇・三、一三八・八、一三九・一四　タ詩一一九・三四、一一〇、一一、一九　レ詩三四・二　ソ詩一一九・四九、一四七　ツ來一二・一〇　ネ詩一一九・四一　ナ詩一一九・二四、四、四　ノ詩一一九・七四、一一四　ヤ詩三九・四　マ默六・一〇　ケ詩三五・七　箴一六　ク伯三〇・三〇　ヤ詩三九・四　マ默六・一〇　ケ詩三五・七　箴一六　フ詩三五・一九、三八　コ詩一四九・七八　エ詩一一九・四〇　ヨ詩一一九・二三、四　ラ詩二五・三　ム詩一一九・八六　ウ詩一一九・二三　ヰ詩七三・二六、八四　ヲ詩一一九・七、一一九・一二、二二　ル詩一一九・一二、二二　ワ詩一一九・六七　來　カ詩一九・一〇、一一　箴八・九・二七

七四　まへ　七五　なんぢを畏るゝものは我をみて喜ばん　われ聖言によりて望をいだきたればなり　七五　ヱホバよ我はなん
七四　七五　ぢの審判のたゞしく　又なんぢが眞實をもて我をくるしめたまひしを知る　七六　ねがはくは汝のしもべに宣ひたる
七六　七七　聖言にしたがひて　汝の仁慈をわが安慰となしたまへ　七七　なんぢの憐憫をわれに臨ませたまへ　さらばわれ生ん
七八　なんぢの法はわが樂しめるところなり　七八　高ぶるものに恥をかうぶらせたまへ　かれらは虚僞をもて我をくつが
七九　へしたればなり　されど我なんぢの訓諭をふかくおもはん　七九　汝をおそるゝ者となんぢの證詞をしるものとを
八〇　我にかへらしめたまへ　八〇　わがこゝろを全くして汝のおきてを守らしめたまへ　さらばわれ恥をかうぶらじ

○カフ

八一　わが靈魂はなんぢの救をしたひてたえいるばかりなり　然どわれなほ聖言によりて望をいだく　八二　なんぢ
八一　八二　何のとき我をなぐさむるやといひつゝ　我みことばを慕ふによりて眼おとろふ　八三　我は煙のなかの革囊のごとく
八三　なりぬれども　尚なんぢの律法をわすれず　八四　汝のしもべの日は幾何ありや　汝いづれのとき我をせむるものに
八四　八五　審判をおこなひたまふや　八五　たかぶる者われを害はんとて阱をほれり　かれらはなんぢの法にしたがはず　八六　な
八六　八七　んぢの誡命はみな眞實なり　かれらは虚僞をもて我をせむ　ねがはくは我をたすけたまへ　八七　かれらは地にてほと
八七　八八　んど我をほろぼせり　されど我はなんぢの訓諭をすてざりき　八八　願くはなんぢの仁慈にしたがひて我をいかした
八八　まへ　然ばわれ御口よりいづる證詞をまもらん

○ラメテ

八九 ヱホバよみことばは天にてとこしへに定まり 九〇 なんぢの眞實はよろづ世におよぶ なんぢ地をかたく立
たまへば地はつねにあり 九一 これらのものはなんぢの命令にしたがひ恒にありて今日にいたる 萬のものは皆
なんぢの僕なればなり 九二 なんぢの法わがたのしみとならざりしならば我はつひに患難のうちに滅びたるならん
九三 われ恒になんぢの訓諭をわすれじ 汝これをもて我をいかしたまへばなり 九四 我はなんぢの有なりねがはくは
我をすくひたまへ われ汝のさとしを求めたり 九五 惡きものは我をほろぼさんとして窺ひぬ われは唯なんぢの
もろもろの證詞をおもはん 九六 我もろもろの純全に限あるをみたり されど汝のいましめはいと廣し

○ メム

九七 われなんぢの法をいつくしむことといかばかりぞや われ終日これを深くおもふ 九八 なんぢの誡命はつねに
我とともにありて 我をわが仇にまさりて慧からしむ 九九 我はなんぢの證詞をふかくおもふが故に わがすべての
一〇〇 師にまさりて智慧おほし 我はなんぢの訓諭をまもるがゆゑに 老たる者にまさりて事をわきまふるなり
一〇一 われ聖言をまもらんために わが足をとゞめてもろもろのあしき途にゆかしめず 一〇二 なんぢ我ををしへたま
一〇三 ひしによりて 我なんぢの審判をはなれざりき 一〇三 みことばの滋味はわが腭にあまきことといかばかりぞや 蜜の
一〇四 わが口に甘きにまされり 一〇四 我なんぢの訓諭によりて智慧をえたり このゆゑに虚僞のすべての途をにくむ

○ ヌン

一〇五 なんぢの聖言はわがあしの燈火わが路のひかりなり 一〇六 われなんぢのたゞしき審判をまもらんことをちか
一〇七 ひ且かたくせり 一〇七 われ甚いたく苦しめり ヱホバよねがはくは聖言にしたがひて我をいかしたまへ 一〇八 ヱホバ

イ詩八九・二一 太二四 ロ哀三三・二五 ハ詩一一九・二四 ホ詩一・二 ト提後三・一五 ヌ詩一九・一〇 箴八 ヲ箴六・二三
・三四、三五 彼前 ニ太五・一八、二四・ ヘ申四・六、八 チ伯三二・七—九 ワ尼一〇・二九
一・二五 リ箴一・一五 ル詩一一九・一二八 カ詩一一九・八八

よねがはくは誠意よりするわが口の獻物をうけて なんぢの審判ををしへたまへ 一〇九 わが靈魂はつねに危險を
一一〇 をかす されど我なんぢの法をわすれず 一一〇 あしき者わがために羂をまうけたり されどわれ汝のさとしより迷ひ
一一一 いでざりき 一一一 われ汝のもろもろの證詞をとこしへにわが嗣業とせり これらの證詞はわが心をよろこばしむ
一一二 われ汝のおきてを終までとこしへに守らんとて 之にこゝろを傾けたり

○ サメク

一一三 われ二心のものをにくみ汝のおきてを愛しむ 一一四 なんぢはわが匿るべき所わが盾なり われ聖言によりて
一一五 望をいだく 一一五 惡きをなすものよ我をはなれされ われわが神のいましめを守らん 一一六 聖言にしたがひ我をさゝ
一一七 へて生存しめたまへ わが望につきて恥なからしめたまへ 一一七 われを支へたまへ さらばわれ安けかるべし われ
一一八 恒になんぢの律法にこゝろをそゝがん 一一八 すべて律法よりまよひいづるものを汝かろしめたまへり かれらの
一一九 欺詐はむなしければなり 一一九 なんぢは地のすべての惡きものを渣滓のごとく除きさりたまふ この故にわれ汝の
一二〇 あかしを愛す 一二〇 わが肉體なんぢを懼るゝによりてふるふ 我はなんぢの審判をおそる

○ アイン

一二一 われは審判と公義とをおこなふ 我をすてて虐ぐるものに委ねたまふなかれ 一二二 汝のしもべの中保となり
一二三 て福祉をえしめたまへ 高ぶるものの我をしへたぐるを容したまふなかれ 一二三 わが眼はなんぢの救となんぢのた
一二四 だしき聖言とをしたふによりておとろふ 一二四 ねがはくはなんぢの憐憫にしたがひてなんぢの僕をあしらひ 我に

ヨ何一四・二 來一三 ソ詩一四〇・五、一四 ナ詩一一九・七七、九 キ詩六・八、一三九・ オ詩一一九・二一 八二
タ詩一一九・一二、二 ツ詩一一九・九 一一九・一〇、二 ラ詩一一九・一七四 ク結二二・一八
レ伯一三・一四 一一九・一一、二 ム詩三二・七、九一・一 ヤ哈三・一六 羅五・一九・太七・二二
ネ申三三・四 ウ詩一一九・八一 ノ詩二五・二 五、九・三三、一〇 マ來七・二二 ケ詩一一九・八一、

一二五 なんぢの律法ををしへたまへ　一二五 我はなんぢの僕なり われに智慧をあたへてなんぢの證詞をしらしめたまへ
一二六 一二六 彼等はなんぢの法をすてたり　一二七 今はヱホバのはたらきたまふべき時なり　一二七 この故にわれ金よりもまじり
一二七 なき金よりもまさりて汝のいましめを愛す　一二八 この故にもろもろのことに係るなんぢの一切のさとしを正しと
一二八 おもふ 我すべてのいつはりの途をにくむ

○ ペ

一二九 汝のあかしは妙なり　一二九 かゝるが故にわが靈魂これをまもる　一三〇 聖言うちひらくれば光をはなちて 愚かなる
一三〇 ものをさとからしむ　一三一 我なんぢの誡命をしたふが故に わが口をひろくあけて喘ぎもとめたり　一三一 ねがはくは
一三一 聖名を愛するものに恒になしたまふごとく　一三二 身をかへして我をあはれみたまへ　一三三 聖言をもてわが歩履をとゝの
一三二 一三三 へ　一三四 もろもろの邪曲をわれに主たらしめたまふなかれ　一三四 われを人のしへたげより贖ひたまへ　一三五 さらばわれ訓諭を
一三四 一三五 まもらん　一三五 ねがはくは聖顏をなんぢの僕のうへにてらし　一三六 汝のおきてを我にをしへ給へ　一三六 人なんぢの法を
一三五 一三六 まもらざるによりて　一三七 わが眼のなみだ河のごとくに流る

○ ツァデー

一三七 一三七 ヱホバよなんぢは義しくなんぢの審判はなほし　一三八 汝たゞしきと此上なき眞實とをもて その證詞を命じ
一三八 給へり　一三九 わが敵なんぢの聖言をわすれたるをもて わが熱心われをほろぼせり　一四〇 なんぢの聖言はいときよし
一三九 此故になんぢの僕はこれを愛す　一四一 われは微なるものにて人にあなどらるれども 汝のさとしを忘れず　一四二 なん
一四〇 一四一 一四二

イ詩一一九・二二　ホ詩一九・七　笠一・リ詩一七・五　ワ詩一九・一二、三三　耶一二・一　但　ソ詩一二・六、一八・九・七　ツ詩一九・九、一一九・五一　約一七・一七
ロ詩一一六・一六　ヌ詩一九・一三　羅六　カ耶九・一、一四・一七　タ詩一九・七—九　ネ詩一一九・七七　ラ詩五・三、八八・一　ウ詩六三・一、六　ノ詩一四五・一八　ヤ哀五・一　ケ詩一一九・四〇　エ詩四四・一八、一一　第九・四
ハ詩一九・二〇、一一　ル路一・七四　結八・四　レ詩六九・九　約二・三　ナ詩一一九・三四、七　ム詩一一九・七四　キ詩一一九・四〇、一　オ詩一一九・一四二　マ伊前二四・一五　詩三五・一　米七・九　フ伯五・四　コ詩一一九・一四九　テ詩一一九・一三六　ア経一一九・八八
ヘ詩一一九・二〇　ヲ詩四・六　ヨ雅九・一五　尼九・九・一七　ト撒後一・六、八・七　ク路二一・三三　ヤ哀五・一　ヨ詩一一九・一〇六・四　チ詩一一九・一〇四　ヌ詩一九・一三　ヨ詩一一九・一〇六・四　ヨ詩一一九・一〇六・四

一四三 ぢの義はとこしへの義なり　一四三 汝ののりは眞理なり　一四三 われ患難と憂とにかゝれども 汝のいましめはわが喜樂なり
一四四 一四四 なんぢの證詞はとこしへに義し　一四四 ねがはくはわれに智慧をたまへ　一四五 我ながらふることを得ん

○ コフ

一四五 一四五 われ心をつくしてよばはれり　一四六 ヱホバよ我にこたへたまへ　一四六 我なんぢの律法をまもらん　一四七 われ汝をよばは
一四六 一四七 れり　一四七 ねがはくはわれを救ひ給へ　一四八 我なんぢの證詞をまもらん　一四八 われ詰朝おきいでて呼はれり　一四九 われ聖言によりて
一四七 一四八 望をいだけり　一四九 夜の更のきたらぬに先だち　一五〇 わが眼はさめて汝のみことばを深くおもふ　一五〇 ねがはくはなんぢの
一四八 一四九 仁慈にしたがひてわが聲をきゝたまへ　一五一 ヱホバよなんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ　一五一 惡をおひもと
一四九 一五〇 むるものは我にちかづけり　一五二 彼等はなんぢの法にとほくはなる　一五二 ヱホバよ汝はわれに近くましませり　一五二 なんぢの
一五〇 一五一 すべての誡命はまことなり　一五三 われ早くよりなんぢの證詞によりて汝がこれを永遠にたてたまへることを知れり

○ レシ

一五三 一五三 ねがはくはわが患難をみて我をすくひたまへ　一五四 我なんぢの法をわすれざればなり　一五四 ねがはくはわが訟を
一五四 一五五 あげつらひて我をあがなひ　一五五 聖言にしたがひて我をいかしたまへ　一五五 すくひは惡きものより遠くはなる　一五六 かれらは
一五五 一五六 なんぢの律法をもとめざればなり　一五六 ヱホバよなんぢの憐憫はおほいなり　一五七 願くはなんぢの審判にしたがひて我
一五六 一五七 をいかしたまへ　一五七 我をせむる者われに敵する者おほし　一五八 我なんぢの證詞をはなるゝことなかりき　一五八 虛僞をお
一五七 一五八 こなふもの汝のみことばを守らざるにより　一五九 我かれらを見てうれへたり　一五九 ねがはくはわが汝のさとしを愛する
一五八 一五九 こと幾何なるをかへりみたまへ　一六〇 ヱホバよなんぢの仁慈にしたがひて我をいかしたまへ　一六〇 なんぢのみことばの
一五九 一六〇

總計はまことなり　汝のたゞしき審判はとこしへにいたるまで皆たゆることなし

○ シン

一六一　もろもろの侯はゆゑなくして我をせむ　然どわが心はたゞ汝のみことばを畏る　一六二　われ人のおほいなる掠物
一六二　をえたるごとくに　汝のみことばをよろこぶ　一六三　われ虚僞をにくみ之をいみきらへども　汝ののりを愛ず　一六四　われ
一六三　汝のたゞしき審判のゆゑをもて　一日に七次なんぢを讃稱ふ　一六五　なんぢの法をあいするものには大なる平安あり
一六四　かれらには躓礙をあたふる者なし　一六六　ヱホバよ我なんぢの救をのぞみ汝のいましめをおこなへり　一六七　わが靈魂は
一六五　なんぢの證詞をまもれり　我はいたく之をあいす　一六八　われなんぢの訓諭となんぢの證詞とをまもりぬ　わがすべて
一六六　の道はみまへにあればなり

○ タウ

一六九　ヱホバよ願くはわがよぶ聲をみまへにちかづけ　聖言にしたがひて我にちゑをあたへたまへ　一七〇　わが願を
一六七　みまへにいたらせ　聖言にしたがひて我をたすけたまへ　一七一　わがくちびるは讃美をいだすべし　汝われに律法を
一六八　をしへ給へばなり　一七二　わが舌はみことばを謳ふべし　なんぢの一切のいましめは義なればなり　一七三　なんぢの手を
一六九　つねにわが助となしたまへ　われなんぢの訓諭をえらび用ゐたればなり　一七四　ヱホバよ我なんぢの救をしたへり　な
一七〇　んぢの法はわがたのしみなり　一七五　願くはわが靈魂をながらへしめたまへ　さらば汝をほめたゝへん　汝のさばきの
一七一　我をたすけんことを　一七六　われは亡はれたる羊のごとく迷ひいでぬ　なんぢの僕をたづねたまへ　われ汝のいましめ
一七二　を忘れざればなり

イ 詩前二四・一一、一　ロ 箴三・二　賽三二・一九・一七四　ハ 詩一一九・一七　ニ 箴五・二一　ホ 詩一一九・一四四　ヘ 詩一一九・七　ト 書二四・二二　箴一二・二九　路一〇・四二　チ 詩一一九・一六六、一一一　リ 詩一一九・一六、二四、四七、七七、一一一　ヌ 賽五三・六　路一五・四　彼前二・二五　ル 詩一一八・五　拿二・二

ヲ 創一〇・二　結二七・二五・一　耶四九・一　詩前二・九　箴三・七・三　レ 詩一六八、一〇九　ソ 賽二五・四　賽四九・一〇　ツ 詩九一・五　賽四九・一〇　默七・一六　ネ 詩四一・二、九七・一〇、一四五・二〇　ナ 申二八・六　箴二・八、三・六　ラ 箴二・三　詩八・二一　ム 提後五・九　ウ 出二三・一七　申一六・一六

ワ 創二五・一三　詩前カ 詩一二四・八　タ 詩一二七・一　賽二・三・一

第一二〇篇

一　われ困苦にあひてヱホバをよびしかば　我にこたへたまへり　二　ヱホバよねがはくは　虚僞の
くちびる欺詐の舌より　わが靈魂をたすけいだしたまへ　三　あざむきの舌よなんぢに何をあたへられ　何をくはへ
らるべきか　四　ますらをの利き箭と金萑花のあつき炭となり　五　わざはひなるかな我はメセクにやどり　ケダル
の幕屋のかたはらに住めり　六　わがたましひは平安をにくむものと偕にすめり　七　われは平安をねがふ　されど
我ものいふときにかれら戰爭をこのむ

第一二一篇

京まうでの歌

一　われ山にむかひて目をあぐ　わが扶助はいづこよりきたるや　二　わがたすけは天地をつくり
たまへるヱホバよりきたる　三　ヱホバはなんぢの足のうごかさるゝを容したまはず　汝をまもるものは微睡
たまふことなし　四　視よイスラエルを守りたまふものは　微睡ことともなく寢ることもなからん　五　ヱホバは汝を
まもる者なり　ヱホバはなんぢの右手をおほふ蔭なり　六　ひるは日なんぢをうたず　夜は月なんぢを傷じ　七　ヱ
ホバはなんぢを守りてもろもろの禍害をまぬかれしめ　並なんぢの靈魂をまもりたまはん　八　ヱホバは今より
とこしへにいたるまで　汝のいづると入るとをまもりたまはん

第一二二篇

ダビデがよめる京まうでの歌

一　人われにむかひて　率ヱホバのいへにゆかんといへるとき我よろこべり　二　ヱルサレムよわれら
の足はなんぢの門のうちにたてり　三　ヱルサレムよなんぢは稠くつらなりたる邑のごとく固くたてり　四　もろも

五 ろのやから即ちヤハの支派かしこに上りきたり イスラエルにむかひて證詞をなし またエホバの名にかんしやを
六 なす 彼處にさばきの寶座まうけらる これダビデの家のみくらなり 六 エルサレムのために平安をいのれ
七 エルサレムを愛するものは榮ゆべし 七 ねがはくはなんぢの石垣のうちに平安あり なんぢの諸殿のうちに福祉
八 あらんことを 八 わが兄弟のためわが侶のために われ今なんぢのなかに平安あれといはん 九 われらの神ヱホ
九 バのいへのために我なんぢの福祉をもとめん

第一二三篇

京まうでの歌

一 天にいますものよ我なんぢにむかひて目をあぐ 二 みよ僕その主の手に目をそゝぎ 婢女その
二 主母の手に目をそゝぐがごとくわれらはわが神ヱホバに目をそゝぎてそのわれを憐みたまはんことをまつ 三 ね
三 がはくはわれらを憐みたまへ ヱホバよわれらを憐みたまへ そはわれらに輕侮はみちあふれぬ 四 おもひわづら
四 ひなきものの凌辱とたかぶるものの輕侮とは われらの靈魂にみちあふれぬ

第一二四篇

ダビデのよめる京まうでの歌

一 今イスラエルはいふべし ヱホバもしわれらの方にいまさず 二 人々われらにさからひて起り
二 たつとき ヱホバもし我儕のかたに在さずりしならんには 三 かれらの怒のわれらにむかひておこりし時 われら
三 を生るまゝにて呑しならん 四 また水はわれらをおほひ 流はわれらの靈魂をうちこえ 五 高ぶる水はわれらの
五 靈魂をうちこえしならん 六 ヱホバはほむべきかな 我儕をかれらの齒にわたして嚙くらはせたまはざりき 七 我
六 儕のたましひは捕鳥者のわなをのがるゝ鳥のごとくにのがれたり 羅はやぶれてわれらはのがれたり 八 われらの
七 助は天地をつくりたまへるヱホバの名にあり

第一二五篇

詣でのうた

一 ヱホバに依賴むものはシオンの山のうごかさるゝことなくして永遠にあるがごとし 二 ヱル
二 サレムを山のかこめるごとく ヱホバも今よりとこしへにその民をかこみたまはん 三 惡の杖はたゞしきものの
三 所領にとゞまることなかるべし 斯てたゞしきものはその手を不義にのぶることあらじ 四 ヱホバよねがはくは
四 善人とこゝろ直きものとに福祉をほどこしたまへ 五 されどヱホバは轉へりておのが曲れる道にいるものを
五 惡きわざをなすものとともに去しめたまはん 平安はイスラエルのうへにあれ

第一二六篇

京まうでの歌

一 ヱホバ、シオンの俘囚をかへしたまひし時 われらは夢みるもののごとくなりき 二 そのとき
二 笑はわれらの口にみち歌はわれらの舌にみてり ヱホバかれらのために大なることを作たまへりといへる者もろ
三 もろの國のなかにありき 三 ヱホバわれらのために大なることをなしたまひたれば我儕はたのしめり 四 ヱホバ
四 よ願くは われらの俘囚をみなみの川のごとくに歸したまへ 五 淚とともに播くものは歡喜とともに穫らん
五 その人は種をたづさへ淚をながしていでゆけど 禾束をたづさへ喜びてかへりきたらん

第一二七篇

ソロモンがよめる京まうでのうた

一 ヱホバ家をたてたまふにあらずば 建るものの勤勞はむなしく ヱホバ城をまもりたまふにあら
二 ずば衛士のさめをるは徒 勞なり 三 なんぢら早くおき遲くいねて辛苦の糧をくらふはむなしきなり 斯てヱホバ

イ 出一六・三四　ロ 申一七・八　一九・八　ハ 詩五一・一八　ニ 尼二・一〇　ホ 詩二・四、一一・四、一五・三　ヘ 詩一二・一、一四　ト 詩一二九・一　チ 詩五六・一、二、五七　リ 詩九一・三　鐵六・五　ヌ 詩一二一・二
ル 創一・一　詩一三四　ヲ 鐵二・八　箴一四　ワ 鐵二・一五　カ 詩一二八・六　加六　ヨ 徒一二・九　タ 伯八・二一　レ 鐵三一・九　ソ 詩一二一・三—五　ツ 創三・一七、一九

その愛しみたまふものに寢をあたへたまふ　三 みよ子輩はヱホバのあたへたまふ嗣業にして　胎の實はその報の
たまものなり　四 年壯きころほひの子はますらをの手にある矢のごとし　五 矢のみちたる箙をもつ人はさいはひ
なり　かれら門にありて仇とものいふとき恥ることあらじ

第一二八篇

一　京まうでの歌

ヱホバをおそれその道をあゆむものは皆さいはひなり　二 そはなんぢおのが手の勤勞をくらふ
べければなり　三 なんぢの妻はいへの奥にをりておほくの實をむすぶ　四 見よヱホバをおそるゝ者はかく
葡萄の樹のごとく　汝の子輩はなんぢの筵に圓居してかんらんの若樹のごとし　五 ヱホバはシオンより惠をなんぢに賜はん　なんぢ世にあらんかぎりヱルサレムの福祉をみん
福祉をえん　六 なんぢおのが子輩の子をみるべし　平安はイスラエルの上にあり

第一二九篇

一　京まうでのうた

今イスラエルはいふべし　彼等はしばしば我をわかきときより惱めたり　二 かれらはしばしば
我をわかきときより惱めたり　されどわれに勝ことを得ざりき　三 耕すものはわが背をたがへしてその畝をながくせり　四 ヱホバは義し　あしきものの繩をたちたまへり　五 シオンをにくむ者はみな恥をおびてしりぞかせら
るべし　六 かれらは長たざるさきにかるゝ屋上の草のごとし　七 これを刈るものはその手にみたず　之をつかぬる
ものはその束ふところに盈ざるなり　八 かたはらを過るものはヱホバの惠なんぢの上にあれといはず
ヱホバの名によりてなんぢらを祝すといはず

イ 創三三・五、四八・四　ロ 申二八・四　ハ 伯五・四　ニ 詩一二七・一、一二　ホ 箴三・一〇　ヘ 結一九・一〇　ト 詩五二・八、一四四・一　チ 詩一三四・三　リ 創五〇・二三　ヌ 詩一二五・五　ル 詩一二四・一　ヲ 結二三・三　カ 得二・四　ワ 詩三七・二　ヨ 哀三・五五　タ 詩一四三・二　レ 出三四・七　ソ 王上八・四〇　ツ 詩二七・一四、三三　ネ 詩一一九・八一　ナ 詩六三・六、一一九・一四七　ム 詩八六・五、一五五・七　ウ 詩一〇三・三、四　ヤ 詩六五・一　ラ 詩一三一・三　ノ 太一八・三　オ 詩一三〇・七　ク 創四九・二四　キ 羅一二・一六　マ 徒七・四六

第一三〇篇

一　京まうでの歌

あゝヱホバよ　われふかき淵より汝をよべり　二 主よねがはくはわが聲をきゝ　汝のみゝをわが
懇求のこゑにかたぶけたまへ　三 ヤハよ主よなんぢ若もろもろの不義に目をとめたまはゞ　誰かよく立ことをえん
や　四 されどなんぢに赦あれば　人におそれかしこまれ給ふべし　五 我ヱホバを俟望む　わが靈魂はまちのぞむ
われはその聖言によりて望をいだく　わがたましひは衛士があしたを待にまさり　誠にゑじが旦をまつにまさ
りて主をまてり　七 イスラエルよヱホバによりて望をいだけ　そはヱホバにあはれみあり　またゆたかなる救贖
あり　八 ヱホバはイスラエルをそのもろもろの邪曲よりあがなひたまはん

第一三一篇

一　ダビデのよめる京まうでのうた

ヱホバよわが心おごらずわが目たかぶらず　われは大なることと我におよばぬ奇しき事とを
つとめざりき　二 われはわが靈魂をもださしめまた安からしめたり　乳をたちし嬰兒のごとくわれに恃れり
我がたましひは乳をたちし嬰兒のごとくわれに恃れり　三 イスラエルよ今よりとこしへにヱホバにたよりて望を
いだけ

第一三二篇

一　京まうでの歌

ヱホバよねがはくはダビデの爲にそのもろもろの憂をこゝろに記たまへ　二 ダビデ、ヱホバに
ちかひヤコブの全能者にうけひていふ　三 われヱホバのために處をたづねいだし　ヤコブの全能者のために居所を

もとめうるまでは　我家の幕屋にいらず　わが臥床にのぼらず　わが眼瞼をとぢしめざるべ
しと　六　われらエフラタにて之をきゝヤアルの野にて見とめたり　七　われらはその居所にゆきて　その承足のまへ
に俯伏さん　八　ヱホバよねがはくは起きて　なんぢの稜威の櫃とともになんぢの安居所にいりたまへ　九　なんぢの
祭司たちは義を衣　なんぢの聖徒はみな歡びよばふべし　一〇　なんぢの僕ダビデのために　なんぢの受膏者の面を
しりぞけたまふなかれ　一一　ヱホバ眞實をもてダビデに誓ひたまひたれば之にたがふことあらじ　曰く　われなんぢ
の身よりいでし者をなんぢの座位にざせしめん　一二　なんぢの子輩もしわがをしふる契約と證詞とをまもらば
かれらの子輩もまた永遠になんぢの座位にざすべしと　一三　ヱホバはシオンを擇びておのが居所にせんとのぞみ
たまへり　一四　曰くこれは永遠にわが安居處なり　われこゝに住ん　そはわれ之をのぞみたればなり　一五　われシオン
の糧をゆたかに祝し　くひものをもてその貧者をあかしめん　一六　われ救をもてその祭司たちに衣せん　その聖徒
はみな聲たからかによろこびよばふべし　一七　われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん　わが受膏者の
ために燈火をそなへたり　一八　われかれの仇にはぢを衣せん　されどかれはその冠弁さかゆべし

第一三三篇

ダビデがよめる京まうでの歌

一　視よ　はらから相睦てともにをるはいかに善いかに樂きかな　二　首にそゝがれたる貴きあぶら
鬚にながれ　アロンの鬚にながれ　その衣のすそにまで流れしたゝるゝがごとく　三　またヘルモンの露くだりてシ
オンの山にながるゝがごとし　そはヱホバかしこに福祉をくだし　窮なき生命をさへあたへたまへり

イ 出一〇・三五　代下六・一〇　ヘ 民一〇・三五　代下六一・一〇　一六 路一・六九 徒カ 代下六・四一　詩一一・三〇　レ 王上一一・三六、一一・一
ロ 得前一七・一二　詩一三五・一、二　ト 詩七八・六一　チ 伯二九・一四　リ 詩八九・三、四、三　ル 詩四八・一、二　ネ 出三〇・二五、三〇
ハ 代上一三・五　詩六・四一、四二　ヌ 得後七・一二、五上　ヲ 詩六八・一六　ソ 詩三五・二六、一〇
ニ 得前七・一　ホ 詩五・七、九九・五　ヌ 得後七・一二　ヲ 詩六八・一六　ナ 申四・四八　タ 結二九・二一　路一・六九
ヘ 詩一三二・一六　ヨ 何一・一二　ツ 創一三・八　来一三　ラ 利二五・二一　申二八・八　詩四二・八

第一三四篇

一　夜間ヱホバのいへにたちヱホバに事ふるもろもろの僕よ　ヱホバをほめまつれ　二　なんぢら聖所
にむかひ手をあげてヱホバをほめまつれ　三　ねがはくはヱホバ天地をつくりたまへるものシオンより汝をめぐみ
たまはんことを

第一三五篇

一　なんぢらヱホバを讃稱へよ　ヱホバの名をほめたゝへよ　二　ヱホバ
の家われらの神のいへの大庭にたつものよ　讃稱へよ　三　ヱホバは惠ふかし　なんぢらヱホバを
ほめたゝへよ　その聖名はうるはし　讃うたへ　四　そはヤハおのがためにヤコブをえらみ　イスラエルをえらみて
その珍寶となしたまへり　五　われヱホバの大なるとわれらの主のもろもろの神にまされるとをしれり　六　ヱホバ
その聖旨にかなふことを　天にも地にも海にも淵にもみなことごとく行ひ給ふなり　七　ヱホバは地のはてより霧を
のぼらせ　雨のために電光をつくり　その庫より風をいだしたまふ　八　ヱホバは人より畜類にいたるまでエジプト
の首出をうちたまへり　九　エジプトよヱホバはなんぢの中にしるしと奇しき事跡とをおくりて　パロとその僕とに
臨ませ給へり　一〇　ヱホバはおほくの國々をうち　又いきほひある王等をころし給へり　一一　アモリ人のわうシホン、
バシヤンの王オグならびにカナンの國々なり　一二　かれらの地をゆづりとし　その民イスラエルの嗣業として
あたへ給へり　一三　ヱホバよなんぢの名はとこしへに絶ることなし　ヱホバよなんぢの記念はよろづ世におよばん
一四　ヱホバはその民のために審判をなし　その僕等にかゝはれる聖意をかへたまふ可ればなり　一五　もろもろの

ム 代上九・三三　ク 詩一・二、一三　ケ 詩一九・六、八　エ 詩九五・三、九七・九　三八・二四　亞一〇　六・一〇
ウ 詩一三五・一、二　詩一三・一、一三　フ 詩一四七・一　テ 詩一一五・三　ア 耶一〇・一三、五一　メ 出七・八、九、
キ 提前二・八　四・一　ヤ 路二・三七　コ 出一九・五　申七・一・六　キ 伯三八・二二　ヱ 箴一二・七　一〇・一四・
ノ 詩一二四・八　ヤ 路二・三七　ヨ 出一九・五　申七・六、七、一〇・一五　サ 伯二八・二五、二六、ユ 出一二・二、二九　ミ 詩一三六・一五　セ 申三二・三六
オ 詩一二八・五、一三　マ 詩九二・一、三、九六　ユ 詩七八・五一、一三　シ 民二一・二四—二　ヒ 詩七八・五五、一三　ス 詩一一五・四—八
六、三四、三五　詩　モ 出三一・一五　詩一〇　一三六・一七　一二・二二

一六 くにの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり　一七 そのぐうざうは口あれどいはず目あれど見ず　一八 耳あれ
一八 どきかず またその口に氣息あることなし　一九 これを造るものと之によりたのむものとは皆これにひとしからん
一九 イスラエルの家よヱホバをほめまつれ アロンのいへよヱホバをほめまつれ　二〇 レビの家よヱホバをほめまつ
二〇 れ ヱホバを畏るゝものよヱホバをほめまつれ　二一 ヱルサレムにすみたまふヱホバは シオンにて讃まつるべき
二一 かな ヱホバをほめたゝへよ

第一三六篇

一 ヱホバに感謝せよヱホバはめぐみふかし その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　二 もろもろの神の神にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　三 もろもろの
二 主の主にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　四 たゞ獨りおほいなる奇跡なしたまふ
三 ものに感謝せよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　五 智慧をもてもろもろの天をつくりたまへる
四 ものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　六 地を水のうへに布たまへるものに感謝せよ
五 そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　七 巨大なる光をつくりたまへる者にかんしやせよ その憐憫は
六 とこしへに絶ることなければなり　八 晝をつかさどらするために日をつくりたまへる者にかんしやせよ その
七 憐憫はとこしへにたゆることなければなり　九 夜をつかさどらするために月ともろもろの星とをつくりたまへる
八 者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　一〇 もろもろの首出をうちてエジプトを責た
九 まへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　一一 イスラエルを率てエジプト人のなか
一〇 より出したまへる者にかんしやせよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　一二 臂をのばしつよき手
一一 をもて之をひきいだしたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　一三 紅海をふ
一二 たつに分たまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　一四 イスラエルをしてその
一三 中をわたらしめ給へるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　一五 パロとその軍兵とを
一四 紅海のうちに仆したまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　一六 その民をみちび
一五 きて野をすぎしめたまへる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　一七 大なる王たち
一六 を擊たまへるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　一八 名ある王等をころしたまへる
一七 者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　一九 アモリ人のわうシホンをころしたまへる者
一八 にかんしやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　二〇 バシヤンのわうオグを誅したまへるものに
一九 感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　二一 かれらの地を嗣業としてあたへたまへる者にかん
二〇 しやせよ その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　二二 その僕イスラエルにゆづりとして之をあたへたま
二一 へるものに感謝せよ そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　二三 われらが微賤かりしときに記念したま
二二 へる者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　二四 わが敵よりわれらを助けいだしたまへ
二三 る者にかんしやせよ その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　二五 すべての生るものに食物をあたへたまふ
二四 ものに感謝せよ そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり　二六 天の神にかんしやせよ その憐憫はとこし
二五 へに絶ることなければなり
二六

第一三七篇

一 われらバビロンの河のほとりにすわり シオンをおもひいでて涙をながしぬ　二 われらその

イ詩一一五・九—一一　ロ詩一三四・三　ハ詩一〇六・一、一〇　ニ代上一六・三四、四　ホ申一〇・一七　ヘ詩七二・一八　ト創一・一　チ詩三・一九　リ詩一・一四　ヌ詩一・一六　ル出一二・二九　ヲ出一二・五一、一三・三、一七　ワ出六・六
カ出一四・二一、二二　詩七八・一三　ヨ出一四・二七　タ出一三・一八、一五・二二　レ詩一三五・一〇、一一　ソ申二九・七　ツ民二一・二一　ネ民二一・二三　ナ書一二・一—八　ラ創八・一　ム詩一〇四・二七、一三五・一二　中三二・一四五・一五、三六　詩一一三・七　一四七・九

三 あたりの柳にわが琴をかけたり　三 そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめたり　我儕をくるしむる者
四 われらにおのれを歡ばせんとて　シオンのうた一つうたへといへり　四 われら外邦にありていかでヱホバの歌を
五 うたはんや　五 ヱルサレムよもし我なんぢをわすれなば　わが右の手にその巧をわすれしめたまへ　六 もしわれ
六 汝を思ひいでずもしわれヱルサレムをわがすべての歡喜の極となさずば　わが舌を腭につかしめたまへ　七 ヱホ
七 バよねがはくはヱルサレムの日に　エドムの子輩がこれを掃除け　その基までもはらひのぞけといへるを　聖意に
八 とめたまへ　八 ほろぼさるべきバビロンの女よ　なんぢがわれらに作しごとく汝にむくゆる人はさいはひなるべし
九 なんぢの嬰兒をとりて岩のうへになげうつものは福ひなるべし

第一三八篇

ダビデのうた

一 われはわが心をつくしてなんぢに感謝し　もろもろの神のまへにて　汝をほめうたはん　二 我な
二 んぢのきよき宮にむかひて伏拜み　なんぢの仁慈とまことの故によりて聖名にかんしやせん　そは汝そのみこと
三 ばをもろもろの聖名にまさりて高くしたまひたればなり　三 汝わがよばはりし日にわれにこたへ　わが靈魂に
四 ちからをあたへて雄々しからしめたまへり　四 ヱホバよ地のすべての王はなんぢに感謝せん　かれらはなんぢの
五 口のもろもろの言をきゝたればなり　五 かれらはヱホバのもろもろの途についてうたはん　ヱホバの榮光おほい
六 なればなり　六 ヱホバは高くましませども卑きものを顧みたまふ　されど亦おごれるものを遠よりしりたまへり
七 縱ひわれ患難のなかを歩むとも汝われをふたゝび活し　その手をのばしてわが仇のいかりをふせぎ　その右の手
八 われをすくひたまふべし　八 ヱホバはわれに係ることを全うしたまはん　ヱホバよなんぢの憐憫はとこしへに

イ 詩七九・一　ロ 結三・二六　ハ 耶四九・七—一三　寡四・二二 結二五・一二、阿一〇—一八　ニ 寡一三・一六、四七　ホ 耶五〇・二　五〇・一五、二九　ヘ 寡一三・一六　ト 詩一一九・四六　チ 王上八・二九、三〇　リ 詩五・七　詩二八・二　ヌ 寡四二・二二　ル 詩一〇二・一五、一二　ヲ 詩一一三・五、六　寡五七・一五　ワ 箴三・三四　カ 詩二三・三、四　彼前五・五　ヨ 詩五七・二　雅一・六

タ 伯一〇・三、八・一四　レ 詩一七・三　耶一二　ソ 王下一九・二七　ツ 太九・四　約二・二　ネ 伯三一・四　ナ 來四・一三　四・二五　ラ 伯四二・三　詩四〇・二　ウ 箴九・二—四　キ 伯二六・六　箴一五　ノ 伯二六・六、三四・二二　但二・二二　來四・一三　オ 伯一〇・八、九　一二・五　傳　ク 詩四〇・五

タゆることなし願くはなんぢの手のもろもろの事跡をすてたまふなかれ

第一三九篇

伶長にうたはしめたるダビデの歌

一 ヱホバよなんぢは我をさぐり我をしりたまへり　二 なんぢはわが坐るをも立をもしり　又とほく
三 よりわが念をわきまへたまふ　三 なんぢはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだし　わがもろもろの途をことごと
四 く知たまへり　四 そはわが舌に一言ありとも　視よヱホバよなんぢことごとく知たまふ　五 なんぢは前より後より
五 われをかこみ　わが上にその手をおき給へり　六 かゝる知識はいとくすしくして我にすぐ　また高くして及ぶこと
六 あたはず　七 我いづこにゆきてなんぢの聖靈をはなれんや　われいづこに往てなんぢの前をのがれんや　八 われ
七 天にのぼるとも汝かしこにいまし　われわが榻を陰府にまうくるとも　視よなんぢ彼處にいます　九 我あけぼの
八 の翼をかりて海のはてにすむとも　一〇 かしこにて尙なんぢの手われをみちびき　汝のみぎの手われをたもちたま
九 はん　一一 暗はかならず我をおほひ　我をかこめる光は夜とならんと我いふとも　一二 汝のみまへには暗ものをかくす
一〇 ことなく　夜もひるのごとくに輝けり　なんぢにはくらきも光もことなることなし　一三 汝はわがはらわたをつくり
一一 又わがはゝの胎にわれを組成たまひたり　一四 われなんぢに感謝す　われは畏るべく奇しくつくられたり　なんぢの
一二 事跡はことごとくくすし　わが靈魂はいとつぶさに之をしれり　一五 われ隱れたるところにてつくられ　地の底所に
一三 て妙につゞりあはされしとき　わが骨なんぢにかくるゝことなかりき　一六 わが體いまだ全からざるに　なんぢの目
一四 ははやくより之をみ　日々かたちづくられしわが百體の一だにあらざりし時に　ことごとくなんぢの册にしるされ
一五 たり　一七 神よなんぢのもろもろの思念はわれに寶きことといかばかりぞや　そのみおもひの總計はいかに多きかな

一八 我これを算へんとすれどもそのかずは沙よりもおほし われ眠さむるときも尚なんぢとともにをる 一九 神よ
二〇 なんぢはかならず悪者をころし給はん されば血をながすものよ我をはなれされ 二一 かれらはあしき企圖をもて
二二 汝にさからひて言ふ なんぢの仇はみだりに聖名をとなふるなり 二三 ヱホバよわれは汝をにくむ者をにくむに
二四 あらずや なんぢに逆ひておこりたつものを厭ふにあらずや 二五 われ甚くかれらをにくみてわが仇とす 二六 神よ
二七 ねがはくは我をさぐりてわが心をしり 我をこゝろみてわがもろもろの思念をしりたまへ 二八 ねがはくは我に
二九 よこしまなる途のありやなしやを見て われを永遠のみちに導きたまへ

第一四〇篇

伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 ヱホバよねがはくは悪人よりわれを助けいだし 我をまもりて強暴人よりのがれしめたまへ
二 かれらは心のうちに殘害をくはだて たえず戰鬪をおこす 三 かれらは蛇のごとくおのが舌を利す そのくちび
三 るのうちに蝮の毒あり セラ 四 ヱホバよ願くはわれを保ちてあしきひとの手よりのがれしめ 我をまもりてわが
四 足をつまづかせんと謀るあらぶる人よりのがれしめ給へ 五 高ぶるものはわがために絹と索とをふせ 路のほとり
五 に網をはり かつ機をまうけたり セラ 六 われヱホバにいへらく 汝はわが神なり ヱホバよねがはくはわが祈の
六 こゑをきゝ給へ 七 わが救のちからなる主の神よ なんぢはたゝかひの日にわが首をおほひたまへり 八 ヱホバ
七 よあしきひとの欲のまゝにすることをゆるしたまふなかれ そのあしき企圖をとげしめたまふなかれ おそらくは
八 彼等みづから誇らん セラ 九 われを圍むものの首はおのれのくちびるの殘害におほはるべし 一〇 もえたる炭は
九 かれらのうへにおち かれらは火になげいれられ ふかき穴になげいれられて再びおきいづることあたはざるべし

イ 箴一一・四 ロ 詩一一九・一一五 ハ 箴二五 ニ 代下一九・二 詩一一九・一五八 ホ 伯三一・六 詩二六 ヘ 詩五・八、一四三・一〇 ト 詩一四〇・四 チ 詩五六・六 リ 詩五八・四 ヌ 詩七一・四 ル 詩一四〇・一 ヲ 詩三五・七、五七・六、一一九・二一〇、一四一・九 邪一八 ワ 申三二・二七 カ 詩七・一六、九四・一〇 ヨ 詩一一・六 タ 王下八・四五 詩九・四 レ 詩七〇・五 ソ 默八・三 ツ 默五・八、八・三、四 ネ 出二九・三九 ナ 詩一三四・二 提前二・八 ラ 箴二三・六 ム 箴九・八、一九・二五、二五・一二 加六・一 ウ 哀篠一・九 ヰ 代下二〇・二二 詩二五・一五、一二三 ノ 詩一一九・一一〇、一四〇・五、一四二 オ 詩三五・八 ク 箴二六・二六

二 悪言をいふものは世にたてられず 暴ぶるものはわざはひに追及れてたふさるべし 二一 われは苦しむものの
二二 訴と まづしきものの義とを ヱホバの守りたまふを知る 二三 義者はかならず聖名にかんしやし 直者はみまへ
二三 に住ん

第一四一篇

ダビデのうた

一 ヱホバよ我なんぢを呼ふ ねがはくは速かにわれにきたりたまへ われ汝をよばふときわが聲に
二 耳をかたぶけたまへ 三 われは薫物のごとくにわが祈をみまへにさゝげ 夕のそなへものの如くにわが手をあげて
三 聖前にさゝげんことをねがふ 四 ヱホバよねがはくはわが口に門守をおきて わがくちびるの戸をまもりたまへ
四 悪事にわがこゝろを傾かしめて 邪曲をおこなふ者とともに惡きわざにあづからしめ給ふなかれ 又かれらの
五 珍饌をくらはしめたまふなかれ 五 義者われをうつとも我はこれを愛しみとし その我をせむるを頭のあぶら
六 とせん わが頭はこれを斡まず かれらが禍害にあふときもわが祈はたえじ 六 その審士はいはほの崖になげられ
七 ん かれらわがことばの甘美によりて聽ことをすべし 七 人つちを耕しうがつがごとく我儕のほねははかの口に
八 ちらさる 八 されど主ヱホバよ わが目はなほ汝にむかふ 我なんぢに依賴めり ねがはくはわが靈魂をともしき
九 まゝに捨おきたまふなかれ 九 我をまもりてかれらがわがためにまうくる羂とよこしまを行ふものの機とを
一〇 まぬかれしめたまへ 一〇 われは全くのがれん あしきものをおのれの網におちいらしめたまへ

第一四二篇

ダビデが洞にありしときよみたる敎へのうたなり 祈なり

一 われ聲をいだしてヱホバによばはり 聲をいだしてヱホバにこひもとむ 二 われはその聖前に

三 わが歎息をそゝぎいだし そのみまへにわが患難をあらはす　三 わが靈魂わがうちにきえうせんとするときも 汝
四 わがみちを識たまへり 人われをとらへんとてわがゆくみちに羂をかくせり　四 願くはわがみぎの手に目をそゝ
五 ぎて見たまへ 一人だに我をしるものなし われには避所なくまたわが靈魂をかへりみる人なし　五 ヱホバよわれ
六 汝をよばふ 我いへらく汝はわがさけどころ有生の地にてわがうべき分なりと　六 ねがはくはわが號呼にみこゝろ
七 をとめたまへ われいたく卑くせられたればなり 我をせむる者より助けいだしたまへ 彼等はわれにまさりて
強ければなり　七 願くはわがたましひを囹圄よりいだし われに聖名を感謝せしめたまへ なんぢ豐かにわれを
待ひたまふべければ 義者われをめぐらん

第一四三篇

ダビデのうた

一 ヱホバよねがはくはわが祈をきゝ わが懇求にみゝをかたぶけたまへ なんぢの眞實なんぢの
二 公義をもて我にこたへたまへ　二 汝のしもべの審判にかゝつらひたまふなかれ そはいけるもの一人だにみまへ
三 に義とせらるゝはなし　三 仇はわがたましひを迫めわが生命を地にうちすて 死てひさしく世を經たるもののごと
四 く我をくらき所にすまはせたり　四 又わがたましひはわが衷にきえうせんとし わが心はわがうちに曠さびれた
五 り　五 われはいにしへの日をおもひいで 汝のおこなひたまひし一切のことを考へ なんぢの手のみわざをおもふ
六 われ汝にむかひてわが手をのべ わがたましひは燥きおとろへたる地のごとく汝をしたへり セラ　七 ヱホバよ
速かにわれにこたへたまへ わが靈魂はおとろふ われに聖顏をかくしたまふなかれ おそらくはわれ穴にくだるも
八 のごとくならん　八 朝になんぢの仁慈をきかしめたまへ われ汝によりたのめばなり わが歩むべき途をしらせ

イ詩一四三・四　ロ詩一四〇・五　ハ詩六九・二〇　ニ詩三一・二、一一、八八　ホ詩四六・一、九一・二　ヘ詩二七・一三　ト詩一六・五、七三・一　チ詩一一六・六　リ詩一三・六、一一九　京三・二四　ヌ詩三四・二　ル詩三一・一　ヲ伯一四・三　ワ出三四・七　伯四・一七、九・二、一五　カ詩七七・三、一四二・一四、二五・四　加二・一六　ヨ詩七七・五、一〇、一一　タ詩八八・九　レ詩六三・一　ソ詩二八・一　ツ詩四六・五　ネ詩五・八　ナ詩二五・一　ラ詩二五・四、五、一三九・二四　ム尼九・二〇　ウ箴二六・一〇　キ詩一一九・二五、三七、四〇　ノ詩五四・五　オ詩一一六・一六　ク申後二二・三五　詩一八・三四　ヤ申後二二・二、三、四〇、四八　マ伯七・一七　詩八・一　ケ伯四・一九、一四・二　詩三九・五、六二・九　フ詩一〇二・一一　コ詩一八・九　箴六四　エ詩一〇四・三二　テ詩一八・三、一四　ア詩一八・一六　サ詩六九・一、二、一　キ詩五四・三　四・一四四・一一　ユ詩一二・二　メ詩三三・二、三、四〇・三　ミ詩一八・五〇　シ詩一四四・七、八

九 たまへ われわが靈魂をなんぢに擧ればなり　九 ヱホバよねがはくは我をわが仇よりたすけ出したまへ われ匿れ
一〇 んとして汝にはしりゆく　一〇 汝はわが神なり われに聖旨をおこなふことををしへたまへ 惠ふかき 聖靈をもて
一一 我をたひらかなる國にみちびきたまへ　一一 ヱホバよねがはくは聖名のために我をいかし なんぢの義によりて
一二 わがたましひを患難よりいだしたまへ　一二 又なんぢの仁慈によりてわが仇をたち 靈魂をくるしむる者をことご
とく滅したまへ そは我なんぢの僕なり

ダビデのうた

第一四四篇

一 戰することをわが手にをしへ 鬪ふことをわが指にをしへたまふ わが磐ヱホバはほむべきかな
二 ヱホバはわが仁慈わが城なり わがたかき櫓われをすくひたまふ者なり わが盾わが依賴むものなり ヱホバは
三 わが民をわれにしたがはせたまふ　三 ヱホバよ人はいかなる者なれば之をしり 人の子はいかなる者なれば之をみ
四 こゝろに記たまふや　四 人は氣息にことならず その存らふる日はすぎゆく影にひとし　五 ヱホバよねがはくは
五 なんぢの天をたれてくだり 手を山につけて煙をたゝしめたまへ　六 電光をうちいだして彼等をちらし なんぢの
六 矢をはなちてかれらを敗りたまへ　七 上より手をのべ我をすくひて 大水より外人の手よりたすけいだしたまへ
七 八 かれらの口はむなしき言をいひ その右の手はいつはりのみぎの手なり　九 神よわれ汝にむかひて新らしき歌
八 九 をうたひ 十絃の琴にあはせて汝をほめうたはん　一〇 なんぢは王たちに救をあたへ 僕ダビデをわざはひの劍より
一〇 すくひたまふ神なり　一一 ねがはくは我をすくひて外人の手よりたすけいだしたまへ かれらの口はむなしき言を

一二 いひ その右の手はいつはりのみぎの手なり　一三 われらの男子はとしわかきとき育ちたる草木のごとく われ
一三 らの女子は宮のふりにならひて刻みいだし〻隅の石のごとくならん　一四 われらの倉はみちたらひてさまざまのも
一四 のをそなへ われらの羊は野にて千萬の子をうみ　一五 われらの牡牛はよく物をおひ われらの衢にはせめいること
一五 なく亦おしいづることなく叫ぶこともなからん　一六 かゝる狀の民はさいはひなり ヱホバをおのが神とする民は
さいはひなり

第一四五篇

ダビデの讃美のうた

一 わがかみ王よわれ汝をあがめ 世々かぎりなく聖名をほめまつらん　二 われ日ごとに汝をほめ
二 世々かぎりなく聖名をほめたゝへん　三 ヱホバは大にましませば最もほむべきかな その大なることは尋ねしる
三 ことかたし　四 この代はかの代にむかひてなんぢの事跡をほめたゝへ なんぢの大能のはたらきを宣つたへん
四 五 われ汝のほまれの榮光ある稜威と なんぢの奇しきみわざとを深くおもはん　六 人はなんぢのおそるべき動作の
五 六 いきほひをかたり 我はなんぢの大なることを宣つたへん　七 かれらはなんぢの大なる惠の跡をいひいで なんぢ
七 の義をほめうたはん　八 ヱホバは惠ふかく憐情みちまた怒りたまふことおそく憐憫おほいなり　九 ヱホバはよろ
八 九 づの者にめぐみあり そのふかき憐憫はみわざの上にあまねし　一〇 ヱホバよ汝のすべての事跡はなんぢに感謝し
一〇 なんぢの聖徒はなんぢをほめん　一一 かれらは御國のえいくわうをかたり 汝のみちからを宣つたへて　一二 その大能
一一 一二 のはたらきとそのみくにの榮光あるみいづとを人の子輩にしらすべし　一三 なんぢの國はとこしへの國なり なん
一三 ぢの政治はよろづ代にたゆることなし　一四 ヱホバはすべて倒れんとする者をさゝへ かゞむものを直くたゝしめ

イ詩一二八・三　ロ申三三・二九　詩三三・一二、六五・四、一四六・五　ハ詩九六・四、一四七　ニ伯五・九、九・一〇　ホ申三八・一九　ヘ出三四・六、七　民一四・一八、詩八六・五、一五、一〇三・七　ト詩一〇〇・五　チ詩一九・一　リ詩一四六・一　ヌ詩一四六・八

たまふ　一五 よろづのものの目はなんぢを待 なんぢは時にしたがひてかれらに糧をあたへ給ふ　一六 なんぢ手をひら
一六 一七 きてもろもろの生るものの願望をあかしめたまふ　一七 ヱホバはそのすべての途にたゞしく そのすべての作爲に
一七 一八 めぐみふかし　一八 すべてヱホバをよぶもの 誠をもて之をよぶものに ヱホバは近くましますなり　一九 ヱホバは己
一九 二〇 をおそるゝものの願望をみちたらしめ その號呼をきゝて之をすくひたまふ　二〇 ヱホバはおのれを愛しむものを
二〇 二一 すべて守りたまへど 惡者をことごとく滅したまはん　二一 わが口はヱホバの頌美をかたり よろづの民は世々かぎ
二一 りなくそのきよき名をほめまつるべし

第一四六篇

一 ヱホバを讃稱へよ わがたましひよヱホバをほめたゝへよ　二 われ生るかぎりはヱホバをほめ
一 二 たゝへ わがながらふるほどはわが神をほめうたはん　三 もろもろの君によりたのむことなく 人
二 三 の子によりたのむなかれ かれらに助あることなし　四 その氣息いでゆけばかれ土にかへる その日かれがもろも
四 五 ろの企圖はほろびん　五 ヤコブの神をおのが助とし その望をおのが神ヱホバにおくものは福ひなり　六 此は
五 六 あめつちと海とそのなかなるあらゆるものを造り とこしへに眞實をまもり　七 虐げらるゝもののために審判を
六 七 おこなひ 餓ゑたるものに食物をあたへたまふ神なり ヱホバはとらはれたる人をときはなちたまふ　八 ヱホバは
七 八 めしひの目をひらき ヱホバは屈者をなほくたゝせ ヱホバは義しきものを愛しみたまふ　九 ヱホバは他邦人を
八 九 まもり 孤子と寡婦とをさゝへたまふ されど惡きものの徑はくつがへしたまふなり　一〇 ヱホバはとこしへに統御
九 一〇 めたまはん シオンよなんぢの神はよろづ代まで統御めたまはん ヱホバをほめたゝへよ

ル詩一〇四・二七　ヲ詩一三六・二五　ワ詩一〇四・二二、一四七・九　カ申四・七　ヨ約四・二四　タ詩三一・二三、九七・一〇　レ詩一〇三・一　ソ詩一〇四・三三　ツ詩一一八・八、九　賽二・二一　ネ詩一〇四・二九　傳一二・七　ム創一・一　默一四・七　ウ詩一〇三・六　ヰ詩一〇七・九　ラ詩一四四・一五　邪一七・七　ノ詩六八・六、一〇七　オ太九・三〇　約九・一〇、一四　ヤ申一〇・一八　詩七一・三二　ク詩一四五・一四、一　マ詩一四七・六　ケ出一五・一八　詩一〇・一六、一四五・一三　默一一・一五

第一四七篇

一　ヱホバをほめたゝへよ　われらの神をほめうたふは善ことなり　樂しきことなり　稱へまつるは
よろしきに適へり　二　ヱホバはエルサレムをきづき　イスラエルのさすらへる者をあつめたまふ
三　ヱホバは心のくだけたるものを醫し　その傷をつゝみたまふ　四　ヱホバはもろもろの星の數をかぞへて　すべて
これに名をあたへたまふ　五　われらの主はおほいなり　その能力もまた大なり　その智慧はきはまりなし　六　ヱホ
バは柔和なるものをさゝへ　惡きものを地にひきおとし給ふ　七　ヱホバに感謝してうたへ　琴にあはせてわれらの
神をほめうたへ　八　ヱホバは雲をもて天をおほひ　地のために雨をそなへ　もろもろの山に草をはえしめ　九　くひ
ものを獸にあたへ並なく小鴉にあたへたまふ　一〇　ヱホバは馬のちからを喜びたまはず　人の足をよみしたまはず
一一　ヱホバはおのれを畏るゝものと　おのれの憐憫をのぞむものとを好したまふ　一二　ヱルサレムよヱホバをほめ
たゝへよ　シオンよなんぢの神をほめたゝへよ　一三　ヱホバはなんぢの門の關木をかたうし　汝のうちなる子輩を
さきはひ給ひたればなり　一四　ヱホバは汝のすべての境にやはらぎをあたへ　いと嘉麥をもて　汝をあかしめたまふ
一五　ヱホバはそのいましめを地にくだしたまふ　その聖言はいとすみやかにはしる　一六　ヱホバは雪をひつじの毛の
ごとくふらせ　霜を灰のごとくにまきたまふ　一七　ヱホバは氷をつちくれのごとくに擲ちたまふ　たれかその寒冷に
たふることをえんや　一八　ヱホバ聖言をくだしてこれを消し　その風をふかしめたまへばもろもろの水はながる
一九　ヱホバはそのみことばをヤコブに示し　そのもろもろの律法とその審判とをイスラエルにしめしたまふ　二〇　ヱ
ホバはいづれの國をも如此あしらひたまひしにあらず　ヱホバのもろもろの審判をかれらはしらざるなり　ヱホバ

イ詩九二・一　ロ詩一三五・三　ハ詩三三・一　ニ詩一〇二・一六　ホ申三〇・三　ヘ詩五一・一七　賽五七・一五、六一・　一路四・一八　ト創一五・五　賽四〇・二六　チ代上一六・二五　詩四八・一、九六・四、一四五・三　リ翁一・三　ヌ賽四〇・二八　ル詩一四六・八、九　ヲ伯三八・二六、二七　詩一〇四・一三、一四　ワ伯三八・四一　詩・二六　カ伯三八・四一　太六　ヨ詩三三・一六—一八　何一・七　タ賽六〇・一七、一八　レ詩一三二・一五　ソ伯三七・一二　詩　ツ伯三七・六　ネ詩一四七・一五　伯三七・一〇　ナ申三三・二—四　詩　ラ馬四・四　ム申四・三二—三四　羅三・一、二　七六・一、七八・五、一〇三・七

ウ詩一〇三・二〇、二一　ヰ創一・一、六、七　詩三三・六、九　ノ創一・七　ク詩八九・三七、一一　耶九・九〇、九一　ケ賽四四・二三、四九　コ詩一・一三・四　サ詩三三・三　シ詩一四七・一五—一　ス詩一四五・一〇　セ詩七五・一〇　ソ詩一四九・九　タ賽四三・二〇　チ賽四三・二五　ツ詩八・一　賽一二・四　テ詩一四九・九　ト詩一・一、五五・一一　ナ弗二・一七　ニ詩三三・三　ヌ伯三五・一〇　詩一〇〇・三　賽五四・五　ネ亞九・九　太二一・五　ノ詩八一・二、一五〇・四　ハ詩三五・二七　ヒ詩三五・一〇　フ詩一〇三・一二　ヘ詩一四五・一八　ホ詩一四七・一八　マ詩一四七・一五　ミ詩三五・二七

をほめたゝへよ

第一四八篇

一　ヱホバをほめたゝへよ　もろもろの天よりヱホバをほめたゝへよ　もろもろの高所にてヱホバ
をほめたゝへよ　二　その天使よみなヱホバをほめたゝへよ　その萬軍よみなヱホバをほめたゝへ
よ　三　日よ月よヱホバをほめたゝへよ　ひかりの星よみなヱホバをほめたゝへよ　四　もろもろの天のてんよ　天の
うへなる水よ　ヱホバをほめたゝへよ　五　これらはみなヱホバの聖名をほめたゝふべし　そはヱホバ命じたまひた
ればかれらは造られたり　六　ヱホバまた此等をいやとほながに立たまひたり　又すぎうすまじき詔命をくだしたま
へり　七　龍よ　すべての淵よ　地よりヱホバをほめたゝへよ　八　火よ　霰よ　雪よ　霧よ　みことばにしたがふ狂風よ
九　もろもろの山　もろもろのをか　實をむすぶ樹　すべての香柏よ　一〇　獸　もろもろの牲畜　はふもの　翼ある鳥よ
二　地の王たち　もろもろのたみ　地の諸侯よ　地のもろもろの審士よ　一二　少きをのこ　若きをみな　老たる人　をさ
なきものよ　一三　みなヱホバの聖名をほめたゝふべし　その聖名はたかくして　類なく　そのえいくわうは地よりも
天よりもうへにあればなり　一四　ヱホバはその民のために一つの角をあげたまへり　こはそのもろもろの聖徒の
ほまれ　ヱホバにちかき民なるイスラエルの子輩のほまれなり　ヱホバを讃稱へよ

第一四九篇

一　ヱホバをほめたゝへよ　ヱホバに對ひてあたらしき歌をうたへ　聖徒のつどひにてヱホバの頌美
をうたへ　二　イスラエルはおのれを造りたまひしものをよろこび　シオンの子輩は己が王のゆゑ
によりて樂しむべし　三　かれらをどりつゝその聖名をほめたゝへ　琴鼓にてヱホバをほめうたふべし　四　ヱホバ

はおのが民をよろこび救にて柔和なるものを美しくしたまへばなり　五聖徒はえいくわうの故によりてよろこ
び その寝牀にてよろこびうたふべし　六その口に神をほむるうたあり その手にもろはの劍あり　七こはもろも
ろの國に仇をかへし もろもろの民をつみなひ　八かれらの王たちを鏈にて かれらの貴人をくろかねの械にて
いましめ　九錄したる審判をかれらに行ふべきためなり 斯るほまれはそのもろもろの聖徒にあり ヱホバをほめ
たゝへよ

第一五〇篇

一ヱホバをほめたゝへよ その聖所にて神をほめたゝへよ その能力のあらはるゝ穹蒼にて神をほめたゝへよ　二その大能のはたらきのゆゑをもて神をほめたゝへよ その秀でておほいなることの故によりてヱホバをほめたゝへよ　三ラッパの聲をもて神をほめたゝへよ 箏と琴とをもて神をほめたゝへよ　四つゞみと蹈舞とをもて神をほめたゝへよ 絃簫をもて神をほめたゝへよ　五音のたかき鐃鈸をもて神をほめたゝへよ なりひゞく鐃鈸をもて神をほめたゝへよ　六氣息あるものは皆ヤハをほめたゝふべし なんぢらヱホバをほめたゝへよ

詩篇　をはり

イ詩一三二・一六　ロ伯三五・一〇　ハ來四・一二　歌一・　ホ詩一四八・一四　ヘ詩一四五・五、六　ト申三・二四　チ詩八一・二、一四九　ヌ詩三三・二、九二　リ出一五・二〇　ル代上一五・一六、一九・二八、一六・五、一五・一、六

箴言

第一章

一ダビデの子イスラエルの王ソロモンの箴言　二こは人に智慧と訓誨とをしらしめ哲言を曉らせ
三さとき訓と公義と公平と正直とをえしめ　四拙者にさとりを與へ少者に知識と謹慎とを得させ
ん爲なり　五智慧ある者は之を聞て學にすゝみ 哲者は智略をうべし　六人これによりて箴言と譬喩と智慧ある
者の言とその隱語とを悟らん　七ヱホバを畏るゝは知識の本なり 愚なる者は智慧と訓誨とを輕んず　八我
が子よ汝の父の教をきけ 汝の母の法を棄ることなかれ　九これ汝の首の美しき冠となり 汝の項の妝飾とならん
一〇わが子よ惡者なんぢを誘ふとも從ふことなかれ　一一彼等なんぢにむかひて請ふわれらと偕にきたれ我儕まち
ぶせして人の血を流し 無辜ものを故なきに伏てねらひ　一二陰府のごとく彼等を活たるまゝにて呑み 壯健なる者
を墳に下る者のごとくになさん　一三われら各樣のたふとき財寶をえ 奪ひ取たる物をもて我儕の家に盈さん　一四汝
われらと偕に籤をひけ 我儕とともに一の金囊を持べしと云とも　一五我が子よ彼等とともに途を歩むことなかれ
汝の足を禁めてその路にゆくこと勿れ　一六そは彼らの足は惡に趨り 血を流さんとて急げばなり　一七（すべて鳥の
眼の前にて羅を張は徒勞なり）　一八彼等はおのれの血のために埋伏し おのれの命をふしてねらふ　一九凡て利を貪
る者の途はかくの如し 是その持主をして生命をうしなはしむるなり　二〇智慧外に呼はり衢に其聲をあげ
二一熱鬧しき所にさけび 城市の門の口邑の中にその言をのべていふ　二二なんぢら拙者のつたなきを愛し 嘲笑者
のあざけりを樂しみ 愚なる者の知識を惡むは幾時までぞや　二三わが督斥にしたがひて心を改めよ 視よわれ我が
靈を汝らにそゝぎ 我が言をなんぢらに示さん　二四われ呼たれども汝らこたへず 手を伸たれども顧る者なく

イ王上四・三二　ロ箴二・一、二五・一　ハ箴九・四　ニ箴九・九　ホ詩七八・二　ヘ伯二八・二八　詩一一・一〇　箴九・一〇　傳一二・一三　ト箴四・一、六・二〇　チ箴三・二二　リ耶五・二六　ヌ詩二八・一、一四三　ル詩一・二　箴四・一四　ヲ詩一一九・一〇一　ワ箴五九・七　カ箴一五・二七　提前六・二〇　ヨ箴八・一、九・三　約七・三七　タ耳二・二八　レ箴六五・二、六六　哀四・一　耶七・一三　亞七・一一

二五 かへつて我がすべての勸告をすて　我が督斥を受ざりしに由り　二六 われ汝らが禍災にあふとき之を笑ひ　汝ら
二七 の恐懼きたらんとき嘲るべし　二八 これは汝らのおそれ颶風の如くきたり　汝らのほろび颶風の如くきたり　艱難と
二九 かなしみと汝らにきたらん時なり　三〇 そのとき彼等われを呼ばん　然れどわれ應へじ　只管に我を求めん　されど
三一 我に遇じ　三二 かれら知識を憎み又ヱホバを畏るゝことを悅ばず　三三 わが勸に從はず凡て我督斥をいやしめたるに
三三 よりて　三四 己の途の果を食ひおのれの策略に飽べし　三五 拙者の違逆はおのれを殺し　愚なる者の幸福はおのれ
を滅さん

第二章

一 我が子よ汝もし我が言をうけ　我が誡命を汝のこゝろに藏め　二 斯て汝の耳を智慧に傾け　汝の
心をさとりにむけ　三 もし知識を呼求め聰明をえんと汝の聲をあげ　四 銀の如くこれを探り　秘れ
たる寶の如くこれを尋ねば　五 汝ヱホバを畏るゝことを曉り　神を知ることを得べし　六 そはヱホバは智慧をあた
へ　知識と聰明とその口より出づればなり　七 かれは義人のために聰明をたくはへ　直く行む者の盾となる
八 そは公平の途をたもち　その聖徒の途すぢを守りたまへばなり　九 斯て汝はつひに公義と公平と正直と一切の
善道を曉らん　一〇 すなはち智慧なんぢの心にいり　知識なんぢの靈魂に樂しからん　一一 謹愼なんぢを守り　聰明
なんぢをたもちて　一二 惡き途よりすくひ虛僞をかたる者より救はん　一三 彼等は直き途をはなれて幽暗き路に行み
一四 惡を行ふを樂しみ　惡者のいつはりを悅び　一五 その途はまがりその行爲は邪曲なり　一六 聰明はまた汝を妓女
より救ひ　言をもて諂ふ婦より救はん　一七 彼はわかき時の侶をすて　その神に契約せしことを忘るゝなり　一八 その

イ 詩一〇七・一一 箴一二 賽一・一五 ホ 伯二一・一四 箴一 チ 伯四・八 箴一四・ル 箴四・二一、七・一 カ 詩八四・一一 箴 レ 約三・一九、二〇 ナ 箴五・二〇
一・三〇 路七・三〇 耶一一・一一、一四 ヘ 詩一一・一九、一七三 一四、二二・八 賽 ヲ 箴三・一四 太一三 三〇・五 ソ 箴一〇・二三 耶 ラ 箴五・三、六・二四、
ロ 詩二・四 ・二二 結八・一八 ト 詩八一・一一 箴一 三・一一 耶六・一九 ワ 王上三・九、一二 雅 ヨ 申前二・九 詩六六 一一・一五 七・五
ハ 箴一〇・二四 米三・四 哀七・一 ・二五 リ 詩二五・一二、一三 ヌ 詩一一二・七 ・四四 ・九 タ 箴六・二二 ツ 羅一・三二 ム 馬二・一四、一五
ニ 伯二七・九、三五・ 三 雅四・三 ネ 詩一二五・五 ウ 箴七・二七

家は死に下りその途は陰府に趣く　一九 凡てかれにゆく者は歸らず　また生命の途に達らざるなり　二〇 聰明汝を
たもちてよき途に行ませ　義人の途を守らしめん　二一 そは義人は地にながらへをり　完全者は地に止らん
二二 されど惡者は地より亡され　悖逆者は地より拔さらるべし

第三章

一 我が子よわが法を忘るゝなかれ　汝の心にわが誡命をまもれ　二 さらば此事は汝の日をながくし
生命の年を延べ平康をなんぢに加ふべし　三 仁慈と眞實とを汝より離すことなかれ　之を汝の項に
むすび　これを汝の心の碑にしるせ　四 さらばなんぢ神と人との前に恩寵と好名とを得べし　五 汝こゝろを盡し
てヱホバに倚賴め　おのれの聰明に倚ることなかれ　六 汝すべての途にてヱホバをみとめよ　さらばなんぢの途を
直くしたまふべし　七 自から看て聰明とする勿れ　ヱホバを畏れて惡を離れよ　八 これ汝の身に良藥となり　汝の
骨に滋潤とならん　九 汝の貨財と汝がすべての產物の初生をもてヱホバをあがめよ　一〇 さらば汝の倉庫はみちて
餘り　汝の酒醡は新しき酒にて溢れん　一一 我子よ汝ヱホバの懲治をかろんずる勿れ　その譴責を受くるを厭ふこと
勿れ　一二 それヱホバはその愛する者をいましめたまふ　あたかも父のその愛する子を譴むるが如し　一三 智慧
を求め得る人および聰明をうる人は福なり　一四 そは智慧を獲るは銀を獲るに愈り　その利は精金よりも善ければ
なり　一五 智慧は眞珠よりも貴し　汝の凡ての財寶も之と比ぶるに足らず　一六 其右の手には長壽あり　その左の手
には富と尊貴とあり　一七 その途は樂しき途なり　その徑すぢは悉く平康し　一八 これは執る者には生命の樹なり
之を持ものは福なり　一九 ヱホバ智慧をもて地をさだめ　聰明をもて天を置たまへり　二〇 その知識によりて海洋は

ヒ 伯二八・一三 箴二・四、八・一一、一九、 ス 太一・二九、三〇 ヌ 箴八・三四、三五
四、八・一一、一九、 イ 創二・九、三・二二 ヒ 伯二八・一三 箴二・
一六・一六 ロ 詩一〇四・二四、 四、八・一一、一九、
一三六・五 箴八・ 一六・一六
モ 太一三・四四 一三六・五 箴八・
セ 箴八・一八 提前四 二七 耶一〇・一二、 五一・一五
ハ 創一・九

二一 わきいで 雲は露をそゝぐなり　二二 我が子よこれらを汝の眼より離す勿れ 聰明と謹慎とを守れ　二三 然ばこれは汝
二三 の靈魂の生命となり 汝の項の妝飾とならん　二四 かくて 汝やすらかに 汝の途をゆかん 又なんぢの足つまづかじ
二五 なんぢ臥とき怖るゝところあらず 臥ときは酣く睡らん　二六 なんぢ猝然なる恐懼をおそれず 惡者の滅亡きた
る時も之を怖るまじ　二七 そはヱホバは 汝の倚賴むものにして 汝の足を守りてとらはれしめたまはざるべければ
なり　二八 汝の手善をなす力あらば之を爲すべき者に爲さゞること勿れ　二九 もし汝に物あらば 汝の鄰に向ひ
去て復來れ明日われ汝に予へんといふなかれ　二九 汝の鄰なんぢの傍に安らかに居らば之にむかひて惡を謀ること
三〇 勿れ　三〇 人もし汝に惡を爲さずば故なく之と爭ふこと勿れ　三一 暴虐人を美むことなく そのすべての途を好と
三二 することなかれ　三二 そは邪曲なる者はヱホバに惡まるれども 義者はその親き者とせらるべし　三三 ヱホ
三四 バの呪詛は惡者の家にあり されど 義者の室はかれにめぐまる　三四 彼は嘲笑者をあざけり 謙る者に恩惠をあた
三五 へたまふ　三五 智者は尊榮をえ 愚なる者は羞辱之をとりさるべし

第四章

一 小子等よ父の訓をきけ 聰明を知んために耳をかたむけよ　二 われ善教を汝らにさづく わが律を
棄つることなかれ　三 われも我が父には子にして 我が母の目には獨の愛子なりき　四 父われを教
へていへらく我が言を汝の心にとゞめ わが誡命をまもれ 然らば生べし　五 智慧をえ聰明をえよ これを忘るゝ
なかれ また我が口の言に身をそむくるなかれ　六 智慧をすつることなかれ彼なんぢを守らん 彼を愛せよ彼なん
ぢを保たん　七 智慧は第一なるものなり 智慧をえよ 凡て 汝の得たる物をもて聰明をえよ　八 彼を尊べ さらば

イ申三三・二八 伯 ・九 三六・二八　ロ箴一・九　ハ詩三七・二四、九一・一一、一二 箴一〇　ニ利二六・六 詩三・五、四・八　ホ詩九一・五、一一二・七　ヘ羅一三・七 加六・一〇　ト利一・九・一三 申二四・一五　チ羅一二・一八　リ詩三七・一、七三・三 箴二四・一　ヌ詩二五・一四 利二六・一四 詩三七・二二 亞五・四　ヲ詩一・三 箴二・一　ワ雅四・六 彼前五・五　カ詩三四・一一 箴一・八　ヨ代上二九・一　タ代上二八・九 弟六　レ箴七・二　ソ箴二・二、三　ツ箴後二・一〇　ネ太一三・四四 路 一〇・四二　ナ 彼前二・三〇　ラ箴一・九、三・二二　ム箴三・二　ウ詩一八・三六　ヰ詩九一・一一、一二

九 彼なんぢを高く擧げん もし彼を懷かば彼汝を尊榮からしめん　九 かれ美しき飾を汝の首に置き 榮の冠弁を汝に
一〇 予へん　一〇 我が子よきけ 我が言を納れよ さらば汝の生命の年おほからん　一一 われ智慧の道を汝に教へ義しき
一二 徑筋に汝を導けり　一二 歩くとき汝の歩は艱まず 趨るときも蹶かじ　一三 堅く訓誨を執りて離すこと勿れ これを守
一四 れ これは汝の生命なり　一四 邪曲なる者の途に入ることなかれ 惡者の路をあゆむこと勿れ　一五 これを避よ 過る
一六 こと勿れ 離れて去れ　一六 そは彼等は惡を爲さゞれば睡らず 人を蹶かせざればいねず　一七 不義のパンを食ひ暴虐
一八 の酒を飲めばなり　一八 義者の途は旭光のごとし いよいよ光輝をまして晝の正午にいたる　一九 惡者の途は幽冥の
二〇 ごとし 彼らはその躓くものゝなになるを知ざるなり　二〇 わが子よ我が言をきけ 我が語るところに汝の耳を
二一 傾けよ　二一 之を汝の目より離すこと勿れ 汝の心のうちに守れ　二二 是は之を得るものの生命にしてまたその全體
二三 の良藥なり　二三 すべての操守べき物よりもまさりて汝の心を守れ そは生命の流これより出ればなり　二四 虛僞の口
二五 を汝より棄さり 惡き口唇を汝より遠くはなせ　二五 汝の目は正く視 汝の眼瞼は汝の前を眞直に視るべし　二六 汝の
二七 足の徑をかんがへはかり 汝のすべての道を直くせよ　二七 右にも左にも偏ること勿れ汝の足を惡より離れしめよ

第五章

一 我が子よわが智慧をきけ 汝の耳をわが聰明に傾け　二 しかしてなんぢ謹慎を守り 汝の口唇に知
識を保つべし　三 娼妓の口唇は蜜を滴らし 其口は脂よりも滑なり　四 されど其終は茵蔯の如くに
苦く 兩刃の劍の如くに利し　五 その足は死に下り その歩は陰府に趣く　六 彼は生命の途に入らず 其徑はさだか
ならねども 自ら之を知ざるなり　七 小子等よいま我にきけ 我が口の言を棄つる勿れ　八 汝の途を彼より
遠く離れしめよ 其家の門に近づくことなかれ　九 恐くは汝の榮を他人にわたし 汝の年を憐憫なき者にわたすに

ノ詩一・一 箴一・一〇、一五　オ詩三六・四 箴五七　ク太五・一四、四五 鄰　ヤ詩後二三・四 マ詩前二・九 伯一八・五、六 箴五九・九、ケ箴三・二一　一〇 耶二三・一二　フ箴二・一　コ箴三・八、一二・一八　エ申五・三二、二八・一四 箴一・七　テ箴一・一六 羅一二　ア馬二・七　サ箴二・一六、六・二四　キ詩五五・二二　ユ 傳七・二六　メ 來四・一二　ミ箴七・二七

一〇 いたらん　一〇 恐くは他人なんぢの資財によりて盈され 汝の勞苦は他人の家にあらん　一一 終にいたりて 汝の身な
一二 んぢの體亡ぶる時 なんぢ泣悲みていはん　一二 われ教をいとひ 心に譴責をかろんじ　一三 我が師の聲をきかず
一三 我を教ふる者に耳を傾けず　一四 あつまりの中會衆のうちにてほとんど 諸〻の惡に陷れりと　一五 汝おのれの
一四 水溜より水を飲み おのれの泉より流るゝ水をのめ　一六 汝の流をほかに溢れしめ 汝の河の水を衢に流れしむべけ
一五 んや　一七 これを自己に歸せしめ 他人をして 汝と偕に之に與らしむること勿れ　一八 汝の泉に福祉を受しめ 汝の
一六 少き時の妻を樂しめ　一九 彼は愛しき麀のごとく 美しき鹿の如しその乳房をもて 常にたれりとしその愛をもて
一七 常によろこべ　二〇 我子よ何なればあそびめをたのしみ 淫婦の 胸を懷くや　二一 それ人の途はヱホバの目の前に
一八 あり 彼はすべて其行爲を量りたまふ　二二 惡者はおのれの愆にとらへられ その罪の繩に繫る　二三 彼は訓誨なき
一九 によりて死 その多くの愚なることに由りて亡ぶべし

第六章

一 我子よ 汝もし朋友のために保証をなし 他人のために汝の手を拍ば　二 汝その口の言によりて
二 救へ すなはち往て自ら謙だり只管なんぢの友に求め　三 我子よ汝友の手に陷りしならば斯して自ら
三 むること勿れ　四 かりうどの手より鹿ののがるゝごとく 鳥とる者の手より鳥ののがるゝ如くしてみづからを救
四 へ　五 惰者よ蟻にゆき其爲すところを觀て智慧をえよ　六 蟻は首領なく有司なく君王なけれども　七 夏の
五 うちに食をそなへ 收穫のときに糧を斂む　八 惰者よ 汝いづれの時まで臥息むや いづれの時まで睡りて起ざ
六 るや　九 しばらく臥ししばらく睡り 手を叉きてまた片時やすむ　一〇 さらば 汝の貧窮は盜人の如くきたり 汝の

イ 箴一・二九　ロ 箴一・二五、一二・一　ハ 馬二・二四　ニ 歌二・九、四・五、七・三　ホ 箴二・一六、七・五　ヘ 代下一六・九　伯 三一・四、三四・二一　箴一五・三　耶一六　ト 詩九・一五　チ 伯四・二一、三六・一九　何七・二　來四・一三　リ 箴一・一、一五、一七　ヌ 詩一三二・四　ル 伯一二・七　一三　ヲ 箴二四・三三、三四　ワ 箴一〇・四、一三・四、二〇・四

一一 缺乏は兵士の如くきたるべし　一二 邪曲なる人あしき人は虛僞の 言をもて事を行ふ　一三 彼は眼をもて眴せし 脚を
一四 もてしらせ 指をもて示す　一四 その心に虛僞をたもち 常に惡をはかり 爭端を起す　一五 この故にその禍害にはか
一五 に來り 援助なくして立刻に敗らるべし　一六 ヱホバの憎みたまふもの六あり 否その心に嫌ひたまふもの七あり
一六 即ち驕る目 いつはりをいふ舌 つみなき人の血を流す手　一八 惡き謀 計をめぐらす心 すみやかに惡に趨る足
一七 詐僞をのぶる證人 および兄弟のうちに爭端をおこす者なり　二〇 我子よ汝の父の誡命を守り 汝の母の法
一八 を棄る勿れ　二一 常にこれを汝の心にむすび 之をなんぢの頸に佩よ　二二 これは汝のゆくとき汝をみちびき 汝の寢
一九 るとき汝をまもり 汝の寤るとき汝とかたらん　二三 それ誡命は燈火なり 法は光なり 教訓の懲治は生命の道なり
二〇 二四 これは汝をまもりて惡き婦よりまぬかれしめ 汝をたもちて淫婦の舌の諂媚にまどはされざらしめん　二五 その
二一 艶美を心に戀ふことなかれ その眼瞼に捕へらるゝこと勿れ　二六 それ娼妓のために人はたゞ僅に一撮の糧をの
二二 こすのみにいたる 又淫婦は人の貴き生命を求むるなり　二七 人は火を懷に抱きてその衣を焚れざらんや　二八 人は
二三 熱火を踏て其足を焚れざらんや　二九 その隣の妻と姦淫をおこなふ者もかくあるべし 凡て之に捫る者は罪なしと
二四 せられず　三〇 竊む者もし飢しときに其飢を充さん爲にぬすめるならば人これを藐ぜじ　三一 もし捕へられなばその
二五 七倍を償ひ 其家の所有をことごとく出さゞるべからず　三二 婦と姦淫をおこなふ者は智慧なきなり 之を行ふ者は
二六 おのれの靈魂を亡し　三三 傷と凌辱とをうけて其恥を雪ぐこと能はず　三四 妒忌その夫をして忿怒をもやさしむれば
二七 その怨を報ゆるときかならず寛さじ　三五 いかなる贖物をも顧みず 衆多の饋物をなすともやはらがざるべし

カ 伯一五・一二 詩三五・一九 箴一〇　ヨ 米二・一　タ 箴六・一九　レ 代下三六・一六　ソ 耶一九・一一　ツ 詩一八・二七、一〇・五　ネ 詩一二〇・二、三　ナ 賽一・二五　ラ 創六・五　ム 賽五九・七　羅三・一五　ウ 詩二七・一二　箴　ク 箴三・二三、二四　ヤ 箴六・一九　ノ 箴一・八　弗六・一　オ 箴三・三、七・三　ケ 箴二・一六、五・三、七・五　マ 詩一九・八、一一・九　ヨ 一〇五　フ 太五・二八　コ 箴二九・三　エ 創三九・一四　テ 結一三・一八　ア 出二二・一、四　サ 箴七・七

第七章

一 我子よわが言をまもり我が誡命を汝の心にたくはへよ　二 我が誡命をまもりて生命をえよ我法を
守ること汝の眸子を守るが如くせよ　三 これを汝の指にむすび これを汝の心の碑に銘せ　四 なん
ぢ智慧にむかひて汝はわが姉妹なりといひ 明理にむかひて汝はわが友なりといへ　五 さらば汝をまもりて淫婦
にまよはざらしめ 言をもて媚る娼妓にとほざからしめん　六 われ我室の牖により 櫺子よりのぞきて　七 拙き者の
うち幼弱者のうちに 一人の智慧なき者あるを觀たり　八 彼衢をすぎ婦の門にちかづき其家の路にゆき　九 黄昏
に半宵に夜半に黑暗の中にあるけり　一〇 時に娼妓の衣を着たる狡らなる婦かれにあふ　一一 この婦は譁しくして
つゝしみなく 其足は家に止らず　一二 あるときは衢にあり 或時はひろばにあり すみずみにたちて人をうかゞふ
一三 この婦かれをひきて接吻し 恥しらぬ面をもていひけるは　一四 われ酬恩祭を獻げ今日すでにわが誓願を償せり
一五 これによりて我なんぢを迎へんとていで 汝の面をたづねて汝に逢へり　一六 わが榻には美しき褥およびエジプ
トの文桒をしき　一七 沒藥 蘆薈 桂皮をもて我が榻にそゝげり　一八 來れわれら詰朝まで情をつくし愛をかよはして
相なぐさめん　一九 そは夫は家にあらず遠く旅立して　二〇 手に金囊をとれり 望月ならでは家に歸らじと　二一 多の
婉 言をもて惑し 口唇の諂媚をもて誘へば　二二 わかき人たゞちにこれに隨へり あだかも牛の宰地にゆくが
如く 愚なる者の桎梏をかけらるゝ爲にゆくが如し　二三 遂には矢その肝を刺さん 鳥の速かに羅にいりてその生命
を喪ふに至るを知ざるがごとし　二四 小子等よいま我にきけ 我が口の言に耳を傾けよ　二五 なんぢの心を淫婦
の道にかたむくること勿れ またこれが徑に迷ふこと勿れ　二六 そは彼は多の人を傷つけて仆せり 彼に殺されたる
者ぞ多かる　二七 その家は陰府の途にして死の室に下りゆく

イ 箴二・一　ロ 利一八・五　四 箴五五・三　ハ 申三二・一〇　ホ 箴二・一六、五・三、六・二四　ヘ 箴六・三二、九・四、　ト 伯二四・一五　チ 箴九・一三　リ 提前五・一三　ヌ 箴一九・九　ル 箴五・三　ヲ 詩一二・二　ワ 傳九・一二　カ 尼一三・二六　ヨ 箴二・一八、五・五、九・一八　タ 箴一・二〇、九・三　レ 箴二二・二〇　ソ 伯二八・一五—二三　詩一九・一〇、一一九・一二七　箴ツ 箴一六・六、三・一四、一五、四・ネ 箴六・一七　ナ 箴四・二四　ラ 傳七・一九　ム 伯二・二一　詩一三　ウ 提前二・三〇　詩 牛雅一・五　ノ 箴三・一六　太六・　ク 箴三・一九　約一・一　す 箴三・一四、八・一〇　ヤ 詩二・六　マ 伯一五・七、八

第八章

一 智慧は呼はらざるか 聰明は聲を出さゞるか　二 彼は路のほとりの高處また街衢のなかに立ち
三 邑のもろもろの門 邑の口および門々の入口にて呼はりいふ　四 人々よ われ汝をよび 我が聲を
五 拙き者よなんぢら聰明に明かなれ 愚なる者よ汝ら明かなる心を得よ　六 汝きけ われ
もて人の子等をよぶ
善事をかたらん わが口唇をひらきて正 事をいださん　七 我が口は眞實を述べ わが口唇はあしき事を憎むなり
八 わが口の言はみな義し そのうちに虛僞と奸邪とあることなし　九 是みな智者の明かにするところ 知識をうる
者の正とするところなり　一〇 なんぢら銀をうくるよりは我が教をうけよ 精金よりもむしろ知識をえよ　一一 それ
智慧は眞珠に愈れり 凡の寶も之に比ぶるに足らず　一二 われ智慧は聰明をすみかとし 知識と謹慎にいたる
一三 ヱホバを畏るゝとは惡を憎むことなり 我は傲慢と驕奢 惡道と虛僞の口とを憎む　一四 謀略と聰明は我にあり
我は了知なり 我は能力あり　一五 我に由て王者は政をなし 君たる者は義しき律をたて　一六 我によりて主たる者お
よび牧伯たちなど凡て地の審判人は世ををさむ　一七 われを愛する者は我これを愛す 我を切に求むるものは我に
遇ん　一八 富と榮とは我にあり 貴き寶と公義とも亦然り　一九 わが果は金よりも精金よりも愈り わが利は精銀より
二〇 もよし 我は義しき道にあゆみ 公平なる路徑のなかを行む　二一 これ我を愛する者に貨財をえさせ 又その庫を
充しめん爲なり　二二 ヱホバいにしへ其御わざをなしそめたまへる前に その道の始として我をつくりたまひき
二三 永遠より元始より地の有ざりし前より我は立られ　二四 いまだ海洋あらずいまだ大なるみづの泉あらざりし
とき我すでに生れ　二五 山いまださだめられず 陵いまだ有ざりし前に我すでに生れたり　二六 即ち神いまだ地をも
野をも地の塵の根元をも造り給はざりし時なり　二七 かれ天をつくり 海の面に穹蒼を張たまひしとき我かしこに

二八 在りき 二九 彼うへに雲氣をかたく定め 淵の泉をつよくならしめ 二九 海にその限界をたて 水をしてその岸を踰え
三〇 ざらしめ また地の基を定めたまへるとき 三〇 我はその傍にありて創造者となり 日々に欣び 恒にその前に樂み
三一 その地にて樂み 又世の人を喜べり 三二 されば小子等よ いま我にきけ わが道をまもる者は福ひなり
三三 教をきゝて智慧をえよ 之を棄ることなかれ 三四 凡そ我にきゝ 日々わが門の傍にまち わが戸口の柱のわき
三五 にたつ人は福ひなり 三五 そは我を得る者は生命をえ ヱホバより恩寵を獲ればなり 三六 我を失ふものは自己の生命
三六 を害ふ すべて我を惡むものは死を愛するなり

第九章

一 智慧はその家を建て その七の柱を砍成し 二 その畜を宰り その酒を混和せ その筵をそなへ
三 その婢女をつかはして邑の高處に呼はりいはしむ 四 拙者よこゝに來れと また智慧なき者
五 にいふ 五 汝等きたりて我が糧を食ひ わがまぜあはせたる酒をのみ 六 拙劣をすてて生命をえ 聰明のみちを行
七 め 七 嘲笑者をいましむる者は恥を己にえ 惡人を責むる者は疵を己にえん 八 嘲笑者を責むることなかれ
恐くは彼なんぢを惡まん 智慧ある者をせめよ 彼なんぢを愛せん 九 智慧ある者に授けよ 彼はますます智慧をえ
十 義者を教へよ 彼は知識に進まん 十 ヱホバを畏るゝことは智慧の根本なり 聖者を知るは聰明なり 十一 我
十二 によりて汝の日は多くせられ 汝のいのちの年は增べし 十二 汝もし智慧あらば自己のために智慧あるなり 汝もし
十三 嘲らば汝ひとり之を負ん 十三 愚なる婦は嘩しく且つたなくして何事をも知らず 十四 その家の門に坐し 邑の
十四 たかき處にある座にすわり 十五 道をますぐに過る往來の人を招きていふ 十六 拙者よこゝに來れと また智慧な

イ 創一・九、一〇 伯二太三・一七 西一・ト 箴三・一三、一八 ル 太二二・三一—一四 ネ 太一一・二五 ム 伯三五・六、七 箴一八・一二 詩一二・一四 彼前四・八 ヒ 箴一七・九 哥前五二・七 箴一八・一一 提前六・一七
三八・一〇、一一 詩一三 チ 箴一一・二 ヲ 箴九・五、二三・三〇 歌五・一 ナ 伯二八・二八 詩一一・一〇 箴一 ウ 箴七・一一 イ 詩一五・三 ト 箴一七・一二 詩三七・二二
三三・七、一〇四・九 リ 箴二〇・二 ワ 羅一〇・一五 約六・二七 一一・一〇 箴一六・一六 牛 箴九・三 ロ 傳五・三
耶五・二二 ヌ 太一六・一八 弗二 カ 箴九・一四 ヨ 箴八・一一 タ 箴六・三二、九・一六 ソ 太七・六 ツ 詩一四一・五 ラ 箴三・二、一六、一〇 ハ 雅三・二
ロ 伯三八・四 ル 約一・二、一八 ヘ 路一二・一九、二一・二八 ヲ 太一八・二八、二一 使前一二・五 ル 路一二・一八 ヘ 路一二・一九、二一・五 ヨ 詩二二・四 箴二八、一八 ス 伯三一・二四 詩二一・二四、二六
ハ 約一・一二、一八 ヘ 路一二・一九、二一・五 ヨ 箴一二・二四、一九 ア 箴一〇・一一 帖七・八 ヌ 詩二二・四 箴二八、一八 寒三二・一五、一六 ヤ 詩一〇七・四二 箴一〇・六 ス 伯三一・二四 詩二一・二六

オ 箴二〇・一七 ク 箴二・二八、七・二七 ヤ 箴一五・二〇、一七 ケ 但四・二七 フ 詩一〇・一四、三四・一三、二九・三、一五 マ 詩四九・六 箴一一・四 路一二・一九、二一・五 エ 箴一三・四、二一・五 テ 箴一二・一四、一七、二一、一九・二六 ア 箴一〇・一一 帖七・八 サ 詩九・五、六、一一、一二 キ 箴一〇・一〇 傳八・一〇 ユ 詩二二・四 箴二八・一八 寒三二・一五、一六 メ 箴六・一三 ミ 箴一〇・八 シ 詩三七・三〇 箴一三・一四、一八・四 セ 箴一八・七、二一・ ヒ 箴一七・九 哥前四・八 モ 箴二六・三 ロ 傳五・三 ハ 雅三・二 ス 伯三一・二四 詩二三 ニ 詩三七・二二

き人にむかひては之にいふ 一七 竊みたる水は甘く 密かに食ふ糧は美味ありと 一八 彼處にある者は死し者 その客
一八 は陰府のふかき處にあることを是等の人は知らざるなり

第一〇章

一 ソロモンの箴言 されど正義は救ひて死を脫かれしむ 二 智慧ある子は父を欣ばす 愚なる子は母の憂なり 二 不義の財は益なし
三 ヱホバは 義者の靈魂を饑ゑしめず 惡者にその欲する
四 手をものうくして動くものは貧くなり 勤めはたらく者の手は富を得 五 夏のうちに斂む
ところを得ざらしむ
る者は智き子なり 收穫の時にねむる者は辱をきたす子なり 六 義者の首には福祉きたり 惡者の口は强暴を
七 掩ふ 七 義者の名は讃られ 惡者の名は腐る 八 心の智き者は誡命を受く されど口の頑愚なる者は滅さる 九 直
くあゆむ者はそのあゆむこと安し されどその途を曲ぐる者は知らるべし 十 眼をもて眴せする者は憂をおこし
十一 口の頑愚なる者は亡さる 十一 義者の口は生命の泉なり 惡者の口は强暴を掩ふ 十二 怨恨は爭端をおこし 愛は
十二 すべての愆を掩ふ 十三 哲者のくちびるには智慧あり 智慧なき者の背のためには鞭あり 十四 智慧ある者は知識を
十四 たくはふ 十五 愚かなる者の口はいまにも滅亡をきたらす 十五 富者の資財はその堅き城なり 貧者のともしきはその
十六 ほろびなり 十六 義者の動作は生命にいたり 惡者の利得は罪にいたる 十七 教をまもる者は生命の道にあり 懲戒
十七 をすつる者はあやまりにおちいる 十八 怨をかくす者には虛僞のくちびるあり 誹謗をいだす者は愚かなる者なり
十八 十九 言おほければ罪なきことあたはず その口唇を禁むるものは智慧あり 二〇 義者の舌は精銀のごとし 惡者
十九 二〇 の心は價すくなし 二一 義者の口唇はおほくの人をやしなひ 愚なる者は智慧なきに由て死ぬ 二二 ヱホバの祝福は

二三 人を富す　人の勞工はこれに加ふるところなし　二四 人にとりても是のごとし　二五 のすぐるとき惡者は無に歸せん　二六 齒に於るが如く煙の目に於るが如し　二七 義者の望は喜悅にいたり　二八 惡者の望は絶べし　二九 ヱホバの途は直者の城となり　三〇 惡を行ふものの滅亡となる　三一 義者は何時までも動かされず　三二 惡者は地に住むことを得じ　三三 義者の口は智慧をいだすなり　三四 虛僞の舌は拔るべし

第一一章

一 いつはりの權衡はヱホバに惡まれ　義しき碼碼は彼に欣ばる　二 驕傲きたれば辱も亦きたる　謙だる者には智慧あり　三 直者の端莊は己を導き　悖逆者の邪曲は己を亡す　四 寶は震怒の日に益なし　されど正義は救ふて死をまぬかれしむ　五 完全者はその正義によりてその途を直くせられ　惡者はその惡によりて跌るべし　六 直者はその正義によりて救はれ　悖逆者は自己の惡によりて執へらる　七 惡人は死るときにその望たえ　不義なる者の望もまた絶べし　八 義者は艱難より救はれ　惡者はこれに代る　九 邪曲なる者は口を以て其隣を亡す　されど義しき者はその知識によりて救はる　一〇 義しきもの幸福を受ればその城邑に歡喜あり　惡きもの亡さるれば歡喜の聲おこる　一一 城邑は直者の祝ふに倚て高く擧られ　惡者の口によりて亡さる　一二 その隣を侮る者は智慧なし　聰明人はその口を噤む　一三 往て人の是非をいふ者は密事を洩し　心の忠信なる者は事を

イ箴一四・九、一五・二一　ロ伯一五・二一　ハ詩一四五・一九　太五・六　一四、一五　約壹五・一　ニ詩三七・九、一〇　ホ詩一五・五　箴一〇　ヘ箴九・一一　ト伯一五・三二、三三、二五、一六・一八　チ伯八・一三、一七・二〇　リ詩一・六、三七・二〇　ヌ詩三七・二二、二九、二二・一六　詩五五・二三　箴一〇・一七　ル詩三七・三〇　ヲ利一九・三五、三六　申二五・一三—一六　ワ箴一五・三三、一六　カ箴一三・六　ヨ箴一〇・二一　結七・一九　番一・一八　タ創七・一　レ箴五・二二　傳一〇・一八、一八・一二　但四・三〇、三二　ソ箴一〇・二八　ツ箴二一・一八　ネ伯八・一三　ナ帖八・一五　箴二八・二五、二六・一八　ラ箴二九・八　ム利一九・一六　箴二〇・一九

一四 隱す　はかりごとなければ民たふれ　議士多ければ平安なり　一五 他人のために保證をなす者は苦難をうけ　保證を嫌ふ者は平安なり　一六 柔順なる婦は榮譽をえ　强き男子は資財を得　一七 慈悲ある者は己の靈魂に益をくはへ　殘忍者はおのれの身を擾はす　一八 惡者の獲る報はむなしく　義を播くものの得る報賞は確し　一九 堅く義をたもつ者は生命にいたり　惡を追もとむる者はおのれの死をまねく　二〇 心の戾れる者はヱホバに憎まれ　直く道を步む者は彼に悅ばる　二一 手に手をあはするとも惡人は罪をまぬかれず　義人の苗裔は救を得　二二 美しき婦のつゝしみなきは金の環の豕の鼻にあるが如し　二三 人のねがふところは凡て福祉にいたり　惡人ののぞむところは震怒にいたる　二四 ほどこし散して反りて增ものあり　與ふべきを吝みてかへりて貧しきにいたる者あり　二五 施與を好むものは肥え　人を潤ほす者はまた利潤をうく　二六 穀物を藏めて糶ざる者は民に詛はる　然れど售る者の首には祝福あり　二七 善をもとむる者は恩惠をえん　惡をもとむる者には惡き事きたらん　二八 おのれの富を恃むものは仆れんされど義者は樹の青葉のごとくさかえん　二九 おのれの家をくるしむるものは風をえて所有とせん　愚なる者は心の智きものの僕とならん　三〇 義人の果は生命の樹なり　智慧ある者は人を捕ふ　三一 みよ義人すらも世にありて報をうくべし　況て惡人と罪人とをや

第一二章

一 訓誨を愛する者は知識を愛す　懲戒を惡むものは畜のごとし　二 善人はヱホバの恩寵をうけ　惡き謀略を設くる人はヱホバに罰せらる　三 人は惡をもて堅く立ることあたはず　義人の根は動くことなし　四 賢き婦はその夫の冠弁なり　辱をきたらする婦は夫をしてその骨に腐あるが如くならしむ　五 義者の

ウ王上一二・一一—一五　箴一五・二六、二四　キ箴六・一　ノ箴三・三〇　オ太五・七、二五・三四　ク何一〇・二一　加六・八、九　雅三・一八　ヤ箴一六・五　マ詩一一二・二　ケ羅二・八、九　フ詩一二・九　コ哥後九・六—一〇　エ太五・七　テ箴八・五、六　ア伯二九・一三　サ帖七・二〇　詩七・一五、一六、九・一、一六、一〇・二、五・六　キ伯三一・二四　詩五一・七　可一〇・二四　路一二・二一　ユ詩一・三、五二・八　ヤ箴九・一二　箴一四・三〇　メ傳五・一六　ミ但一二・三　哥前九・一九　雅五・二〇　ヒ箴八・三五　ヒ箴一〇・二五　モ箴三一・二三　哥前　シ耶二五・二九　彼前四・七、一八　エ箴八・三五　ヒ箴一〇・二五　モ箴三一・二三　哥前　セ箴一四・三〇　一一・七

六 おもひは直し　悪者の計るところは虚偽なり　六 悪者の言は人の血を流さんとて伺ふ　されど直者の口は人を救ふ
七 なり　七 悪者はたふされて無ものとならん　されど義者の家は立べし　八 人はその聰明にしたがひて譽られ心
八 の悖れる者は藐めらる　九 卑賤してしもべある者は自らたかぶりて食に乏き者に愈る　一〇 義者はその畜の生命
九 を顧みる　されど悪者は殘忍をもてその憐憫とす　一一 おのれの田地を耕すものは食にあく　放蕩なる人にしたがふ
一〇 者は智慧なし　一二 悪者はあしき人の獲たる物をうらやみ　義者の根は芽をいだす　一三 悪者はくちびるの愆に
一一 よりて罟に陷る　されど義者は患難の中よりまぬかれいでん　一四 人はその口の徳によりて福祉に飽ん　人の手の
一二 行爲はその人の身にかへるべし　一五 愚なる者はみづからその道を見て正しとす　されど智慧ある者はすゝめを
一三 容る　一六 愚なる者はたゞちに怒をあらはし　智きものは恥をつゝむ　一七 眞實をいふものは正義を述べ　いつはりの
一四 證人は虚偽をいふ　一八 妄りに言をいだし劍をもて刺がごとくする者あり　されど智慧ある者の舌は人をいやす
一五 眞理をいふ口唇は何時までも存つ　されど虚偽をいふ舌はたゞ瞬息のあひだのみなり　二〇 悪事をはかる者の心
一六 には欺詐あり　和平を議る者には歡喜あり　二一 義者には何の禍害も來らず　悪者はわざはひをもて充さる　二二 い
一七 つはりの口唇はヱホバに憎まれ　眞實をおこなふ者は彼に悅ばる　二三 賢人は知識をかくす　されど愚なる者の
一八 こゝろは愚なる事を述ぶ　二四 勤めはたらく者の手は人ををさむるにいたり　惰者は人に服ふるにいたる　二五 う
一九 れひ人の心にあれば之を屈ます　されど善言はこれを樂します　二六 義者はその友に道を示す　されど悪者は自ら
二〇 途にまよふ　二七 惰者はおのれの獵獲たる物をも燔ず　勉めはたらくことは人の貴とき寶なり　二八 義しき道には

イ 箴一・二、一八　ロ 箴一四・三　ハ 詩三七・三六、三七　ニ 得前二五・一七　ホ 箴一三・七　ヘ 申二五・四　ト 創三・一九　チ 箴六・三二　リ 箴一八・七　ヌ 彼後二・九　ル 箴一三・二、一八、二〇　ヲ 箴三・一〇、一一　ワ 箴三・七　カ 箴二九・一一　ヨ 箴一四・五　タ 詩五七・四、五九・七、六四・三　レ 詩五二・五　箴一九・九　ソ 箴六・一七、一一・二　ツ 箴一三・一六、一五　ネ 箴一〇・四　ナ 箴一五・一三　ラ 箴五〇・四　ム 得前二・二五　ウ 箴一二・一四　キ 詩三九・一　箴二一・二三　箴三・二　ノ 箴一〇・四

一一 生命あり　その道すぢには死なし

第一三章

一 智慧ある子は父の教訓をきゝ　戯謔者は懲治をきかず　二 人はその口の德によりて福祉をくらひ
三 悖逆者の靈魂は强暴をくらふ　三 その口を守る者はその生命を守る　その口唇を大きくひらく者に
四 は滅亡きたる　四 惰る者はこゝろに慕へども得ることなし　勤めはたらく者の心は豐饒なり　五 義者は虚偽の
五 言をにくみ　悪者ははぢをかうむらせ面を赤くせしむ　六 義は道を直くあゆむ者をまもり　悪は罪人を倒す　七 自
六 ら富めりといひあらはして些少の所有もなき者あり　自ら貧しと稱へて資財おほき者あり　八 人の資財はその
七 生命を贖ふものとなるあり　然ど貧者は威嚇をきくことあらず　九 義者の光は輝き　悪者の燈火はけさる
八 一〇 驕傲はたゞ爭端を生ず　勸告をきく者は智慧あり　一一 詭詐をもて得たる資財は減る　されど手をもて聚めたく
九 はふる者はこれを增すことを得　一二 望を得ること遲きときは心を疾しめ　願ふ所既にとぐるときは生命の樹を得
一〇 たるがごとし　一三 御言をかろんずる者は亡され　誡命をおそるゝ者は報賞を得　一四 智慧ある人の教訓はいのちの
一一 泉なり　能く人をして死の罟を脫れしむ　一五 善にして哲きものは恩を蒙る　されど悖逆者の途は艱難なり　一六 凡そ
一二 賢者は知識に由りて事をおこなひ　愚なる者はおのれの痴を顯す　一七 悪き使者は災禍に陷る　されど忠信なる
一三 使者は良藥の如し　一八 貧乏と恥辱とは教訓をすつる者にきたる　されど譴責を守る者は尊まる　一九 望を得れば
一四 心に甘し　愚なる者は悪を棄つることを嫌ふ　二〇 智慧ある者と偕にあゆむものは智慧をえ　愚なる者の友となる
一五 者はあしくなる　二一 わざはひは罪人を追ひ　義者は善報をうく　二二 善人はその產業を子孫に遺す　されど罪人の
一六 資財は義者のために蓄へらる　二三 貧しき者の新田にはおほくの糧あり　されど不義によりて亡る者あり　二四 鞭を

す 箴一一・三、五、六　ク 箴一二・九　ヤ 伯一八・五、六、二一　ケ 箴一三・一九　フ 代下三六・一六　コ 箴一〇・二一、二四　エ 得後二二・六　テ 箴一二・二三、一五　ア 箴二五・一三　サ 箴一五・五、三一　キ 箴一三・一二　ユ 詩三二・一〇　メ 伯二七・一六、一七　ミ 箴一二・一一　箴二八・八　傳二・二六　シ 箴一九・一八、二二・一五、二三・一三、二九・一五、一七

くはへざる者はその子を憎むなり　子を愛する者はしきりに之をいましむ　二五義しき者は食をえて飽くされど
惡者の腹は空し

第一四章

一智慧ある婦はその家をたて　愚なる婦はおのれの手をもて之を毀つ　二直くあゆむ者はヱホバを
畏れ　曲りてあゆむ者はこれを侮る　三愚なる者の口にはその傲のために鞭笞あり　智者の口唇は
おのれを守る　四牛なければ飼葉倉むなし　牛の力によりて生産る物おほし　五忠信の證人はいつはらず　虚僞の
あかしびとは謊言を吐く　六嘲笑者は智慧を求むれどもえず　哲者は知識を得ること容易し　七汝おろかなる者
の前を離れされ　つひに知識の彼にあるを見ざるべし　八賢者の智慧はおのれの道を曉るにあり　愚なる者の痴
は欺くにあり　九おろかなる者は罪をかろんずされど義者の中には恩惠あり　一〇心の苦みは心みづから知る
其よろこびには他人あづからず　二悪者の家は亡され　正直き者の幕屋はさかゆ　一一人のみづから見て正しとす
る途にして　その終はつひに死にいたる途となるものあり　一二笑ふ時にも心に悲あり　歡樂の終に憂あり　一四心の
悖れる者はおのれの途に飽かん　善人もまた自己に飽かん　一五拙者はすべての言を信ず　賢者はその行を慎む
一六智慧ある者は怖れて惡をはなれ　愚なる者はたかぶりて怖れず　一七怒り易き者は愚なることを行ひ　悪き謀計
を設くる者は惡まる　一八拙者は愚なる事を得て所有となし　賢者は知識をもて冠弁となす　一九悪者は善者の前
に俯伏し　罪ある者は義者の門に俯伏す　二〇貧者はその鄰にさへも惡まる　されど富者を愛する者はおほし
二一その鄰を藐むる者は罪あり　困苦者を憐むものは幸福あり　二二惡を謀る者は自己をあやまるにあらずや　善を
謀る者には憐憫と眞實とあり　二三すべての勤勞には利益あり　されど口唇のことばは貧乏をきたらするのみなり

イ詩三四・一〇、三七　ロ箴二四・三　ハ得四・一一　ニ伯一二・四　ホ箴一二・六　ヘ出二〇・一六、二三・一四、一一箴六・一九、一二・一七、一四・二五　ト箴八・九、一七・二四　チ箴一〇・二三・一七　リ伯八・一五　ヌ箴一六・二五　ヲ箴五・四　ル箴六・二一　ワ箴一・三一、一二・一四　カ箴二二・三　ヨ箴一九・七　タ詩四一・一、一二　レ箴一四・五　ソ箴一三・一四　ツ箴一六・三二　箴一

二四智慧ある者の財寶はその冠弁となる　愚なる者のおろかはたゞ痴なり　二五眞實の證人は人のいのちを救ふ　謊言
を吐く者は僞人なり　二六ヱホバを畏るゝことは堅き依賴なり　その兒輩は逃避場をうべし　二七ヱホバを畏るゝこ
とは生命の泉なり　人を死の罠より脱れしむ　二八王の榮は民の多きにあり　牧伯の衰敗は民を失ふにあり　二九怒を
遲くする者は大なる知識あり　氣の短き者は愚なることを顯す　三〇心の安穩なるは身のいのちなり　娼嫉は骨の腐
なり　三一貧者を虐ぐる者はその造主を侮るなり　彼をうやまふ者は貧者をあはれむ　三二惡者はその惡のうち
にて亡され　義者はその死ぬる時にも望あり　三三智慧は哲者の心にとゞまり　愚なる者の衷にある事はあらはる
三四義は國を高くし　罪は民を辱しむ　三五さとき僕は王の恩を蒙ぶり　辱をきたらす者はその震怒にあふ

第一五章

一柔和なる答は憤恨をとゞめ　厲しき言は怒を激す　二智慧ある者の舌は知識を善きものと
おもはしめ　愚なる者の口はおろかをはく　三ヱホバの目は何處にもありて惡人と善人とを鑒みる
四溫柔き舌は生命の樹なり　悖れる舌は靈魂を傷ましむ　五愚なる者はその父の訓をかろんず　誡命をまもる者は
賢者なり　六義者の家には多くの資財あり　惡者の利潤には擾累あり　七智者のくちびるは知識をひろむ　愚
なる者の心は定りなし　八惡者の祭物はヱホバに憎まれ　直き人の祈は彼に悅ばる　九惡者の道はヱホバに憎まれ
正義をもとむる者は彼に愛せらる　一〇道をはなるゝ者には嚴しき懲治あり　譴責を惡む者は死ぬべし　一一陰府と
沉淪とはヱホバの目の前にあり　況て人の心をや　一二嘲笑者は誡めらるゝことを好まず　また智慧ある者に近づ
かず　一三心に喜樂あれば顏色よろこばし　心に憂苦あれば氣ふさぐ　一四哲者のこゝろは知識をたづね　愚なる者の

ネ詩一二・一〇　ナ箴一二・四　ラ箴一七・五　太二五　ム伯三一・一五、一六　ウ伯一二・一五、一九　箴二二・二　ク申前二五・一〇　王箴一二・一六、二九　ノ太二四・四五、四七　オ士八・一—三　箴二五・一五　ヤ箴一二・二三、一三　マ伯三四・二一　箴五・一六・一七　コ箴二一・二七、二八　ケ箴一〇・一　フ箴一三・一八、一五・一三　ア箴五・一二、一〇・一七　サ伯二六・六　詩一三九・八　エ箴二一・二一　提前六・一一　キ代下六・三〇　詩七　ミ箴一二・二五　メ箴一七・二二　ユ申五・一〇　徒一・二四　提後四・一七　テ王上二二・八　耶六・二〇、七・二二　申一・二一、一〇・一九　箴一・一一　ヤ箴一二・二三、一三　ケ箴一〇・一　フ箴一三・一八、一五・一三　申五・二二　箴二一・二一　提前　ヨ箴一九・七　タ詩四一・一、一二　レ箴一四・五　ソ箴一三・一四　ツ箴一六・三二　箴一

一五 口は愚をくらふ　一六 艱難者の日はことごとく悪く　心の懼べる者は恒に酒宴にあり　一六 すこしの物を有てヱホバを
一七 畏るゝは多の寶をもちて擾煩あるに愈る　一七 蔬菜をくらひて互に愛するは肥たる牛を食ひて互に恨むるに愈る
一八 憤ほり易きものは爭端をおこし　怒をおそくする者は爭端をとゞむ　一九 惰者の道は棘の籬に似たり　直者の
一九 途は平坦なり　二〇 智慧ある子は父をよろこばせ　愚なる人はその母をかろんず　二一 無知なる者は愚なる事をよろ
二〇 こび　哲者はその途を直くす　二二 相議ることあらざれば謀計やぶる　議者おほければ謀計かならず成る　二三 人は
二二 その口の答によりて喜樂をう　言語を出して時に適ふはいかに善らずや　二四 智人の途は生命の路にして上へ昇り
二四 ゆく　これ下にあるところの陰府を離れんが爲なり　二五 ヱホバはたかぶる者の家をほろぼし　寡婦の地界をさだめ
二五 たまふ　二六 あしき謀計はヱホバに憎まれ　溫柔き言は潔白し　二七 不義の利をむさぼる者はその家をわづらはせ
二六 賄賂をにくむ者は活ながらふべし　二八 義者の心は答ふべきことを考へ　惡者の口は惡を吐く　二九 ヱホバは惡者
二七 に遠ざかり　義者の祈禱をきゝたまふ　三〇 目の光は心をよろこばせ　好音信は骨をうるほす　三一 生命の誡命を
二八 きくところの耳は智慧ある者の中間に駐まる　三二 教をすつる者は自己の生命をかろんずるなり　懲治をきく者は
二九 聰明を得　三三 ヱホバを畏るゝことは智慧の訓なり　謙遜は尊貴に先だつ

第一六章

一 心に謀るところは人にあり　舌の答はヱホバより出づ　二 人の途はおのれの目にことごとく潔し
二 と見ゆ　惟ヱホバ靈魂をはかりたまふ　三 なんぢの作爲をヱホバに託せよ　さらば汝の謀るところ
三 必ず成るべし　四 ヱホバはすべての物をおのおのその用のために造り　惡人をも惡き日のために造りたまへり

イ 箴一七・二二　ロ 詩三七・一六　箴一六・八　提前六・六　ハ 箴一七・一　ニ 箴二六・二二、二九　ホ 箴二二・五　ヘ 箴一〇・一、二九・三　ト 箴一〇・二三　チ 弗五・一五　リ 箴一・一四、二〇　ヌ 箴二五・一一　ル 腓三・二〇　西三・一、二　ヲ 箴一二・七、一四・　ワ 詩六八・五、六、一四六・九　カ 箴六・一六、一八　ヨ 詩三七・三〇　タ 箴一・一九　寨五・八　耶一七・一一　レ 使前三・一五　ソ 詩一〇・一、三四・一六　ツ 詩一四五・一八、一九　ネ 箴一五・五　ナ 箴一・七　ラ 箴一八・一二　ム 箴一六・九、一九・二、一〇・二四　ウ 太一〇・一九、二〇　キ 詩一〇・三六　ク 寨四三・七　ノ 傳前一六・七　オ 詩三七・五、五五・二二　太六・二五　路一二・二二　腓四・六　彼前五・七　ヤ 伯二・三〇　羅九・二二

五 すべて心たかぶる者はヱホバに惡まれ　手に手をあはするとも罪をまぬかれじ　六 憐憫と眞實とによりて愆は
六 贖はる　ヱホバを畏るゝことによりて人惡を離る　七 ヱホバもし人の途を喜ばゞ　その人の敵をも之と和がしむべ
七 し　八 義によりて得たるところの僅少なる物は不義によりて得たる多の資財にまさる　九 人は心におのれの途を
八 考へはかる　されどその歩履を導くものはヱホバなり　一〇 王のくちびるには神のさばきあり　審判するときその口
九 あやまる可らず　一一 公平の權衡と天秤とはヱホバのものなり　嚢にある砝碼もことごとく彼の造りしものなり
一〇 一二 惡をおこなふことは王の憎むところなり　是その位は公義によりて堅く立ばなり　一三 義しき口唇は王によろ
一一 こばる　彼等は正直をいふものを愛す　一四 王の怒は死の使者のごとし　智慧ある人はこれをなだむ　一五 王の面の光
一二 には生命あり　その恩寵は春雨の雲のごとし　一六 智慧を得るは金をうるよりも更に善らずや　聰明をうるは銀を得
一三 るよりも望まし　一七 惡を離るゝは直き人の路なり　おのれの道を守るは靈魂を守るなり　一八 驕傲は滅亡にさきだ
一四 ち　誇る心は傾跌にさきだつ　一九 卑き者に交りて謙だるは驕ぶる者と偕にありて贓物をわかつに愈る　二〇 愼みて
一五 御言をおこなふ者は益をうべし　ヱホバに倚賴むものは福なり　二一 心に智慧あれば哲者と稱へらる　くちびる甘け
一六 れば人の知識をます　二二 明哲はこれを持つものに生命の泉となる　愚なる者をいましむる者はおのれの痴是なり
一七 二三 智慧ある者の心はおのれの口ををしへ　又おのれの口唇に知識をます　二四 こゝろよき言は蜂蜜のごとくにし
一八 て　靈魂に甘く骨に良藥となる　二五 人の自から見て正しとする途にして　その終はつひに死にいたる途となるもの
一九 あり　二六 勞をするものは飲食のためにおのれに迫ればなり　二七 邪曲なる人は惡を掘る　その口唇

マ 箴六・一七、八・一三　ケ 箴一・二一　フ 但四・二七　路一一　コ 箴一四・一六　エ 詩三七・一六　箴二〇・二四　耶一〇・二三　テ 箴一五・六　ア 詩三七・二三　箴キ 箴二五・五、二九・　箴一・一、一九・　サ 利一九・三六　箴一一・一　箴二〇・二四　ユ 箴一四・三五、二二　ヒ 箴一一・二、一七・　ヱ 箴八・一一、一九　ヌ 箴一九・一二、二〇　ミ 箴一九・一二　シ 伯二九・二三　亞一〇・一　モ 詩二・一二、三四・八・一二五・一寨　三〇・一八　耶一七　セ 箴一三・一四、一四　ロ 箴九・一二　傳六・七　イ 箴一四・一二

二八 には烈しき火のごときものあり　二九 いつはる者はあらそひを起し つげぐちする者は朋友を離れしむ　三〇 強暴人
三一 はその鄰をいざなひ 之を善らざる途にみちびく　三二 その目を閉て惡を謀り その口唇を蹙めて惡事を成遂ぐ
三三 白髮は榮の冠弁なり 義しき途にてこれを見ん　三四 怒を遲くする者は勇士に愈り おのれの心を治むる者は
城を攻取る者に愈る　三五 人は籤をひくされど事をさだむるは全くヱホバにあり

第一七章

一 睦じうして一塊の乾けるパンあるは あらそひありて宰れる畜の盈たる家に愈る　二 かしこき僕
は恥をきたらする子ををさめ 且その子の兄弟の中にありて產業を分ち取る　三 銀を試むる者は
坩堝 金を試むる者は爐 人の心を試むる者はヱホバなり　四 惡を行ふものは虛僞のくちびるにきゝ 虛僞をいふ
者はあしき舌に耳を傾ぶく　五 貧人を嘲るものはその造主をあなどるなり 人の災禍を喜ぶものは罪をまぬか
れず　六 孫は老人の冠弁なり 父は子の榮なり　七 勝れたる事をいふは愚なる人に適はず 況て虛僞をいふ口唇は
君たる者に適はんや　八 贈物はこれを受る者の目には貴き珠のごとし その向ふところにて凡て幸福を買ふ
九 愛を追求むる者は人の過失をおほふ 人の事を言ひふるゝ者は朋友をあひ離れしむ　一〇 一句の誡命の智人に
徹るは 百回扑つことの愚なる人に徹るよりも深し　一一 叛きもとる者はたゞ惡きことのみをもとむ 此故に彼にむ
かひて殘忍なる使者遣はさる　一二 愚なる者の愚妄をなすにあはんよりは寧ろ子をとられたる牝熊にあへ　一三 惡を
もて善に報ゆる者は惡その家を離れじ　一四 爭端の起源は堤より水をもらすに似たり この故にあらそひの起らざ
る先にこれを止むべし　一五 惡者を義とし義者を惡しとするこの二の者はヱホバに憎まる　一六 愚なる者はすでに

イ 箴六・一四、一九、二一・一五・一八、二二・一九・二二　ロ 箴一七・九　ハ 箴一・一〇　ニ 箴二〇・二九　ホ 箴一九・一一　ヘ 箴一五・一七　ト 箴一〇・五、一九・二六　チ 詩二六・二 箴二七　リ 箴一四・二一　ヌ 伯三一・二九 阿一二　ル 詩一二・七・三、一二八・三　ヲ 箴一八・一六、一九　ワ 箴一〇・一二　カ 箴一六・二八　ヨ 何一三・八　タ 詩一〇九・四、五 耶一八・二〇 羅一二　ソ 出二三・七 箴二四・一七 撒前五・一五　レ 箴二〇・三 撒前四・一一　ツ 箴二一・二五、二六

心なし 何ぞ智慧をかはんとて手にその價の金をもつや　一七 朋友はいづれの時にも愛す 兄弟は危難の時のために
生る　一八 智慧なき人は手を拍てその友の前にて保證をなす　一九 爭端をこのむ者は罪を好み その門を高くする者は
敗壞を求む　二〇 邪曲なる心ある者はさいはひを得ず その舌をみだりにする者はわざはひに陷る　二一 愚なる者を
產むものは自己の憂を生じ 愚なる者の父は喜樂を得ず　二二 心のたのしみは良藥なり 靈魂のうれひは骨を枯す
二三 惡者は人の懷より賄賂をうけて審判の道をまぐ　二四 智慧は哲者の面のまへにあり されど愚なる者は目を地
の極にそゝぐ　二五 愚なる子は其父の憂となり 亦これを生る母の煩勞となる　二六 義者を罰するは善らず 貴き者
をその義きがために扑は善らず　二七 言を寡くする者は知識あり 心の靜なる者は哲人なり　二八 愚なる者も默する
ときは智慧ある者と思はれ その口唇を閉るときは哲者とおもはるべし

第一八章

一 自己を人と異にする者はおのれの欲するところのみを求めてすべての善き考察にもとる　二 愚な
る者は明哲を喜ばず 惟おのれの心意を顯すことを喜ぶ　三 惡者きたれば藐視したがひてきたり 恥
きたれば淩辱もともに來る　四 人の口の言は深水の如し 湧てながるゝ川 智慧の泉なり　五 惡者を偏視るは善
らず 審判をなして義者を惡しとするも亦善らず　六 愚なる者の口唇はあらそひを起し その口は打るゝことを
招く　七 愚なる者の口はおのれの敗壞となり その口唇はおのれの靈魂の罟となる　八 人の是非をいふものの言は
たはぶれのごとしといへども反つて腹の奥にいる　九 その行爲をおこたる者は滅すものの兄弟なり　一〇 ヱホバの
名はかたき櫓のごとし 義者は之に走りいりて救を得　一一 富者の資財はその堅き城なり これを高き石垣の如く

ネ 得一・一六　ナ 箴六・二、一一・一五　ラ 箴一六・一八　ム 雅三・八　ウ 箴一八　オ 出二三・八　ク 箴四・六　傳二・一四、八・一　ヤ 箴一〇・一、一五・二〇、一七・二、一九　マ 箴七・一五、一八　ケ 雅一・一九　フ 伯二・三五　コ 箴一〇・一一、二〇　サ 箴一二・一八、二六　シ 箴二四・二三、二八　ア 箴一〇・一四、一二・一三、一三・三　傳ユ 耶後二二・三、五一　詩一八・二、二七・一九　キ 箴二八・二四　メ 箴一〇・一五　エ 詩七八・五　テ 利一九・一五　申一・一七、一六・一九　ヨ 箴一九・一三、四、九一・二、一四・二

に思ふ　一二人の心のたかぶりは滅亡に先だち　謙遜はたふとまるゝ事にさきだつ　一三いまだ事をきかざるさきに
應ふる者は愚にして辱をかうぶる　一四人の心は尚其疾を忍ぶべし　されど心の傷める時は誰かこれに耐んや
一五哲者の心は知識をえ　智慧ある者の耳は知識を求む　一六人の贈物はその人のために道をひらき　かつ貴きもの
の前にこれを導く　一七先に訴訟の理由をのぶるものは正義に似たれども　その鄰人きたり詰問ひてその事を明か
にす　一八籤は爭端をとゞめ且つよきものの間にへだてとなる　一九怒れる兄弟はかたき城にもまさりて說き伏せ
がたし　兄弟のあらそひは檜の貫木のごとし　二〇人は口の德によりて腹をあかし　その口唇の德によりて自ら飽
べし　二一死生は舌の權能にあり　これを愛する者はその果を食はん　二二妻を得るものは美物を得るなり　且ヱホバ
より恩寵をあたへらる　二三貧者は哀なる言をもて乞ひ　富人は厲しき答をなす　二四多の友をまうくる人は遂に
その身を亡す　但し兄弟よりもたのもしき知己もまたあり

第一九章

一たゞしく歩むまづしき者は　くちびるの悖れる愚なる者に愈る　二心に思慮なければ善らず　足にて急ぐものは道にまよふ　三人はおのれの痴によりて道につまづき　反て心にヱホバを怨む　四資財はおほくの友をあつむ　されど貧者はその友に疎まる　五虛僞の證人は罰をまぬかれず　詐言をはくものは避ることをえず　六君に媚る者はおほし　凡そ人は贈物を與ふる者の友となるなり　七貧者はその兄弟すらも皆これをにくむ　況てその友これに遠ざからざらんや　言をはなちてこれを呼とも去てかへらざるなり　八智慧を得る者はおのれの靈魂を愛す　聰明をたもつ者は善福を得ん　九虛僞の證人は罰をまぬかれず　詐言をはく者はほろぶ

イ 籤一一・二、一五・一八、二一・一四　ロ 約七・五一　ハ 創三二・二〇　二五・二七　籤一七　ニ 籤一二・一四、一三　ホ 太一二・三七　ヘ 籤一九・一四、三一　ト 雅二・三　チ 籤一七・一七　リ 籤二八・六　ヌ 詩三七・七　ル 籤一四・二〇　ヲ 出二二・一　申一九　一六、一九　籤六・一九、一九・九、二一・二八　ワ 籤二九・二六　カ 籤一七・八、一八・一四　ヨ 籤一四・二〇　タ 籤三八・一一　レ 籤一六・二〇　ソ 籤一九・五　ツ 籤三〇・二二　傳一〇・六、七　ネ 籤一四・二九　雅一・一九

ナ 籤一六・三二　ラ 籤一六・一四、一五、二〇・二一、二八・一五　ム 何一四・五　ウ 籤一〇・一、一五・二〇、一七・二一、ク 籤六・九　ヤ 籤一〇・四、二〇・一三、二三・二一　マ 箴一〇・二八、一一　ケ 籤二八・二七　一一・一　太一〇・四二、二五・四〇　哥後九・六、七、八　フ 籤一三・二四、二三・二六、二七、四六・一〇　徒五・三九　來六・一七　コ 詩三七・三七　エ 伯三三・一三　詩テ 提前四・八　ア 籤一五・一九、二六　サ 籤二一・一一・一五　キ 申一三・一一　ユ 籤九・八　メ 籤一七・二　ミ 伯一五・一六、二〇・一二、一三、三四・七　シ 籤一〇・一三、二六　創九・二一　籤二三　ヱ 詩一九・三〇　箴二八　ヒ 籤一六・一四、一九・一二　モ 何四・一　セ 籤八・三六　ス 籤一七・一四

一〇愚なる者の驕奢に居るは適當からず　況て僕にして上に在る者を治むることをや　一一聰明は人に怒をしの
ばしむ　過失を宥すは人の榮譽なり　一二王の怒は獅の吼るが如く　その恩典は草の上におく露のごとし　一三愚なる
子はその父の災禍なり　妻の相爭そふは雨漏のたえぬにひとし　一四家と資財とは先祖より承嗣ぐもの　賢き妻はヱ
ホバより賜ふものなり　一五懶惰は人を酣寐せしむ　懈怠人は飢べし　一六誡命を守るものは自己の靈魂を守るなり
その道をかろむるものは死ぬべし　一七貧者をあはれむ者はヱホバに貸すなり　その施濟はヱホバ償ひたまはん
一八望ある間に汝の子を打て　これを殺すこゝろを起すなかれ　一九怒ることの烈しき者は罰をうく　汝もしこれを
救ふともしばしば然せざるを得じ　二〇なんぢ勸をきゝ訓をうけよ　然ばなんぢの終に智慧あらん　二一人の心には
多くの計畫あり　されど惟ヱホバの旨のみ立べし　二二人のよろこびは施濟をするにあり　貧者は詐人に愈る
二三ヱホバを畏るゝことは人をして生命にいたらしめ　かつ恒に飽足りて災禍に遇ざらしむ　二四惰者はその手を
盤にいるゝも之をその口に擧ることをだにせず　二五嘲笑者を打て　さらば拙者も愼まん　哲者を譴めよ　さらば
かれ知識を得ん　二六父を煩はし母を逐ふは羞赧をきたらし凌辱をまねく子なり　二七わが子よ哲言を離れしむる
教を聽くことを息めよ　二八惡き證人は審判を嘲り　惡者の口は惡を呑む　二九審判は嘲笑者のために備へられ　鞭は
愚なる者の背のために備へらる

第二〇章

一酒は人をして嘲らせ　濃酒は人をして騷がしむ　之に迷はさるゝ者は無智なり　二王の震怒は獅の
吼るがごとし　彼を怒らする者は自己のいのちを害ふ　三穩かに居りて爭はざるは人の榮譽なり

四 すべて愚なる者は怒り爭ふ　四 惰者は寒ければとて耕さず　この故に收穫のときにおよびて求るとも得るところ
五 なし　五 人の心にある謀計は深き井の水のごとし　然れど哲人はこれを汲出す　六 凡そ人は各自おのれの善を誇
七 る　八 されど誰か忠信なる者に遇しぞ　七 身を正しくして歩履む義人はその後の子孫に福祉あるべし　八 審判の位
九 に坐する王はその目をもてすべての惡を散す　九 たれか我わが心をきよめ　わが罪を潔められたりといひ得るや
一〇 一一 一一種の權衡二種の斗量は等しくヱホバに憎まる　一一 幼子といへどもその動作によりておのれの根性の清きか
一二 一三 或は正しきかをあらはす　一二 聽くところの耳と視るところの眼とはともにヱホバの造り給へるものなり　一三 なん
一四 ぢ睡眠を愛すること勿れ　恐くは貧窮にいたらん　汝の眼をひらけ　然らば糧に飽べし　一四 買者はいふ惡し惡しと
一五 一六 然れど去りて後はみづから誇る　一五 金もあり眞珠も多くあれど貴き器は知識のくちびるなり　一六 人の保證を
一七 なす者よりは先その衣をとれ　他人の保證をなす者をばかたくとらへよ　一七 欺きとりし糧は人に甜し　されど後に
一八 一九 はその口に沙を充されん　一八 謀計は相議るによりて成る　戰はんとせば先よく議るべし　一九 あるきめぐりて人の
二〇 是非をいふ者は密事をもらす　口唇をひらきてあるくものと交ること勿れ　二〇 おのれの父母を罵るものはその
二一 二二 燈火くらやみの中に消ゆべし　二一 初に俄に得たる產業はその終さいはひならず　二二 われ惡に報いんと言ふこと勿
二三 二四 れ　ヱホバを待て　彼なんぢを救はん　二三 一種の砝碼はヱホバに憎まる　虛僞の權衡は善らず　二四 人の步履はヱホ
二五 バによる　人いかで自らその道を明かにせんや　二五 漫に誓願をたつることは其人の罠となる　誓願をたてゝのちに
二六 二七 考ふることも亦然り　二六 賢き王は箕をもて簸るごとく惡人を散し　車輪をもて碾すごとく之を罰す　二七 人の靈魂

イ 箴一〇・四、一九・ホ 詩一二・一　路一八　リ 王上八・四六　代下二四　ロ 箴一九・一五　ハ 箴一八・四　ニ 箴二五・一四　太六　ヘ 哥後一・一二　ト 詩三七・二六、一一二・二　チ 箴二〇・二六　ヌ 申二五・一三　箴　ワ 箴六・九、一一、一九・一五　カ 伯二八・二二、二六　レ 箴一五・二二、二四　ル 太七・一六　詩九四　ヲ 出四・一一　約壹一・八　ヨ 箴二二・二六、二七、二七・一三　タ 箴九・一七　ソ 路一四・三一　ツ 箴一一・一三　ネ 出二一・一七　利　ナ 伯一八・五、六　箴　ラ 箴二八・二〇　ム 哈二・六　ウ 申三二・三五　箴　ヰ 提後一六・二　彼前三・九

二八 二九 三〇 一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九
二八 はヱホバの燈火にして人の心の奥を窺ふ　二九 王は仁慈と眞實をもて自らたもつ　その位もまた恩惠のおこなひに
よりて堅くなる　三〇 少者の榮はその力おいたる者の美しきは白髮なり　三一 傷つくまでに打たば惡きところきよ
まり　打てる鞭は腹の底までもとほる

第二一章

一 王の心はヱホバの手の中にありて恰かも水の流れのごとし　彼その聖旨のまゝに之を導きたまふ
二 人の道はおのれの目に正しとみゆ　されどヱホバは人の心をはかりたまふ　三 正義と公平を行ふ
は犧牲よりも愈りてヱホバに悅ばる　四 高ぶる目と驕る心とは惡人の光にしてたゞ罪のみ　五 勤めはたらく者の
圖るところは遂にその身を豐裕ならしめ　凡てさわがしく急ぐ者は貧乏をいたす　六 虛僞の舌をもて財を得るは
吹はらはるゝ雲烟のごとし　之を求むる者は死を求むるなり　七 惡者の殘虐は自己を亡す　これ義しきを行ふこと
を好まざればなり　八 罪人の道は曲り　潔者の行爲は直し　九 相爭ふ婦と偕に室に居らんよりは屋蓋の隅にをる
はよし　一〇 惡者の靈魂は惡をねがふ　その鄰も彼にあはれみ見られず　一一 あざけるもの罰をうくれば拙者は
智慧を得　ちゑあるもの教をうくれば知識を得　一二 義しき神は惡者の家をみとめて惡者を滅亡に投いれたまふ
一三 耳を掩ひて貧者の呼ぶ聲をきかざる者はおのれ自ら呼ぶときもまた聽れざるべし　一四 潛なる饋物は忿恨を
なだめ　懷中の賄賂は烈しき瞋恚をやはらぐ　一五 公義を行ふことは義者の喜樂にして　惡を行ふものの敗壞なり
一六 さとりの道を離るゝ人は死し者の集會の中にをらん　一七 宴樂を好むものは貧し　人となり　酒と膏とを好むもの
は富をいたさじ　一八 惡者は義者のあがなひとなり　悖れる者は直き者に代る　一九 爭ひ怒る婦と偕にをらんより

ノ 箴二〇・一〇　オ 詩三七・二三　箴一　マ 哥前二・一一　ケ 詩一〇一・一　箴　フ 箴一六・三一　コ 箴一六・二二　エ 箴二四・一二　路　テ 提前一五・二二　詩　五〇・八　箴一五・何　キ 箴一〇・二一、一三・一一、二〇・二一　彼後二・三　ア 箴六・一七　サ 箴一〇・四、一三・四　ク 傳五・四、五　ヤ 詩一〇一・五　箴　ユ 箴一九・一三、二一　一九、二五・二四、二七・一五　メ 雅四・五　ミ 箴一九・二五　シ 太七・二六、一八・三〇　モ 箴一一・一八　雅四・三、四　ヱ 箴一七・八、二三、一八・一六　ヒ 箴一〇・二九

二〇 は荒野に居るはよし　二一 智慧ある者の家には貴き寶と膏とあり　愚なる人は之を呑つくす　二二 正義と憐憫とを
二二 追求むる者は生命と正義と尊貴とを得べし　二三 智慧ある者は強者の城にのぼりて その堅く賴むところを倒す
二四 口と舌とを守る者はその靈魂を守りて患難に遇せじ　二五 高ぶり驕る者を嘲笑者となづく これ驕奢を逞しくして行ふものなり　二六 惰者の情慾はおのれの身を殺す　是はその手を肯て働かせざればなり　二七 人は終日しきりに慾を圖る　二八 されど義者は與へて吝まず　二九 惡者の獻物は憎まる　況て惡き事のために獻ぐる者をや　三〇 虛僞の證人は滅さる　然れど聽く人は恒にいふべし　三一 惡人はその面を厚くし　義者はその道を謹む　三二 ヱホバに むかひては智慧も明哲も謀略もなすところなし　三三 戰鬪の日のために馬を備ふ　されど勝利はヱホバによる

第二二章

一 嘉名は大なる富にまさり　恩寵は銀また金よりも佳し　二 富者と貧者と偕に世にをる　凡て之を造りし者はヱホバなり　三 賢者は災禍を見てみづから避け　拙者はすゝみて罰をうく　四 謙遜　五 悖れる者の途には荊棘と罠とあり　靈魂を守る者は遠くこれを離れん　六 子をその道に從ひて教へよ　然ばその老たる時も之を離れじ　七 富者は貧者を治め　借者は貸人の僕となる　八 惡を播くものは禍害を穫り　その怒の杖は廢るべし　九 人を見て惠む者はまた惠まる　此はその糧を貧者に與ふればなり　一〇 嘲笑者を逐へば爭論も亦さり　且鬪諍も恥辱もやむ　一一 心の潔きを愛する者はその口唇に憐憫をもてり　王その友とならん　一二 ヱホバの目は知識ある者を守る　彼は悖れる者の言を敗りたまふ　一三 惰者はいふ獅そとにあり　われ衢にて殺されんと　一四 妓婦の口は深き坑なり　ヱホバに憎まるゝ者これに陷

イ詩一一二・三　太　雅三・二　ル詩三・八　ヲ傳七・一　ヤ箴八・六　伯三一　エ傳前二四・一二、二　ヲ出二三・六　ヱ傳前二四・一二、二
ロ箴一五・九　太五・六　ホ箴一三・四　チ箴一九・五、九　ワ箴二九・一三　カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　マ路一・三、四　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六　ケ箴前三・一五
ハ傳九・二四　太五・六　ヘ詩三七・二六、一一　リ箴八・九、一〇　邪九　ワ箴二九・一三　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六　コ箴七・一〇　馬三・五
ニ箴一二・一三、一三　ト詩五〇・九　箴一五　ヌ詩二〇・七、三三・　カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩
八　箴六六・三　邪　一七　箴三一・一　一四・三一　一五・三・四　一五・二・二　ウ詩一〇・五・六　箴　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六
ホ箴一三・四　チ箴一九・五、九　ヲ傳七・一　ヤ箴八・六　伯三一　エ傳前二四・一二、二　ヲ出二三・六　ヱ傳前二四・一二、二
ヘ詩三七・二六、一一　リ箴八・九、一〇　邪九　ワ箴二九・一三　カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　マ路一・三、四　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六　ケ箴前三・一五
ト詩五〇・九　箴一五　ヌ詩二〇・七、三三・　カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　コ箴七・一〇　馬三・五
チ箴一九・五、九　ヲ傳七・一　ヤ箴八・六　伯三一　エ傳前二四・一二、二　ヲ出二三・六　ヱ傳前二四・一二、二
リ箴八・九、一〇　邪九　ワ箴二九・一三　カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　マ路一・三、四　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六　ケ箴前三・一五
ヌ詩二〇・七、三三・　カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　コ箴七・一〇　馬三・五
ル詩三・八　ヲ傳七・一　ヤ箴八・六　伯三一　エ傳前二四・一二、二　ヲ出二三・六　ヱ傳前二四・一二、二
ヲ傳七・一　ヤ箴八・六　伯三一　エ傳前二四・一二、二　ヲ出二三・六　ヱ傳前二四・一二、二
ワ箴二九・一三　カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　マ路一・三、四　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六　ケ箴前三・一五
カ伯三一・一五　箴　ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　コ箴七・一〇　馬三・五
ヨ箴一四・一六、二七　ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　マ路一・三、四　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六　ケ箴前三・一五
ツ弗六・四　提後三・　ム創二一・九、一〇　詩　コ箴七・一〇　馬三・五
ム創二一・九、一〇　詩　マ路一・三、四　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六　ケ箴前三・一五
ウ詩一〇・五・六　箴　ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六
ヲ傳一・二・三　太六　ネ雅二・六　ヲ傳一・二・三　ヲ傳七・二六
ヲ傳七・二六　オ傳七・二六
ヲ傳七・二六　ク箴一三・二四、一九・一八、二三・一三、二九・一五、一七

一五 らん　一六 痴なること子の心の中に繫がる　懲治の鞭これを逐いだす　一七 貧者を虐げて自らを富さんとする者と
富者に與ふる者とは遂にかならず貧しくなる　一八 汝の耳を傾ぶけて智慧ある者の言をきゝ　且なんぢの心を
わが知識に用ゐよ　一九 之を汝の腹にたもちて　盡くなんぢの口唇にそなはらしめば樂しかるべし　二〇 汝をして
ヱホバに倚賴ましめんが爲にわれ今日これを汝に教ふ　二一 われ勸言と知識とをふくみたる勝れし言を汝の爲に
錄しゝにあらずや　二二 これ汝をして眞の言の確實なることを曉らしめ　且なんぢを遣しゝ者に眞の言を持歸ら
しめん爲なり　二三 弱き者を弱きがために掠むることなかれ　艱難者を門にて壓つくること勿れ　二四 そはヱホ
バその訴を糺し　且かれらを害ふものの生命をそこなはん　二五 怒る者と交ること勿れ　憤ほる人とともに往こと
なかれ　二六 恐くは汝その道に效ひてみづから罠に陷らん　二七 なんぢ人と手をうつ者となることなかれ　人の負債の
保證をなすこと勿れ　二八 汝もし償ふべきものあらずば人なんぢの下なる臥牀までも奪ひ取ん　是豈よからんや
なんぢの先祖がたてし古き地界を移すこと勿れ　二九 汝その業に巧なる人を見るか　斯る人は王の前に立ん
かならず賤者の前にたゝじ

第二三章

一 なんぢ侯たる者とともに坐して食ふときは　愼みて汝の前にある者の誰なるかを思へ　二 汝もし食
を嗜む者ならば汝の喉に刀をあてよ　三 その珍饈を貪り食ふこと勿れ　これ迷惑の食物なればなり
四 富を得んと思煩らふこと勿れ　自己の明哲を恃むこと勿れ　五 なんぢ虛しきに歸すべき者に目をとむるか　富は
かならず自ら翅を生じて鷲のごとく天に飛さらん　六 惡目をする者の糧をくらふことなく　その珍饈をむさぼり
ねがふことなかれ　七 そはその心に思ふごとくその人となりも亦しかればなり　彼なんぢに食へ飲めといふと

八 いへどもその心は汝に眞實ならず　八汝つひにその食へる物を吐出すにいたり　且その出しゝ懇懃の言もむなしく
九 ならん　九愚なる者の耳に語ること勿れ　彼なんぢが言の示す明哲を藐めん　一〇古き地界を移すことなかれ　孤子
一〇 の畑を侵すことなかれ　一一そはかれが贖者は強し　必ず汝に對らひて之が訴をのべん　一二汝の心を教に用ゐ　汝の
一一 耳を知識の言に傾けよ　一三子を懲すことを爲ざるなかれ　鞭をもて彼を打とも死ることあらじ　一四もし鞭をもて
一二 彼をうたばその靈魂を陰府より救ふことをえん　一五わが子よもし汝のこゝろ智からば我が心もまた歡び　一六もし
一三 汝の口唇たゞしき事をいはゞ　我が腎腸も喜ぶべし　一七なんぢ心に罪人をうらやむ勿れ　たゞ終日ヱホバを畏れ
一四 よ　一八そは必ず應報ありて汝の望は廢らざればなり　一九わが子よ　汝きゝて智慧をえ　かつ汝の心を道にかたぶけ
一五 よ　二〇酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ　二一それ酒にふける者と肉を嗜む者とは貧しくなり　睡眠を貪る
一六 者は敝れたる衣をきるにいたらん　二二汝を生る父にきけ　汝の老たる母を輕んずる勿れ　二三眞理を買へ　これを
一七 售るなかれ　智慧と誡命と知識とまた然あれ　二四義き者の父は大によろこび　智慧ある子を生る者はこれがために
一八 樂しまん　二五汝の父母を樂しませ　汝を生る者を喜ばせよ　二六わが子よ汝の心を我にあたへ　汝の目にわが途を樂
一九 しめ　二七それ妓婦は深き坑のごとく　淫婦は狹き井のごとし　二八彼は盜賊のごとく人を窺ひ　かつ世の人の中に悖れ
二〇 る者を增なり　二九禍害ある者は誰ぞ　憂愁ある者は誰ぞ　爭端をなす者は誰ぞ　煩慮ある者は誰ぞ　故なくして傷を
二一 うくる者は誰ぞ　赤目ある者は誰ぞ　三〇是すなはち酒に夜をふかすもの　往て混和せたる酒を味ふる者なり　三一酒
二二 はあかく盃の中に泡だち滑かにくだる　汝これを見るなかれ　三二是は終に蛇のごとく噬み　蝮の如く刺すべし

イ 箴九・八　太七・六　二四・一九、一九・二四・二七　ロ 申一九・一四、二七・一七　箴二二・二八　ハ 伯三一・二一　箴ホ 哥前五・五　ヘ 箴二三・二四、二五、二九・三　ト 詩三七・一、七三・三　チ 箴二八・一四　リ 詩三七・三七　箴二四・一四　路一六　ヌ 箴四・二三　ル 箴五・二二　太二四　ワ 箴一・九・一五　弗六・一二　ヨ 箴一〇・一、一五・二〇、二三・一五　タ 箴二二・一四　レ 箴七・一二　傳七・二六　ソ 箴五・一一、二二　ツ 創四九・一二　ネ 箴二〇・一　弗五・

三三 三四 三五 三六 一一 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇

三三 また汝の目は怪しきものを見　なんぢの心は謎言をいはん　三四汝は海のなかに偃すもののごとく　帆桅の上に偃
三五 すもののごとし　三五汝いはん人われを擊ども我いたまず　我を拷けども我おぼえず　我さめなばまた酒を求めんと

第二四章

一 なんぢ惡き人を羨むことなかれ　又これと偕に居らんことを願ふなかれ　二そはその心に暴虐を
はかり　その口唇に人を害ふことをいへばなり　三家は智慧によりて建られ　明哲によりて堅くせら
四 れ　四また室は知識によりて各種の貴く美しき寶にて充されん　五智慧ある者は強し　知識ある人は力をます
六 汝よき謀計をもて戰鬪をなせ　勝利は議者の多きによる　七智慧は高くして愚なる者の及ぶところにあらず
八 愚なる者は門にて口を啓くことをえず　八惡をなさんと謀る者を邪曲なる者と稱ふ　九愚なる者の謀るところは
九 罪なり　嘲笑者は人に憎まる　一〇汝もし患難の日に氣を挫かば汝の力は弱し　一一なんぢ死地に曳れゆく者を拯へ
一〇 滅亡によろめきゆく者をすくはざる勿れ　一二汝われら之を知らずといふとも心をはかる者これを曉らざらんや
一一 汝の靈魂をまもる者これを知ざらんや　彼はおのおのの行爲によりて人に報ゆべし　一三わが子よ蜜を食へ　是は美
一二 ものなり　また蜂のすの滴瀝を食へ　是はなんぢの口に甘し　一四智慧の汝の靈魂におけるも是の如しと知れ　これ
一三 を得ばかならず報いありて汝の望すたれじ　一五惡者よ義者の家を窺ふことなかれ　その安居所を攻ること勿れ
一四 そは義者は七次たふるゝともまた起く　一六されど惡者は禍災によりて亡ぶ　一七汝の仇たふるゝとき樂しむこと
一五 勿れ　彼の亡ぶるときこゝろに喜ぶことなかれ　一八恐くはヱホバこれを見て惡しとし　その震怒を彼より離れしめ
一六 たまはん　一九なんぢ惡者を怒ることなかれ　邪曲なる者を羨むなかれ　二〇それ惡者には後の善賚なし　邪曲なる

ラ 箴二七・二二　耶五　ム 弗四・二九　ウ 申二九・一九　箴　ヰ 詩三七・二、七三・三　箴三・三一、二三・十箴一・二四、一五・一七、二四・一九　ノ 箴一・二五　オ 詩一〇・七　ク 箴二一・二二　傳九・一六　ヤ 哥前五・五　箴一九・一五、二七　マ 詩一〇・五　箴一四　ケ 羅一・三〇　フ 詩八二・四　箴五八・六・三　路一四・三一　コ 箴二一・二　エ 伯三四・一一　詩六一・二一　耶三二・サ 箴二三・一八　一九 箴二・六　獻キ 詩一〇・九、一〇　ユ 伯五・一九　詩三四二・二三、二二・一二　一九、三七・二四　テ 歌五・一、一〇、一一　ア 詩一九・一〇三　メ 帖七・一〇　米七・八　箴五・一四　ミ 伯三一・二九　詩三五・一五、一九　箴一七・五、阿一・二　シ 詩三七・一、七三・三　箴二三・一七、二四　ヱ 詩一・六　ヒ 伯一八・五、六、二一・一七　箴一三・九、二〇・二〇

二一 者の燈火は滅されん　二二 わが子よヱホバと王とを畏れよ　叛逆者に交ること勿れ　二三 斯るものらの災禍は速に
二三 おこるこの兩者の滅亡はたれか知えんや　二四 是等もまた智慧ある者の箴言なり　偏りて鞫するは
二五 善らず　二六 罪人に告て汝は義しといふものをば衆人これを詛ひ諸民これを惡まん　二七 これを譴る者は恩をえん
二六 また福祉これにきたるべし　二八 ほどよき應答をなす者は口唇に接吻するなり　二七 外にて汝の工をとゝのへ田圃に
二八 てこれを自己のためにそなへ然るのち汝の家を建よ　二八 故なく汝の鄰に敵して證することなかれ　汝なんぞ口唇
二九 をもて欺くべけんや　二九 彼の我に爲しゝ如く我も亦かれになすべし　われ人の爲ししところに循ひてこれに報い
三〇 んといふこと勿れ　三〇 われ曾て惰人の田圃と智慧なき人の葡萄園とをすぎて見しに　三一 荊棘あまねく生え蔦
三一 その地面を掩ひ その石垣くづれゐたり　三二 我これをみて心をとゞめ これを觀て教をえたり　三三 しばらく臥し
三三 暫らく睡り 手を叉きて叉しばらく休む　三四 さらば汝の貧窮は盜人のごとく汝の缺乏は兵士の如くきたるべし

第二五章

一 此等もまたソロモンの箴言なり　ユダの王ヒゼキヤに屬せる人々これを輯めたり　二 事を隱
三 すは神の榮譽なり　事を窮むるは王の榮譽なり　三 天の高さと地の深さと　王たる者の心とは測るべ
四 からず　四 銀より渣滓を除け　さらば銀工の用ふべき器いでん　五 王の前より惡者をのぞけ　然ばその位義により
五 て堅く立ん　六 王の前に自ら高ぶることなかれ　貴人の場に立つことなかれ　七 なんぢが目に見る王の前にて
六 下にさげらるゝよりは こゝに上れといはるゝこと愈れり　八 汝かろがろしく出でて爭ふことなかれ　恐くは終に
七 いたりて汝の鄰に辱しめられん　その時なんぢ如何になさんとするか　九 なんぢ鄰と爭ふことあらば只これと爭へ

イ羅一三・七　彼前　一 約七・二四　ホ弗四・二五　チ箴六・九　ヲ提前二・二
ロ利一九・一五　申一二・一七、一六・一九　ハ箴一七・一五　寨五　ヘ箴二〇・二二　太五　リ王上四・三二　ワ箴二〇・八
ニ箴一八・五、二八・二　ホ王上五・一七、一八　路一四・二八　ト創三・一八　ヘ箴二九・四四　羅一二　ヌ申二九・二九　羅　カ箴一六・一二、二九　レ太五・二五、一八・一五　ヨ路一四・八—一〇　タ箴一七・一四　太五・二五　ツ箴一三・一七　五〇・四
ネ箴二〇・六　ナ繪一二　ソ箴一五・二三　寨　ラ創三二・四　毎前

一〇 人の密事を洩すなかれ　一〇 恐くは聞者なんぢを卑しめん　汝そしられて止ざらん　一一 機にかなひて語る言は銀の
一一 彫刻物に金の林檎を嵌たるが如し　一二 智慧をもて譴むる者の之をきく者の耳におけることは　金の耳環と精金の
一三 飾のごとし　一三 忠信なる使者は之を遣す者におけること　穡收の日に冷かなる雪あるがごとし　能その主の心を喜
一四 ばしむ　一四 おくりものすと僞りて誇る人は雨なき雲風の如し　一五 怒を緩くすれば君も言を容る　柔かなる舌は骨
一五 を折く　一六 なんぢ蜜を得るか　惟これを足る程に食へ　恐くは食ひ過して之を吐出さん　一七 なんぢの足を鄰の家に
一六 しげくするなかれ　恐くは彼なんぢを厭ひ惡まん　一八 その鄰に敵して虛僞の證をたつる人は　斧刃または利き箭の
一七 ごとし　一九 艱難に遇ふとき忠實ならぬ者を賴むは　惡しき齒または跛たる足を恃むがごとし　二〇 心の傷める人の
一八 前に歌をうたふは　寒き日に衣をぬぐが如く　曹達のうへに酢を注ぐが如し　二一 なんぢの仇もし飢ゑなば之に糧を
一九 くらはせ　もし渴かば之に水を飲ませよ　二二 なんぢ斯するは火をこれが首に積むなり　ヱホバなんぢに報いたまふ
二〇 べし　二三 北風は雨をおこし　かげごとをいふ舌は人の顏をいからす　二四 爭ふ婦と偕に室に居らんより屋蓋の隅に
二一 をるは宜し　二五 遠き國よりきたる好き消息は　渴きたる人における冷かなる水のごとし　二六 義者の惡者の前に
二二 服するは井の濁れるがごとく泉の汚れたるがごとし　二七 蜜をおほく食ふは善らず　人おのれの榮譽をもとむる
二三 は榮譽にあらず　二八 おのれの心を制へざる人は石垣なき壞れたる城のごとし

第二六章

一 榮譽の愚なる者に適はざるは　夏の時に雪ふり　二 故なき詛は雀の翔
二 燕の飛ぶが如くにきたるものにあらず　三 馬の爲には策あり　驢馬の爲には銜あり　愚なる者の背
三 のために杖あり　四 愚なる者の痴にしたがひて答ふること勿れ　恐くはおのれも是と同じからん　五 愚なる者の

二五・二四　箴一五　ウ詩五七・四、一二〇・一、一六・一四　ム箴二五・二七　半但六・一八　羅一二　ノ出二二・四、五　太五・一五　オ傳後一六・一二　ク伯三七・二二　ヤ詩一〇一・五　マ箴一九・一三、二一　ケ箴二五・一六　フ箴二七・二　コ箴一六・三二　エ傳前一二・一七　テ民二三・八　申二三　サ太一六・一—四、二一・二四—二七　ア詩三二・九　箴一〇　ヤ詩一〇一・五

六 痴にしたがひて之に答へよ　恐くは彼おのれの目に自らを智者と見ん　六 愚なる者に托して事を言おくる者は
七 おのれの足をきり身に害をうく　七 跛者の足は用なし　愚なる者の口の箴もかくのごとし
八 に與ふるは　石を投石索に繋ぐが如し　九 愚なる者の口にたもつ箴言は　八 榮譽を愚なる者
九 ごとし　一〇 愚なる者を傭ひ流浪者を傭ふ者は　すべての人を傷くる射手の如し　一一 狗のかへり來りてその吐たる
一〇 物を食ふがごとく　愚なる者は重ねてその痴なる事をおこなふ　一二 汝おのれの目に自らを智慧ある者とする人を
一二 見るか　彼よりも却て愚なる人に望あり　一三 惰者は途に獅あり　衢に獅ありといふ　一四 戸の蝶鉸によりて轉るご
一三 とく　惰者はその牀に輾轉す　一五 惰者はその手を盤にいるゝも之をその口に擧ることを厭ふ　一六 惰者はおのれ
一四 の目に自らを善く答ふる七人の者よりも智慧ありとなす　一七 路をよぎり自己に關りなき爭擾にたづさはる者は
一五 狗の耳をとらふる者のごとし　一八 既にその鄰を欺くことをなして我はたゞ戯れしのみといふ者は　火箭または鎗
一六 または死を擲つ　狂人のごとし　一九 薪なければ火はきえ　人の是非をいふ者なければ爭端はやむ　二〇 煨火に炭を
一七 つぎ火に薪をくぶるがごとく爭論を好む人は爭論を起す　二一 人の是非をいふものの言はたはぶれのごとしと雖も
一八 かへつて腹の奥に入る　二二 溫かき口唇をもちて惡き心あるは　銀の滓をきせたる瓦片のごとし　二三 恨むる者は口唇
一九 をもて自ら飾れども　心の衷には虛僞をいだく　二四 彼その聲を和らかにするとも之を信ずるなかれ　その心に七の
二〇 憎むべき者あればなり　二五 たとひ虛僞をもてその恨をかくすとも　その惡は會集の中に顯はる　二六 坑を掘るものは
二一 自ら之に陷らん　石を轉ばしあぐる者の上にはその石まろびかへらん　二七 虛僞の舌はおのれの害す者を憎み　二八 諂ふ
二二 口は滅亡をきたらす

ヲ 路一二・一九、二〇　カ 約壹三・一二　タ 詩一四一・五　ネ 詩一二七・五
ヨ 箴四・一三　ヨ 箴二八・二三　加二　レ 伯六・七　ナ 箴二二・三五
ワ 箴二五・二七　ソ 箴一七・一七、一八　ツ 箴一〇・一、二三・二四　ラ 出二二・二六　箴　ウ 箴前九・七、一三
イ 彼後二・二二　ロ 出八・二五　箴二九・二〇　路　一八・二一　羅一二　ホ 詩一九・二四　ヘ 弗五・四　ト 箴二二・一〇
一六・一七　歌三・一七　チ 箴一五・一八、二九　ヌ 詩二八・三　耶九・八　五七・六　箴二八・
ル 詩七・一五、一六・八　一〇　傳一〇・八　九・一五、一〇・二、
ム 箴一九・一三　ウ 箴前九・七、一三　ク 箴二三・二五　箴一　ヤ 箴三〇・一六　哈二　マ 箴一七・三
ケ 箴二二・一六　箴　ノ 傳一・八、六・七　コ 箴二五・三　箴一　リ 箴一八・八

第二七章

一 なんぢ明日のことを誇るなかれ　そは一日の生ずるところの如何なるを知ざればなり　二 汝おの
三 れの口をもて自ら讃むることなく人をして己を讃めしめよ自己の口唇をもてせず　他人をして己を
四 石は重く沙は輕からず　然ど愚なる者の怒はこの二よりも重し　四 忿怒は猛く憤恨は烈し　され
五 ほめしめよ　五 明白に譴むるは秘に愛するに愈る　六 愛する者の傷つくるは眞實よりし
六 ど嫉妬の前には誰か立ことを得ん　七 飽るものは蜂の蜜をも踐つく　されど飢たる者には苦き物さへもすべて甘し
七 敵の接吻するは僞詐よりするなり　八 その家を離れてさまよふ人は　その巢を離れてさまよふ鳥のごとし
八 心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯のごとし　九 膏と香とは人の心をよろこばすなり
九 にあふ日に兄弟の家にいることなかれ　親しき鄰は疏き兄弟に愈れり　一〇 なんぢの友と汝の父の友とを棄るなかれ　なんぢ患難
一〇 然ば我をそしる者に我こたふることを得ん　一一 賢者は禍害を見てみづから避け　拙者はすゝみて罰をうく　一二 人
一一 の保證をなす者よりは先その衣をとれ　他人の保證をなす者をば固くとらへよ　一三 晨はやく起て大聲にその鄰を
一二 祝すれば却て呪詛と見なされん　一四 相爭ふ婦は雨ふる日に絶ずある雨漏のごとし　一五 これを制ふるものは風をお
一三 さふるがごとく　右の手に膏をつかむがごとし　一六 鐵は鐵をとぐ　斯のごとくその友の面を研なり　一七 無花果の樹
一四 をまもる者はその果をくらふ　主を貴ぶものは譽を得　一八 水に照せば面と面と相肖るがごとく　人の心は人の心に
一五 似たり　一九 陰府と沈淪とは飽ことなく　人の目もまた飽ことなし　二〇 坩堝によりて銀をためし　爐によりて金をた
一六 めし　その讃らるゝ所によりて人をためす　二一 なんぢ愚なる者を臼にいれ杵をもて麥と偕にこれを搗ともその愚
一七 は去らざるなり　二二 なんぢの羊の情況をよく知り　なんぢの群に心を留めよ　二三 富は永く保つものにあらず

二五 いかで位は世々にたもたん　二五 艸枯れ苗いで山の蔬菜あつめらる　二六 羔羊はなんぢの衣服を出し　牡羊は田圃を
二七 買ふ價となり　二七 牝羊の乳はおほくして汝となんぢの家人の糧となり　汝の女をやしなふにたる

第二八章

一 惡者は逐ふ者なけれども逃げ　義者は獅子のごとくに勇まし　二 國の罪によりて侯伯多くなり
三 智くして知識ある人によりて國は長く保つ　三 弱者を虐ぐる貧人は糧をのこさゞる暴しき雨のごとし
四 律法を棄るものは惡者をほめ　律法を守る者はこれに敵す　五 惡人は義きことを覺らず　ヱホバを求むる者は凡の事をさとる　六 義しくあゆむ貧者は曲れる路をあゆむ富者に愈る　七 律法を守る者は智子なり　放蕩なる者に交るものは父を辱かしむ　八 利息と高利とをもてその財産を增すものは貧者のために之をたくはふるなり　九 耳をそむけて律法を聞ざる者はその祈すらも憎まる　一〇 義者を惡き道に惑す者はみづから自己の陷に陷らん　されど質直なる者は福祉をつぐべし　一一 富者はおのれの目に自らを智慧ある者となす　されど聰明ある貧者は彼をはかり知る　一二 義者の喜ぶときは大なる榮あり　惡者の起るときは民身を匿す　一三 その罪を隱すものは榮ゆることなし　然ど認らはして之を離るゝ者は憐憫をうけん　一四 恒に畏るゝ人は幸福なり　その心を剛愎にする者は災禍に陷るべし　一五 貧しき民を治むるあしき侯伯は　吼る獅子あるひは飢たる熊のごとし　一六 智からざる君はおほく暴虐をおこなふ　不義の利を惡む者は遐齡をうべし　一七 人を殺してその血を心に負ふ者は墓に奔るなり　人これを阻むること勿れ　一八 義く行む者は救をえ　曲れる路に行む者は直に跌れん　一九 おのれの田地を耕す者は糧にあき　放蕩なる者に從ふものは貧乏に飽く　二〇 忠信なる人は多くの幸福をえ　速かに富を得

イ 詩一〇四・一四　ロ 利二六・一七、三六　詩五三・五　ハ 太一八・二八　ニ 詩一〇・三、四九・一八　羅一・三二　ホ 王上一八・一八、二　一 太三・七、一四　詩五・一一　ヘ 詩九二・六　ト 約七・一七　哥前二・一五　チ 箴一九・一、二八・二七　リ 箴一九・三　一八　ヌ 伯二七・一六、一七　箴一三・一二　傳二　ル 亞七・一一　詩六六・一八、一〇　ヲ 九・七　箴一五・八　カ 太六・三三　ヨ 箴一一・一〇、二八・二八、二九・二　傳一〇・六　タ 詩三二・三、五　約壁一・八—一〇　レ 詩一六・八　箴二三　ソ 羅二・五、一一・二〇　ツ 出一・一四、一六、二　二 太二・一六　ネ 彼前五・八　ナ 創九・六　出二一・一七　ラ 箴一〇・九、二五　ム 箴二八・六　ウ 箴一二・一一　キ 箴一三・一一、二〇　ノ 箴一八・五、二四・二三　二八・二二　提前六・九

第二九章

一 しばしば責られてもなほ強項なる者は　救はるゝことなくして猝然に滅されん　二 義者ませば民よろこび　惡きもの權を掌らば民かなしむ　三 智慧を愛する人はその父を悅ばせ　妓婦に交る者はその財産を費す　四 王は公義をもて國を堅うす　されど租稅を征取る者はこれを滅す　五 その鄰に諂ふ者はかれの脚の前に羅を張る　六 惡き人の罪の中には罟あり　然ど義者は歡び樂しむ　七 義きものは貧きものの訟をかへりみる　然ど惡人は之を知ることを願はず　八 嘲笑人は城邑を擾し　智慧ある者は怒をしづむ　九 智慧ある人おろかなる人と爭へば或は怒り或は笑ひて休むことなし　一〇 血をながす人は直き人を惡む　されど義き者はその生命を救はんことを求む　一一 愚なる者はその怒をことごとく露はし　智慧ある者は之を心に藏む　一二 君王もし虛僞の言を聽かばその臣みな惡し　一三 貧者と苛酷者と偕に世にをる　ヱホバは彼等の目に光をあたへ給ふ　一四 眞實をもて弱者を審判する王はその位つねに堅く立つべし　一五 鞭と譴責とは智慧をあたふ　任意になしおかれたる子はその母を辱しむ　一六 惡きもの多ければ罪も亦おほし　義者は彼等の傾覆をみん　一七 なんぢの子を懲せ

ヨ 箴一一・一〇、二八・二八、二九・二　タ 詩四一・一　セ 士一六・一七　箴一二・一六、一四・三三　ス 箴二二・二　イ 太五・四五　ロ 詩七二・二、四、一三、一四　ハ 箴二〇・二八、二五・五　ニ 箴二九・一七　ホ 箴一〇・一、一七・二一・二五　ヘ 詩三七・三六、五八・二〇、九一・八、九二・一一　ト 箴一三・二四、一九・二八、二二・二五、二三・一三、二四、二九・一五　チ 箴一一・一一　リ 箴一九・一一　ヌ 箴五・九、一〇、六・一五・二三、二〇　ル 箴一七・一七　ヲ 詩六六・一八、一〇　カ 太六・二三　ヨ 箴一一・一〇、二八・二八、二九・二　タ 詩三二・三、五　約壁一・八—一〇　レ 詩一六・八　箴二三　ソ 羅二・五、一一・二〇　ツ 出一・一四、一六、二　ネ 彼前五・八　ナ 創九・六　出二一・一七　ラ 箴一〇・九、二五　ム 箴二八・六　ウ 箴一二・一一　キ 箴一三・一一、二〇　ノ 箴一八・五、二四・二三　ヲ 箴一一・一〇　ス 箴二二・二　イ 太五・四五　ロ 詩七二・二、四、一三、一四　ハ 箴二〇・二八、二五・五　ニ 箴二九・一七　ホ 箴一〇・一、一七・二一・二五　ヘ 詩三七・三六、五八・二〇、九一・八、九二・一一　ト 箴一三・二四、一九・二八、二二・二五、二三・一三、二四、二九・一五　チ 箴一一・一一　リ 箴一九・一一　ヌ 箴五・九、一〇、六・一五・二三、二〇　ル 箴一七・一七　ヲ 詩六六・一八、一〇　カ 太六・二三　ヨ 箴一一・一〇、二八・二八、二九・二　タ 詩三二・三、五　約壁一・八—一〇　レ 詩一六・八　箴二三　ソ 羅二・五、一一・二〇　ツ 出一・一四、一六、二　二 太二・一六　ネ 彼前五・八　ナ 創九・六　出二一・一七　ラ 箴一〇・九、二五　ム 箴二八・六　ウ 箴一二・一一　キ 箴一三・一一、二〇　ノ 箴一八・五、二四・二三　ク 箴二八・二〇　ヤ 箴二七・五、六　マ 箴一八・九　ケ 箴一三・一〇　フ 提前六・六　ヨ 申一五・七　箴一九・二七、二二・九　エ 箴二八・一二、二九　テ 伯二四・四　ア 提前二・二五　代下　ス 結二二・三〇　ヒ 太一・一七　モ 創四・五、八　約壁　ス 箴二二・二　イ 太五・四五　ロ 詩七二・二、四、一三、一四　ヘ 詩三七・三六、五八・二〇、九一・八、九二・一一　ト 箴一三・二四、一九・二八、二二・二五、二三・一三、二四、二九・一五　チ 箴一一・一一　リ 箴一九・一一　ヌ 箴五・九、一〇、六・一五・二三、二〇　ル 箴一七・一七　ヲ 詩六六・一八、一〇　カ 太六・二三　ヨ 箴一一・一〇、二八・二八、二九・二　タ 詩三二・三、五　約壁一・八—一〇　レ 詩一六・八　箴二三　ソ 羅二・五、一一・二〇　ツ 出一・一四、一六、二　二 太二・一六　ネ 彼前五・八　ナ 創九・六　出二一・一七　ラ 箴一〇・九、二五　ム 箴二八・六　ウ 箴一二・一一　キ 箴一三・一一、二〇　ノ 箴一八・五、二四・二三　ク 箴二八・二〇　ヤ 箴二七・五、六　マ 箴一八・九　ケ 箴一三・一〇　フ 提前六・六　ヨ 申一五・七　箴一九・二七、二二・九　エ 箴二八・一二、二九　テ 伯二四・四　ア 提前二・二五　代下　ス 結二二・三〇　ヒ 太一・一七　モ 創四・五、八　約壁　ス 箴二二・二　イ 太五・四五　ロ 詩七二・二、四、一三、一四　ヘ 詩三七・三六、五八・二〇、九一・八、九二・一一　ト 箴一三・二四、一九・二八、二二・二五、二三・一三、二四、二九・一五　チ 箴一一・一一　リ 箴一九・一一　ヌ 箴五・九、一〇、六・一五・二三、二〇　ル 箴一七・一七　ヲ 詩六六・一八、一〇　カ 太六・二三　ヨ 箴一一・一〇、二八・二八、二九・二　タ 詩三二・三、五　約壁一・八—一〇　レ 詩一六・八　箴二三　ソ 羅二・五、一一・二〇　ツ 出一・一四、一六、二　二 太二・一六　ネ 彼前五・八　ナ 創九・六　出二一・一七　ラ 箴一〇・九、二五　ム 箴二八・六　ウ 箴一二・一一　キ 箴一三・一一、二〇　ノ 箴一八・五、二四・二三

さらば彼なんぢを安からしめ　又なんぢの心に喜樂を與へん　一八 默示なければ民は放肆にす　律法を守るものは
福ひなり　一九 僕は言をもて譴むるとも改めず　彼は知れども從はざればなり　二〇 なんぢ言を謹まざる人を見しや
彼よりは却て愚なる者に望あり　二一 僕をその幼なき時より柔かに育てなば終には子の如くならしめん　二二 怒る
人は爭端を起し　憤ほる人は罪おほし　二三 人の傲慢はおのれを卑くし　心に謙だる者は榮譽を得　二四 盜人に黨する
者はおのれの靈魂を惡むなり　彼は誓を聽けども說述べず　二五 人を畏るれば罠におちいる　ヱホバをたのむ者は護
られん　二六 君の慈悲を求むる者はおほし　然れど人の事を定むるはヱホバによる　二七 不義をなす人は義者の惡む
ところ　義くあゆむ人は惡者の惡むところなり

第三〇章

一 ヤケの子アグルの語なる箴言　とにいへる所のものなり　二 我は人よりも愚なり　我には人の聰明あらず　三 我いまだ智慧をならひ得ず　またいまだ至聖ものを曉ることをえず　四 天に昇りまた降りし者は誰か　風をその掌中に聚めし者は
誰か水を衣につゝみし者は誰か　地のすべての限界を定めし者は誰か　その名は何ぞ　その子の名は何ぞ　汝これを
知るや　五 神の言はみな潔よし　神は彼を賴むものの盾なり　六 汝その言に加ふること勿れ　恐くは彼なん
ぢをせめ　又なんぢを謊る者となしたまはん　七 われ二つの事をなんぢに求めたり　我が死ざる先にこれを
たまへ　八 即ち虛假と謊言とを我より離れしめ　我をして貧からしめずまた富しめず　惟なくてならぬ糧をあたへ
給へ　九 そは我あきて神を知ずといひヱホバは誰なりやといはんことを恐れ　また貧くして竊盜をなし我が神の

イ 傳前三・一　廢八・二　箴一五・一八、二六　ロ 約一三・一七　雅一　ホ 伯二二・二九　箴一　ヘ 利五・一　ト 創一二・一二、二〇　チ 詩二〇・九　箴一九　リ 箴三一・一　ヌ 詩七三・二二　ル 約三・一三　ヲ 伯三八・四　詩一〇　ワ 詩一二・六、一八・三　ヨ 申四・二、一二・三二　タ 太六・一一　レ 申八・一二、一四、一　ソ 路一八・一一　箴六　ネ 伯二九・一七　詩　ナ 詩一四・四　廢八・四　ム 創九・二二　利二〇　ウ 箴一九・一〇　傳　ノ 詩一〇四・一八　オ 伯二一・五、四〇・四　傳八・三　米七・一六　ツ 詩一三一・一　箴六　ラ 箴二七・二〇　哈二　ク 箴一〇・七　ヤ 箴六・六

名を汚さんことを恐るればなり　一〇 なんぢ僕をその主に讒ることなかれ　恐くは彼なんぢを詛ひてなんぢ罪
せられん　二 その父を詛ひその母を祝せざる世類あり　三 おのれの目に自らを潔き者となして尙その汚穢を
滌はれざる世類あり　四 また一の世類あり　嗚呼、その眼はいかに高きぞや　その瞼は昂れり　五 その齒は劍のご
とく　その牙は刃のごとき世類あり　彼等は貧き者を地より呑み　窮乏者を人の中より食ふ　六 蛭に二人の女
あり　與へよ與へよと呼はる　飽ことを知ざるもの三あり　否な四あり皆たれりといはず　七 即ち陰府　姙まざる胎
水に滿されざる地　足りといはざる火これなり　八 おのれの父を嘲り母に從ふことをいやしとする眼は　谷の鴉こ
れを拔いだし　鷲の雛これを食はん　九 わが奇とするもの三あり　否な四あり共にわが識ざる者なり　一〇 即ち空
にとぶ鷲の路　磐の上にはふ蛇の路　海にはしる舟の路　男の女にあふの路これなり　一一 淫婦の途も亦しかり　彼は
食ひてその口を拭ひ　われ惡きことを爲ざりきといふ　一二 地は三の者によりて震ふ　否な四の者によりて耐る
ことあたはざるなり　一三 即ち僕たるもの王となるに因り　愚なるもの糧に飽るにより　一四 厭忌はれたる婦の嫁ぐに
より　婢女その主母に續に因りてなり　一五 地に四の物あり　微小といへども最智し　一六 蟻は力なき者なれども
その糧を夏のうちに備ふ　一七 山鼠は强からざれどもその室を磐につくる　一八 蝗は王なけれどもみな隊を立ていづ
一九 守宮は手をもてつかまり王の宮にをる　二〇 善あゆむもの三あり　否な四あり皆よく歩く　二一 獸の中にて
最も強くもろもろのものの前より退かざる獅子、　二二 肚帶せし戰馬　牡野羊　および當ること能はざる王これなり
二三 汝もし愚にして自から高ぶり或は惡きことを計らば汝の手を口に當つべし　二四 それ乳を搾れば乾酪いで
鼻を搾れば血いで　怒を激ふれば爭端おこる

第三一章

一 レムエル王のことば即ちその母の彼に敎へし箴言なり　二 わが子よ何を言んか わが胎の子よ何をいはんか 我が願ひて得たる子よ何をいはんか　三 なんぢの力を女につひやすなかれ 王を滅すものに汝の途をまかする勿れ　四 レムエルよ 酒を飲は王の爲べき事に非ず 王の爲べき事にあらず 醇醪を求むるは牧伯の爲すべき事にあらず　五 恐くは酒を飲て律法をわすれ 且すべて惱まさるゝ者の審判を枉げん　六 醇醪を亡びんとする者にあたへ 酒を心の傷める者にあたへよ　七 かれ飲てその貧窮をわすれ 復その苦楚を憶はざるべし　八 なんぢ瘖者のため又すべての孤者の訟のために口をひらけ　九 なんぢ口をひらきて義しき審判をなし 貧 者と窮乏者の訟を糺せ　一〇 誰か賢き女を見出すことを得ん その價は眞珠よりも貴とし　一一 その夫の心は 彼を恃み その產業は乏しくならじ　一二 彼が存命ふる間はその夫に善事をなして惡き事をなさず　一三 彼は羊の毛と麻とを求め 喜びて手から操き　一四 商賈の舟のごとく遠き國よりその糧を運び　一五 夜のあけぬ先に起てその家人に糧をあたへ その婢女に日用の分をあたふ　一六 田畝をはかりて之を買ひ その手の操作をもて葡萄園を植ゑ　一七 力をもて腰に帶し その手を強くす　一八 彼はその利潤の益あるを知る その燈火は終夜きえず　一九 かれ手を紡線車にのべ その指に紡錘をとり　二〇 手を貧 者にのべ 手を困苦者に舒ぶ　二一 彼は家人の爲に雪をおそれず 蓋その家人みな蕃紅の衣をきればなり　二二 彼はおのれの爲に美しき褥子をつくり 細布と紫とをもてその衣とせり　二三 その夫はその地の長老とともに邑の門に坐するによりて人に知るゝなり　二四 彼は細布の衣を製りてこれをうり 帶をつくりて商賈にあたふ　二五 彼は筋力と尊貴とを衣とし且のちの日を笑ふ　二六 彼は口を啓きて智慧をのぶ 仁愛の敎誨その舌にあり　二七 かれはその家の事を鑒み 怠惰の糧を食はず　二八 その衆子は起て彼を祝す その夫も彼を讃ていふ　二九 賢く事をなす女子は多けれども 汝はすべての女子に愈れり　三〇 艶麗は いつはりなり 美色は呼吸のごとし 惟エホバを畏るゝ女は譽られん　三一 その手の操作の果をこれにあたへ その行爲によりてこれを邑の門にほめよ

イ箴三〇・一　ロ箴四九・一五　ハ箴五・九　ニ申一七・一七　尼一　ホ傳一〇・一七　ヘ何四・一一　ト詩一〇四・一五　チ伯二九・一五、一六　リ撮前一九・四　ヌ利一九・一五　申一・一七　耶二二・一六　ワ羅一二・一一　カ路一二・四二　ヨ弗四・二八　タ箴一二・四　レ伯二九・一二　ソ箴一二・四、一八　ツ箴一二・一九・一四　ネ箴一三・一六　ナ箴一三・一六　ラ箴一二・一九・一四　ム箴一三・一六　ウ何四・一一　ヰ箴七・二六　ノ箴一九・四　オ箴一九・一五　ク箴一九・一六　ヤ箴一九・一六　マ箴一九・一六　ケ箴一九・一六　フ箴一九・一六　コ箴一九・一六　エ箴一九・一六　テ箴一九・一六　ア箴一九・一六　サ箴一九・一六　キ箴一九・一六　ユ箴一九・一六　メ箴一九・一六　ミ箴一九・一六　シ箴一九・一六　ヒ箴一九・一六　モ箴一九・一六　セ箴一九・一六　ス箴一九・一六　ン箴一九・一六

傳道之書

第一章

一 ダビデの子 エルサレムの王 傳道者の言

二 傳道者言く 空の空 空の空なる哉 都て空なり

三 日の下に人の勞して爲ところの諸〻の動作は

四 その身に何の益かあらん 世は去り世は來る 地は永久に長存なり

五 日は出で日は入り またその出し處に喘ぎゆくなり

六 風は南に行き又轉りて北にむかひ 旋轉に旋りて行き 風復その旋轉る處にかへる

七 河はみな海に流れ入る 海は盈ること無し 河はその出きたれる處に復還りゆくなり

八 萬の物は勞苦す 人これを言つくすことあたはず 目は見に飽ことなく耳は聞に充ること無し

九 曩に有し者はまた後にあるべし 曩に成し事はまた後に成べし 日の下には新しき者あらざるなり

一〇 見よ是は新しき者なりと指て言べき物あるや 其は我等の前にありし世々に既に久しくありたる者なり

一一 已前のものの事はこれを記憶ることなし 以後のものの事もまた後に出る者これをおぼゆることあらじ

一二 われ傳道者はエルサレムにありてイスラエルの王たりき

一三 我心を盡し智慧をもちひて天が下に行はるゝ諸の事を尋ねかつ考覈たり 此苦しき事件は神が世の人にさづけて之に身を勞せしめたまふ者なり

一四 我日の下に作ところの諸〻の行爲を見たり 嗚呼皆空にして風を捕ふるがごとし

一五 曲れる者は直からしむるあたはず 缺たる者は數をあはするあたはず

一六 我心の中に語りて言ふ 嗚呼我は大なる者となれり 我より先にエルサレムにをりしすべての者よりも我は多くの智慧を得たり 我心は智慧と知識を多く得たり

一七 我心を盡して智慧を知んとし狂妄と愚癡を知んとしたりしが 是も亦風を捕ふるがごとくなるを曉れり

一八 夫智慧多ければ憤激多し 知識を增す者は憂患を增す

イ傳一・一二、七・二　ロ詩三九・五、六、六二　ハ箴八・二〇　ニ傳二・二二、三・九、一〇四・八、九　ホ詩一〇四・五、一一　ヘ詩一九・五、六　ト約三・八　チ伯三八・一〇　詩　リ箴二七・二〇　ヌ傳三・一五　ル傳一・一　ヲ創三・一九　傳三・　ワ傳七・一三　カ王上三・一二、一三、四・三〇、一〇・七、　ヨ傳二・三、一二、七、二三、二五　タ傳一・一二　レ詩一二・一九　ソ箴五〇・一一　ツ箴一四・一三　傳七　ナ王上九・二八、一〇　ム傳三・二二、五・一　ネ傳一・一七　ラ傳一・一六　ウ傳一・三、一四　ヰ傳一・一七、七・二五

第二章

一 我わが心に言けらく 來れ我試みに汝をよろこばせんとす 汝逸樂をきはめよと 嗚呼是もまた空なりき

二 我笑を論ふ是は狂なり 快樂を論ふ是何の爲ところあらんやと

三 我心に智慧を懷きて居つゝ酒をもて肉身を肥さんと試みたり 又世の人は天が下において生涯如何なる事をなさば善らんかを知んためにわれは愚なる事を行ふことをせり

四 我は大なる事業をなせり 我はわが爲に家を建て葡萄園を設け

五 園をつくり囿をつくり 又菓のなる諸〻の樹を其處に植ゑ

六 また水の塘池をつくりて樹木の生茂れる林に其より水を灌がしめたり

七 我は僕婢を買得たり また家の子あり 我はまた凡て我より前にエルサレムにをりし者よりも衆多の牛羊を有り

八 我は金銀を積み 王等と國々の財寶を積あげたり また歌詠之男女を得 世の人の樂なる妻妾を多くえたり

九 斯我は大なる者となり 我より前にエルサレムにをりし諸の人よりも大になりぬ 吾智慧もまたわが身を離れざりき

一〇 凡そわが目の好む者は我これを禁ぜず 凡そわが心の悅ぶ者は我これを禁ぜざりき

一一 即ち我はわが諸〻の勞苦によりて快樂を得たり 是は我が諸〻の勞苦によりて得たるところの分なり

一二 我わが手にて爲たる諸の事業および我が勞して事を爲たる勞苦を顧みるに 皆空にして風を捕ふるが如くなりき 日の下には益となる者あらざるなり

一三 我また身を轉らして智慧と狂妄と愚癡とを觀たり 抑王に嗣ぐところの人は如何なる事を爲うるや その既になせしところの事に過ざるべし

一四 光明の黑暗にまさるがごとく智慧は愚癡に勝るなり 我これを曉れり

一四 智者の目はその頭にあり愚者は黑暗に歩む 然ど我しる其みな遇ふところの事は同一なり 一五 我心に謂けらく
一五 愚者の遇ふところの事に我もまた遇ふべければ 我なんぞ智慧のまさる所あらんや 我また心に謂へり是も亦空なる
一六 のみと 一六 夫智者も愚者と均しく永く世に記念らるゝことなし 來らん世にいたれば皆早く既に忘らるゝなり
一七 嗚呼智者の愚者とおなじく死るは是如何なる事ぞや 一七 是に於て我世にながらふることを厭へり 凡そ日の下に
爲ところの事は我に惡く見ればなり 即ち皆空にして風を捕ふるがごとし
一八 我は日の下にわが勞して 諸の動作をなしたるを恨む 其は我の後を嗣ぐ人にこれを遺さゞるを得ざれば
一八 なり 一九 其人の智愚は誰かこれを知らん然るにその人は日の下に我が勞して爲し智慧をこめて爲たる 諸の工作
一九 を管理るにいたらん是また空なり 二〇 我身をめぐらし日の下にわが勞して爲たる 諸の動作のために望を失へり
二〇 二一 今茲に人あり 智慧と知識と才能をもて勞して事をなさんに終には之がために勞せざる人に一切を遺してその
二一 所有となさしめざるを得ざるなり 是また空にして大に惡し 二二 夫人はその日の下に勞して爲ところの諸の動作
二二 とその心 勞によりて何の得ところ有るや 二三 その世にある日には常に憂患あり その勞苦は苦し その心は夜の
二三 間も安んずることあらず 是また空なり
二四 人の食飲をなしその勞苦によりて心を樂しましむるは幸福なる事にあらず 是もまた神の手より出るなり
二四 二五 誰かその食ふところその歡樂を極むるところに於て我にまさる者あらん 二六 神はその心に適ふ
二五 我これを見る
二六 人には智慧と知識と喜樂を賜ふ 然れども罪を犯す人には勞苦を賜ひて斂めかつ積ことを爲さしむ 是は其を神の
心に適ふ人に與へたまはんためなり 是もまた空にして風を捕ふるがごとし

イ 箴一七・二四 傳八 ハ 詩四九・一〇 ロ 詩四九・一〇 傳九 ニ 傳一・三、三・九 永 伯五・七、一四・一 ヘ 傳三・一二、一三、二二、五・一八、八 ト 伯二七・一六、一七、箴二八・八

第三章

一 天が下の萬の事には期あり 萬の事務には時あり 植たる者を拔く時あり 二 生るゝに時あり死るに時あり 植るに時あり
三 殺すに時あり醫すに時あり 毀つに時あり 建るに時あり 四 泣に時あり
笑ふに時あり 悲むに時あり 躍るに時あり 五 石を擲つに時あり石を斂むるに時あり 懷くに時あり懷くことをせ
ざるに時あり 六 得に時あり失ふに時あり 保つに時あり棄るに時あり 七 裂に時あり縫に時あり 默すに時あり
語るに時あり 八 愛しむに時あり惡むに時あり 戰ふに時あり和ぐに時あり 九 働く者はその勞して爲ところより
して何の益を得んや 一〇 我神が世の人にさづけて身をこれに勞せしめたまふところの事件を視たり 一一 神の爲し
たまふところは皆その時に適ひて美麗しかり 神はまた人の心に永遠をおもふの思念を賦けたまへり 然ば人は神
のなしたまふ作爲を始より終まで知明むることを得ざるなり 一二 我知る人の中にはその世にある時に快樂をなし
善をおこなふより外に善事はあらず 一三 また人はみな食飲をなしその勞苦によりて逸樂を得べきなり 是すなはち
神の賜物たり 一四 我知る凡て神のなしたまふ事は限なく存せん 是は加ふべき所なく是は減すべきところ無し 神
の之をなしたまふは人をしてその前に畏れしめんがためなり 一五 昔ありたる者は今もあり 後にあらん者は既に
ありし者なり 神はその逐やられし者を索めたまふ
一六 我また日の下を見るに審判をおこなふ所に邪曲なる事あり 公義を行ふところに邪曲なる事あり 一七 我すな
はち心に謂けらく神は義者と惡者とを鞫きたまはん 彼處においては萬の事と萬の所爲に時あるなり 一八 我また
心に謂けらく是事あるは是世の人のためなり 即ち神は斯世の人を撿して之にその獸のごとくなることを自ら曉
らしめ給ふなり 一九 世の人に臨むところの事はまた獸にも臨む この二者に臨むところの事は同一にして是も死ば

ヌ 耳二・一六 哥前七 ル 慶五・一三 ヲ 路一四・二六 ワ 傳一・三 カ 傳一・一三 ヨ 傳八・一七 羅一一 タ 傳三・二二 レ 傳二・二四
チ 傳三・一七、八・六 リ 來九・二七 ソ 雅一・一七 ツ 傳一・九 ネ 傳五・八 ナ 羅二・六—八 哥後五・一〇、六、七 ラ 傳三・一 ム 詩四九・一二、二〇、七三・二二 傳二・

二〇 彼も死るなり 皆同一の呼吸に依れり 人は獸にまさる所なし皆空なり　二〇 皆一の所に往く 皆塵より出で皆塵に
二一 かへるなり　二一 誰か人の魂の上に昇り獸の魂の地にくだることを知ん　二二 然ば人はその動作によりて逸樂をなす
二二 に如はなし 是その分なればなり 我これを見る その身の後の事は誰かこれを携へゆきて見さしむる者あらんや

第四章

一 一 茲に我身を轉して日の下に行はるゝ諸の虐遇を視たり 嗚呼虐げらるゝ者の涙ながら 之を慰む
二 る者あらざるなり また虐ぐる者の手には權力あり 彼等はこれを慰むる者あらざるなり
三 生る生者よりも既に死たる死者をもて幸なりとす　三 またこの二者よりも幸なるは未だ世にあらずして日の下に
四 おこなはるゝ惡事を見ざる者なり　四 我また諸の勞苦と諸の工事の精巧とを觀るに 是は人のたがひに嫉みあひて成せる者たるなり 是も空
五 にして風を捕ふるが如し　五 愚なる者は手を束ねてその身の肉を食ふ　六 片手に物を盈て平穩にあるは 兩手に
六 物を盈て勞苦て風を捕ふるに愈れり
七 七 我また身をめぐらし日の下に空なる事のあるを見たり　八 茲に人あり只獨にして伴侶もなく子もなく兄弟
八 もなし 然るにその勞苦は都て窮なくその目は富に飽ことなし 彼また言ず嗚呼我は誰がために勞するや何とて
九 我は心を樂ませざるやと 是もまた空にして勞力の苦き者なり　九 二人は一人に愈る其はその勞苦のために善報を
一〇 得ればなり　一〇 即ちその跌倒る時には一箇の人その伴侶を扶けおこすべし 然ど孤身にして跌倒る者は憐なるかな
一一 之を扶けおこす者なきなり　一一 又二人ともに寢れば溫煖なり 一人ならば爭で溫煖ならんや　一二 人もしその一人を
一二 攻擊ば二人してこれに當るべし 三根の繩は容易く斷ざるなり

イ 創三・一九　ロ 傳一二・七　ハ 傳二・二四、三・一二　ニ 傳二・一〇　ホ 傳六・一二、八・七、一二、五・一八、一一・九　ヘ 傳三・一六、五・八　ト 伯三・一七　チ 伯三・一一、一六、二一　傳六・三　リ 歌六・一〇、二四・三三　ヌ 歌一五・一六、一七、一六・八　ル 歌二七・一〇　一二・一六　約壹一・一六　ヲ 詩三九・六

一三 貧くして賢き童子は 老て愚にして諫を納れざる王に愈る　一四 彼は牢獄より出て王となれり 然どその國に
一五 生れし時は貧かりき　一五 我日の下にあゆむところの群生が彼王に續てこれに代りて立ところの童子とともにある
一六 を觀たり　一六 民はすべて際限なし その前にありし者みな然り 後にきたる者また彼を悅ばず 是も空にして風を
捕ふるがごとし

第五章

一 一 汝エホバの室にいたる時にはその足を愼め 進みよりて聽聞は愚なる者の犧牲にまさる 彼等は
二 めて妄に言をいだすなかれ 其は神は天にいまし汝は地にをればなり　二 汝神の前にありては輕々しく口を開くなかれ 心を攝
三 の繁多によりて生じ 愚なる者の聲は言の衆多によりて識るなり　三 然ば汝の言詞を少からしめよ　三 夫夢は事
四 なかれ 神は愚なる者を悅びたまはざるなり 汝はそのかけし誓願を還すべし　四 汝神に誓願をかけなば之を還すことを怠る
五 よりは寧ろ誓願をかけざるは汝に善し　五 誓願をかけてこれを還さゞる
六 汝の口をもて汝の身に罪を犯さしむるなかれ 亦使者の前に其は過誤
七 なりといふべからず 恐くは神汝の言を怒り汝の手の所爲を滅したまはん　七 夫夢多ければ空なる事多し 言詞の
八 多きもまた然り 汝エホバを畏め
八 汝國の中に貧き者を虐遇る事および公道と公義を枉ることあるを見るもその事あるを怪むなかれ 其は
九 その位高き人よりも高き者ありてその人を伺へばなり 又其等よりも高き者あるなり　九 國の利益は全く是にあり
一〇 即ち王者が農事に勤むるにあるなり
一〇 銀を好む者は銀に飽ことを無し 豐富ならんことを好む者は得るところ有らず 是また空なり　一一 貨財增せば

ワ 出三・五、申一・一二　カ 傳前一五・二二　詩五〇・八　箴一五・ヨ　箴一〇・一九　太六　レ 民三〇・二　申二三　ソ 詩六六・一三、一四　ネ 傳一二・一三　タ 箴一〇・一九　ツ 箴二〇・二五　徒五　ナ 傳三・一六　ラ 詩一二・五、五八・一一、八二・一

一二 これを食む者も増すなり その所有主は唯目にこれを看るのみ その外に何の益かあらん
一三 勞する者はその食ふ
ところは多きも少きも快く睡るなり 然れども富者はその貨財の多きがために睡ることを得せず
一三 我また日の下に患の大なる者あるを見たり すなはち財寶のこれを蓄ふる者の身に害をおよぼすことある
一四 是なり その財寶はまた災難によりて失落ことあり 然ばその人子を擧ることあらんもその手には何物もある
一五 ことなし 人は母の胎より出て來りしごとくにまた裸體にして皈りゆくべし その勞苦によりて得たる者を毫厘
一六 も手にとりて携へゆくことを得ざるなり 人は全くその來りしごとくにまた去ゆかざるを得ず 是また患の大
一七 なる者なり 抑風を追て勞する者何の益をうること有んや 人は生命の涯黑暗の中に食ふことを爲す また憂愁
多かり 疾病身にあり 憤怒あり
一八 視よ我は斯觀たり 人の身にとりて善かつ美なる者は 神にたまはるその生命の極食飲をなし 且その日の
一九 下に勞して働ける勞苦によりて得るところの福祿を身に享るの事なり 是その分なればなり 何人によらず神が
これに富と財を與へてそれに食ことを得せしめ またその分を取りその勞苦によりて快樂を得ることをせさせ
二〇 たまふあれば その事は神の賜物たるなり かゝる人はその年齡の日を憶ゆること深からず 其は神これが心の
喜ぶところにしたがひて應ることを爲したまへばなり

第六章

一 我觀るに日の下に一件の患あり 是は人の間に恒なる者なり 二 すなはち神富と財と貴を人に
あたへて その心に慕ふ者を一件もこれに缺ることなからしめたまひながらも 神またその人に之を
食ふことを得せしめたまはずして 他人のこれを食ふことあり 是空なり惡き疾なり 三 假令人百人の子を擧け

イ 傳六・一
ロ 伯一・二一 詩四九・七 提前六・七
ハ 箴一一・二九 詩四九 ニ 傳一・三 ホ 詩一二七・二
ヘ 傳二・二四、三・一 二、一三、二二、九・一三、三・二一 ト 傳二・一〇、三・二二 七、一一・九 提前 チ 傳二・二四、三・ヌ 伯二・一〇 詩一 六・一七 一三、六・二 七・一四、七三・七 リ 傳五・二三 ル 路一二・二〇

また長壽してその年齡の日多からんも 若その心景福に滿足せざるか又は葬らるゝことを得ざるあれば 我言ふ
流産の子はその人にまさるなり 夫流産の子はその來ること空しくして黑暗の中に去ゆきその名は黑暗の中に
かくるゝなり 又是は日を見ることなく物を知ることなければ彼よりも安泰なり 人の壽命千年に倍するとも
福祉を蒙れるにはあらず 皆一所に往くにあらずや
七 人の勞苦は皆その口のためなり その心はなほも飽ざるところ有り 八 賢者なんぞ愚者に勝るところ
あらんや また世人の前に歩行ことを知ところの貧者も何の勝るところ有んや 九 目に觀る事物は心のさまよひ
歩くに愈るなり 是また空にして風を捕ふるがごとし
一〇 嘗て在し者は久しき前にすでにその名を命られたり 即ち是は人なりと知る 然ば是はかの自己よりも力
強き者と爭ふことを得ざるなり 一一 衆多の言論ありて虛浮き事を增す然ど人に何の益あらんや 一二 人はその虛空
き生命の日を影のごとくに送るなり 誰かこの世において如何なる事か人のために善き者なるやを知ん 誰かその
身の後に日の下にあらんところの事を人に告うる者あらんや

第七章

一 名は美膏に愈り 死る日は生るゝ日に愈る 二 哀傷の家に入は宴樂の家にいるに愈る 其は一切の
人の終かくのごとくなればなり 生る者またこれをその心にとむるあらん 三 悲哀は嬉笑に愈る 其
は面に憂色を帶るなれば心も善にむかへばなり 四 賢き者の心は哀傷の家にあり 愚なる者の心は喜樂の家にあり
五 賢き者の勸責を聽は愚なる者の歌詠を聽に愈るなり 六 愚なる者の笑は釜の下に焚る荊棘の聲のごとし
是また空なり 七 賢き人も虐待る事によりて狂するに至るあり 賄賂は人の心を壞なふ

ヲ 王下九・三五 賽 ワ 伯三・一六 詩五八 ヨ 伯九・三二 箴四五 ソ 箴一五・三〇、二二 ネ 詩一四一・五 箴 ナ 詩一一八・一二 傳 一九 一四・一九、二〇 耶 ヨ 傳四・三 四 雅四・一四 ○九・二三、一四四・ 一・九 耶四九・一九 タ 詩一〇二・一二、一 レ 詩三九・六 傳八・七 ツ 哥後七・一〇 一三、一八、一五・ 三二、三三 二・二 ラ 出二三・八 申一六

八 事の終はその始よりも善し　容忍心ある者は傲慢心ある者に勝る　九 汝氣を急くして怒るなかれ　怒は愚な
一〇 る者の胸にやどるなり　一〇 昔の今にまさるは何故ぞやと汝言なかれ　汝の斯る問をなすは是智慧よりいづる者に
あらざるなり
一一 智慧の上に財産をかぬれば善し　然れば日を見る者等に利益おほかるべし　一二 智慧も身の護庇となり銀子
一三 も身の護庇となる　然ど智慧はまたこれを有る者に生命を保しむ　是知識の殊勝たるところなり　一三 汝神の作爲を
一四 考ふべし　神の曲たまひし者は誰かこれを直くすることを得ん　一四 幸福ある日には樂め　禍患ある日には考へよ
一五 神はこの二者をあひ交錯て降したまふ　是は人をしてその後の事を知ることなからしめんためなり
一五 我この空の世にありて各樣の事を見たり　義人の義をおこなひて亡ぶるあり　惡人の惡をおこなひて
一六 長壽あり　一六 汝義に過るなかれまた賢に過るなかれ　汝なんぞ身を滅すべけんや　一七 汝惡に過るなかれ
一八 また愚なる勿れ　汝なんぞ時いたらざるに死べけんや　一八 汝此を執は善しまた彼にも手を放すなかれ　神を畏む
者はこの一切の者の中より逃れ出るなり
一九 智慧の智者を帮くることは邑の豪雄者十人にまさるなり　二〇 正義して善をおこなひ罪を犯すことなき人は
二一 世にあることなし　二一 人の言出す言詞には凡て心をとむる勿れ　恐くは汝の僕の汝を詛ふを聞こともあらん
二二 汝も屢人を詛ふことあるは汝の心に知ところなり
二三 我智慧をもてこの一切の事を試み我は智者とならんと謂たりしが遠くおよばざるなり　二四 事物の理は遠く
二五 して甚だ深し　誰かこれを究むることを得ん　二五 我は身をめぐらし心をもちひて物を知り事を探り　智慧と道理を

イ 箴一四・二九　ロ 箴一四・一七、一六・三二　ハ 傳一一・七　ニ 伯一二・一四　傳一・一五　ホ 申二八・四七　傳三・四　ヘ 傳八・一四　ト 箴二五・一六　チ 羅一二・三　リ 伯一五・三二　詩五五・二三　箴一〇　ヌ 箴二二・二二、二四・　ル 王上八・四六　代下六・三六　箴二〇・九　ヲ 羅一・二二　カ 羅一・一三

二六 索めんとし　又惡の愚たると愚癡の狂妄たるを知んとせり　二六 我了れり　婦人のその心羅と網のごとくその手縲絏
二七 のごとくなる者は是死よりも苦き者なり　神の悅びたまふ者は之を避ることを得ん罪人は之に執らるべし　二七 傳道
二八 者言ふ　視よ我その數を知んとして一々に算へてつひに此事を了る　二八 我なほ尋ねて得ざる者は是なり　我千人の
二九 中には一箇の男子を得たれども　その數の中には一箇の女子をも得ざるなり　二九 我了れるところは唯是のみ　即ち
神は人を正直者に造りたまひしに人衆多の計略を案出せしなり

第八章

一 誰か智者に如ん誰か事物の理を解ことを得ん　人の智慧はその人の面に光輝あらしむ　又その粗暴
二 面も變改べし　二 我言ふ王の命を守るべし既に神をさして誓ひしことあれば然るべきなり　三 早まり
三 て王の前を去ることなかれ　惡き事につのること勿れ　其は彼は凡てその好むところを爲ばなり　四 王の言語には
四 權力あり　然ば誰か之に汝何をなすやといふことを得ん　五 命令を守る者は禍患を受るに至らず　智者の心は時期
五 と判斷を知なり　六 萬の事務には時あり判斷あり是をもて人大なる禍患をうくるに至るあり　七 人は後にあらん
六 ところの事を知ず　また誰か如何なる事のあらんかを之に告る者あらん　八 靈魂を掌管て靈魂を留めうる人あらず
七 人はその死る日には權力あること无し　此戰爭には釋放たるゝ者あらず　又罪惡はこれを行ふ者を救ふことを得せ
八 ざるなり
九 我この一切の事を見また日の下におこなはるゝ諸の事に心を用ひたり時としては此人彼人を治めてこれに
一〇 害を蒙らしむることあり　一〇 我見しに惡人の葬られて安息にいるあり　また善をおこなふ者の聖所を離れてその
一一 邑に忘らるゝに至るあり是また空なり　一一 惡き事の報速にきたらざるが故に世人心を專にして惡をおこなふ

ヨ 傳一・一七、二・一二　レ 傳一・一、二　タ 箴五・三、四、二二・一四　ソ 伯三三・二三　詩一二・一　ツ 創一・二七　ネ 創三・六、七　ナ 箴四・八、九、一七・二四　ラ 申二八・五〇　ム 代上二九・二四　結二四・五　ウ 傳一〇・四　ヰ 伯三四・一八　ノ 傳三・一　オ 箴二四・二二　傳六・一二、九・一二、一〇・一四　ク 伯一四・五　詩四九・六、七、五〇・一七・一八　羅一三　キ 伯三四・一八　ノ 傳三・一　オ 箴二四・二二　傳六　ク 伯一四・五　詩四九　ヤ 詩一〇・六、七　二一　雅二六・一〇

一二 罪を犯す者百次惡をなして猶長命あれども我知る神を畏みてその前に畏怖をいだく者には幸福あるべし
一三 但し惡人には幸福あらず またその生命も長からずして影のごとし 其は神の前に畏怖をいだくことなければ
なり
一四 我日の下に空なる事のおこなはるゝを見たり 即ち義人にして惡人の遭べき所に遭ふ者あり 惡人にし
一五 て義人の遭べきところに遭ふ者あり 我謂り是もまた空なり 是に於て我喜樂を讃む 其は食飲して樂むより
も好き事は日の下にあらざればなり 人の勞して得る物の中是こそはその日の下にて神にたまはる生命の日の間
その身に離れざる者なれ
一六 茲に我心をつくして智慧を知らんとし世に爲ところの事を究めんとしたり 人は夜も晝もその目をとぢて
一七 眠ることをせざるなり 我神の諸〳〵の作爲を見しが人は日の下におこなはるゝところの事を究むるあたはざる
なり 人これを究めんと勞するもこれを究むることを得ず 且又智者ありてこれを知ると思ふもこれを究むること
あたはざるなり

第九章

一 我はこの一切の事に心を用ひてこの一切の事を明めんとせり 即ち義き者と賢き者およびかれら
の爲ところは神の手にあるなるを明めんとせり 愛むや惡むやは人これを知ることなし一切の事は
その前にあるなり
二 諸の人に臨む所は皆同じ 義き者にも惡き者にも善者にも 淨者にも穢れたる者にも 犧牲を献ぐる者にも
犧牲を献げぬ者にもその臨むところの事は同一なり 善人も罪人に異ならず 誓をなす者も誓をなすことを畏るゝ

イ 申六五・二〇 羅二 一九 箴一・三二、四一 ・五 ・三三 ・申三・一〇、 ・三・一三、二二、五・ 一四、一五 ・二〇、三九、一七 二二
ロ 詩三七・一一、一八、 一一 太二五・三四、 ハ 詩七三・一四 傳二 ニ 傳二・二四、三・一 九・一—三 二、二二、五・一八、 ホ 伯五・九 傳三・一一 九・七 ヘ 詩七三・一六 ト 傳八・一四 ・三、一二、一三 馬 ・二六 ・三・一五 羅一・三三 チ 伯二一・七 詩七三
リ 伯一四・二一 箴 ル 傳八・一五 二六・一四 ヌ 伯七・八—一〇 箴 ヲ 傳二・一〇、二四、 ワ 申九・二三 箴二 ヨ 箴二九・六 路一二 タ 傳徒二〇・一六—

三 諸の人に臨むところの事の同一なるは是日の下におこなはるゝ事の中の惡き者たり 抑人の心
四 には惡き事充をり その生る間は心に狂妄を懷くあり 後には死者の中に往くなり 凡活る者の中に列る者は望
五 あり 其は生る犬は死る獅子に愈ればなり 生者はその死んことを知る 然ど死る者は何事をも知ずまた應報を
六 うくることも重てあらず その記憶らるゝ事も遂に忘れらるゝに至る 又またその愛も惡も嫉も既に消うせ
七 て彼等は日の下におこなはるゝ事に最早何時までも關係ことあらざるなり
八 汝往て喜悅をもて汝のパンを食ひ樂き心をもて汝の酒を飲め 其は神久しく汝の行爲を嘉納たまへばなり
九 汝の衣服を常に白からしめよ 汝の頭に膏を絶しむるなかれ 日の下に汝が賜はるこの汝の空なる生命の日
の間汝 その愛する妻とともに喜びて度生せ 汝の空なる生命の日の間しかせよ 是は汝が世にありて受る分汝が
一〇 日の下に働ける勞苦によりて得る者なり 凡て汝の手に堪ることは力をつくしてこれを爲せ 其は汝の往んと
ころの陰府には工作も計謀も知識も智慧もあることなければなり
一一 我また身をめぐらして日の下を觀るに 迅速者走ることに勝にあらず强者戰爭に勝にあらず 智慧者食物を
一二 獲にあらず 明哲人財寶を得にあらず 知識人恩顧を得にあらず 凡て人に臨むところの事は時ある者偶然なる者
なり 人はまたその時を知ず 魚の禍の網にかゝり鳥の鳥羅にかゝるが如くに世の人もまた禍患の時の計らざ
一三 るに臨むに及びてその禍患にかゝるなり
一四 我日の下に是事を觀て智慧となし大なる事となせり
一五 すなはち茲に一箇の小き邑ありて その中の人は鮮かりしが大なる王これに攻きたりてこれを圍みこれに向ひて大なる雲梯を建たり 時に邑の中に一人の智慧

一六 ある貧しき人ありてその智慧をもて邑を救へり　然るに誰ありてその貧しき人を記念もの無りし　一六 是において
一七 我言り智慧は勇力に愈る者なりと　但しかの貧しき人の智慧は藐視られその言詞は聴れざりしなり　一七 靜に聽る
一八 智者の言は愚者の君長たる者の號呼に愈る　一八 智慧は軍の器に勝れり　一人の惡人は許多の善事を壞ふなり

第一〇章

一 死し蠅は和香者の膏を臭くしこれを腐らす　少許の愚癡は智慧と尊榮よりも重し　二 智者の心は
その右に愚者の心はその左に行くなり　三 愚者は出て途を行にあたりてその心たらず自己の愚なる
ことを一切の人に告ぐ　四 君長たる者汝にむかひて腹たつとも汝の本處を離るゝ勿れ　溫順は大なる愆を生ぜし
めざるなり　五 我日の下に一の患事あるを見たり是は君長たる者よりいづる過誤に似たり　六 すなはち愚なる者高き位に
置かれ貴き者卑き處に坐る　七 我また僕たる者が馬に乘り王侯たる者が僕のごとく地の上に歩むを觀たり
八 坑を掘る者はみづから之におちいり石垣を毀つ者は蛇に咬れん　九 石を打くだく者はそれがために傷を受
け木を割る者はそれがために危難に遭ん　一〇 鐵の鈍くなれるあらんにその刃を磨ざれば力を多く之にもちひざる
を得ず　智慧は功を成に益あるなり　一一 蛇もし呪術を聽ずして咬ば呪術師は用なし
一二 智者の口の言語は恩德あり　愚者の唇はその身を呑ほろぼす　一三 愚者の口の言は始は愚なり　またその言は
終は狂妄にして惡し　一四 愚者は言詞を衆くす　人は後に有ん事を知ず　誰かその身の後にあらんところの事を述る
を得ん　一五 愚者の勞苦はその身を疲らす彼は邑にいることをも知ざるなり

イ 箴二一・二三、二四　ニ 傳七・一、一一、一二　二五・一五　ル 詩五八・四、五　耶　ワ 箴一〇・一四、一八
・五　傳七・一九、ホ 箴一三・一六、一八　チ 帖三・一　リ 箴一九・一〇、三〇　ヲ 箴一〇・三一、一二　カ 箴一五・二
九・一八　ヘ 傳八・三　ヌ 詩七・一五　箴二六　ヨ 傳三・一二、八・七
ロ 可六・二、三　ト 傳前二五・二四　・一三　・七　・一三　・一二　・一三　・一二、八・七　・六
ハ 傳九・一六

一六 その王は童子にしてその侯伯は朝に食をなす國よ　汝は禍なるかな　一七 その王は貴族の子またその侯伯
は醉樂むためならず力を補ふために適宜き時に食をなす國よ　汝は福なるかな　一八 懶惰ところよりして屋背は
落ち　手を垂をるところよりして家屋は漏る　一九 食事をもて笑ひ喜ぶの物となし酒をもて快樂を取れり　銀子は
何事にも應ずるなり　二〇 汝心の中にても王たる者を詛ふなかれ　また寢室にても富者を詛ふなかれ　天空の鳥
その聲を傳へ羽翼ある者その事を布べければなり

第一一章

一 汝の糧食を水の上に投げよ　多くの日の後に汝ふたゝび之を得ん　二 汝一箇の分を七また八にわ
かて　其は汝如何なる災害の地にあらんかを知ざればなり　三 雲もし雨の充るあれば地に注ぐ　また
樹もし南か北に倒るゝあればその樹は倒れたる處にあるべし　四 風を伺ふ者は種播ことを得ず　雲を望む者は刈
ことを得ず　五 汝は風の道の如何なるを知ず　また孕める婦の胎にて骨の如何に生長つを知ず　斯汝は萬事を爲
たまふ神の作爲を知ことなし　六 汝朝に種を播け　夕にも手を歇るなかれ　其はその實る者は此なるか彼なるか
又は二者ともに美なるや汝これを知ざればなり　七 夫光明は　快き　者なり　目に日を見るは樂し　八 人多くの年
生ながらへてその中凡て幸福なるもなほ幽暗の日を憶ふべきなり　其はその數も多かるべければなり　凡て來らん
ところの事は皆空なり　九 少者よ汝の少き時に快樂をなせ　汝の少き日に汝の心を悅ばしめ　汝の心の道に歩み　汝の目に見るところを
爲せよ　但しその諸〳〵の行爲のために神汝を鞫きたまはんと知べし　一〇 然ば汝の心より憂を去り　汝の身より惡き
者を除け　少き時と壯なる時はともに空なればなり

ソ 詩一〇四・一五　ネ 箴三二・二〇　ノ 詩一三九・一四、一　ク 民一五・三九　マ 哥後七・一　提後二
ツ 出二二・二八　徒　ナ 申一五・一〇　箴一　ウ 弗五・一六　ヤ 傳一二・一四　羅二　ケ 詩三九・五
二三・五　九・一七　太一〇・　六・一〇　加六・九、一〇　來　八、一九　提前六・一　キ 約三・八　・三〇　・六一・一一
ム 米五・五　オ 傳七・一一
タ 箴三・四、五、一二、五・一一　レ 箴三一・四

第一二章

一 汝の少き日に汝の造主を記えよ 即ち惡き日の來り年のよりて我は早何も樂むところ無しと言に
(イ)
いたらざる先 二 また日や光明や月や星の暗くならざる先 雨の後に雲の返らざる 中に汝然せよ
(ロ)
三 その日いたる時は家を守る者は慄ひ 力ある人は屈み 磨碎者は寡きによりて息み 窓より窺ふ者は目昏むなり
四 磨こなす聲低くなれば衢の門は閉づ その人は鳥の聲に起あがり 歌の女子はみな身を卑くす 五 かゝる人々は
(ハ)
高き者を恐る畏しき者多く途にあり 巴旦杏は花咲くまた蝗もその身に重くその嗜欲は廢る 人永遠の家にいた
(ホ)
らんとすれば哭婦衢にゆきかふ 六 然る時には銀の紐は解け 金の盞は碎け 吊瓶は泉の側に壞れ 轆轤は井の傍
(ヘ) (ト)
に破んで 七 而して塵は本の如くに土に皈り 靈魂はこれを賦けし神にかへるべし 八 傳道者云ふ空の空なるかな
(チ) (リ)
皆空なり

九 また傳道者は智慧あるが故に恒に知識を民に教へたり 彼は心をもちひて尋ね究め許多の箴言を作れり
(ヌ)
一〇 傳道者は務めて佳美き言詞を求めたり その書しるしたる者は正直して眞實の言語なり
一一 智者の言語は刺鞭のごとく會衆の師の釘たる釘のごとくにして 一人の牧者より出し者なり 一二 わが子よ
是等より訓誡をうけよ 多く書をつくれば竟なし 多く學べば體疲る
一三 事の全體の皈する所を聽べし 云く 神を畏れその誡命を守れ 是は諸の人の本分たり 一四 神は一切の行爲
(ル)
ならびに一切の隱れたる事を善惡ともに審判たまふなり

傳道之書をはり

イ 箴二二・六　哀三・八 母後一九・三五　二七・一三　ロ 母後一九・三五　ホ 耶九・一七
ハ 創三・一九　伯三四・一五　詩九〇・三　ト 傳三・二一　チ 民一六・二二、二七・一一　伯三四・一四　リ 詩六二・九　傳一・二　ヌ 申六・二一　ル 傳一・一八　一六・伯三四・一四　亞　ヲ 王上四・三二　ワ 傳一・九　太一二　一二・一　一六・一四・一〇、一二　・三六　徒一七・三　哥前四・五　哥後五　・一〇

第一章

一 これはソロモンの雅歌なり
(イ)
二 ねがはしきは彼その口の接吻をもて我にくちつけせんこと
なり 汝の愛は酒よりもまさりぬ 三 なんぢの香膏のごとし 是をもて女子等なんぢを愛す
(ロ)
四 われを引たまへ われら汝にしたがひて走らん 王われを
たる香膏のごとし 是をもて女子等なんぢを愛す
(ハ) (ホ)
たづさへてその後宮にいれたまへり 我らは汝によりて歡び樂しみ酒よりも勝りてなんぢの愛をほめたゝふ 彼ら
は直きこゝろをもて汝を愛す 五 エルサレムの女子等よ われは黑けれどもなほ美はしケダルの天幕のごと
(ヘ)
く またソロモンの帷帳に似たり 六 われ色くろきが故に日のわれを燒たるが故に我を視るなかれ わが母の子等
(ト)
われを怒りて我に葡萄園をまもらしめたり 我はおのが葡萄園をまもらざりき 七 わが心の愛する者よなんぢは
(チ)
何處にてなんぢの群を牧ひ 午時いづこにて之を息ますや請ふわれに告よ なんぞ面を覆へる者の如くしてなん
(リ)
ぢが伴侶の群のかたはらにをるべけんや 八 婦人の最も美はしき者よ なんぢ若しらずば群の足跡にしたが
ひて出ゆき 牧羊者の天幕のかたはらにて汝の羔山羊を牧へ 九 わが佳耦よ 我なんぢをパロの車の馬に譬ふ
(ヌ)
一〇 なんぢの臉には鏈索を垂れ なんぢの頭には珠玉を陳ねて至も美はし 一一 われら白銀の星をつけたる黃金の
(ル)
鏈索をなんぢのために造らん 一二 王其席につきたまふ時 わがナルダ其香味をいだせり 一三 わが愛する者は
我にとりてはわが胸のあひだにおきたる沒藥の袋のごとし 一四 わが愛する者はわれにとりてはエンゲデの園に
あるコペルの英華のごとし 一五 あゝ美はしきかな わが佳耦よ あゝうるはしきかな なんぢの目は鴿のごと
し 一六 わが愛する者よ あゝなんぢは美はしくまた樂しきかな われらの牀は靑綠なり 一七 われらの家の棟樑

イ 王上四・三二　ロ 歌四・一〇　ハ 何一一・四　約六・　四四、一二・三二　ニ 腓三・一二—一四　ホ 詩四五・一四、一五　ト 歌二・二、一〇・一三　約一四・二　弗二・六　ヘ 歌五・九、六・一　チ 代下一・一六、一七　四・一、七、五・二、六・四　約一五・一四、一五　リ 結一六・一一—一三　ヌ 歌四・一、五・一二

一 ば香柏 その垂木は松の木なり

第二章

二 一 われはシャロンの野花 谷の百合花なり

三 のあるがごとし わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし

四 我ふかく喜びてその蔭にすわれり その實はわが口に甘かりき

五 彼われをたづさへて酒宴の室にいれたまへり その我上にひるがへしたる旗は愛なりき

六 請ふ なんぢら乾葡萄をもてわが力をおぎなへ 林檎をもて我に力をつけよ 我は愛によりて疾わづらふ

七 エルサレムの女子等よ我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ 愛のおのづから起るときまでは殊更に喚起し且つ醒すなかれ

八 わが愛する者の聲きこゆ 視よ 山をとび 岡を躍りこえて來る

九 わが愛する者は獐の ごとくまた小鹿のごとし 視よ彼われらの壁のうしろに立ち 窓より覗き 格子より窺ふ

一〇 わが愛する者 われに語りて言ふ わが佳耦よ わが美はしき者よ 起ていできたれ

一一 視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみてはやさりぬ

一二 もろもろの花は地にあらはれ 鳥のさへづる時すでに至り 班鳩の聲われらの地にきこゆ

一三 無花果樹はその青き果を赤らめ 葡萄の樹は花さきてその馨はしき香氣をはなつ わが佳耦よ わが美しき者よ 起て出できたれ

一四 磐間にをり 斷崖の匿 處にをるわが鴿よ 我になんぢの面を見させよ なんぢの聲をきかしめよ なんぢの聲は愛らしく なんぢの面はうるはし

一五 われらのために狐をとらへよ 彼の葡萄園をそこなふ小狐をとらへよ 我等の葡萄園は花盛なればなり

一六 わが愛する者は我につき 我はかれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ

一七 わが愛する者よ 日の涼しくなるまで 影の消るまで身をかへして出ゆき 荒き山々の上にありて獐のごとく

イ 歌二・一、二　ロ 歌八・三　ハ 歌三・五、八・四　ニ 歌二・一七　ホ 歌二・一三　ヘ 歌二・一〇　ト 歌八・一三　チ 詩八〇・一三　結一三・四　路一三・三二　リ 歌六・三、七・一〇　ヌ 歌四・六　ル 歌二・九、八・一四

一二 小鹿のごとくせよ

第三章

一 夜われ床にありて我心の愛する者をたづねしが尋ねたれども得ず

二 我おもへらく今おきて邑をまはりありき わが心の愛するものを街衢あるひは大路にてたづねんと 乃ちこれを尋ねたれども

三 得ざりき

四 これに別れて過ゆき 間もなくわが心の愛する者に遇たれば 之をひきとめて放さず 遂にわが母の家にともなひゆき 我を產しの室にいりぬ

五 エルサレムの女子等よ 我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ 愛のおのづから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ

六 この沒藥乳香など商人のもろもろの薰物をもて身をかをらせ煙の柱のごとくして荒野より來る者は誰ぞや

七 視よ こはソロモンの乘輿にして 勇士六十人その周圍にありイスラエルの勇士なり

八 みな刀劍を執り 戰鬪を善す 各人腰に刀劍を帶て夜の警誡に備ふ

九 ソロモン王レバノンの木をもて己のために輿をつくれり

一〇 その柱は白銀 その欄杆は黃金 その座は紫色にて作り その內部にはイスラエルの女子等が愛をもて繡たる物を張つく

一一 シオンの女子等よ 出きたりてソロモン王を見よ かれは婚姻の日 心の喜べる日にその母の己にかうぶらしゝ冠冕を戴けり

第四章

一 あゝなんぢ美はしきかな わが佳耦よ あゝなんぢ美はしきかな なんぢの目は面帕のうしろにありて鴿のごとし なんぢの髮はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり

二 なんぢの齒は毛を剪たる牝羊の浴場より出たるがごとし おのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし

三 なんぢの唇は紅色の線維のごとく その口は美はし なんぢの頰は面帕のうしろにありて石榴の半片に似たり

四 なんぢの頸項は

ヲ 箴二六・九　ワ 歌五・七　カ 歌二・七、八・四　ヨ 歌八・五　タ 歌一・一五、五、一二　レ 歌六・五　ソ 歌六・六　ツ 歌六・七　ネ 歌七・四

五 武器庫にとて建たるダビデの戍樓のごとし その上には一千の盾を懸つらぬ みな勇士の大楯なり 五 なんぢの兩
六 乳房は牝獐の雙子なる二箇の小鹿が百合花の中に草はみをるに似たり 六 日の涼しくなるまで影の消るまで
七 われ沒藥の山また乳香の岡に行べし 七 わが佳耦よ なんぢはことごとくうるはしくしてすこしのきずもなし
八 新婦よ レバノンより我にともなへ レバノンより我とともに來れ アマナの巔セニルまたヘルモンの巔より
九 望み 獅子の穴また豹の山より望め 九 わが妹わが新婦よ なんぢの愛は樂しきかな なんぢの愛は酒よりも遙にす
一〇 頸玉の一をもてわが心をうばへり 一〇 わが妹わが新婦よ なんぢの唇は蜜を滴らす なんぢの舌の底に
一一 ぐれ なんぢの香膏の馨は一切の香物よりもすぐれたり 一一 新婦よなんぢの唇は蜜を滴らす
一二 わが妹わがはなよめよ なんぢは閉たる園
一三 は蜜と乳とあり なんぢの衣裳の香氣はレバノンの香氣のごとし
一四 閉たる水源 封じたる泉水のごとし 一四 なんぢの園の中に生いづる者は石榴及びもろもろの佳果 またコペル及び
一五 ナルダの草 一五 ナルダ 番紅花 菖蒲 桂枝さまざまの乳香の木および沒藥 蘆薈一切の貴とき香物なり 一五 なんぢ
一六 は園の泉水 活る水の井 レバノンよりいづる流水なり 一六 北風よ起れ 南風よ來れ 我園を吹てその香氣を
揚よ ねがはくはわが愛する者のおのが園にいりきたりてその佳き果を食はんことを

第五章

一 わが妹わがはなよめよ 我はわが園にいり わが沒藥と薫物とを採り わが蜜房と蜜とを食ひ わが
酒とわが乳とを飲り わが伴侶等よ 請ふ食へ わが愛する人々よ 請ふ飲あけよ 二 われは睡り
たれどもわが心は醒ぬたり 時にわが愛する者の聲あり 即はち門をたゝきていふ わが妹 わが佳耦 わが鴿 わが
完きものよ われのために開け わが首には露滿ち わが髪の毛には夜の點滴みてりと 三 われすでにわが衣服を

イ 尼三・一九　ロ 箴五・一九　ハ 歴二・一七　ニ 弗五・二七　ホ 申三・九　ヘ 歴一・二　ト 箴二四・一三、一四　チ 創二七・二七　リ 約四・一〇、七・三八　ヌ 歴五・一　ル 歴四・一六　ヲ 歴四・一一　ワ 詩一五・七、一〇 約　カ 歴三・二九、一五・一四　ヨ 歴三・一　タ 歴三・二　レ 歴一・八　ソ 歴一・一五、四・一　ツ 歴一・八

四 脫り いかでまた着るべき 已にわが足をあらへり いかでまた汚すべき 四 わが愛する者戸の穴より手をさしい
五 れしかば わが心かれのためにうごきたり 五 やがて起いでてわが愛する者の爲に開かんとせしとき 沒藥わが手
六 より沒藥の汁わが指よりながれて關木の把柄のうへにしたゝれり 六 我わが愛する者の爲に開きしにわが愛する
七 者は已に退き去りぬ さきにその物いひし時はわが心さわぎたり 我かれをたづねたれども遇ず 呼たれども答應
八 なかりき 七 邑をまはりありく夜巡者等われを見てうちて傷つけ 石垣をまもる者らはわが上衣をはぎとれり
九 八 エルサレムの女子等よ 我なんぢらにかたく請ふ もしわが愛する者にあはゞ汝ら何とこれにつぐべきや 我愛
一〇 によりて疾わづらふと告よ 九 なんぢの愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありや 婦女の中の
一一 いと美はしき者よ なんぢが愛する者は別の人の愛する者に何の勝れるところありて斯われらに固く請ふや
一二 一〇 わが愛する者は白くかつ紅にして萬人の上に越ゆ 一一 その頭は純金のごとく その髮はふさやかにして黑き
一三 こと烏のごとし 一二 その目は谷川の水のほとりにをる鴿のごとく 乳にて洗はれて美はしく嵌れり 一三 その頰は
一四 馨しき花の床のごとく 香草の壇のごとし その 唇は百合花のごとくにして沒藥の汁をしたゝらす 一四 その手は
一五 きばみたる碧玉を嵌し黃金の釧のごとく 其躰は青玉をもておほひたる象牙の雕刻物のごとし 一五 その脛は蠟石
一六 の柱を黃金の臺にたてたるがごとく その相貌はレバノンのごとく その優れたるさまは香柏のごとし 一六 その口
はは甚だ甘く誠に彼には一つだにうつくしからぬ所なし エルサレムの女子等よ これぞわが愛する者 これぞ
わが伴侶なる

第六章

一 婦人のいと美はしきものよ 汝の愛する者は何處へゆきしや なんぢの愛する者はいづこへおもむ
きしや われら汝とともにたづねん 二 わが愛するものは已の園にくだり 香しき花の床にゆき

園の中にて群を牧ひ　また百合花を採る　三 我はわが愛する者につき　わが愛する者はわれにつく　彼は百合花の
中にてその群を牧ふ　四 わが佳耦よ　なんぢは美はしきことテルザのごとく　華やかなることエルサレムのご
とく　畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし　五 なんぢの目は我をおそれしむ　請ふ我よりはなれしめよ　なん
ぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり　六 なんぢの齒は毛を剪たる牝羊の浴場より出たるがごとし
おのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし　七 なんぢの頰は面帕の後にありて石榴の半片に似たり　八 后
六十人　妃嬪八十人　數しられぬ處女あり　九 わが鴿わが完き者はたゞ一人のみ　彼はその母の獨子にして產たる
者の喜ぶところの者なり　女子等は彼を見て幸福なる者ととなへ　后等妃嬪等は彼を見て讃む　一〇 この晨光の
ごとくに見えわたり　月のごとくに美はしく　日のごとくに輝やき　畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとき者は
誰ぞや　二 われ胡桃の園にくだりゆき　谷の青き草木を見　葡萄や芽しゝ　石榴の花や咲しと見回しをりしに
一三 意はず知ず我が心われをしてわが貴とき民の車の中間にあらしむ　一三 歸れ歸れシュラミの婦よ　歸れ歸れ
われら汝を觀んことをねがふ　なんぢら何とてマハナイムの跳舞を觀るごとくにシュラミの婦を觀んと
ねがふや

第七章

一 君の女よ　なんぢの足は鞋の中にありて如何に美はしきかな　汝の腿はまろらかにして玉のごとく
巧匠の手にて作りたるがごとし　二 なんぢの臍は美酒の缺ることあらざる圓き杯盤のごとく　なん
ぢの腹は積かさねたる麥のまはりを百合花もてかこめるが如し　三 なんぢの兩乳房は牝鹿の雙子なる二の小鹿の
ごとし　四 なんぢの頸は象牙の戍樓の如く　汝の目はヘシボンにてバテラビムの門のほとりにある池のごとく

イ 歌二・一六・七・一〇　ロ 歌六・一〇　ハ 歌四・一　ニ 歌四・二　ホ 歌四・三　ヘ 歌六・四　ト 歌七・一二　チ 詩四五・一三　リ 歌四・五　ヌ 歌四・四

五 なんぢの鼻はダマスコに對へるレバノンの戍樓のごとし　五 なんぢの頭はカルメルのごとく　なんぢの頭の髪は
紫色のごとし　王その垂たる髪につながれたり　六 あゝ愛よ　もろもろの快樂の中にありてなんぢは如何に美はし
く如何に悅ばしき者なるかな　七 なんぢの身の長は棕櫚の樹に等しく　なんぢの乳房は葡萄のふさのごとし
八 われ謂ふ　この棕櫚の樹にのぼり　その枝に執つかんと　なんぢの乳房は葡萄のふさのごとく　なんぢの鼻の氣息
は林檎のごとく匂はん　九 なんぢの口は美酒のごとし　一〇 われはわが愛する者につき　彼はわれを戀したふ　二 わが愛する者よ　われら田舍
者の口をして動かしむ　わが愛する者のために滑かに流れくだり　睡れる
にくだり村里に宿らん　二 われら夙におきて　葡萄や芽しゝ　苔やいでし　石榴の花やさきし　いざ葡萄園にゆきて
見ん　かしこにて我わが愛をなんぢにあたへん　一三 戀茄かぐはしき香氣を發ち　もろもろの佳き果物古き新らしき
共にわが戶の上にあり　わが愛する者よ我これをなんぢのためにたくはへたり

第八章

一 ねがはくは汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことを　われ戶外にてなんぢに遇ふ
とき接吻せん　然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじ　二 われ汝をひきてわが母の家に
いたり　汝より教誨をうけん　我かぐはしき酒石榴のあまき汁をなんぢに飲しめん　三 かれが左の手はわが頭の
下にあり　その右の手をもて我を抱く　四 エルサレムの女子等よ　我なんぢ等に誓ひて請ふ　愛のおのづから
起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ　五 おのれの愛する者に倚かゝりて荒野より上りきたる者は誰ぞや
林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませり　なんぢの母かしこにて汝のために劬勞をなし　なんぢを產し者
かしこにて劬勞をなしぬ　六 われを汝の心におきて印のごとくし　なんぢの腕におきて印のごとくせよ　其は愛は

ル 歌二・一六、六・三　ヲ 詩四五・一一　ワ 歌六・一一　カ 創三〇・一四　ヨ 太一三・五上　タ 箴九・二　レ 歌二・六　ソ 歌二・七、三・五　ツ 歌三・六　ネ 雅四九・一六　耶二二・二四　基二・二三

七 強くして死のごとく 嫉妬は堅くして陰府にひとし その焔は火のほのほのごとし いともはげしき焔なり 七愛
は大水も消ことあたはず 洪水も溺らすことあたはず 人その家の一切の物をことごとく與へて愛に換んとすると
八 も尚いやしめらるべし 八われら小さき妹子あり 未だ乳房あらず われらの妹子の問聘をうくる日には之に
九 何をなしてあたへんや 九かれもし石垣ならんには我ら白銀の城をその上にたてん 彼もし戸ならんには香柏
一〇 の板をもてこれを圍まん 一〇われは石垣わが乳房は戍樓のごとし 是をもてわれは情をかうむれる者のごと
一一 く彼の目の前にありき 一一バアルハモンにソロモン葡萄園をもてりこれをその守る者等にあづけおき 彼等を
一二 しておのおの銀一千をその果のために納めしむ 一二われ自らの有なる葡萄園われの手にあり ソロモンなんぢは
一三 一千を獲よ その果をまもる者も二百を獲べし 一三なんぢ園の中に住む者よ 伴侶等なんぢの聲に耳をかた
一四 むく 請ふ我にこれを聽しめよ 一四わが愛する者よ 請ふ急ぎはしれ 香はしき山々の上にありて獐のごとく
小鹿のごとくあれ

イ 雅歌六・三五
ロ 結二三・三三
ハ 太二一・三三

二 歌二・一四
ホ 歌二二・一七、二〇
ヘ 歌二・一七

雅歌 をはり

以賽亞書

イ 民一二・六
ロ 申三二・一 一二、六・一九、二二 二九 米一・二、六・一、二 ヘ 寒五・一、二
ハ 耶二・ホ 耶九・三、六 ヘ 寒五・一二 ト 寒五七・三、四 三・七 チ 寒九・一三 耶二・ヲ 耶四・一七
ヌ 申二八・五一、五二 ル 伯二七・一八 哀二 ヨ 申三二・三二 タ 得前一五・二二 詩 一六・四六
リ 耶八・二二 三〇、五・三 ワ 哀三・二二 羅九・一九 カ 創一九・二四 結 二一・二七 寒六六・三 耶六・二〇、七 麼五・二一、二二 米六・七
ヨ 申二八・五一、五二 タ 得前一五・二二 詩 一六・四六 二一・二七 寒六六・三 耶六・二〇、七 麼五・二一、二二 米六・七
五〇・八、九、五一・一六 箴一五・八、二一・二七 寒六六・三 耶六・二〇、七 麼五・二一、二二 米六・七

第一章

一 アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのときに示されたるユダとエルサ
二 レムとに係る異象 二天よきけ地よ耳をかたぶけよエホバの語りたまふ言あり曰くわれ子をやしなひ育てしにかれらは我にそ
三 むけり 三牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩をしる然どイスラエルは識ずわが民はさとらず 四あゝ罪
四 をかせる國人よこしまを負ふたみ惡をなす者のすゑ壞りそこなふ種族かれらはエホバをすてイスラエルの聖者
五 をあなどり之をうとみて退きたり 五なんぢら何ぞかさねがさね悖りて猶撻れんとするかその頭はやまざる所
六 なくその心はつかれはてたり 六足のうらより頭にいたるまで全きところなくたゞ創痍と打傷と腫物とのみな
七 り而してこれを合すものなく包むものなく亦あぶらにて軟らぐる者もなし 七なんぢらの國はあれすたれなん
八 ぢらの諸邑は火にてやかれなんぢらの田畑はその前にて外人にのまれ既にあだし人にくつがへされて荒廢れ
九 たり 八シオンの女はぶだうぞのの廬のごとく瓜田の假舍のごとくまた圍をうけたる城のごとく唯ひとり遺れ
九 萬軍のエホバわれらに少しの遺をとゞめ給ふことなくば我儕はソドムのごとく又ゴモラに同じかりしな
一〇 らん 一〇なんぢらソドムの有司よエホバの言をきけなんぢらゴモラの民よわれらの神の律法に耳をかたぶけよ
二 二エホバ言たまはくなんぢらが獻ぐるおほくの犧牲はわれに何の益あらんや我はをひつじの燔祭とこえたる

けものの膏とにあけりわれは牡牛あるひは小羊あるひは牡山羊の血をよろこばず　一二 なんぢらは我(イ)に見えんと
きたるこのことを誰がなんぢらに要めしや徒らにわが庭をふむのみなり　一三 むなしき(ロ)祭物をふたゝび携ふる
ことなかれ燻物はわがにくむところ新月および安息日また會(ハ)衆をよびあつむることも我がにくむところなり
なんぢらは聖會に惡を兼ぬれ容すにたへず　一四 わが心はなんぢらの新月(ニ)と節會(ホ)とをきらふ是わが重荷なり
われ負(ヘ)にうみたり　一五 我(ト)なんぢらが手をのぶるとき目をおほひ汝等がおほくの祈禱をなすときも聞(チ)ことをせじ
なんぢらの手には血(リ)みちたり　一六 なんぢら(ヌ)己をあらひ己をきよくしわが眼前よりその惡業をさり惡(ル)をおこなふ
ことを止め　一七 善をおこなふことをならひ公平(ヲ)をもとめ虐げらるゝ者をたすけ孤子に公平をおこなひ寡婦の
訟をあげつらへ
一八 ヱホバいひたまはく率(ワ)われらともに論らはんなんぢらの罪は緋のごとくなるも雪(カ)のごとく白くなり紅の
ごとく赤くとも羊の毛のごとくにならん　一九 若なんぢら肯ひしたがはゞ地の美產をくらふことを得べし　二〇 もし
汝等こばみそむかば劍にのまるべし此(ヨ)はヱホバその御口よりかたりたまへるなり
二一 忠(タ)信なりし邑いかにして妓女とはなれる昔しは公平にてみち正義その中にやどりしに今は人をころす者
ばかりとなりぬ　二二 なんぢの白(レ)銀は滓となりなんぢの葡萄酒は水をまじへ　二三 なんぢの長(ソ)輩はそむきて盜人(ツ)の
伴侶となり(ネ)おのおの賄賂をよろこび贓財をおひもとめ孤(ナ)子に公平をおこなはず寡婦の訟はかれらの前にいづる
こと能はず

イ出二三・一七、三四　ホ利二三・二　哀二・六　・一二　米三・四　ル詩三四・一四、三七・　ワ賽四三・二六　米六　ツ詩二九・二四　一〇
・二三　ヘ賽四三・二四　チ詩六六・一八　提前　二七　摩五・一五　・二一　タ耶二・二〇、二一　ネ耶二二・一七　結二
ロ太一五・九　ト伯二七・九　詩一三　二・八　ヲ耶二二・三、一六　米　カ詩五一・七　默七・　レ耶六・三〇　結二二　二・一二　何四・一八
ハ耳一・一四、二・一五　四・二　箴一・二八　リ賽五九・三　六・八　亞七・九、八　一四　・一八、一九　米三・一一、七・三
ニ民二八・一一　賽五九、二　耶一四　ヌ耶四・一四　・一六　ヨ民二三・一九　多一　ソ何九・一五　ナ耶五・二八　亞七・

ラ申二八・六三　結五　ヰ弼八・三　オ賽五七・五　ケ創四九・一　耶二三　エ米四・一　一八　弼九・一〇
・一三　ノ伯三一・三　詩一・　ク賽六五・三、六六・　・二〇　テ耶三一・六、五〇・五　キ詩七二・三、七
ム耶六・二九、九・七　六、五・六、七三・二　一七　フ詩六八・一五、一六　亞八・二一、二三　ユ弗五・八
馬三・三　七、九三・九、一〇四　ヤ結三二・二一　コ詩七二・八　賽二七　ア路二四・四七
ウ耶三三・七　・三五　マ賽四三・一七　・一三　サ詩四六・九　何二・

二四 このゆゑに主萬軍のヱホバ、イスラエルの全能者のたまはく唉われ敵にむかひて念をはらし仇(ラ)にむかひて
報をすべし　二五 我また手をなんぢの上にそへなんぢの滓(ム)をことごとく淨くしなんぢの鉛をすべて取去り　二六 な
んぢの審士を舊(ウ)のごとくなんぢの議官を始のごとくに復すべし然るのち(ヰ)なんぢは正義の邑忠信の邑ととなへら
れん　二七 シオンは公平をもてあがなはれ歸來るものも正義をもて贖はるべし　二八 されど愆(ノ)ををかすものと罪人
とはともに敗れヱホバをすつる者もまた亡びうせん　二九 なんぢらはその喜びたる橿樹(オ)によりて恥をいだきその(ク)
えらびたる園によりて慙赧むべし　三〇 なんぢらは葉のかるゝ橿樹のごとく水なき園のごとくならん　三一 權(ヤ)勢あ
るものは麻のごとくその工は火花のごとく二(マ)つのもの一同もえてこれを撲滅すものなし

第二章

一 アモツの子イザヤが示されたるユダとヱルサレムとにかゝる言
二 すゑの(ケ)日にヱホバ(フ)の家の山はもろもろの山のいたゞきに堅立ちもろもろの嶺よりもたかく擧
りすべての國は流(エ)のごとく之(コ)につかん　三 おほくの民ゆきて相語いはん率(テ)われらヱホバの山にのぼりヤコブの神
の家にゆかん神われらにその道をしへ給はんわれらその路をあゆむべしとそは律法(ア)はシオンよりいでヱホバの
言はヱルサレムより出べければなり　四 ヱホバはもろもろの國のあひだを鞫きおほくの民をせめたまはん斯て(サ)か
れらはその劍をうちかへて鋤となしその鎗をうちかへて鎌となし國は國にむかひて劍をあげず戰鬪(キ)のことを再び
まなばざるべし
五 ヤコブの家よきたれ我儕(ユ)ヱホバの光にあゆまん　六 主よなんぢはその民ヤコブの家をすてたまへり此は

かれらのなかに東のかたの風俗みち皆ペリシテ人のごとく陰陽師となり異邦人のともがらと手をうちて盟をたて
七 しが故なり　七 かれらの國には黄金白銀みちて財寶の數かぎりなしかれらの國には馬みちて戰車のかず限りな
八 し　八 かれらの國には偶像みち皆おのが手の工その指のつくれる者をがめり　九 賤しきものは屈められ尊きも
九 のは卑せらるかれらを容したまふなかれ　一〇 なんぢ岩間にいりまた土にかくれてヱホバの畏るべき容貌とその
一〇 稜威の光輝とをさくべし　一一 この日には目をあげて高ぶるもの卑せられ驕る人かゞめられ唯ヱホバのみ高くあげ
一一 られ給はん

一二 そは萬軍のヱホバの一の日ありすべて高ぶる者おごる者みづからを崇るものの上にのぞみて之をひくゝし
一三 またレバノンのたかく聳たるすべての香柏バシャンのすべての橿樹　一四 もろもろの高山もろもろの聳えたる
一四 嶺　一五 すべてのたかき櫓すべての堅固なる石垣　一六 およびタルシシのすべての舟すべての慕ふべき美はしきもの
一五 に臨むべし　一七 この日には高ぶる者はかゞめられ驕る人はひくゝせられ唯ヱホバのみ高くあげられ給はん　一八 か
一六 くて偶像はことごとく亡びうすべし　一九 ヱホバたちて地を震動したまふとき人々そのおそるべき容貌とその稜威
一七 の光輝とをさけて巖の洞と地の穴とにいらん　二〇 その日人々おのが拜せんとて造れる白銀のぐうざうと黄金のぐ
一八 うざうとを鼹鼠のあな蝙蝠の穴になげすて　二一 岩々の隙けはしき山峽にいりヱホバの起て地をふるひうごかした
一九 まふその畏るべき容貌と稜威のかゞやきとを避ん　二二 なんぢら鼻より息のいでいりする人に倚ることをやめよ斯
二〇 るものは何ぞかぞふるに足らん

イ民三三・七　ロ申一八・一四　ハ詩一〇六・三五　ニ申一七・一六、一七　ホ耶二・二八　ヘ箴二・一九、二二　ト箴四・一、一一・一、一二・一、一〇・一、一二・一、一四・二四・二一、二二、二五・九・二六・一、二七・一、二七・一、二八・五、二九・一、八・三〇・二三、三五・六　耶三〇・七、八　結三八・一四、一九、三九・一、二二　チ箴二・一七、五・一　ル王上一〇・二二　ヲ箴二・一一　ワ箴二・一一　カ箴三〇・三二　基二・七・六・二二　來一二・二六　ヨ撒後一・九　タ箴二・一〇　レ箴三〇・二二、三一　ソ箴二・一九　ツ箴二・一〇、一九　ネ伯二七・三　ナ詩一四六・三

第三章

一 みよ主ばんぐんのヱホバ、ヱルサレムおよびユダの賴むところ倚ところなる凡てその賴むところ
二 の糧すべてその賴むところの水　二 勇士戰士審士預言者卜筮者長老　三 五十人の首貴顯者
三 議官藝に長たる者および言語たくみなるものを除去りたまはん　四 われ童子をもてかれらの君とし嬰兒にかれ
四 らを治めしめん　五 民たがひに相虐げ人おのおのその隣をしへたげ童子は老たる者にむかひて高ぶり賤しき
五 ものは貴きものに對ひてたかぶらん　六 そのとき人ちゝの家にて兄弟にすがりていはん汝なほ衣ありわれらの
六 有司となりてこの荒敗をその手にてをさめよと　七 その日かれ聲をあげていはん我なんぢらを愈すものとなる
七 を得じわが家に糧なくまた衣なし我をたてゝ民の有司とすることなかれと　八 是かれらの舌と行爲とはみな
八 ヱホバにそむきてその榮光の目ををかしゝが故にヱルサレムは敗れユダは仆れたればなり　九 かれらの面色は
九 その惡きことの證をなしソドムのごとくその罪をあらはして隱すことをせざるなりかれらの靈魂はわざはひな
一〇 るかな自らその惡の報をとれり　一〇 なんぢら義人にいへかならず福祉をうけんと彼等はそのおこなひの實を
一一 くらふべければなり　一一 惡者はわざはひなる哉かならず災禍をうけんその手の報きたるべければなり　一二 わが
一二 民はをさなごに虐げられ婦女にをさめらる唉、わが民よなんぢを導くものは反てなんぢを迷はせ汝のゆくべき
一三 途を絶つ

一三 ヱホバ立いでて公理をのべ起てもろもろの民を審判したまふ　一四 ヱホバ來りておのが民の長老ともろもろ
一四 の君とをさばきて言給はんなんぢらは葡萄園をくひあらせり貧きものより掠めとりたる物はなんぢらの家にあり
一五 いかなれば汝等わが民をふみにじり貧きものの面をすりくだくやとこれ主萬軍のヱホバのみことばなり

ラ利二六・二六　ム王下二四・一四　ウ傳一〇・一六　キ米三・一二　ノ創一三・一三、一八・二二〇、二一、一九・五　オ傳八・一二　ク詩一二八・二　ヤ傳八・一三　マ箴三・四　ケ箴九・一六　フ米六・二　コ箴五・七　三三　エ箴五八・四　太二一・二三　米三・

一六 ヱホバまた言給はくシオンの女輩はおごり項をのばしてあるき眼にて媚をおくり徐々としてあゆみゆくそ
の足にはりんりんと音あり　一七 このゆゑに主シオンのむすめらの頭をかぶろにしヱホバかれらの醜所をあらは
一八 し給はん　一九 その日主かれらが足にかざれる美はしき釧をとり瓔珞半月飾　二〇 耳環手釧面帕　二一 華冠脛飾
紳香盒符嚢　二二 指環鼻環　二三 公服上衣外帔金嚢　二四 鏡細布の衣首帕被衣などを取除きたまはん　二五 而
して馨はしき香はかはりて臭穢となり紳はかはりて繩となり美はしく編たる髪はかぶろとなり華かなる衣はかは
りて麁布のころもとなり麗顔はかはりて烙鐵せられたる痕となならん　二六 なんぢの男はつるぎにたふれなんぢの
勇士はたゝかひに仆るべし　二七 その門はなげきかなしみシオンは荒廢れて地にすわらん

第四章

一 その日七人のをんな一人の男にすがりていはん我儕おのれの糧をくらひ己のころもを着るべした
だ我儕になんぢの名をとなふることを許してわれらの恥をとりのぞけと　二 その日ヱホバの枝はさかえて輝かん地よりなりいづるものの實はすぐれ並うるはしくして逃れのこれる
イスラエルの益となるべし　三 而してシオンに遺れるもののエルサレムにとゞまれる者すべて此等のエルサレムに
存ふる者のなかに錄されたるものは聖ととなへられん　四 そは主さばきするみたまと燒つくす靈とをもてシオン
のむすめらの汚をあらひエルサレムの血をその中よりのぞきたまふ期きたるべければなり　五 爰にヱホバはシオ
ンの山のすべての住所ともろもろの聚會とのうへに晝は雲と煙とをつくり夜はほのほの光をつくりたまはんあま
ねく榮のうへに覆庇あるべし　六 また一つの假廬ありて晝はあつさをふせぐ陰となり暴風と雨とをさけてかくる
る所となるべし

イ申二八・二七 ロ箴四七・二、三 ハ士八・二一 ニ箴二二・一二 米一 ヘ哀二・一〇 ト箴二・一一、一七 チ箴卷三・一二 リ路一・二五 ヌ申二三・五 亞三・ヲ箴六〇・二一 ワ馬三・一二 ル賜四・三 默三・五 カ出一三・二一 ヨ亞二・五

一 われわが愛する者のために歌をつくり我があいするものの葡萄園のことをうたはんわが愛するも
のは土肥たる山にひとつの葡萄園をもてり　二 彼その園をすきかへし石をのぞきて嘉ぶだうをうゑ
そのなかに望樓をたて酒榨をほりて嘉葡萄のむすぶを望みまてり然るに結びたるものは野葡萄なりき
三 さればヱルサレムに住るものとユダの人よ請なんぢら我とわがぶだうぞのとの間をさばけ　四 わが葡萄園
にわれの作たるほか何のなすべき事ありや我はよきぶだうの結ぶをのぞみまちしに何なれば野葡萄をむすびしや
五 然ばわれわが葡萄園になさんとすることを汝等につげん我はぶだうぞのの籬笆をとりさりてその食あらさるゝ
にまかせその垣をとぼちてその踐あらさるゝにまかせん　六 我これを荒してふたゝび剪ことをせず耕すことをせ
ず棘と荊とをはえいでしめんまた雲に命せてそのうへに雨ふることなからしめん　七 それ萬軍のヱホバの葡萄園
はイスラエルの家なりその喜びたまふところの植物はユダの人なりこれに公平をのぞみたまひしに反りて血をな
がしこれに正義をのぞみ給ひしにかへりて號呼あり　八 禍ひなるかな彼らは家に家をたてつらね田圃に田圃をましくはへて餘地をあまさず己ひとり國のうちに住
んとす　九 萬軍のヱホバ我耳につげて宣はく實におほくの家はあれすたれ大にして美しき家は人のすむことなき
にいたらん　一〇 十段のぶだうぞの僅かに一バテをみのり一ホメルの穀種はわづかに一エパを實るべし　一一 禍ひな
るかなかれらは朝つとにおきて濃酒をおひもとめ夜のふくるまで止まりてのみ酒にその身をやかるゝなり　一二 か
れらの酒宴には琴あり瑟あり鼓あり笛あり葡萄酒ありされどヱホバの作爲をかへりみずその手のなしたまふとこ
ろに目をとめず

タ詩八〇・八 默八・一二 箴二七・二耶 太二一・レ申三二・六 箴一・ツ詩八〇・一二 三三 可一二・一 ソ羅三・四 二、三 ネ米二・二 ナ箴二二・一四 ラ結四五・一一 ム雅二三・二九、三〇 ウ箴六・五、六 傳一〇・一六 箴五・ヰ伯三四・二七 詩二二 八・五

一三 斯るが故にわが民は無知にして虜にせられその貴顯者はうゑそのもろもろの民は渴によりて疲れはてん
一四 また陰府はその欲望をひろくしその度られざる口をはるかれらの榮華かれらの群衆かれらの饒富および喜び
一五 たのしめる人みなその中におつべし　一五 賤しき者はかゞめられ貴きものは卑くせられ目をあげて高ぶる者はひく
一六 くせらるべし　一六 されど萬軍のヱホバは公平によりてあがめられ聖なる神は正義によりて聖とせられ給ふべし
一七 而して小羊おのが牧場にあるごとくに草をはみ豐かなるものの田はあれて旅客にくらはれん
一八 禍ひなるかな彼等はいつはりを繩となして惡をひき索にて車をひくごとく罪をひけり　一九 かれらは云その
成んとする事をいそぎて速かになせ我儕これを見んイスラエルの聖者のさだむることを逼來らせよわれらこれを
二〇 知んと　二〇 禍ひなるかなかれらは惡をよびて善とし善をよびて惡とし暗をもて光とし光をもて暗とし苦をもて甘
二一 とし甘をもて苦とする者なり　二一 わざはひなる哉かれらは己をみて智しとし自らかへりみて聰とする者なり
二二 二三 禍ひなるかなかれらは葡萄酒をのむに丈夫なり濃酒を和するに勇者なり　二三 かれらは賄賂によりて惡きもの
を義となし義人よりその義をうばふ
二四 此によりて火舌の刈株をくらふがごとくまた枯草の火焰のなかにおつるがごとくその根はくちはてその花
は塵のごとくに飛さらんかれらは萬軍のヱホバの律法をすてゝイスラエルの聖者のことばを蔑したればなり
二五 この故にヱホバその民にむかひて怒をはなち手をのべてかれらを擊たまへり山はふるひうごきかれらの屍は
二六 衢のなかにて糞土のごとくなれり然はあれどヱホバの怒やまずして尙その手を伸したまふ
二六 かくて旗をたてゝとほき國々をまねき彼等をよびて地の極より來らしめたまはん視よかれら趨りて速かに

イ 雅一・三　何四・六　ロ 雅二・九、一一、一七　ハ 雅一〇・一六　詩一九・四四　ニ 雅六六・五　耶一七　ホ 箴三・七　彼後三・三、四　ヘ 雅五・一一　隨一・二　ト 箴一七・一五、二四　チ 出一五・七　リ 伯一八・一六　何九・一六　ヌ 王下二二・一三、一　ヲ 利二六・一四　雅九　ワ 雅一一・一二　カ 雅七・一八　ヨ 申二八・四九　詩七・二五　歴五・一八　ル 耶四・二四　ヨ 申二八・四九　詩七・一六　歴二・九

二七 きたるべし　二七 その中には疲れたふるゝものなく眠りまたは寢るものなしその腰の帶はとけずその履の紐はきれ
二八 ず　二八 その矢は鋭その弓はことごとく張りその馬のひづめは石のごとくその車の輪は疾風のごとしと稱へられん
二九 二九 その嘷ること獅のごとくまた小獅のごとく嘷うなりつゝ獲物をつかみて掠去れども之をすくふ者なし　三〇 そ
の日かれらが嘯響めくこと海のなりどよめくがごとしもし地をのぞまば暗と難とありて光は黑雲のなかにくらく
なりたるを見んヽ

第六章

一 ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座にヱホバの坐し給ふを見しにその衣裾は殿にみちた
二 セラピムその上にたつおのおの六の翼ありその二をもて面をおほひその二をもて足をおほひ
三 たがひに呼いひけるは聖なるかな聖なるかな聖なるかな萬軍のヱホバその榮光は全地にみ
四 其二をもて飛翔り　三 つ　四 斯よばはる者の聲によりて閾のもとゐ搖うごき家のうちに煙みちたり　五 このとき我いへり禍ひなるかな
五 我ほろびなん我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢たるくちびるの者なるにわが眼ばんぐんのヱホバにまして
六 す王を見まつればなりと　六 爰にかのセラピムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手にたづさへて我にとびきたり　七 わが口
七 に觸ていひけるは視よこの火なんぢの唇にふれたれば既になんぢの惡はのぞかれなんぢの罪はきよめられたりと
八 八 我またヱホバの聲をきく曰くわれ誰をつかはさん誰かわれらのために往べきかとそのとき我いひけるはわれ此
九 にあり我をつかはしたまへ　九 ヱホバいひたまはく往てこの民にかくのごとく告よなんぢら聞てきけよ然どさと

二八 馬一・二　夕 耳二・七　レ 但五・六　ソ 耶五・一六　ツ 雅八・二二　二三 哀三・二　結 三二・七、八　ネ 王下一五・七　ナ 王上二二・一九　約 一二・四一　歴四・二　ラ 結一・一一　ム 默四・八　ウ 詩七二・一九　キ 出四〇・三四　王上 八・一〇　オ 默八・三　ク 耶一・九　但一〇・一六　ノ 出四・一〇、六・三〇　士六・二二、一三　ヤ 創一・二六、三・二　二二 耶一・六　マ 雅四三・八　太一三・一四　可四・一二　路八・一〇　約一二・四〇　徒二八・二六　羅一一・八

一〇 らざるべし見てみよ然どしらざるべしと　一〇 なんぢこの民のこゝろを鈍くしその耳をものうくしその眼をおほへ
一一 恐らくはかれらその眼にて見その耳にてきゝその心にてさとり翻へりて醫さるゝことあらん　一一 こゝに我いひけ
るは主よいつまで如此あらんか主こたへたまはく邑はあれすたれて住むものなく家に人なく邦ことごとく荒土と
一二 なり　一二 人々ヱホバに遠方までうつされ廢りたるところ國中におほくならん時まで如此あるべし　一三 そのなかに
一三 十分の一のこる者あれども此もまた呑つくされんされど聖裔のこりてこの地の根となるべし彼のテレビントまた
は檀樹がきらるゝことありともその根ののこるがごとし

第七章

一 一 ウジヤの子ヨタムその子ユダヤ王アハズのときアラムの王レヂンとレマリヤの子イスラエル王
二 ペカと上りきたりてエルサレムを攻しがつひに勝ことあたはざりき　二 こゝにアラムとエフライム
と結合なりたりとダビデの家につぐる者ありければ王のこゝろと民の心とは林木の風にうごかさるゝが如くに動
けり
三 三 その時ヱホバ、イザヤに言たまひけるは今なんぢと汝の子シヤルヤシユブと共にいでて布をさらす野の大
四 路のかたはらなる上池の樋口にゆきてアハズを迎へ　四 これに告べしなんぢ謹みて靜かなれアラムのレヂン及び
五 レマリヤの子はげしく怒るとも二の燼餘りたる煙れる片柴のごとし懼るゝなかれ心をよわくするなかれ　五 アラ
六 ム、エフライム及びレマリヤの子なんぢにむかひて惡き謀ごとを企てゝいふ　六 われらユダに攻上りて之をおび
七 やかし我儕のためにこれを破りとりタビエルの子をその中にたてゝ王とせんと　七 されど主ヱホバいひたまはく
八 この事おこなはれずまた成ことなし　八 アラムの首はダマスコ、ダマスコの首はレヂンなりエフライムは六十五

イ詩一一九・七〇 寒　ハ米三・一二　羅一・五　ト寒一〇・二一　リ懺二一・三〇 慶八
ロ 邸五・二一　ニ 王下二五・二一　代下 チ 王下一八・一七 寒　・一〇
ホ 申九・二 馬二・一五　ヘ 王下一六・五　ヌ 出後八・六
二八・五・六　三六・二

九 年のうちに敗れて國をなさゞるべし　九 またエフライムの首はサマリヤ、サマリヤの首はレマリヤの子なり若な
一〇 んぢら信ぜずばかならず立ことを得じと　一〇 ヱホバ再びアハズに告ていひたまはく　一一 なんぢの神ヱホバに一の豫兆をもとめよ或はふかき處あるひは
一二 上のたかき處にもとめよ　一二 アハズいひけるは我これを求めじ我はヱホバを試むることをせざるべし　一三 イザヤ
一三 いひけるはダビデのいへよ請なんぢら聞なんぢら人をわづらはしこれを小事として亦わが神をも煩はさんとする
一四 か　一四 この故に主みづから一の豫兆をなんぢらに賜ふべし視よをとめ孕みて子をうまんその名をインマヌエルと
一五 稱ふべし　一五 かれ惡をすて善をえらぶことを知ころほひにいたりて乳酥と蜂蜜とをくらはん　一六 そはこの子いま
一六 だ惡をすて善をえらぶことを知ざるさきになんぢが忌きらふ兩の王の地はすてらるべし　一七 ヱホバはエフライム
一七 がユダを離れし時よりこのかた臨みしことなき日をなんぢとなんぢの民となんぢの父の家とにのぞませ給はん是
一八 アツスリヤの王なり　一八 其日ヱホバ、エジプトなる河々のほとりの蠅をまねきアツスリヤの地の蜂をよびたまはん　一九 皆きたりて
一九 荒たるたに岩穴すべての荊棘すべての牧場のうへに止まるべし　二〇 その日主はかはの外ふより雇へるアツスリヤの王を剃刀として首と足の毛とを剃たまはんまた髯をも除き
二〇 たまふべし　二一 その日人わかき牝犢ひとつと羊ふたつとを飼をらん　二二 その出すところの乳おほきによりて乳酥をくらふ
二一 ことを得んすべて國のうちに遺れるものは乳酥と蜂蜜とをくらふべし

ル 代下二〇・二〇　ヲ 士六・三六　太一二　ワ 太一・二三　路一・ヨ 寒八・八
・三八　カ 寒九・六　タ 寒八・四　レ 王下一五・三〇、ツ 王上二二・一六　ソ 代下二八・一九　一六・九
ネ 寒五・二六　ナ 寒二・一九　邪一六　ラ 王下一六・七、八 代下二八・二〇、二一　結五・二
・一六

二三 その日千株に銀一千の價をえたる葡萄ありし處もことごとく荊と棘はえいづべし
二四 荊とおどろと地にあ
二五 まねきがゆゑに人々矢と弓とをもて彼處にゆくなり　二五 鋤をもて掘たがへしたる山々もいばらと棘のために人お
それてその中にゆくことを得じその地はたゞ牛をはなち羊にふましむる處とならん

第八章

一 ヱホバ我にいひたまひけるは一の大なる牌をとりそのうへに平常の文字にてマヘル シャラル
ハシ バズと錄せ　二 われ信實の證者なる祭司ウリヤおよびエベレキヤの子ゼカリヤをもてその證
三 をなさしむ　三 われ預言者の妻にちかづきしとき彼はらみて子をうみければヱホバ我にいひたまはくその名を
マヘル シャラル ハシ バズと稱へよ　四 そはこの子いまだ我が父わが母とよぶことを知らざるうちにダマスコ
四 の富とサマリヤの財寶はうばはれてアッスリヤ王のまへに到るべければなり
五 五 ヱホバまた重て我につげたまへり云く　六 この民はゆるやかに流るゝシロアの水をすてゝレヂンとレマリ
六 ヤの子とをよろこぶ　七 此によりて主はいきほひ猛くみなぎりわたる大河の水をかれらのうへに堰入たまはん
七 是はアッスリヤ王とそのもろもろの威勢とにして百の支流にはびこりもろもろの岸をこえ　八 ユダにながれいり
八 溢れひろごりてその項にまで及ばんインマヌエルよそののぶる翼はあまねくなんぢの地にみちわたらん
九 九 もろもろの民よさばめき騒げなんぢら摧かるべし遠きくにぐにの者よきけ腰におびせよ汝等くだかるべし
一〇 腰に帶せよなんぢら摧かるべし　一〇 なんぢら互にはかれつひに徒勞ならんなんぢら言をいだせ遂におこなはれじ
二 そは神われらとともに在せばなり　二 ヱホバつよき手をもて此如われに示しこの民の路にあゆまざらんことを我
二 にさとして言給はく　二 此民のすべて叛逆ととなふるところの者をなんぢら叛逆ととなふるなかれ彼等のおそる

イ 申五・六
ロ 申三〇・八 哈二・二
ハ 王下一六・一〇
ニ 申七・一六
ホ 王下一五・二九、一
ヘ 尼三・一五 約九・七
ト 申七・一、二、六
チ 申一〇・一二
リ 申三〇・二八
ヌ 申七・一四
ル 耳三・九、一一
ヲ 伯五・一二
ワ 申七・七
カ 申七・一四 徒五・
ヨ 申七・二
三八、三九 羅八・ タ 彼前三・一四、一五

一三 るところを汝等おそるゝなかれ慴くなかれ　一三 なんぢらはたゞ萬軍のヱホバを聖としてこれを畏みこれを恐る
一四 べし　一四 然らばヱホバはきよき避所となりたまはん然どイスラエルの兩の家には躓く石となり妨ぐる磐とならん
一五 エルサレムの民には網罟となり機檻とならん　一五 おほくの人々これによりて躓きかつ仆れやぶれ網せられまた捕
へらるべし
一六 一六 證詞をつかね律法をわが弟子のうちに封べし　一七 いま面をおほひてヤコブの家をかへりみ給はずといへど
一七 も我そのヱホバを待そのヱホバを望みまつらん　一八 視よわれとヱホバが我にたまひたる子輩とはイスラエルのう
一八 ちの豫兆なり奇しき標なり此はシオンの山にいます萬軍のヱホバの興へたまふ所なり
一九 一九 もし人なんぢらにつげて巫女および魔術者のさえづるがごとく細語がごとき者にもとめよといはゞ民はお
二〇 のれの神にもとむべきにあらずやいかで活者のために死者にもとむることを爲んといへ　二〇 たゞ律法と證詞とを
二一 求むべし彼等のいふところ此言にかなはずば晨光あらじ　二二 かれら國をへあるきて苦みうゑんその飢るとき怒を
二二 はなち己が王おのが神をさして詛ひかつその面をうへに向ん　二三 また地をみれば艱難と幽暗とくるしみの闇とあ
りかれらは昏黑におひやられん

第九章

一 一 今くるしみを受れども後には闇なかるべし昔しはゼブルンの地ナフタリの地をあなどられしめ
給ひしかど後には海にそひたる地ヨルダンの外ふの地ことくに人のガリラヤに榮をうけしめ給へり
二 二 幽暗をあゆめる民は大なる光をみ死蔭の地にすめる者のうへに光てらせり　三 なんぢ民をましその歡喜を大に

レ 民二〇・一二
ソ 詩七六・七 路一二
ツ 結一一・一六
ネ 申二八・一六 路
ラ 申五四・八
ム 哈二・三 路二・二
ウ 來二・一三
ヰ 詩七一・七 申三・八
ノ 撒前二八・八 申一
オ 申二九・四
ク 詩一〇六・二八
ヤ 路一六・二九
マ 米三・六
ケ 默一六・一一
フ 申五・三〇
コ 申九・一
エ 申八・二二
テ 王下一五・二九 代 サ 太四・一六 弗五・
ア 利二六・二四 王下 下一六・四 八、一四
一七・五、六 代上 五・二六

したまひければかれらは收穫時によろこぶがごとく掠物をわかつときに樂むがごとく汝の前によろこべり　四　そ
は汝かれらがおへる軛とその肩の笞と虐ぐるものの杖とを折これを折てミデアンの日のごとくなし給ひたればな
り　五　すべて亂れたゝかふ兵士のよろひと血にまみれたる衣とはみな火のもえくさとなりて焚るべし　六　ひとり
の嬰兒われらのために生れたり我儕はひとりの子をあたへられたり政事はその肩にありその名は奇妙また議士ま
た大能の神とこしへのちゝ平和の君ととなへられん　七　その政事と平和とはましくはゝりて窮りなし且ダビデの
位にすわりてその國ををさめ今よりのちとこしへに公平と正義とをもてこれを立これを保ちたまはん萬軍のヱホ
バの熱心これを成たまふべし

八　主一言をヤコブにおくり之をイスラエルの上にのぞませ給へり　九　すべてのこの民エフライムとサマリヤ一
に居るものとは知ならんかれらは高ぶり誇る心をもていふ　一〇　瓦くづるゝともわれら斫石をもて建くはの木きら
るゝともわれら香柏をもて之にかへんと　一一　この故にヱホバ、レヂンの敵をあげもちゐてイスラエルを攻しめ
その仇をたけび勇しめたまはん　一二　前にアラム人あり後にペシリテ人あり口をはりてイスラエルを呑んとす然は
あれどヱホバの怒やまずして尙その手をのばしたまふ

一三　然どこの民はおのれをうつものに歸らず萬軍のヱホバを求めず　一四　斯るゆゑにヱホバ一日のうちに首と尾
と椶櫚のえだと葦とをイスラエルより斷切たまはん　一五　その首とは老たるもの尊きものその尾とは謊言をのぶる
預言者をいふなり　一六　この民をみちびく者はこれを迷はせその引導をうくる者はほろぶるなり　一七　このゆゑに
主はその少壯者をもよろこびたまはずその孤兒と寡婦とを憐みたまはざるべし是その民はことごとく邪まなり惡

イ 士五・三〇　詩八三　ロ 士七・二二　九　賽一〇・二六　ハ 賽六六・一五、一六　ニ 賽七・一四　路二・一一　ホ 約三・一六　ヘ 太二八・一八　哥前一五・二五　ト 士一三・一八　チ 多二・一三　リ 弗二・一四　ヌ 但二・四四　路一・三七・三二　ル 王下一九・三一　賽耶四・八　ヲ 賽五・二五、一〇・四　カ 賽一〇・一七　默一八・八　ワ 耶五・三　何七・一〇　ヨ 賽三・一二　タ 詩一四七・一〇、一一

レ 米七・二　ソ 賽九・一二、二一、五・二五、一〇・四　ツ 賽一〇・一七　馬四　ネ 賽八・二二　ナ 米七・二、六　ラ 利二六・二六　ム 賽四九・二六　九・九　ウ 賽九・一二、一七、五・二五、一〇・四　ヰ 詩五八・二、九四・二〇　ノ 何九・七　四四　オ 伯三一・一四　ク 賽五・二五、一二、一七、二一　九・一二　ヤ 耶五一・二〇　マ 賽九・一七　ケ 耶三四・二二　フ 創五〇・二〇　米四・一二

をおこなふ者なりおのおのの口は愚かなる言をかたればなり然はあれどヱホバの怒やまずして尙その手をのばし
たまふ

一八　惡は火のごとくもえ棘と荊とを食つくし茂りあふ林をやくべければみな煙となりむらがりて上騰らん
一九　萬軍のヱホバの怒によりて地はくろく燒その民は火のもえくさとなり人々たがひに相憐むことなし　二〇　人み
ぎに攫めどもなほ飢ひだりに食へども尙あかずおのおのその腕の肉をくらふべし　二一　マナセはエフライムを
エフライムはマナセをくらひ又かれら相合てユダを攻ん然はあれどヱホバの怒やまずして尙その手をのばした
まふ

第一〇章

一　不義のおきてをさだめ暴虐のことばを錄すものは禍ひなるかな　二　かれらは乏きものの訴をうけ
めらるゝ日きたらば何をなさんとするか敗壞とほきより來らんとき何をなさんとするかなんぢら逃れゆきて誰に
すくひを求めんとするかまた何處になんぢらの榮をのこさんとするか　四　たゞ縛められたるものの下にかゞみ殺
されたるもののしたに伏仆れんのみ然はあれどヱホバのいかり止ずして尙ほその手をのばしたまふ
五　咄アッスリヤ人なんぢはわが怒の杖なりその手の笞はわが忿恚なり　六　われ彼をつかはして邪曲なる國を
せめ我かれに命じて我がいかれる民をせめてその所有をかすめその財寶をうばはしめかれらを街の泥のごとくに
蹂躪らしめん　七　されどアッスリヤ人のこゝろざしは斯のごとくならずその心の念もまた斯のごとくならずその

八 こゝろは敗壞をこのみあまたの國をほろぼし絶ん　八 かれ云わが諸侯はみな王にあらずや　九 カルノはカルケミ
九 シのごとくハマテはアルパデの如くサマリヤはダマスコの如きにあらずや　一〇 わが手は偶像につかふる國々を得
一〇 たりその彫たる像はエルサレムおよびサマリヤのものに勝れたり　一一 われ既にサマリヤとその偶像とに行へるご
一一 とく亦エルサレムとその偶像とにおこなはざる可んやと
一二 このゆゑに主いひたまふ我シオンの山とエルサレムとに爲んとする事をことごとく遂をはらんとき我アッ
一三 スリヤ王のおごれる心の實とその高ぶり仰ぎたる眼とを罰すべし　一三 そは彼いへらくわれ手の力と智慧とにより
一三 て之をなせり我はかしこし國々の境をのぞきその獲たるものをうばひ又われは丈夫にしてかの位に坐するものを
一四 下したり　一四 わが手もろもろの民のたからを得たりしは巣をとるがごとくまた天が下を取收めたりしは遺してす
一四 たる卵をとりあつむるが如くなりきあるひは翼をうごかしあるひは口をひらきあるひは喃々する者もなかりしな
一五 りと　一五 斧はこれをもちゐて伐ものにむかひて己みづから誇ることをせんや鋸はこれを動かす者にむかひて己みづ
一五 から高ぶることをせんや此はあだかも笞がおのれを擧るものを動かし杖みづから木にあらざるものを擧んとする
一六 にひとし　一六 このゆゑに主萬軍のヱホバは肥たるものを瘠しめ且その榮光のしたに火のもゆるがごとき火焰をお
一七 こし給はん　一七 イスラエルの光は火のごとくその聖者はほのほの如くならん斯て一日のうちに荊とおどろとを燒
一八 ほろぼし　一八 又かの林と土肥たる田圃の榮をうせしめ靈魂をも身をもうせしめて病るものの衰へたるが如くなさ
一九 ん　一九 かつ林のうちに殘れる木わづかにして童子も算へうるが如くになるべし

イ 王下一八・二四、三三・一九・一〇　ロ 歴六・二　ハ 代下三五・二〇　ニ 王下一六・九　ホ 王下一九・三一　ヘ 耶五〇・一八　ト 賽三七・二四　結二八・四、但四・二〇　チ 伯三一・二五　リ 耶五・一・二〇　ヌ 賽五・一七　ル 賽九・一八、二七・四　ヲ 王下一九・二三

二〇 その日イスラエルの遺れる者とヤコブの家ののがれたる者とは再びおのれを擊し者にたよらず誠意をもて
二一 イスラエルの聖者ヱホバにたよらん　二一 その遺れるものヤコブの遺れるものは大能の神にかへるべし　二二 あゝイ
二二 スラエルよなんぢの民は海の沙のごとしといへども遺りて歸りきたる者はたゞ僅少ならんそは敗壞すでにさだま
二三 り義にて溢るべければなり　二四 主萬軍のヱホバの定めたまへる敗壞はこれを徧く國内におこなひ給ふべし
二四 このゆゑに主萬軍のヱホバいひたまはくシオンに住るわが民よアッスリヤ人エジプトの例にならひ笞をも
二五 て汝をうち杖をあげて汝をせむるとも懼るゝなかれ　二五 たゞ頃刻にして忿恚はやまん我がいかりは彼等をほろぼ
二六 して息ん　二六 萬軍のヱホバむかしミデアン人をオレブの巖のあたりにて擊たまひしごとくに禍害をおこして之を
二七 せめ又その杖を海のうへに伸しエジプトの例にしたがひてこれを擧たまはん　二七 その日かれの重荷はなんぢの肩
二八 より下かれの軛はなんぢの頸よりはなれその軛はあぶらの故をもて壞れん
二八 かれアイにきたりミグロンを過ミクマシにてその輜重をとゞめ　二九 渡口をすぎてゲバに宿ることゝに於て
二九 ラマはをのゝきサウルギベア人は逃れはしれり　三〇 ガリムの女よなんぢ聲をあげて叫ベライシよ耳をかたぶけて
三〇 聽けアナトテよなんぢも聲をあげよ　三一 マデメナはさすらひゲビムの民はのがれ走れり　三二 この日かれノブに立
三一 とゞまりシオンのむすめの山エルサレムの岡にむかひて手をふりたり
三二 主ばんぐんのヱホバは雄々しくたけびてその枝を斷たまはん丈高きものは伐おとされ聳えたる者はひくゝ
三三 せらるべし　三四 また鋸をもて茂りあふ林をきり給はんレバノンは能力あるものに倒さるべし

ワ 王下一六・七　代下二八・二〇　カ 賽七・三　ヨ 羅九・二七　タ 賽六・一三　レ 賽二八・二二　ソ 賽二八・二二、但九・二七　羅九・二八　ツ 出一四・ネ 賽三七・六　ナ 賽五四・七　ラ 但一・三六　ム 士七・二五　賽九・四　ウ 王下一九・三五　ヰ 出一四・二六、二七　ノ 賽一四・二五　オ 詩一〇五・一五　但九・二四　約壹二・二〇　ク 拙前一三・二三　ヤ 拙前一一・四　マ 拙前二五・四四　ケ 士一八・七　フ 箴二一・一八　コ 箴一五・三一　エ 拙前二一・一、二二・一九　尼一一・三二　テ 賽三七・二二　ア 賽一三・二　サ 歴二・九

第一一章

一 エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて實をむすばん
二 その上にヱホバの靈
とゞまらんこれ智慧聰明の靈謀略才能の靈知識の靈ヱホバをおそるゝの靈なり
三 かれはヱホバ
を畏るゝをもて歡樂としまた目みるところによりて審判をなさず耳きくところによりて斷定をなさず
四 正義を
もて貧しき者をさばき公平をもて國のうちの卑しき者のために斷定をなしその口の杖をもて國をうちその口唇の
氣息をもて惡人をころすべし
五 正義はその腰の帶となり忠信はその身のおびとならん
六 おほかみは小羊とともにやどり豹は小山羊とともにふし犢をむし肥たる家畜ともに居てちひさき童子にみ
ちびかれ
七 牝牛と熊とはくひものを同にし熊の子と牛の子とともにふし獅はうしのごとく藁をくらひ
八 乳兒
は毒蛇のほらにたはふれ乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん
九 斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく
傷ることなからんそは水の海をおほへるごとくヱホバをしるの知識地にみつべければなり
一〇 その日ヱッサイの根たちてもろもろの民の旗となりもろもろの邦人はこれに服ひきたり榮光はそのとゞま
る所にあらん
一一 その日主はまたふたゝび手をのべてその民ののこれる僅かのものをアッスリヤ、エジプト、パテロス、エテ
オピア、エラム、シナル、ハマテおよび海のしまじまより贖ひたまふべし
一二 ヱホバは國々の爲に旗をたてゝイス
ラエルの逐やられたる者をあつめ地の四極よりユダの散失たるものを集へたまはん
一三 またエフライムの猜はう
せユダを惱ますものは斷れエフライムはユダをそねまずユダはエフライムを惱ますことなかるべし
一四 かれらは

イ 申一一・一〇 徒一 ニ 申六一・一 太三・一一 ヘ 伯四・九 馬四・六 チ 申六五・二五 結三 ル 申二・一一 何一・一一
三・二三 一六 約一・三二、撒後二・八 默一・ヨ 申一・一一 羅一五 タ 詩一〇・一〇
ロ 申五三・二一 亞六・ ホ 詩七二・二、四 默 三三、三・三四 一六、二・一六、 リ 伯五・二三 申二・ レ 約七・三五 雅一・一
一二 默五・五 三・一一 一九・一五 四、三五・九 ワ 羅一五・一〇 ソ 耶三・一八 結三七
ハ 申四・二 耶二三・五 ト 弗六・一四 ヌ 哈二・一四 カ 來四・一

ツ 伽一一・四一 ウ 出一四・二九 申五 オ 出一五・二 詩一一 ヨ 申五四・一 番三・ テ 申二一・一、四七・ キ 申一〇・三二
ネ 申六〇・一四 一・一〇、六三・一 八・一四 一四 一四五・四—六 一耶五〇、五一・ ユ 耳三・一一
ナ 亞一〇・一一 ク 約四・一〇、一四、 ケ 詩三四・三 エ 詩七一・二二、八九 ア 耶五一・二五
ラ 默一六・一二 二、一三 七・三七、三八 フ 出一五・一、二一 詩 一八 申四一・一 サ 申五・二六、一八・三
ム 申一九・一三 キ 申二・一二 十代上一六・八 詩一 六八・三二、九八・一 四、一六 耶五〇・二

西なるペリシテ人の境にとびゆき相共にひがしの子輩をかすめその手をエドムおよびモアブにのべアンモンの
一五 子孫をおのれに服はしめん
一六 ヱホバ、エジプトの海汊をからし河のうへに手をふりて熱風をふかせその河をう
ちて七の小流となし履をはきて涉らしめたまはん
一七 斯てその民ののこれる僅かのものの爲にアッスリヤより來
るべき一つの大路あり昔しイスラエルがエジプトの地よりいでし時のごとくなるべし

第一二章

一 その日なんぢ言ん ヱホバよ我なんぢに感謝すべし汝さきに我をいかりたまひしかどその怒はやみ
て我をなぐさめたまへり
二 視よ神はわが救なりわれ依賴ておそるゝところなし主ヱホバはわが
力わが歌なり ヱホバは亦わが救となりたまへりと
三 此故になんぢら欣喜をもて救の井より水をくむべし
四 その
の日なんぢらいはん ヱホバに感謝せよその名をよべその行爲をもろもろの民の中につたへよその名のあがむべき
五 ことを語りつげよと ヱホバを頌うたへそのみわざは高くすぐれたればなりこれを全地につたへよ
六 シオン
に住るものよ聲をあげてよばはれイスラエルの聖者はなんぢの中にて大なればなり

第一三章

一 アモツの子イザヤが示されたるバビロンにかゝる重負の預言
二 なんぢらかぶろの山に旗をたて聲をあげ手をふり彼等をまねきて貴族の門にいらしめよ
三 われ
既にきよめ別ちたるものに命じわが丈夫ほこりかにいさめる者をよびてわが怒をもらさしむ
四 山におほくの人
の聲きこゆ大なる民あるがごとしもろもろの國民のよりつどひて喧めく聲きこゆこれ萬軍のヱホバたゝかひの
軍兵を召したまふなり
五 かれらはとほき國より天の極よりきたるこれヱホバとその忿恚をもらす器とともに